徳島大学埋蔵文化財調査報告書　第7巻

庄・蔵本遺跡 3

― ボイラータンク地点（1998 年度立会）・第 22・30 次調査地点 ―

２０１８

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

徳島大学埋蔵文化財調査報告書　第7巻

庄・蔵本遺跡 3

― ボイラータンク地点（1998 年度立会）・第 22・30 次調査地点 ―

２０１８

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

序　　文

遺跡を発掘すると，お墓が見つかることが時折あります。これに対し，皆様はどのようなイメージをお持ちでしょうか。なにやら不気味で，得体のしれないものを感じ，見たくも触れたくもないとお思いの方もいらっしゃるかもしれません。ですが，考古学者のなかには，発掘調査でこれが出てくるだけで，学問的興味を掻き立てられ，興奮する人もいるのです。というのも，埋葬という行為には，被葬者の生前の社会的地位・出自・性別・年齢などが投影されており，考古学ではそうした認識に立って，これを分析することで，過去の社会を復元することができると考えられているからです。また墓は，人間集団の精神世界を色濃く反映した文化の一つですので，これをもとに，過去の人びとが育んだ文化の起源を探ることもできます。墓に関する，こういった認識は，現代の私たちが葬儀に参列したときにも，感じ取ることができるはずです。

さて，このたびお届けする『庄・蔵本遺跡３』で，まず注目されるのは，こうした特性を備えた墓，あるいは墓地です。ボイラータンク地点と第22次調査地点とでは，弥生時代前期の石棺墓や土壙墓が発見されました。弥生時代前期は，徳島平野において水稲農耕が本格化した時期にあたり，これらの墓は，この時期の社会・文化を知るうえでの貴重な資料といえます。こうした資料をつぶさに分析すると，当時の社会が階層分化のみられない平等社会であったと推定されます。また，視野を遺跡の外に大きく広げてみると，そのルーツは日本列島における弥生文化の成立地である北部九州に求めることができます。そのほか，第30次調査地点では，用水路あるいは畑の畝間の可能性がある，溝状の遺構が検出されており，これはこの時期の集落景観の復元に貢献する資料といえるでしょう。また，同地点の調査にあたっては，SfM/MVSといった最新の三次元計測手法を導入し，その使用法と効果についても検討を試みました。今後の調査でも積極的に活用していきたく思います。

最後とはなりましたが，発掘調査，整理作業，そして本書の刊行にあたって，ご協力・ご助言を賜った学内外の関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。今後，本書が考古学研究，さらには徳島地域での文化財の保存・活用の一助となることを願ってやみません。

平成30年３月31日

徳島大学埋蔵文化財調査室長

端　野　晋　平

例　　言

1．本書は，徳島大学埋蔵文化財調査室が1998・2007・2016年度に本学蔵本キャンパスにおいて実施したボイラータンク工事，西病棟新営その他電気設備工事，渡り廊下建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．整理作業は，中村豊（現・本学総合科学部）・端野晋平・三阪一徳（現・九州大学）・脇山佳奈(現・中国恵州学院)・岸本多美子・久米淑子・中原尚子・板東美幸・前田千夏・安山かおり・山本愛子が担当した。

3．遺構写真の撮影は北條芳隆（現・東海大学）・中村・三阪が，遺物写真の撮影は板東が担当した。

4．本書の執筆分担は，目次と本文中に示した通りである。

5．本書の編集は，端野が行った。

6．本書で使用した座標の値は，世界測地系による平面直角座標系（第Ⅳ系）に準拠した。方位は座標北，レベルは海抜標高である。

7．土層および土製品の色調は，農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準拠した。

8．弥生時代の時期区分については，前期は中村（2000・2002）の土器編年，中期以降は菅原・瀧山（2000）のそれに準拠した。

中村豊，2000．阿波地域における弥生時代前期の土器編年．田崎博之（編），突帯文と遠賀川．土器持寄会論文集刊行会，松山．pp.471-497.

中村豊，2002．縄文から弥生へ－眉山北麓遺跡群の分析から－．徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学．徳島考古学論集刊行会，徳島．pp.245-258.

菅原康夫・瀧山雄一，2000．阿波地域．菅原康夫・梅木謙一（編），様式と編年　四国編．木耳社，東京，pp.1-130.

9．本書に掲載した調査記録および出土遺物は，すべて徳島大学埋蔵文化財調査室で保管している。今後，研究・教育・社会貢献の場で積極的に活用されることを期待する。

目　　次

第１章　遺跡を取り巻く環境と概要 ……三阪　一徳・端野　晋平　1
第１節　遺跡の位置と地理的環境 …… 1
第２節　歴史的環境 …… 1
第３節　庄・蔵本遺跡の概要 …… 4

第２章　ボイラータンク地点（1998年度立会） ……端野　晋平　9
第１節　調査の概要 …… 9
１．調査に至る経緯 …… 9
２．調査体制 …… 9
３．調査地点の位置 …… 9
第２節　調査の記録 …… 10
１．基本層序 …… 10
２．遺構と遺物 …… 13
３．包含層出土遺物 …… 34

第３章　第22次調査（西病棟新営その他電気設備地点） ……三阪　一徳　37
第１節　調査の概要 …… 37
１．調査に至る経緯 …… 37
２．調査体制 …… 37
第２節　調査の記録 …… 37
１．縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の時期区分 …… 37
２．基本層序 …… 38
３．第２遺構面の遺構と遺物 …… 40
４．第1.5遺構面・第１遺構面の遺構と遺物 …… 42
５．包含層出土遺物 …… 63
６．縄文時代晩期末～弥生時代前期の遺構とその性格 …… 68
７．ま　と　め …… 70

第４章　第30次調査（渡り廊下建設地点） ……三阪　一徳　73
第１節　調査の概要 …… 73
１．調査に至る経緯 …… 73
２．調査体制 …… 73
３．調査の経過 …… 73

第２節　調査の記録 …… 77
１．基本層序 …… 77
２．第３遺構面の遺構 …… 77
３．第１・２ 遺構面の遺構 …… 81
４．包含層出土遺物 …… 83
第３節　溝状遺構の機能 …… 84
第４節　SfM/MVS による遺跡の三次元計測とオルソ画像の作成 …… 85
１．目的 …… 85
２．資料と方法 …… 86
３．手順 …… 86
４．結果 …… 88
第５節　ま　と　め …… 89

第５章　総　括 ……端野　晋平　91
第１節　庄・蔵本遺跡一帯における弥生時代前期墓制の検討 …… 91
は　じ　め　に …… 91
１．墓制の実態 …… 91
２．墓制の系譜 ……107
３．墓からみた社会 ……113
第２節　調査成果のまとめ ……114

挿　図　目　次

図 1-1　庄・蔵本遺跡と周辺遺跡の位置 …… 2
図 1-2　庄・蔵本遺跡における調査地点の位置 …… 5
図 2-1　作業風景 …… 9
図 2-2　本調査地点の位置 …… 10
図 2-3　調査区北壁土層断面 …… 11
図 2-4　調査区東壁土層断面 …… 12
図 2-5　検出遺構全体図 …… 14
図 2-6　遺構検出状況 …… 14
図 2-7　SX01（1） …… 15
図 2-8　SX01（2） …… 16
図 2-9　SX01（3） …… 17
図 2-10　SX02（1） …… 18
図 2-11　SX02（2） …… 19
図 2-12　SX02（3） …… 20
図 2-13　SX02 出土土器 …… 21
図 2-14　SX02 出土石器 …… 22
図 2-15　SK01・SD02 …… 23
図 2-16　SK01（1） …… 24
図 2-17　SK01（2） …… 25
図 2-18　SD02 …… 26
図 2-19　SK01 出土土器 …… 27
図 2-20　SK01 出土石器 …… 28
図 2-21　SD02 出土土器 …… 29
図 2-22　SK02 …… 30
図 2-23　SD01 …… 31
図 2-24　SD01 出土土器 …… 31
図 2-25　SD03（1） …… 32
図 2-26　SD03（2） …… 33
図 2-27　SD03 出土土器 …… 33
図 2-28　包含層出土土器 …… 34
図 2-29　包含層出土石器 …… 35
図 3-1　調査風景（東から） …… 37
図 3-2　東壁・南壁の土層断面 …… 39
図 3-3　第 2 遺構面の遺構平面図 …… 41
図 3-4　第 2 遺構面の完掘状況（西から） …… 41
図 3-5　SD03 …… 42
図 3-6　SD03 出土遺物 …… 42
図 3-7　第 1.5 遺構面の遺構平面図 …… 44
図 3-8　第 1 遺構面の遺構平面図 …… 44
図 3-9　第 1 遺構面の完掘状況（西から） …… 45
図 3-10　SK01 …… 46
図 3-11　SK01 下層出土遺物 (1) …… 47
図 3-12　SK01 下層出土遺物 (2) …… 48
図 3-13　SK01 出土遺物 …… 48
図 3-14　SK02 下層 …… 50
図 3-15　SK02 下層出土遺物 (1) …… 51
図 3-16　SK02 下層出土遺物 (2) …… 52
図 3-17　SK02 下層出土遺物 (3) …… 53
図 3-18　SK03 …… 56
図 3-19　SK03 出土遺物 …… 56
図 3-20　SK05 …… 57
図 3-21　SK07 …… 58
図 3-22　SK07 出土遺物 …… 58
図 3-23　SD02 …… 60
図 3-24　SD02 出土遺物 …… 60
図 3-25　SK04 …… 61
図 3-26　SX01 …… 61
図 3-27　SD01 出土遺物 …… 62
図 3-28　包含層（黄褐色シルト層）出土遺物（1） …… 64
図 3-29　包含層（黄褐色シルト層）出土遺物（2） …… 65
図 3-30　包含層（黄褐色シルト層～黒褐色シルト層）出土遺物 …… 66
図 3-31　縄文時代晩期末～弥生時代前期の主要遺構 …… 68
図 3-32　縄文時代晩期末～弥生時代前期の主要遺構とその時期 …… 68
図 4-1　A 区北壁・東壁の土層断面図 …… 75
図 4-2　B 区西壁の土層断面図（上）とオルソ画像（下） …… 75
図 4-3　B 区北壁・東壁土層断面図（上）と北壁オルソ画像（下） …… 76
図 4-4　第 3 遺構面の遺構平面図 …… 78

図 4-5　第 3 遺構面の遺構断面図 …… 78
図 4-6　B 区第 3 遺構面の遺構検出写真（東より）…… 79
図 4-7　SD302 検出状況と西壁土層断面の写真（東より）… 79
図 4-8　B 区第 3 遺構面のオルソ画像 …… 80
図 4-9　第 2・1 遺構面の遺構平面図 …… 82
図 4-10　第 2・1 遺構面の遺構断面図 …… 82
図 4-11　遺物実測図 …… 83
図 4-12　弥生時代前期前葉～中葉の遺構 …… 84
図 5-1　弥生時代前期前葉 ~ 中葉における庄・蔵本集落一帯の様相 …… 92
図 5-2　庄・蔵本遺跡第 6 次調査地点 …… 93
図 5-3　南蔵本遺跡住宅開発工事地点 …… 93
図 5-4　南蔵本遺跡県立中央病院地点 …… 94
図 5-5　庄・蔵本遺跡 1998 年度立会地点と第 22 次調査地点 …… 95
図 5-6　墓壙の主軸方位 …… 95
図 5-7　庄・蔵本遺跡第 6 次調査地点における石棺墓・配石墓・土壙墓 …… 97
図 5-8　各属性と時期との関係 …… 101
図 5-9　石を用いた施設と遺物 の種類の相関状況 …… 101
図 5-10　墓域と遺物の種類の 相関状況 …… 101
図 5-11　墓壙底の規模 …… 103
図 5-12　新町遺跡における墓壙底の規模と被葬者の年齢・性別 …… 103
図 5-13　墓壙底の規模と石を用いた施設の相関状況 …… 104
図 5-14　墓壙底の規模と遺物の種類の相関状況 …… 104
図 5-15　庄・蔵本遺跡一帯における弥生時代前期の甕棺墓 …… 105
図 5-16　虎灘洞遺跡の石棺・木棺 …… 108
図 5-17　北部九州における縄文時代晩期後葉 ~ 弥生時代前期の墓制 …… 109
図 5-18　北部九州における弥生時代開始前後の土器編年 … 111
図 5-19　庄・蔵本遺跡一帯最古の弥生土器 …… 112
図 5-20　大形壺の形態比較 …… 112
図 5-21　集落と出自集団 …… 113

表　目　次

表 1-1　庄・蔵本遺跡発掘調査一覧 …… 6
表 2-1　SK01 出土土器一覧 …… 29
表 2-2　SK01 出土石器一覧 …… 29
表 3-1　徳島における縄文時代晩期から弥生時代前期の時期区分 …… 38
表 5-1　石棺墓・配石墓・土壙墓の計測的属性一覧 …… 98
表 5-2　石棺墓・配石墓・土壙墓の非計測的属性一覧 (1) …… 99
表 5-3　石棺墓・配石墓・土壙墓の非計測的属性一覧 (2) … 100
表 5-4　甕棺墓の計測的属性一覧 …… 106
表 5-5　甕棺墓の非計測的属性一覧 …… 106

図　版　目　次

図版 1　ボイラータンク地点出土遺物 (1) …… 117
図版 2　ボイラータンク地点出土遺物 (2) …… 118
図版 3　ボイラータンク地点出土遺物 (3) …… 119
図版 4　22 次調査地点出土遺物 (1) …… 120
図版 5　22 次調査地点出土遺物 (2) …… 121
図版 6　22 次調査地点出土遺物 (3) …… 122
図版 7　22 次調査地点出土遺物 (4) …… 123
図版 8　22 次調査地点出土遺物 (5) …… 124
図版 9　22 次調査地点出土遺物 (6) …… 125

第１章　遺跡を取り巻く環境と概要

第１節　遺跡の位置と地理的環境

国立大学法人徳島大学蔵本キャンパスは，徳島市庄町１丁目および蔵本町２丁目・３丁目にまたがって所在し，徳島県遺跡地図（徳島県教委・徳島県埋文編，2006）上では，蔵本遺跡の大部分および庄遺跡の東端を含む範囲に位置する（図 1-1-1）。本学では『庄・蔵本遺跡１』（北條編，1998）の刊行以降，同キャンパス内の遺跡については，独自にこの名称を用いており，本書でもこれに従う。

庄・蔵本遺跡は，吉野川の支流である鮎喰川の下流域右岸，四国山地東端の眉山北麓に位置する。現在の鮎喰川は，四国山地の雲早山に源を発し，外帯を約 50km 北流して吉野川と合流する。下流域では，数面の沖積段丘面を伴う扇状地性平野が発達することが知られている。また，上流域では御荷鉾構造線をはじめとする複数の破砕帯を通過し，また地すべりや山腹崩壊により，下流域の平野部において，礫層が厚く発達し，礫床河道となっている（古田，2005）。

吉野川下流域から河口付近にかけての古環境復元の研究によれば，約２万～１万８千年前の海水準は，現在に比べ約 100m 前後低く，その後の温暖化にともない次第に上昇したとされる。約６千年前の縄文海進のピーク時には，吉野川河口部の汀線は，現在の地形面の標高 5m 程度内陸に入り込んでいたと推定され，鮎喰川は直接，紀伊水道に注ぎ込み，河口部に三角州性扇状地を形成したとみられている。その後，やや寒冷化する弥生時代以降，海面の低下と吉野川から流出した土砂の堆積により，三角州が発達していく（古田，1996，2002，松井，1998）。

第２節　歴史的環境

庄・蔵本遺跡は，縄文時代晩期から近現代にいたるまでの複合遺跡である。その形成過程を正しく理解するためには，当然のことながら，周辺の遺跡まで視野に広げることが不可欠である。そこで，周辺遺跡について，以下，時代順に概観する。

旧石器時代　現在のところ，庄・蔵本遺跡周辺では旧石器時代の遺跡は確認されていない。徳島県内においては，吉野川中・下流域の北岸に遺跡が分布する（氏家，2002）。

縄文時代　徳島県内において，縄文時代草創期～前期の遺跡は存在するものの，遺跡数は限られ，その様相は不明瞭である。中期になると，遺跡数が若干増加し，三好郡東みよし町の加茂谷川支流沿いに位置する加茂谷川１号岩陰や，吉野川中流域の美馬郡つるぎ町貞光前田遺跡では，船元Ⅰ式・里木Ⅱ式土器が確認されている。鮎喰川下流域左岸の矢野遺跡（図 1-1-18）では，中期末～後期前葉の居住域が検出されている（湯浅，2002）。

庄･蔵本遺跡周辺で，遺跡形成が顕著となるのは後期後葉以降であり（中村編，2011），庄遺跡（図 1-1-6）の財務省蔵本住宅地点では，後期後葉の住居跡１棟が検出されている（岡山編，1999）。また，同遺跡の各調査地点では，後期末～晩期前半の土器や石器が確認されている（湯浅，2002，中村編，

図 1-1　庄・蔵本遺跡と周辺遺跡の位置

1. 庄･蔵本遺跡　2. 蜂須賀家万年山墓所　3. 三谷遺跡　4. 南蔵本遺跡　5. 蔵本遺跡　6. 庄遺跡　7. 中島田遺跡　8. 南庄遺跡　9. 袋井用水の水源地　10. 鮎喰遺跡　11. 名東遺跡　12. 節句山 1 号墳　13. 節句山 2 号墳　14. 穴不動古墳　15. 八人塚古墳　16. 敷地遺跡　17. 観音寺遺跡　18. 矢野遺跡　19. 延命遺跡（徳島県教委・徳島県埋文編, 2006 をもとに作成）

2011)。名東遺跡（図 1-1-11）では，晩期後半の自然落ち込みから突帯文土器と石器が出土し（勝浦編，1990)，三谷遺跡 (図 1-1-3) ではそれより新しい時期に位置づけられる，突帯文土器と遠賀川式土器との共伴関係が確認されている（勝浦編，1997)。

弥生時代　庄・蔵本遺跡では，弥生時代前期前葉～中葉の居住域・墓域・生産域からなる集落の全容が把握され, 隣接する南蔵本遺跡 (図 1-1-4) まで広がることが確認されている (近藤編, 2014 ほか)。これらの遺跡では，前期末から中期初頭の洪水起源砂層が確認されており，洪水砂によって集落のほとんどが埋没したものと推定されている（中村編，2011 ほか)。庄・蔵本遺跡や名東遺跡周辺で確認された自然流路は，鮎喰川の旧分流の一部とみられ，弥生時代初期の居住域は，これらの旧分流の中州か眉山北麓斜面に存在したと考えられている（古田，2005)。

庄・蔵本遺跡一帯では，中期前葉～中葉の遺構は極めて少なく，この時期の集落構造は判然としない。中期後葉になると，居住域や墓域が明瞭になる。鮎喰川流域では，右岸の名東遺跡や庄・蔵本遺跡一帯で数十基の方形周溝墓，左岸の矢野遺跡（図 1-1-18）で，30 棟前後の竪穴住居跡が確認されている。ただし，水田などの生産域はわかっていない（近藤，2012)。つづいて後期初頭になると，これらの遺跡一帯では，遺構，遺物の数はともに極端に減少する（近藤，2012)。なお，名東遺跡（図 1-1-11）では，中期後葉～後期初頭の所産とみられる扁平紐式銅鐸の埋納遺構が検出されている（勝浦編，1990)。

後期前半は，中期後半に比べ，竪穴住居跡の数は少なく，墓域や生産域も不明瞭である。その後，

後期後半～終末期になると，竪穴住居跡数は増加し，中期後半の数を上回るようになる。矢野遺跡（図 1-1-18）では，蛇紋岩製勾玉の未成品や鍛冶関連遺構，突線紐式銅鐸の埋納遺構が確認されている。矢野遺跡の南に隣接する延命遺跡（図 1-1-19）では，墳丘墓などからなる墓域が認められ，石井城ノ内遺跡では水田が確認されている（近藤，2012）。

古墳時代　眉山西北麓の丘陵尾根上には，前期古墳が点在する。節句山古墳群（図 1-1-12・13）の 2 号墳からは，浮彫式獣帯鏡が出土している。本学考古学研究室が測量調査を実施した八人塚古墳（図 1-1-15）は，全長約 60m の前方後円墳で，川原石を用いた積石塚である（東ほか，2006）。庄・蔵本遺跡の南側に面した眉山北麓では，今のところ前期古墳や居住域は確認されていない。中期の古墳，居住域もまた未発見である。後期になると，横穴式石室をもつ穴不動古墳（図 1-1-14）などがみられるが，やはり集落域はわかっていない（北條編，1998，中村編，2011）。

古代　敷地遺跡（図 1-1-16）や観音寺遺跡（図 1-1-17）の発掘調査により，多数の木簡および多彩な遺構・遺物が確認され（藤川編，2002 ほか），これらの遺跡一帯は，国府であった可能性が高い（藤川，2015 ほか）。庄・蔵本遺跡と名東遺跡周辺では，大型の掘立柱建物跡や墨書土器，石帯，木製祭祀具などが相対的に多く出土しており，郡衙である名東郡にあたる可能性が指摘されている（早渕，2002，藤川，2002）。また，この一帯では条里地割に関係するとみられる溝が検出されている。

中世　12 世紀後半～ 13 世紀が中心時期とされる中島田遺跡（図 1-1-7）では，道路状遺構と，その両側で屋敷地区画が確認されている。また，県内の他の遺跡で多数を占める和泉型瓦器椀よりも，吉備系土師器椀が多数出土したことが注目されている（石尾，2002b，島田，2008）。そこから，この遺跡を物資の集散地とみなし，さらに「市庭」跡（福家，2002）や「市町」（石尾，2002b）と解釈する見解も提出されている。名東遺跡や庄遺跡周辺では，溝などの遺構や瓦器・土師器などの遺物が検出されているが，遺跡の性格ははっきりしない（福家，2002，島田，2008）。

近世　庄・蔵本遺跡一帯は，城下町周辺の散村および水田であった可能性が高く，後述する鮎喰川の改修工事などにより水田開発が進められていったと考えられる。この時期の水田開発により，古墳時代から中世にかけての遺構の多くが，削平された可能性が指摘されている（中村編，2011）。また，佐古に所在する蜂須賀家万年山墓所（図 1-1-2）は，10 代藩主蜂須賀重喜が藩政改革を背景に造成した儒式の墓地で，以後，蜂須賀家は仏式の興源寺と儒式の万年山による両墓制をとるようになった（徳島県の歴史散歩編，2009）。

鮎喰川の河川改修の記録としては，天正 15 年（1585）の「逢庵堤」が知られている。これは徳島城の築城および名東郡の洪水対策のために，右岸の築堤が行われたというものである。その後，享保年間（1716 ～ 1736 年）や寛政年間（1783 ～ 1792 年）の工事によって，右岸の連続築堤が完成された。しかし，逆にこれが天井川化を加速させ，今日にいたる洪水被害の一因となったという（古田，2005）。ほかに，元禄年間（1688 ～ 1704 年）には，鮎喰川流域右岸の水不足解消のため，袋井用水（図 1-1-9）の開削が開始されたという記録もある。また，蔵本付近は伊予街道と讃岐街道の分岐点に位置し，交通の要所でもあった（ふるさと徳島編，1991）。

近現代　現在の蔵本キャンパスとその周辺にあたる区域では，1907 年，陸軍第 10 旅団司令部，歩兵第 62 連隊が設置されたが，第 1 次大戦後は廃止された。これにかわり 1925 年，歩兵第 43 連隊が

移駐し, 以後, 1945 年まで存続することとなった。また, 1908 年に徳島衛戍病院が設けられ, その後, 徳島陸軍病院と改称された。1945 年 7 月 4 日の徳島大空襲後には, 同月 24 日に 1 トン爆弾によって, 歩兵第 43 連隊本部を標的とした蔵本空襲があった（山川，1995）。

終戦後まもなく連隊跡地には，1947 年に官制徳島医学専門学校および同附属病院が移転し，翌年には徳島医科大学および同附属病院となった。1949 年には，国立大学徳島大学および同附属病院が設置された。また，陸軍病院跡には県立中央病院，練兵場跡には蔵本公園・加茂名中学校，実弾射撃場跡には徳島県立林業試験場（林業総合技術センター）が，それぞれ置かれることとなった（ふるさと徳島編，1991）。

第 3 節　庄・蔵本遺跡の概要

1982 年に始まった蔵本キャンパスでの発掘調査は，2018 年 3 月現在，計 31 次にも及び，35,000 ㎡以上の面積がその対象となった（図 1-2, 表 1-1）。前節でも適宜触れてきたが, ここではとくに個々の調査地点に焦点をあて，その成果を振り返っておきたい。

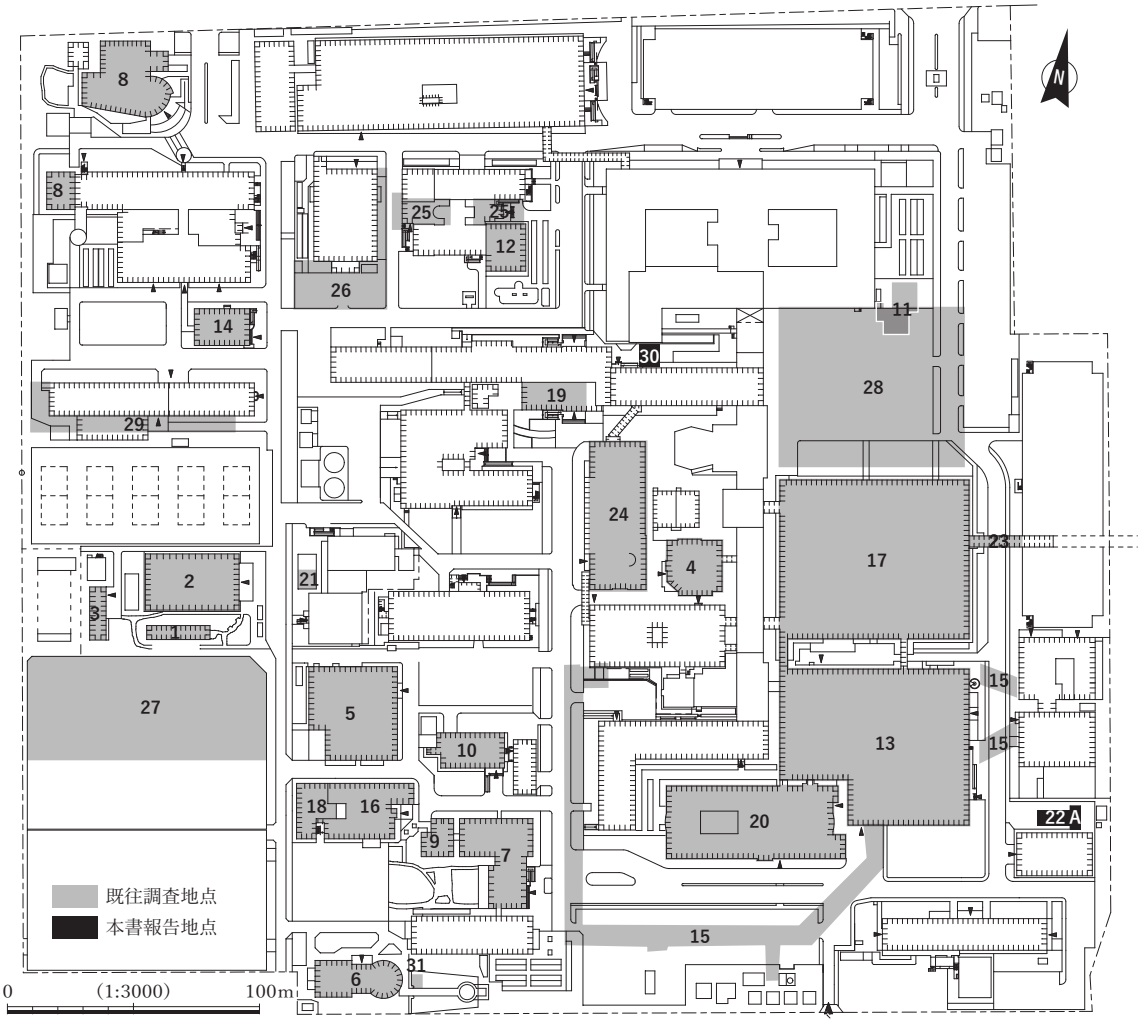
庄・蔵本遺跡では，縄文時代から現代にいたるまでの幅広い時期の，遺構・遺物が多数確認されている。なかでも，弥生時代前期前葉～中葉のものについては，墓域・生産域・居住域からなる集落の全体像を描き出すほどの成果が得られており，注目される。

この時期の墓域については，構内の南西部（第 6 次調査地点）と南東部（本書のボイラータンク地点，第 22 次調査地点）の二か所で確認されている（中村，2002）。このうち，第 6 次調査地点では，石棺墓・配石墓・土壙墓・甕棺墓といった計 20 基以上の墓からなる墓域が検出され，すでに報告を終えている（北條編，1998）。

生産域については，水田跡が検出されており（第 17・19・24・28 次調査地点），これが本遺跡の東側に位置する南蔵本遺跡県立中央病院地点まで広がることがわかっている（近藤編，2014）。また，構内の南端を東流する旧河道（第 5・13・15・16・27 次）と，ここから分岐する用水路網（第 5・9・10・13・15・16・26・27・29 次など）が検出され，水田への給水システムも判明しつつある。さらに，第 20 次調査では，畝を伴う畑跡（中村，2009b）が確認されている。こうした弥生時代前期中葉の畑跡の検出例は，全国的にみても極めてまれであり，特筆に値する。第 27 次調査でも畝状の遺構が検出されており，これも畑跡の可能性がある（端野ほか，2015）。

居住域については，第 1 ～ 3・15 次調査では，構内で土坑群が検出され，その存在がうかがえるものの，明確な住居跡は検出されていない。ただし，庄･蔵本遺跡の南側に位置する南蔵本遺跡では，この時期の住居跡が数基検出されており（徳島市教委，1989，中村，1998，2002 ほか），遺跡南側の眉山北麓に居住域の存在が推定される。また，この時期の植物種実や木製品が良好な状態で検出されたことは，考古学だけではなく植物学的にもきわめて重要な成果といえる（中村，2009b・2010c，端野ほか，2015 ほか）。

以上の弥生時代前期前葉～中葉の集落は, 遅くとも弥生時代前期末から中期初頭にかけての時期に, その大部分が洪水砂によって埋没したとみられている（中村編，2011 ほか）。この洪水砂層上に堆積



1. 体育館器具庫新営
2. 体育館新営
3. 課外活動共用施設新営
4. 医学部臨床講義棟新営
5. 動物実験施設新営
6. 青藍会館(同窓会館)新営
7. 医療技術短期大学校舎新営
8. 長井記念ホール・薬学部実験研究棟新営
9. 医療技術短期大学校舎増築
10. 酵素科学研究センター新営
11. MRI・CT装置棟新営
12. 附属図書館蔵本分館増築
13. 東病棟新営(病棟I期)
14. 医薬資源教育研究センター新営
15. 共同溝設置
16. ゲノム機能研究センター新営
17. 中央診療棟新営
18. ゲノム機能研究センター増築
19. 医学系総合実験研究棟II期改修
20. 西病棟新営
21. 医学系総合実験研究棟III期改修
(RI棟排水処理設備)
22. 西病棟新営その他電気設備
23. 連絡橋建設
24. 藤井節郎記念医科学センター新営
25. 附属図書館蔵本分館増築II期
26. 大塚講堂改修
27. 立体駐車場新営
28. 外来診療棟新営
29. 学生支援センター改修
30. 渡り廊下建設
31. 解剖体慰霊碑区域

A. ボイラータンク(1998年度立会)

図 1-2　庄・蔵本遺跡における調査地点の位置

した弥生時代前期末・中期初頭～中世の土層は，土壌化が著しく進行し，時期ごとに遺構面を検出することは困難である。そのため，この間については，集落の全体像を描くことは難しい。断片的な把握にとどまるが，重要な遺構・遺物について以下，詳述する。

第 7 次調査では，弥生時代中期初頭～中葉の溝が検出されている。この時期の遺構は，本遺跡一帯では検出例が極めて少なく，集落構造の変遷を押さえるうえで，貴重な資料である。構内の南半部に位置する第 2・13・16・20・27 次調査地点では，弥生時代中期後葉前後の方形周溝墓が確認されている（定森・中村編，2005，中村，2009b，端野ほか，2015 ほか）。また，第 16・18 次調査地点では，終末期の鍛冶関連遺構をはじめ，鞴の羽口，鉄器，スラグ，石製の鉄槌や砥石が出土しており

表 1-1　庄・蔵本遺跡発掘調査一覧

調査次数	調査地点	調査年度	調査期間	調査主体	調査担当者 *○は調査主任	調査面積（㎡）	文献
1	体育館器具庫新営	1982	1982年11月30日～1983年2月5日（2か月）	徳島県教育委員会	島巡賢二，秋山浩一ほか	147	中村編2010a
2	体育館新営	1982・1983	1983年1月中旬～11月30日（10か月）	徳島県教育委員会	福家清司，久保脇美朗ほか	1160	定森・中村編，中村編2010a
3	課外活動共用施設新営	1984	1984年7月3日～8月10日（1か月）	徳島県教育委員会	福家清司，久保脇美朗ほか	157	中村編2011
4	医学部臨床講義棟新営	1985	1985年4月25日～7月14日（3か月）	徳島県教育委員会	松永住美，大谷泰久ほか	655	中村編2010a
5	動物実験施設新営	1985	1985年9月2日～12月28日（4か月）	徳島県教育委員会	松永住美，大谷泰久ほか	1321	中村編2008
6	青藍会館（同窓会館）新営	1986	1986年12月11日～1987年3月20日（3か月）	徳島大学	岡内三眞，河野雄次ほか	540	北條編1998
7	医療技術短期大学校舎新営	1987	1987年4月1日～8月31日（4か月）	徳島県教育委員会	羽山久男，久保脇美朗ほか	870	中村編2011
8	長井記念ホール・薬学部実験研究棟新営	1990	1990年1月11日～2月28日（1か月）	徳島大学	岡内三眞，桑原久男	1430	北條編1998
9	医療技術短期大学校舎増築	1992	1992年7月11日～9月4日（3か月）	徳島大学	東潮，○北條芳隆	310	北條編1998
10	酵素科学研究センター新営	1993	1993年5月26日～9月30日（4か月）	徳島大学	東潮，○北條芳隆	623	北條編1998
11	MRI・CT装置棟新営	1993	1994年2月18日～3月17日（1か月）	徳島大学	東潮，○北條芳隆	224	HPに概要報告書を掲載
12	附属図書館蔵本分館増築	1993	1994年2月25日～3月24日（1か月）	徳島大学	東潮，○北條芳隆	288	HPに概要報告書を掲載
13	東病棟新営（病棟Ⅰ期）	1994～1996	1995年3月27日～1996年7月31日（16か月）	徳島大学	東潮，○北條芳隆	5000	中村編2010b，HPに概要報告書を掲載
14	医薬資源教育研究センター新営	1995	1995年6月21日～9月5日（3か月）	徳島大学	東潮，○橋本達也	300	HPに概要報告書を掲載
15	共同溝設置	1996・1997	1996年11月1日～19976月7日（7か月）	徳島大学	北條芳隆，橋本達也，○中村豊	1754	HPに概要報告書を掲載
16	ゲノム機能研究センター新営	1998	1998年9月1日～1999年2月2日（5か月）	徳島大学	北條芳隆，○橋本達也，中村豊	1000	HPに概要報告書を掲載
17	中央診療棟新営	1999	1999年8月1日～2000年3月（8か月）	徳島大学	北條芳隆，○中村豊	5000	HPに概要報告書を掲載
18	ゲノム機能研究センター増築	2001・2002	2002年3月11日～6月10日（3か月）	徳島大学	北條芳隆，○中村豊	311	HPに概要報告書を掲載
19	医学系総合実験研究棟Ⅱ期改修	2006	2006年4月17日～7月25日（3か月）	徳島大学	定森秀夫，○中村豊，中原計	324	中村編2008
20	西病棟新営	2006	2006年6月27日～2007年3月15日（9か月）	徳島大学	定森秀夫，○中村豊，中原計	2645	中村編2008
21	医学系総合実験研究棟Ⅲ期改修（RI棟排水処理設備）	2007	2007年10月22日～11月7日（2週間）	徳島大学	定森秀夫，○中村豊，中原計	45	中村編2010b
22	西病棟新営その他電気設備	2007	2008年1月9日～2月14日（1か月）	徳島大学	定森秀夫，○中村豊	103	本書
23	連絡橋建設	2011	2011年4月4日～4月18日（2週間）	徳島大学	○中村豊，遠部慎	100	HPに概要報告書を掲載
24	藤井節郎記念医科学センター新営	2011	2011年10月7日～2012年3月14日（5か月）	徳島大学	○中村豊，遠部慎	1800	三阪編2016
25	附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期	2011	2011年10月6日～10月26日（2週間）	徳島大学	○中村豊，遠部慎	430	三阪編2016
26	大塚講堂改修	2012	2012年4月9日～6月1日（2か月）	徳島大学	中村豊，○遠部慎，山口雄治	1030	三阪編2016
27	立体駐車場新営	2012・2013	2012年5月1日～2013年4月19日（11か月半）	徳島大学	中村豊，遠部慎，○山口雄治	3610	端野編2015
28	外来診療棟新営	2012	2012年7月2日～2013年1月9日（6か月半）	徳島大学	中村豊，○遠部慎，山口雄治	3688	三阪編2016
29	学生支援センター改修	2011	2012年10月31日～2013月2月5日（2か月）	徳島大学	○中村豊，遠部慎，山口雄治	554	三阪編2016
30	渡り廊下建設	2016	2016年11月14日～12月1日（2週間）	徳島大学	○三阪一徳	70	本書
31	解剖体慰霊碑区域	2017	2017年8月21日～24日（4日間）	徳島大学	○端野晋平	20	HPに概要報告書を掲載

（中村，2003），この地での鉄器生産の存在がうかがえる。第 27 次調査地点では，後期後葉から終末期に位置づけられる一○（形）土坑を伴う住居跡や，終末期の突線紐式銅鐸片（端野ほか，2015）が，第 17 次調査では異体字銘帯鏡片が確認されている（徳大施設・徳大埋文，2000）。

第 2 次調査では，古墳時代前期（布留式期前後）の住居跡や井戸が検出されており（定森・中村編，2005），同地点辺りにこの時期の居住域が存在していたことがわかる。古墳時代中期のものとしては，第 7 次調査で祭祀遺構とみられる溝から須恵器，勾玉形石製品が（中村編，2011），第 9 次調査で同じ溝の延長部から須恵器に加え，朝顔形埴輪片が出土している（北條編，1998）。第 27 次調査では，古墳被葬者の副葬品とみられる玉類や石製紡錘車が出土しており（端野ほか，2015），これらの事実は，付近にかつて古墳が存在した可能性を示唆する。第 2 次調査などでは，掘立柱建物跡や墨書土器，木製祭祀具，石帯などが確認されている。これらにもとづいて，本遺跡周辺を古代の郡衙である名東郡に比定する説が提出されているのは，前節で述べた通りである。また第 2 次調査では，飛鳥時代から鎌倉時代にかけての大溝・水路が検出されている。飛鳥時代の大溝は東西正方向をとるのに対し，10 世紀後葉～ 11 世紀前葉の水路，13 世紀前葉の大溝はやや北に振れた東西方向をとることが注意され，その背後に条里制の変化がうかがえる（定森・中村編，2005）。

近世の遺構としては，第 11 次調査などで水田跡や溝，井戸，暗渠が，第 10 次調査で木棺墓（北條編，1998）が検出されている。これらは，絵図に描かれた「蔵本村」の農民層が残したものとみなせよう。そのほか，戦前，現在の蔵本キャンパス一帯は，旧陸軍や病院に関係する建造物が立地したことや，空襲にあったことが知られており，実際に発掘調査でも，これらに関連する遺構や遺物が時折，発見されている。

（三阪一徳・端野晋平）

文献

東潮・中原計・石村友規・大谷育恵・松浦稔，2006．徳島市八人塚古墳測量調査報告．徳島大学総合科学部人間社会文化研究 13，61-83.

福家清司，2002．徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学．徳島考古学論集刊行会，徳島，pp.135-162.

藤川智之，2002．古代．徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学．徳島考古学論集刊行会，徳島，pp.115-134.

藤川智之，2015．徳島県内における律令期帯金具と出土遺跡，徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱 11，71-84.

藤川智之（編），2002．観音寺遺跡 I（観音寺遺跡木簡編）：一般国道 192 号徳島南環状道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書，徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 40 集．徳島県埋蔵文化財センター，徳島.

ふるさと徳島編集委員会（編），1991．ふるさと徳島．ふるさと徳島編集委員会，徳島.

古田昇，1996．徳島県吉野川・鮎喰川下流域平野の沖積層の形成過程．立命館地理学 8，61-72.

古田昇，2005．多様性をもつ中央構造線沿いの徳島平野．平野の環境歴史学．古今書院，東京，pp.209-246.

端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治，2015．庄・蔵本遺跡第 27 次調査 (立体駐車場地点) の成果．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 1，43-97.

早渕隆人，2002. 古代阿波における官衙と祭祀. 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会，徳島，pp.629-648.

平井松午，1998．吉野川の河川環境と流域史．東潮（編），川と人間：吉野川流域史．渓水社，広島，pp.3-25.

北條芳隆（編），1998．庄・蔵本遺跡 1 ：徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査，徳島大学埋蔵文化財調査報告書第 1 巻．徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島.

石尾和仁，2002a．近世．徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学．徳島考古学論集刊行会，徳島，pp.163-180.

石尾和仁，2002b．中世阿波における集落の展開．徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学．徳島考古学論集

刊行会，徳島，pp.647-656.
勝浦康守（編），1990．名東遺跡発掘調査概要：名東町 2 丁目・宗教法人天理教国名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査．名東遺跡発掘調査委員会，徳島．
勝浦康守（編），1997．三谷遺跡：徳島市佐古配水場施設増設工事に伴う発掘調査．徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会，徳島．
木原克司，2002．吉野川下流域の条里施行期と阿波国府の構造．徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学．徳島考古学論集刊行会，徳島，pp.611-627.
近藤玲，2003．徳島の弥生時代：縄文時代から弥生時代へ．徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱 3，13-40.
近藤玲，2012．徳島市眉山周辺の弥生集落の動態．徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱 10，31-48.
近藤玲（編），2014．南蔵本遺跡：県立中央病院改築事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書，徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 84 集．徳島県埋蔵文化財センター，徳島．
栗林誠治，2002．古墳時代．徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学．徳島考古学論集刊行会，徳島，pp.99-114.
中村豊，1998．稲作のはじまり：吉野川下流域を中心に．東潮（編），川と人間：吉野川流域史．渓水社，広島，pp.79-100.
中村豊，2002．縄文から弥生へ．徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学．徳島考古学論集刊行会，徳島，pp.245-258.
中村豊，2003．徳島における弥生時代終末期の鉄生産．青藍 1，25-36.
中村豊，2009a．医療系総合実験研究棟Ⅱ期改修に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 1，1-10.
中村豊，2009b．西病棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 1，1-10.
中村豊，2010a．庄・蔵本遺跡・医学系総合実験研究棟Ⅲ期改修その他工事に伴う埋蔵文化財発掘調査．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 2，1-9.
中村豊，2010b．庄・蔵本遺跡・西病棟新営その他電気設備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 2，11-21.
中村豊，2010c．概要．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 2，33-42.
中村豊（編），2008．庄（庄・蔵本）遺跡：徳島大学蔵本団地動物実験施設建設に伴う発掘調査報告書．徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島．
中村豊（編），2010．庄（庄・蔵本）遺跡：徳島大学蔵本団地体育館器具庫・医学部臨床講義棟建設に伴う発掘調査報告書，体育館建設に伴う発掘調査報告書補遺．徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島．
中村豊（編），2011．庄（庄・蔵本）遺跡：徳島大学蔵本団地課外活動共用施設・医療技術短期大学建設に伴う発掘調査報告書，弓道場建設に伴う立会調査報告書．徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島．
岡山真知子（編），1999．庄遺跡Ⅲ：大蔵省蔵本団地宿舎新営工事（第 3 期工事）関連埋蔵文化財発掘調査報告，徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 24 集．徳島県埋蔵文化財センター，徳島．
定森秀夫・中村豊（編），2005．庄（庄・蔵本）遺跡：徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書．徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島．
島田豊彰，2008．吉野川流域における中世集落の様相．徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱 7，17-28.
菅原康夫，2002．弥生時代．徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学．徳島考古学論集刊行会，徳島，pp.63-97.
徳島大学施設委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室，2000．庄・蔵本遺跡発掘調査概要：新中央診療棟建設に伴う埋蔵文化財調査．徳島．
徳島県教育委員会文化財課・徳島県埋蔵文化財センター（編），徳島県遺跡地図，第 2 分冊．2006．徳島．
徳島県の歴史散歩編集委員会（編），2009．徳島県の歴史散歩，歴史散歩 36．山川出版社，東京．
徳島市教育委員会，1989．平成元年度文化財調査報告資料．徳島市教育委員会，徳島．
氏家敏之，2002．先土器時代（旧石器時代）．徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学．徳島考古学論集刊行会，徳島，pp.11-28.
山川浩實，1995．戦争から豊かな未来へ．徳島県立博物館，徳島．
山川浩實，2005．徳島大空襲，徳島の自然と歴史ガイド 4．徳島県立博物館，徳島．
湯浅利彦，2002．縄文時代．徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学．徳島考古学論集刊行会，徳島，pp.29-61.

第 2 章　ボイラータンク地点（1998 年度立会）

第 1 節　調査の概要

1. 調査に至る経緯

1998 年度，蔵本キャンパスの南東部に位置する地点に，ボイラータンクを設置することとなった。それまでの調査で，設置予定地の西側では，弥生時代前期の用水路や中期後半の方形周溝墓（第 13 次調査地点），弥生時代前期前葉～中葉の大溝（第 15 次調査地点）などが検出されていた。そのため，これらに関係する遺構・遺物が，予定地の範囲まで広がっている可能性を想定し得た。そこで 1999 年 1 月，土地掘削に際し，調査員 1 名による立会調査を実施した（図 2-1）。調査面積は約 81 ㎡である。

図 2-1　作業風景

2. 調査体制

調査主体　徳島大学埋蔵文化財調査委員会（委員長・齋藤史郎〔徳島大学長〕）
調査担当　徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・北條芳隆）
調査員　　北條芳隆（総合科学部助教授）
調査補助　鄭仁盛（総合科学部留学生）

3. 調査地点の位置

本調査地点は，徳島大学蔵本キャンパスの南東部に位置する（図 2-2）。この地点のすぐ西側では，弥生時代前期前葉～中葉の墓を含む土坑（第 22 次調査地点）などが，さらに北西側から西側にかけての地帯では，弥生時代前期の用水路（第 13 次調査地点），弥生時代前期前葉～中葉の大溝（第 15 次調査地点），弥生時代前期中葉の畑跡や用水路（第 20 次調査地点）などが検出されている。このように，本調査地点の周辺は，弥生時代前期において，墓域・居住域・生産域といった人間活動の痕跡が密集する地帯であり，とくに本調査地点は，第 22 次調査地点とともに，当時の墓域に位置するものと考えられる。

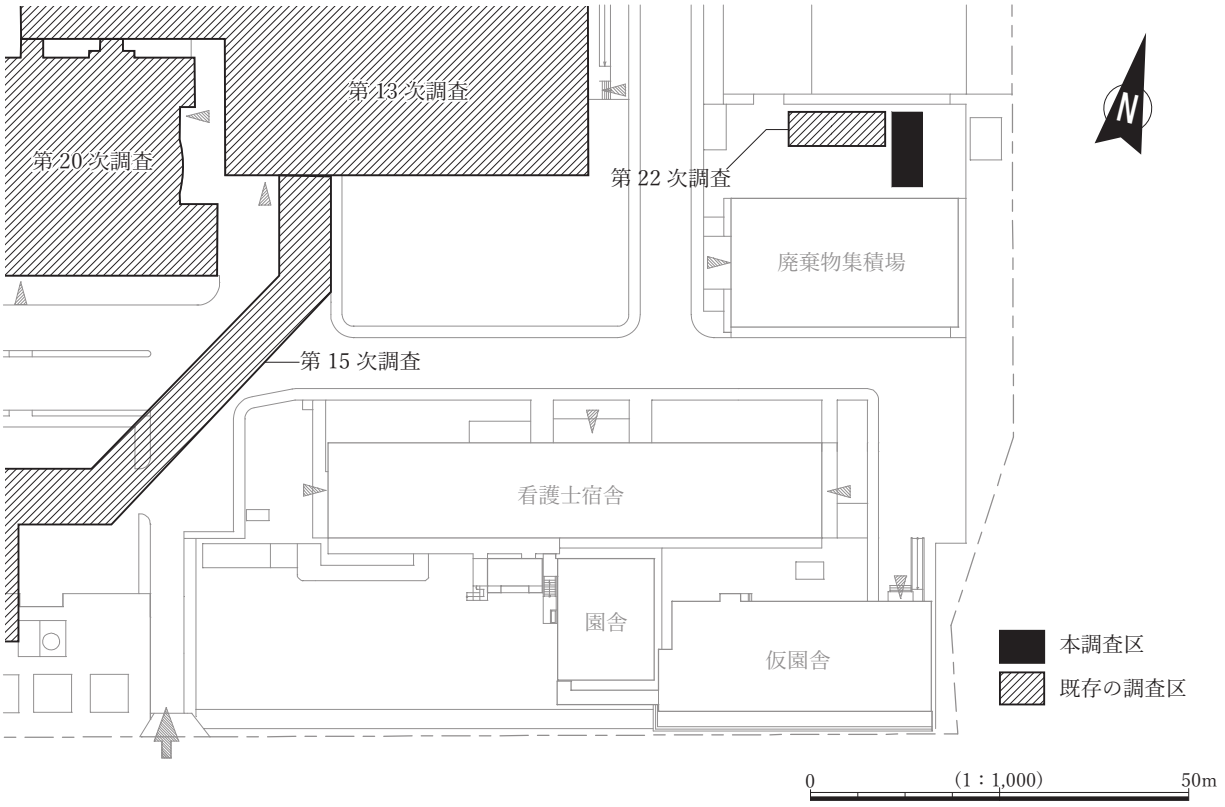


図 2-2　本調査地点の位置

第 2 節　調査の記録

1. 基本層序

本調査地点の基本土層は 5 層に分けられる。以下，調査区北壁・東壁の土層断面（図 2-3・4）にもとづいて詳述する。各層の形成時期については，出土遺物が少なく決め手を欠いたため，周辺地点の調査記録を参照した。なお，現地表面は標高約 3.75m であり，そこから標高 2.8 ～ 2.95m 辺りまでは近代以降の撹乱を受けていた。

1 層　暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト質粘土からなる。上面の標高は 2.8 ～ 2.95m，厚さは 3 ～ 23 ㎝を測る。近世の水田層と考えられる。

2 層　黄褐色(2.5Y5/4)シルト質粘土からなる。上面の標高は 2.7 ～ 2.8m, 厚さは 10 ～ 20 ㎝を測る。中世～近世の水田層かと思われる。

3 層　暗褐色（10YR3/4）シルトからなる。上面の標高は約 2.6m，厚さは 3 ～ 17 ㎝を測る。弥生時代前期末～中世の土壌化層と考えられる。

4 層　オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト・極細砂からなる。上面の標高は 2.6 ～ 2.65m，厚さは 28 ～ 35 ㎝を測る。弥生時代前期末の洪水砂層と考えられる。

5 層　にぶい黄褐色（10YR4/3）細砂・シルトからなる。上面の標高は約 2.3m である。弥生時代前期中葉の洪水砂層と考えられる。

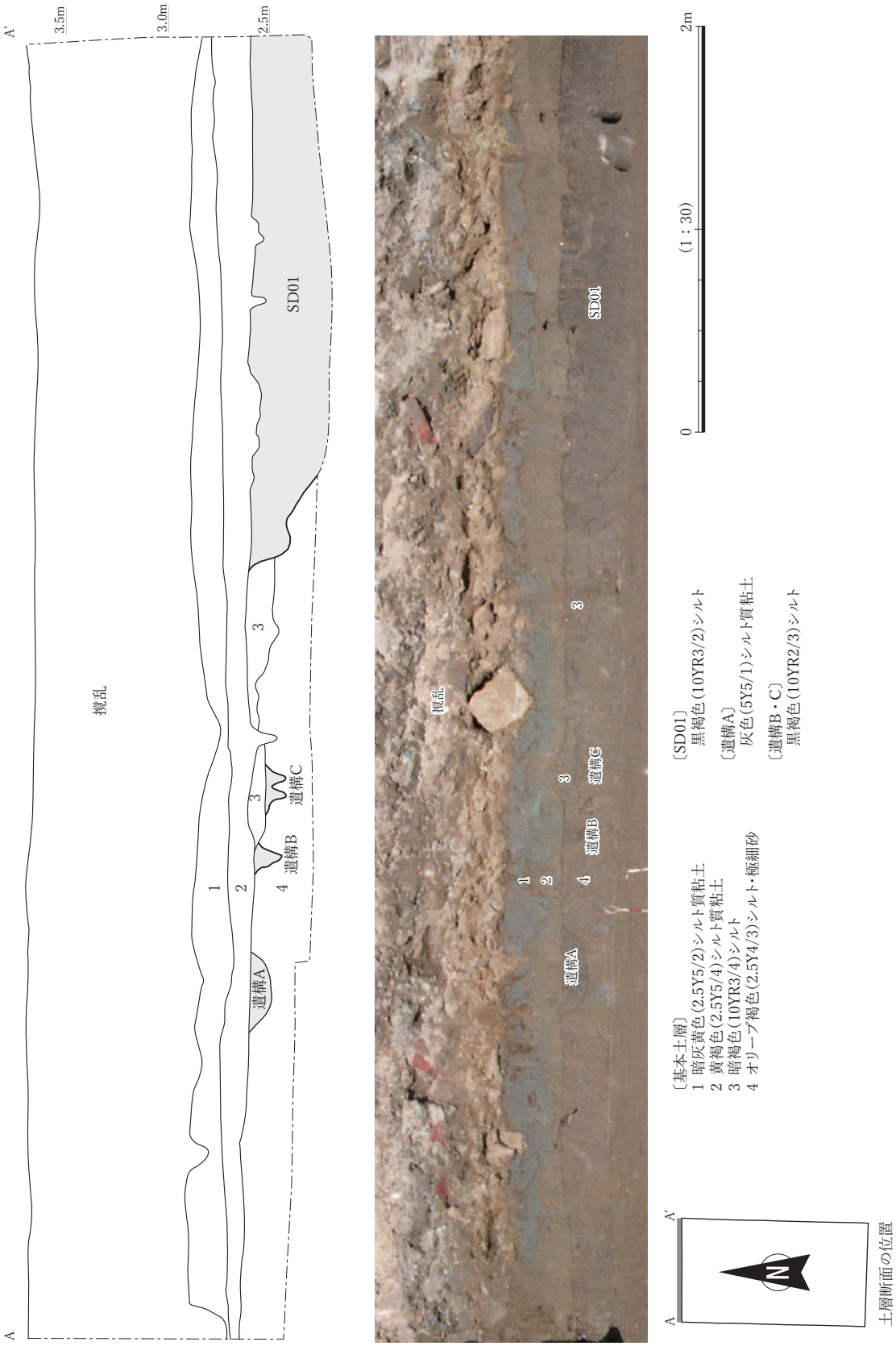


図 2-3　調査区北壁土層断面

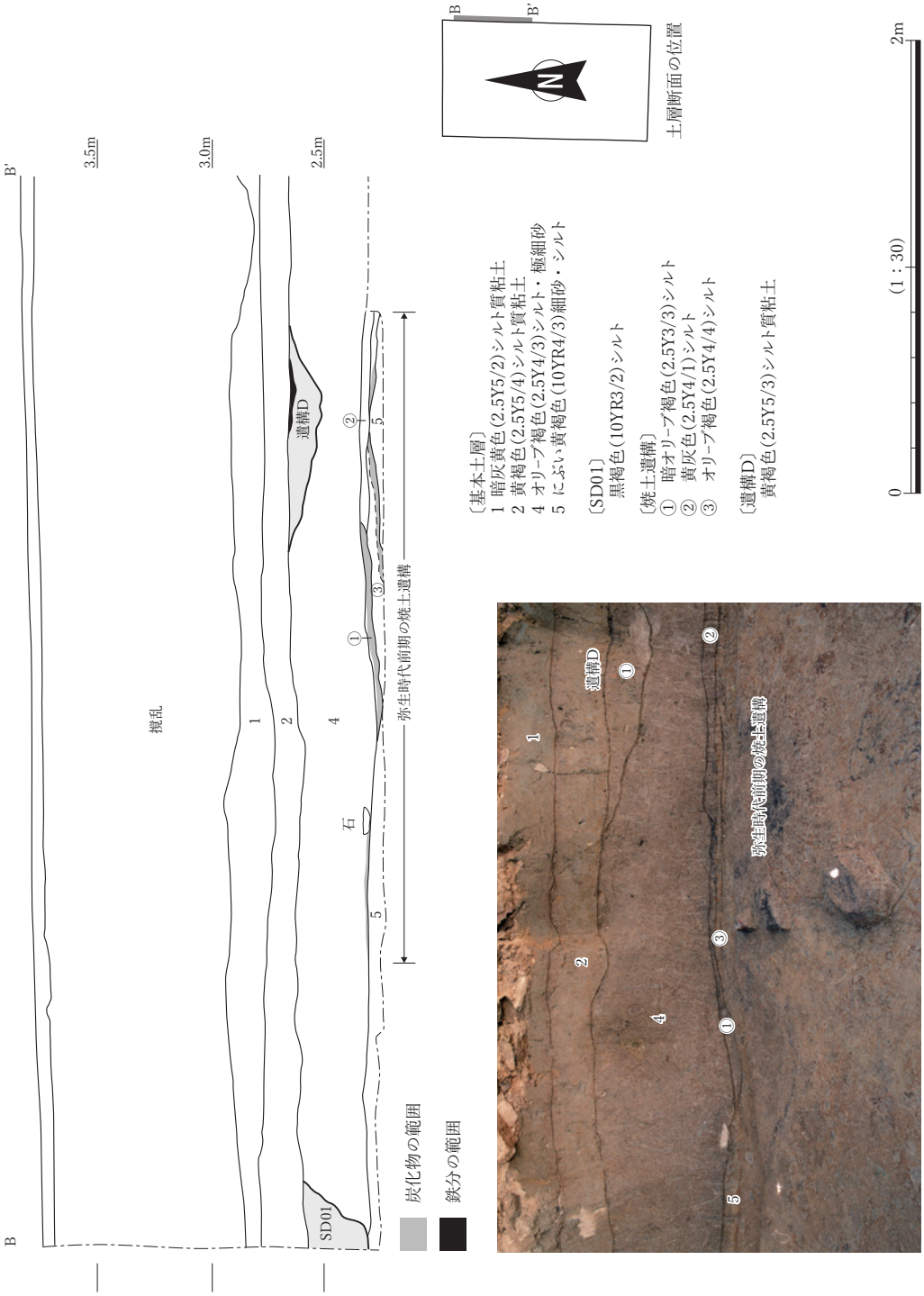


図 2-4　調査区東壁土層断面

本調査地点では，4 層中位～下位を遺構面として，遺構を検出した。

2. 遺構と遺物

本調査地点では，弥生時代前期に属する墓 2 基，土坑 2 基，焼土遺構 1 基，溝 3 条が調査された（図 2-5・6）。以下，遺構の種類ごとに詳述する。

(1) 墓

SX01（図 2-7 ～ 9）

調査区の南側で検出された石棺墓である。大半が撹乱を受け，失われているが，墓壙の平面形は本来，長方形であったものと推定され，検出面で長さ 1.28m，幅 0.98m，底面で長さ 1.09m，幅 0.75m を測る。墓壙の断面形は長軸・短軸ともに，逆台形状を呈し，深さ 0.50m を測る。石棺は，板状あるいは横長の石を 2 ～ 3 段積み上げて構築されている。石を横積みした北側の長壁とは異なり，西側の短壁は板状の石を立てて造られている。石棺に使われた石材はすべて，遺跡の南側に位置する眉山周辺で採取しうる緑色片岩である。長壁の東側上部には，蓋石の一部が残存していた。石棺底の内法は長さ 0.95m，幅 0.37m を測る。長軸方向は N70°　E である。遺物は出土しなかった。人骨は出土しておらず，石棺の残存状態も良くないことから，頭位を推定することはできない。なお，第 6 次調査地点では，これに類似する構造をもつ「石棺墓 1」（徳大埋文，1998）が検出されている。報告では，積石からなる構造物を，遺体を直接収納する石棺とみなしているが，これとは異なり，内部に木棺を有する「石槨墓」とみなす見解（橋本，2001）がある。本遺構は，長壁・短壁のいずれの床面にも，掘り込みを有する。この特徴は，石槨墓ではなく，石棺墓に認められるものであるので，ここではこの遺構を石棺墓と判断した。遺物は出土しなかったが，検出層位と第 6 次調査地点での検出例からみて，本遺構の時期は，弥生時代前期前葉～中葉の可能性を考えておきたい。

SX02（図 2-10 ～ 14，図版 1）

調査区の南側で検出された土壙墓である。SX01 の北西に位置する。墓壙の平面形は，検出面で隅丸長方形を呈し，長さ 1.61m，幅 0.72m を測る。底面で長楕円形に近い隅丸長方形を呈し，長さ 0.92m，幅 0.47m を測る。墓壙内の南側にはテラス状の段がある。墓壙の断面形は，長軸でやや不整な舟形，短軸で U 字形を呈する。深さは 0.59m を測る。埋土は 7 層に分けられるが，粗砂からなる 3・6 層を除いて，シルト層が主体をなしている。炭化物を含む 7 層，炭化物を多量に含む 6 層が堆積した後，上位の層が U 字形をなして堆積している。墓壙の北側からは緑色片岩製の板石（長さ 70 ㎝×幅 45 ㎝×厚さ 16 ㎝）が検出された。この石は層位学的には，5 層と 6 層の間に位置づけられる，炭化物を多量に含む 6 層を木蓋の痕跡ととらえるならば，腐朽しつつあった木蓋が，押さえ石とみられる板石の重量に耐えきれず崩壊し，それより上位にあった土もろとも墓壙内に埋没したものとみなせようか。こうした解釈が妥当であるならば，本遺構は木蓋土壙墓ということとなろう。長軸方向は N6°　W である。板石が頭位に置かれたものだとすれば，頭位は北であろうか。遺物は弥生土器の壺や甕の破片と打製石斧が出土した。出土層位からみて，これらは遺体を墓壙内に収納し，木蓋と石で閉塞した後，

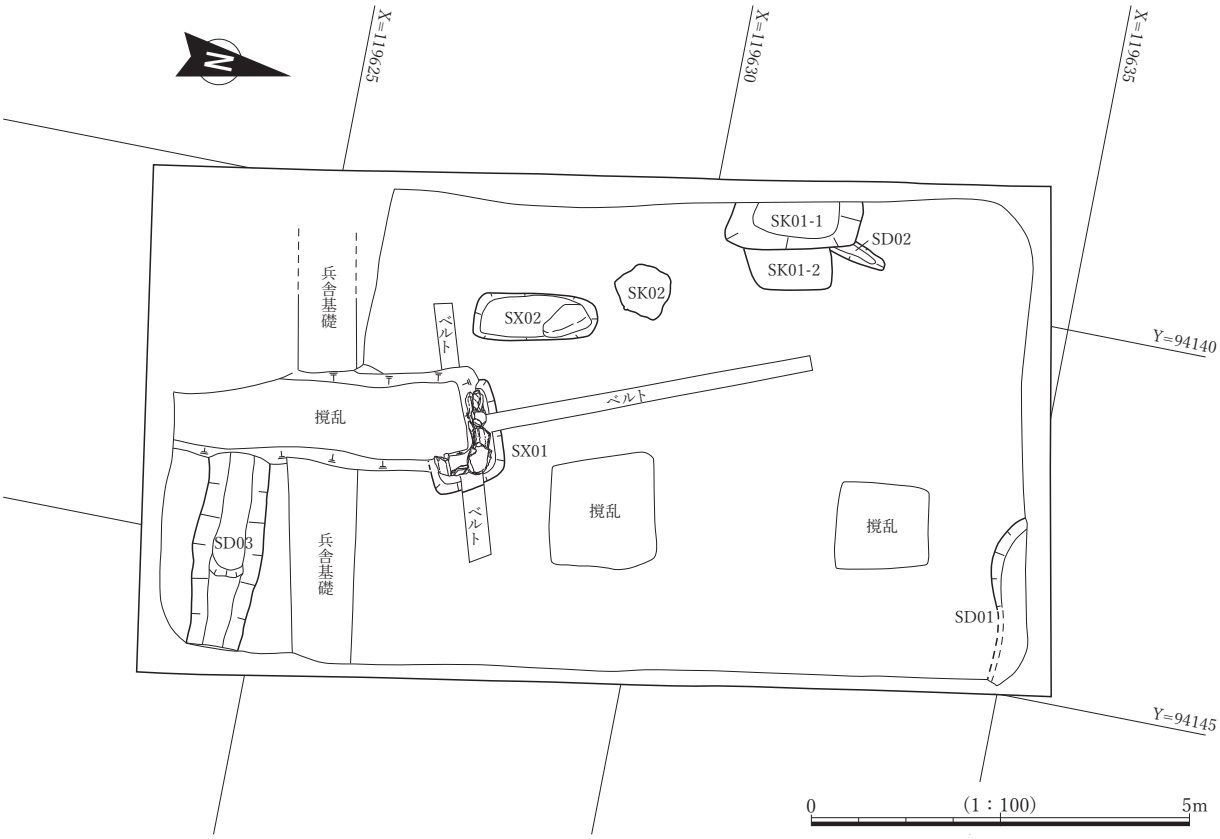


図 2-5　検出遺構全体図

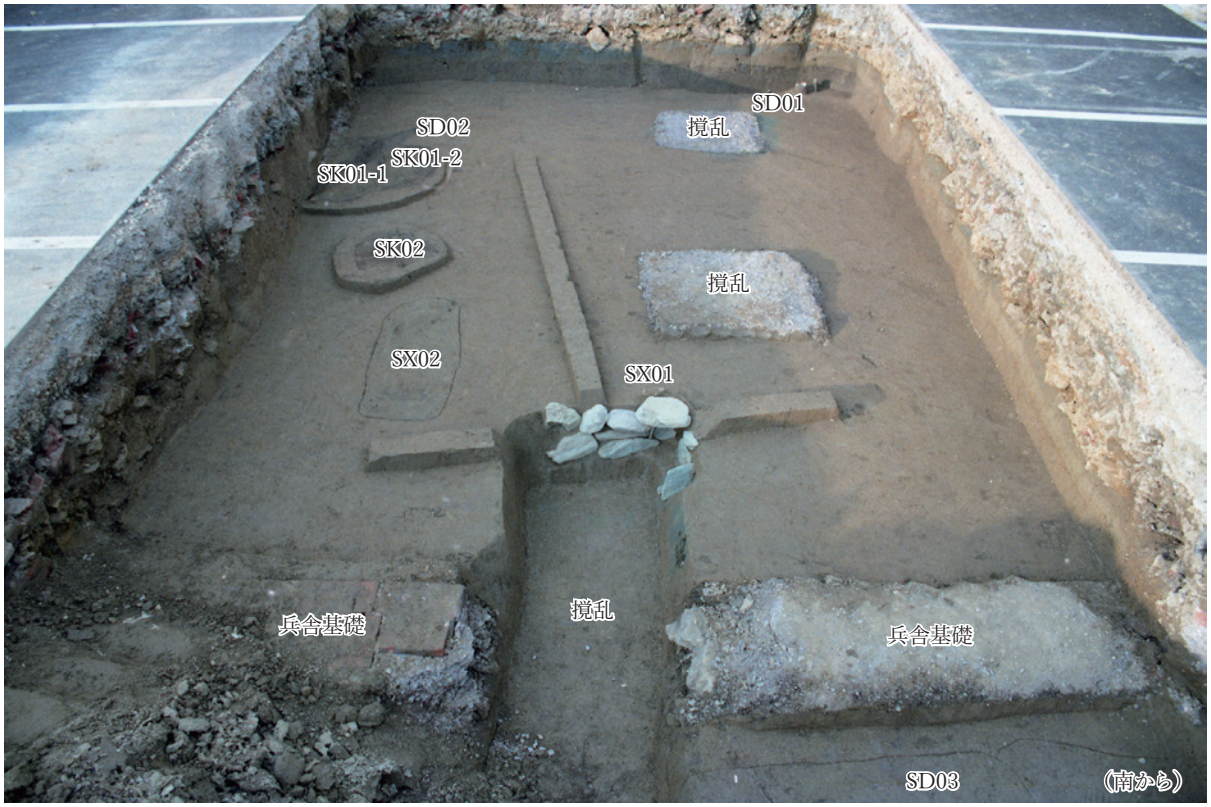


図 2-6　遺構検出状況

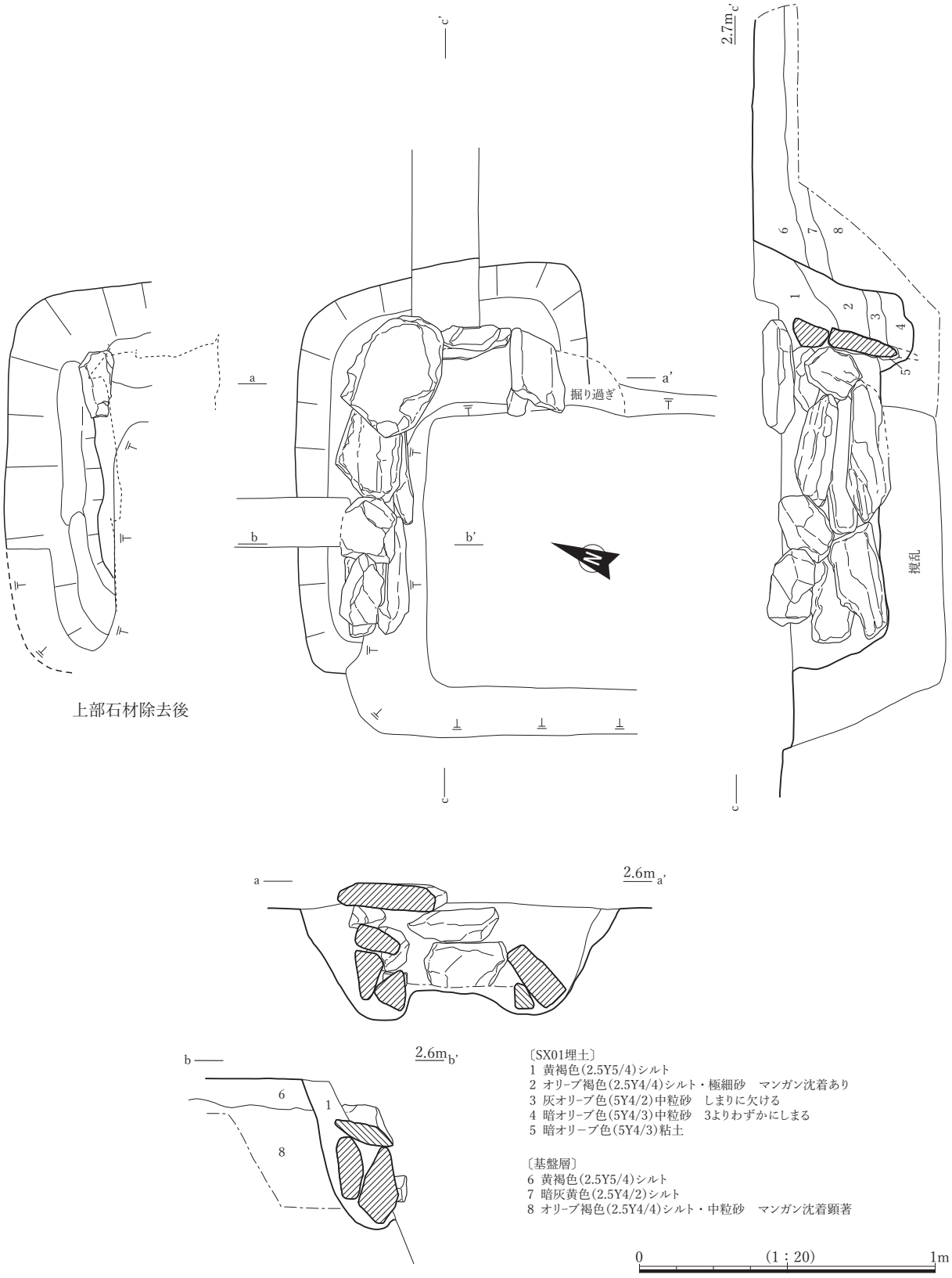

上部石材除去後
掘り過ぎ
撹乱
2.7m
2.6m
2.6m
〔SX01埋土〕
1 黄褐色(2.5Y5/4)シルト
2 オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト・極細砂　マンガン沈着あり
3 灰オリーブ色(5Y4/2)中粒砂　しまりに欠ける
4 暗オリーブ色(5Y4/3)中粒砂　3よりわずかにしまる
5 暗オリーブ色(5Y4/3)粘土
〔基盤層〕
6 黄褐色(2.5Y5/4)シルト
7 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト
8 オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト・中粒砂　マンガン沈着顕著
0
(1：20)
1m

図 2-7　SX01（1）

図 2-8　SX01（2）

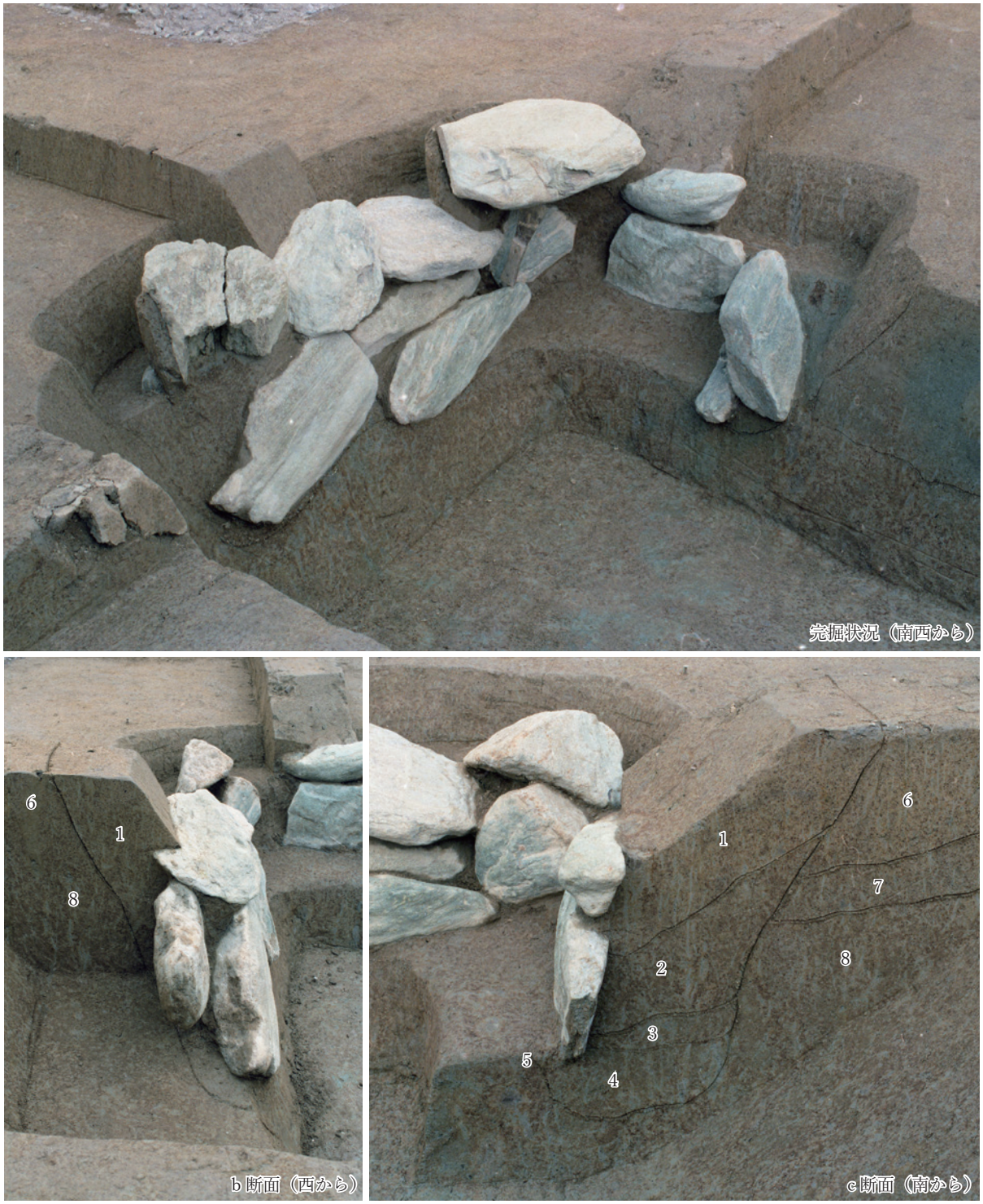


図 2-9　SX01（3）

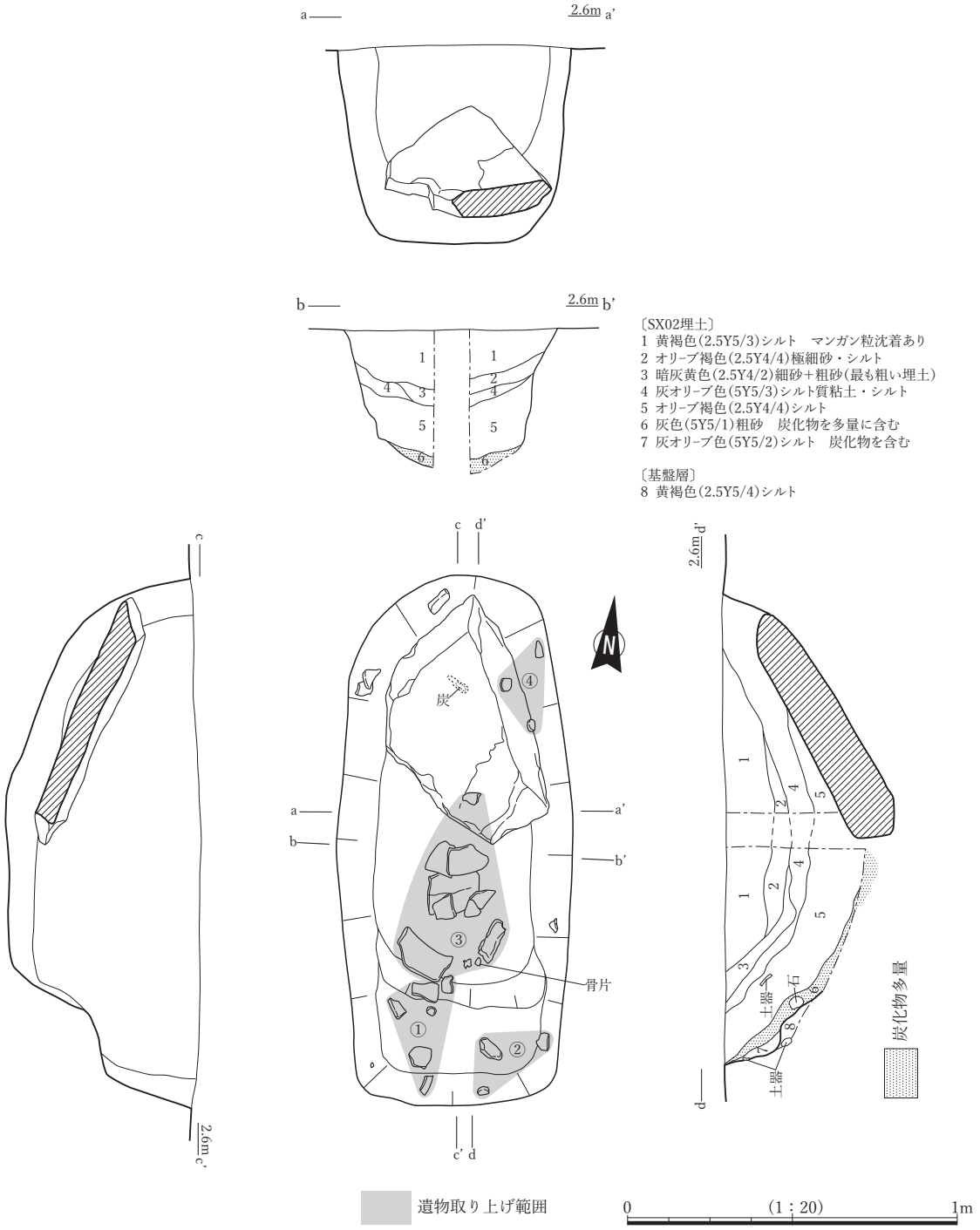

a
2.6m a'
b
2.6m b'
〔SX02埋土〕
1 黄褐色(2.5Y5/3)シルト　マンガン粒沈着あり
2 オリーブ褐色(2.5Y4/4)極細砂・シルト
3 暗灰黄色(2.5Y4/2)細砂＋粗砂(最も粗い埋土)
4 灰オリーブ色(5Y5/3)シルト質粘土・シルト
5 オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト
6 灰色(5Y5/1)粗砂　炭化物を多量に含む
7 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト　炭化物を含む
〔基盤層〕
8 黄褐色(2.5Y5/4)シルト
c
2.6m c'
c d'
炭
④
③
①
②
骨片
N
a
a'
b
b'
c'
d
2.6m d'
土器
石
炭化物多量
遺物取り上げ範囲
0
(1：20)
1m

図 2-10　SX02（1）

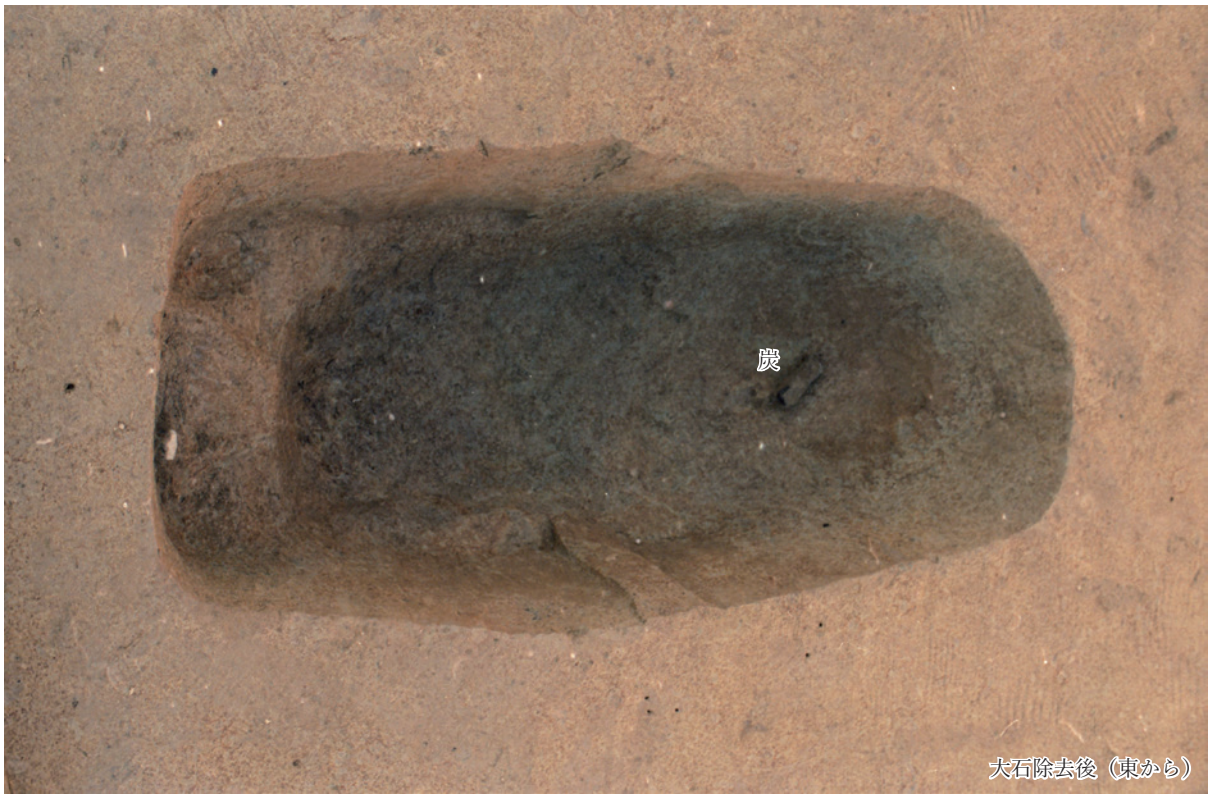
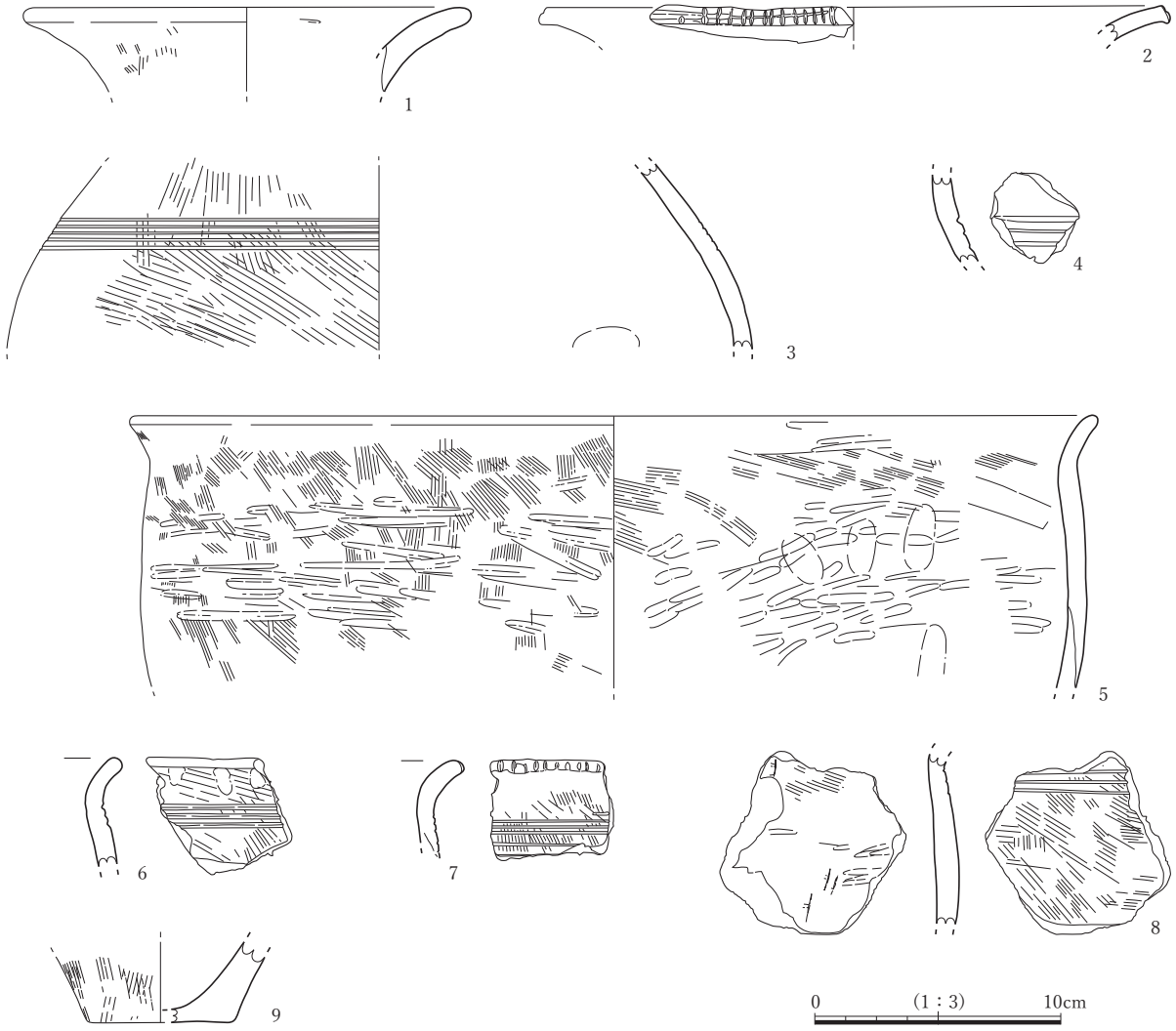


図 2-11　SX02（2）

図 2-12　SX02（3）



番号	出土位置	種類・器種	法量（cm）			文様・調整（外／内）	色調（外／内）	胎土
			口径	底径	器高			
1	①	弥生土器・壺	(18.2)	-	-	刷毛目のちヨコナデ／ヨコナデ・ミガキ	7.5YR 7/6 橙／ 7.5YR 6/4 にぶい橙	微細，石英・長石・輝石・角閃石
2	③最下層	弥生土器・壺	(25.2)	-	-	口縁端部 1 条の沈線に刻目，ヨコナデ・ミガキ／ヨコナデ・ミガキ	7.5YR 5/3 にぶい褐／ 7.5YR 6/4 にぶい橙	微細，石英・長石・輝石・角閃石多量
3	③最下層	弥生土器・壺	-	-	-	刷毛目・5 条の沈線／ナデ・ユビオサエ	10YR 6/4 にぶい黄橙／ 2.5Y 6/3 にぶい黄	微細，石英・長石・輝石
4	北半部最下層	弥生土器・壺	-	-	-	ナデ・3 条の沈線／ナデ	7.5YR 8/4 浅黄橙／ 10YR 7/3 にぶい黄橙	微細，長石・輝石・角閃石多量
5	③最下層	弥生土器・甕	(39.4)	-	-	口縁部刷毛目のちヨコナデ，胴部刷毛目のちミガキ／上部刷毛目・ミガキ，下部ナデ・ユビオサエ・ミガキ	5YR 6/6 橙／ 10YR 7/3 にぶい黄橙	微細，石英・長石・輝石
6	①	弥生土器・甕	-	-	-	口縁部刷毛目・ユビオサエ，胴部 3 条の沈線・刷毛目・ナデ／ヨコナデ	5YR 7/6 橙／ 7.5YR 7/4 にぶい橙	微細，石英・長石・輝石
7	北半部板石直上	弥生土器・甕	-	-	-	口縁端部刻目，刷毛目・ナデ・6 条の沈線／ヨコナデ	10YR 5/3 にぶい黄褐／ 10YR 6/3 にぶい黄橙	細，石英・長石・輝石
8	②	弥生土器・甕	-	-	-	3 条の沈線・刷毛目／刷毛目のちナデ・ミガキ	7.5YR 6/4 にぶい橙／ 5YR 6/4 にぶい橙	微細，石英・長石・輝石・角閃石
9	北半部最下層	弥生土器・甕	-	(5.8)	-	刷毛目，底面ナデ／ナデ	7.5YR 6/4 にぶい橙／ 7.5YR 6/4 にぶい橙	微細，石英・長石・輝石多量

（　）復元値

図 2-13　SX02 出土土器

番号	出土位置	器種	法量（cm）			重さ（g）	石材
			長さ	幅	厚さ		
10	④	打製石斧	10.3	5.6	2.3	195	?

図 2-14　SX02 出土石器

その上で儀礼行為を行った痕跡ではないかとみられる。骨片が墓壙の南側から出土しているが，残存状態が良くないため，人骨かどうかは不確実で，部位も不明である。本遺構は，出土した土器からみて，弥生時代前期末に属するものと考えられる。

(2) 土坑

SK01-1（図 2-15 ～ 17・19・20，表 2-1・2，図版 1・2）

調査区の北西部で検出された土坑である。SD02 に切られ，SK01-2 を切っている。平面形は，西側が調査区外にあり，未検出であるため，正確に把握できないが，長方形であろうか。南北長は 1.68m，東西長は検出部位で 0.66m を測る。断面形は肩から底面にかけて，傾斜が徐々に緩くなる形態であり，深さは 0.30m を測る。埋土は 6 層に分けられ，1 層の撹乱を除き，シルトが主体をなしている。3 ～ 6 層は，炭化物・土器・焼土といった混入物を含んでいることで，2 層とは大きく区別できる。底面からは 30 ㎝大の石が検出された。長軸方向は N10°　W である。内部からは，弥生土器の壺・甕などの破片，両刃石斧・石皿などの石器が出土した。本遺構は，出土した土器からみて，弥生時代前期末に属するものと考えられる。

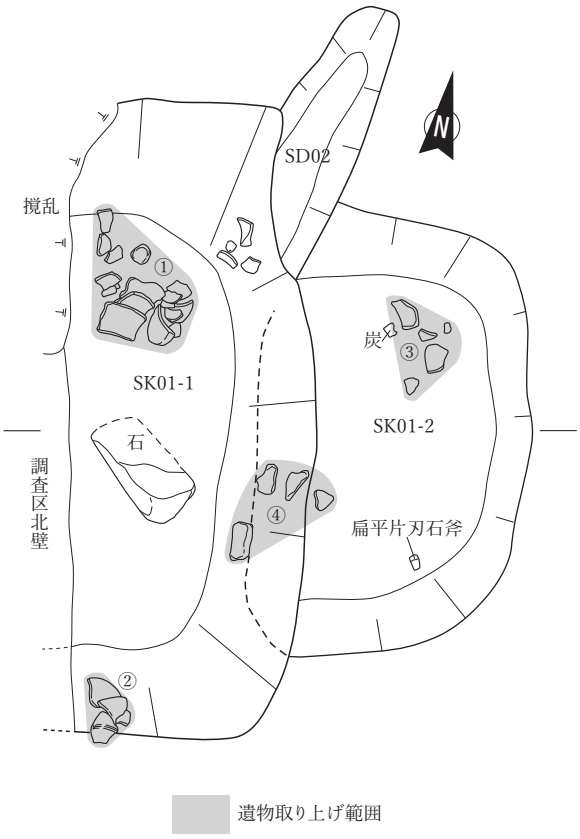
SK01-2（図 2-15 ～ 17・19・20，表 2-1・2，図版 2）

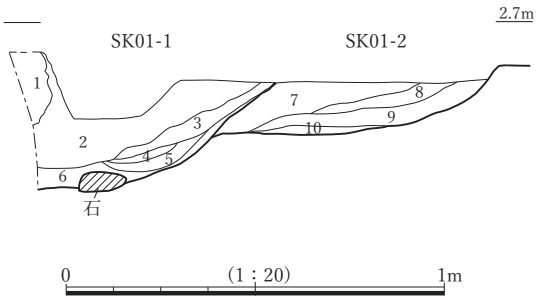
調査区の北西部で検出された土坑である。SD02 と SK01-1 に切られている。平面形は西側を SK01-1 に破壊されているため，正確にはわからないが，隅丸方形あるいは隅丸長方形であろうか。南北長は 1.21m，東西長は残存部位で 0.57m を測る。断面形は肩から底面にかけて，傾斜が徐々に緩くなる形態であり，深さは 0.19m を測る。埋土は 4 層に分けられ，シルトが主体をなしている。9 層は，灰・炭化物からなることから，他の層とは様相を大きく異にする。長軸方向は N11°　W である。内部からは，弥生土器の壺・甕の破片と扁平片刃石斧が出土した。本遺構は，出土した土器からみて，弥生時代前期中葉に属するものと考えられる。

(3) 焼土遺構

SK02（図 2-22）

調査区中央より西側で検出された焼土遺構である。SX02 と SK01-1, SK01-2, SD02 の間に位置する。平面形は不整な五角形で，南北長 0.70m，東西長 0.64m を測る。南東隅を直径 5 ～ 6 ㎝の杭穴に切られている。断面形は極めて薄いレンズ状を呈し，深さは 0.02m を測る。埋土は焼土と炭の 2 層からなり，炭の上に焼土が堆積している。平面上は，西半を焼土が，東半を炭が占めている。遺物は出土していない。本遺構は，検出層位からみて，弥生時代前期中葉～末に属するものと考えられる。





〔SK01-1埋土〕
1　兵舎の基礎による撹乱(コンクリートバラス)
2　黄褐色(2.5Y5/3)シルト
3　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト　炭化物・土器を多量に含む
4　暗赤褐色(5YR3/2)細砂・焼土(砂)とシルトの混合
5　オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト・粘土の混合　炭化物を含む
6　暗褐色(7.5YR3/3)細砂・焼土(砂)の混合

〔SK01-2埋土〕
7　オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト　マンガン粒沈着あり
8　暗褐色(10YR3/3)シルト　黄褐色粘土ブロックを含む
9　黒色(2.5Y2/1)灰・炭化物の微粒の堆積
10　暗オリーブ色(5Y4/3)シルト

図 2-15　SK01・SD02

完掘状況（北東から）

完掘状況（東から）

図 2-16　SK01（1）

土層断面（南東から）

SK01-1 土層断面（南から）

図 2-17　SK01（2）

図 2-18　SD02

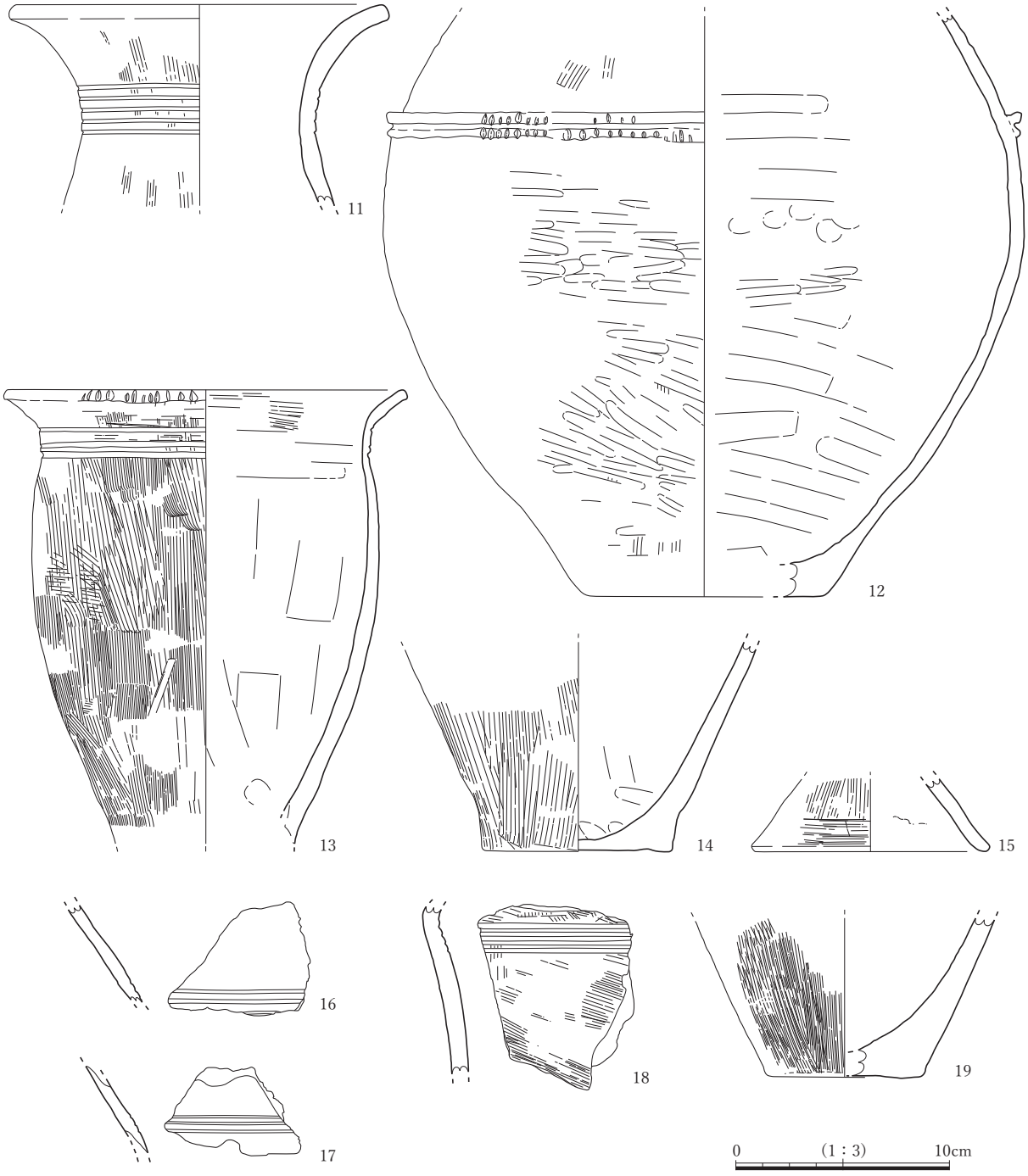


図 2-19　SK01 出土土器

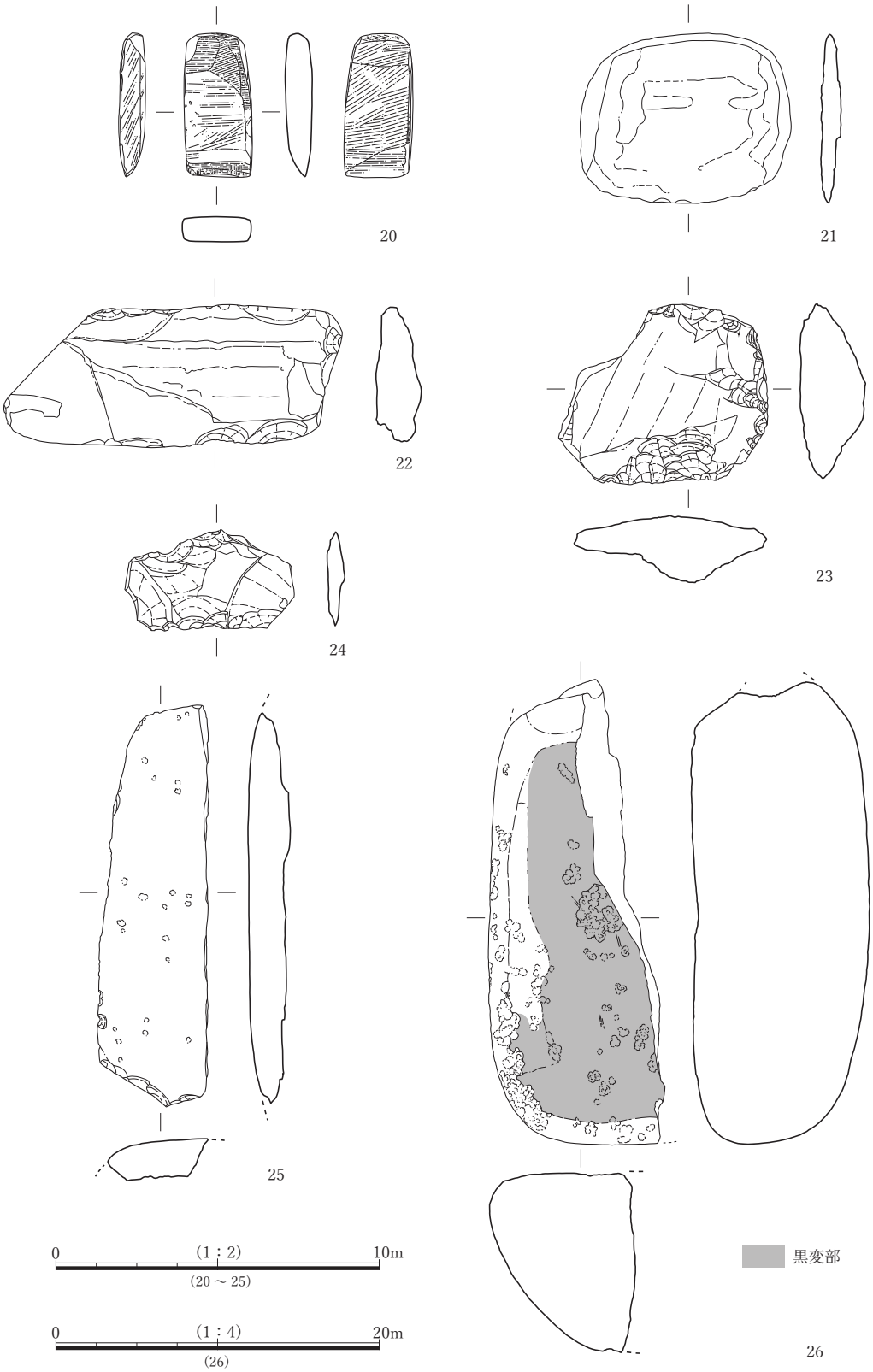


図 2-20　SK01 出土石器

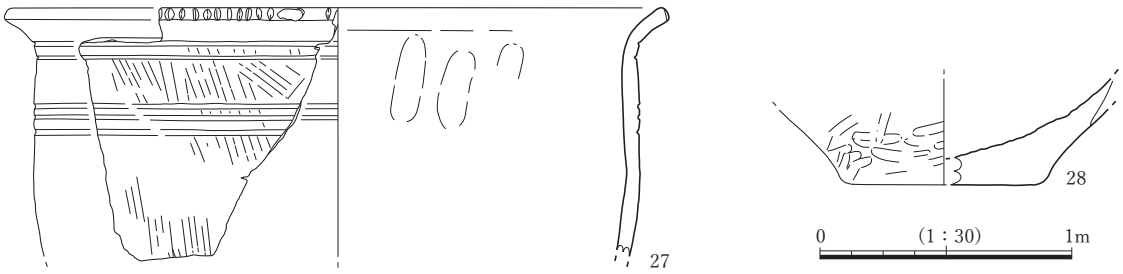
表 2-1　SK01 出土土器一覧

番号	遺構	出土位置	種類・器種	法量（cm）			文様・調整（外／内）	色調（外／内）	胎土	備考
				口径	底径	器高				
11	SK01 - 1	①	弥生土器・壺	(17.2)	-	-	摩耗・刷毛目のちナデ，頸部 5 条の沈線／ナデ	5YR 6/6 橙／ 5YR 6/6 橙	微細，石英・長石・輝石多量	-
12	SK01 - 1	②	弥生土器・壺	-	(11.2)	-	上位剥離・刷毛目のちナデ，肩部 2 条の貼付突帯文に刻目・ヨコナデ，中・下位ミガキ・刷毛目痕，底面ナデ／上半ヨコナデ，中位ユビオサエ・ミガキ，下半板ナデのちナデ	5YR 7/4 にぶい橙／ 5YR 6/6 橙	微細，石英・長石・輝石	-
13	SK01 - 1	①・北半部	弥生土器・甕	(18.6)	-	-	口縁端部刻目，刷毛目のちヨコナデ，胴部 3 条の沈線／刷毛目のちヨコナデ，底部ユビオサエ	7.5YR 5/3 にぶい褐／ 7.5YR 5/3 にぶい褐	微細，長石・輝石	図面上で，沈線 3 条として復元
14	SK01 - 1	①	弥生土器・甕	-	8.9	-	刷毛目，底面ナデ／ナデ，底部ユビオサエ	7.5YR 6/3 にぶい褐／ 10YR 4/3 にぶい黄褐	微細，石英・長石・輝石	-
15	SK01	北半部	弥生土器・高坏	-	(10.8)	-	刷毛目・ヨコナデ／ヨコナデ	7.5YR 5/3 にぶい褐／ 7.5YR 6/4 にぶい橙	微細，長石・輝石・角閃石	
16	SK01 - 2	④	弥生土器・壺	-	-	-	ナデのちミガキ？・ 3 条の沈線／ナデ	7.5YR 5/4 にぶい褐／ 5YR 6/4 にぶい橙	微細，石英・長石・輝石多量	-
17	SK01 - 2	-	弥生土器・壺	-	-	-	板ナデのちナデ・ 3 条の沈線／板ナデ	2.5YR 5/6 明赤褐／ 5YR 5/4 にぶい赤褐	微細，石英・長石・輝石多量	焼成後穿孔？
18	SK01 - 2	③	弥生土器・甕	-	-	-	摩耗・刷毛目・4 条の沈線／ヨコナデ・タテナデ	7.5YR 5/3 にぶい褐／ 10YR 4/3 にぶい黄褐	微細，石英・長石・輝石多量	-
19	SK01 - 2	③	弥生土器・甕	-	(7.4)	-	2 種類の刷毛目，底面ナデ／ナデ	10YR 5/3 にぶい黄褐／ 10YR 7/3 にぶい黄橙	微細，石英・長石・輝石多量	-

（　）復元値

表 2-2　SK01 出土石器一覧

番号	遺構	出土位置	器種	法量（cm）			重さ(g)	石材	備考
				長さ	幅	厚さ			
20	SK01-2	-	扁平片刃石斧	4.4	2.1	0.8	16.2	?	-
21	SK01-1	①	不明石器	5.2	6.5	0.6	30.43	塩基性片岩	-
22	SK01	北半部	打製石庖丁	4.3	10.25	1.4	83.43	塩基性片岩	-
23	SK01	北半部	スクレイパー	5.5	6.45	2.0	68.3	チャート	-
24	SK01-1	①	スクレイパー	3.0	5.2	0.5	8.74	サヌカイト	-
25	SK01-1	①	両刃石斧	12.35	3.35	1.3	79.24	藍閃石？	剥離（再加工か？）
26	SK01-1	-	石皿	28.6	10.5	11.0	4505	砂岩	-



番号	種類・器種	法量（cm）			文様・調整（外／内）	色調（外／内）	胎土
		口径	底径	器高			
27	弥生土器・甕	(25.8)	-	-	口縁端部刻目，口縁部ヨコナデ，胴部 2 条と 3 条の沈線・刷毛目のちナデ／口縁部ヨコナデ，胴部ナデ	7.5YR 6/4 にぶい橙／ 7.5YR 6/3 にぶい褐	微細，石英・長石・輝石
28	弥生土器・壺	-	(8.0)	-	ミガキ，底面ナデ／剥離	7.5YR 7/3 にぶい橙／ 7.5YR 8/4 浅黄橙	微細，石英・長石・輝石・角閃石多量

（　）復元値

図 2-21　SD02 出土土器

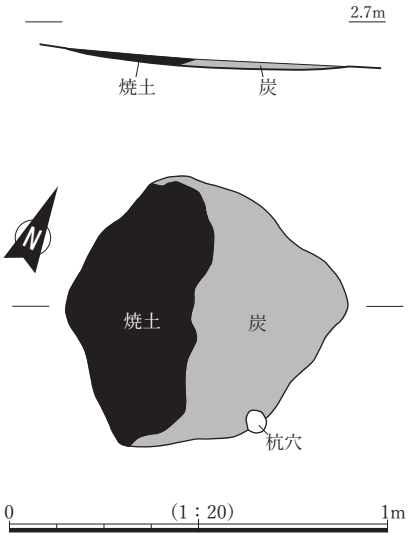


図 2-22　SK02

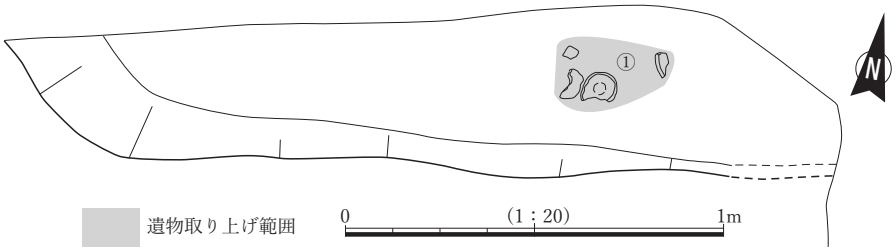
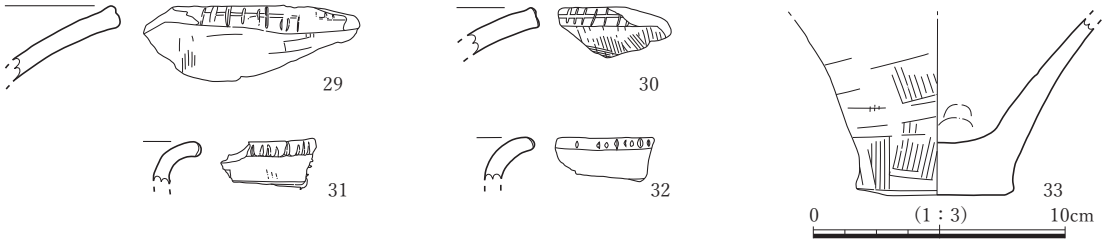
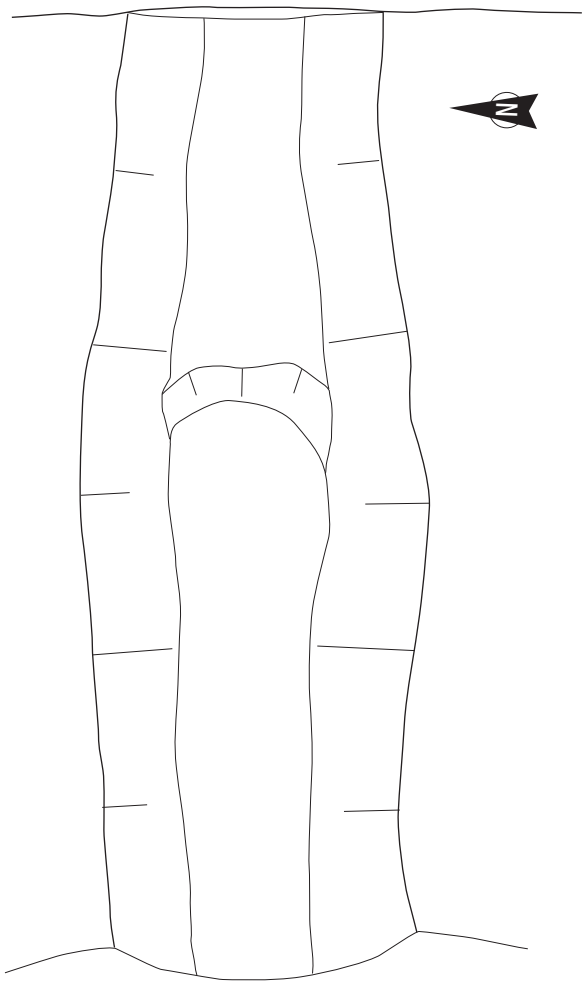


図 2-23　SD01



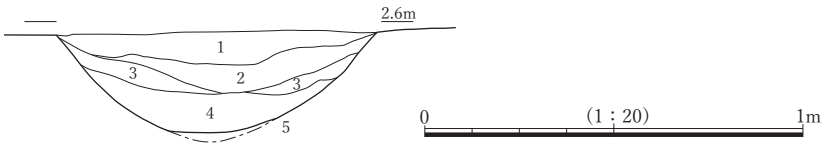
番号	出土位置	種類・器種	法量（cm）			文様・調整（外／内）	色調（外／内）	胎土
			口径	底径	器高			
29	①	弥生土器・壺	-	-	-	口縁端部１条の沈線に刻目，刷毛目のちナデ／ナデ	10YR 6/3 にぶい黄橙／7.5YR 6/3 にぶい褐	微細，石英・長石・輝石
30	-	弥生土器・壺	-	-	-	口縁端部１条の沈線に刻目，刷毛目のちナデ／ナデ	7.5YR 7/4 にぶい橙／7.5YR 7/4 にぶい橙	微細，長石・輝石少量
31	-	弥生土器・甕	-	-	-	口縁端部刻目，刷毛目のちヨコナデ，１条の沈線／ヨコナデ	10YR 6/3 にぶい黄橙／10YR 6/3 にぶい黄橙	微細，石英・長石・輝石・角閃石
32	-	弥生土器・甕	-	-	-	口縁端部刻目，ヨコナデ，１条の沈線／ナデ	10YR 6/3 にぶい黄橙／10YR 6/3 にぶい黄橙	微細，石英・長石・輝石・角閃石
33	①	弥生土器・甕	-	6.3	-	刷毛目のちナデ，底面ナデ・剥離／ナデ，底部一部ユビオサエ	5YR 6/6 橙／ 5YR 7/4 にぶい橙	微細，石英・長石・輝石多量

図 2-24　SD01 出土土器



〔SD03埋土〕
1 褐色(10YR4/4)シルト　遺物をわずかに含む
2 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト
3 褐灰色(10YR4/1)シルト質粘土
4 灰黄褐色(10YR5/2)シルト

〔基盤層〕
5 灰黄褐色(10YR4/2)細砂



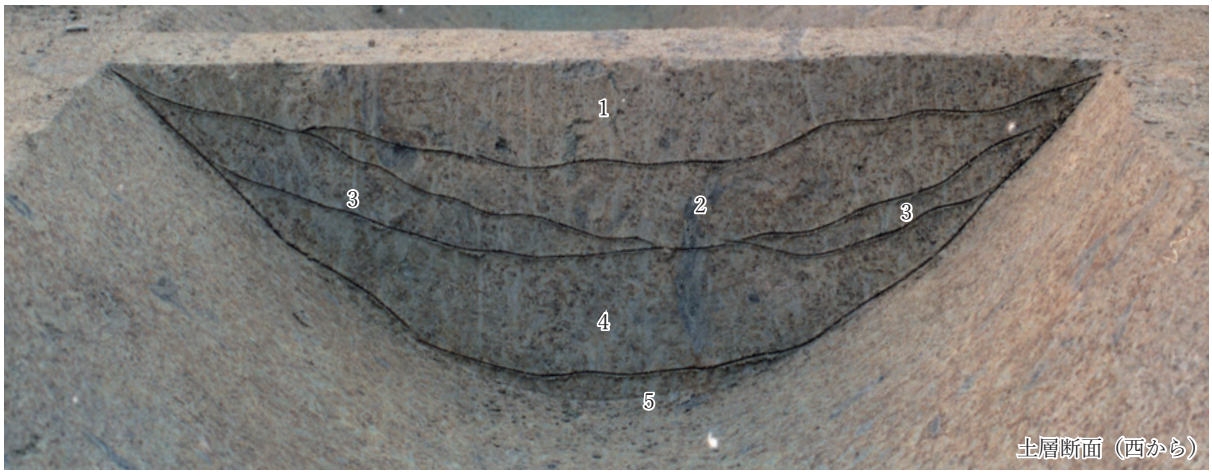
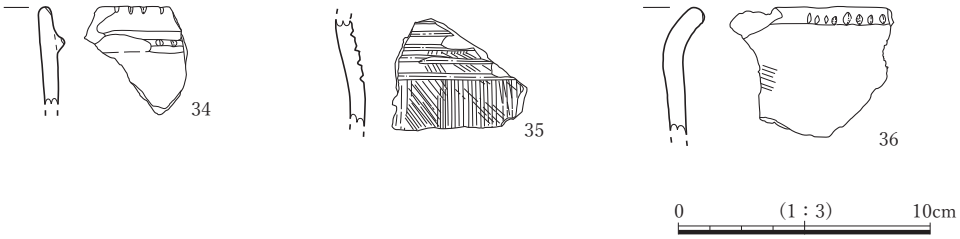


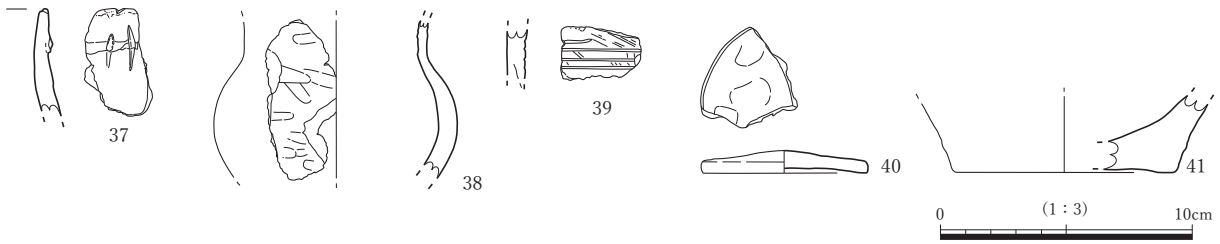
図 2-25　SD03（1）

図 2-26　SD03（2）



番号	種類・器種	文様・調整（外／内）	色調（外／内）	胎土
34	縄文土器・深鉢	口縁端部刻目，ヨコナデ・貼付突帯文に刻目・ナデ／ナデ	10YR 5/2 灰黄褐／ 7.5YR 5/4 にぶい褐	微細，石英・長石・輝石多量
35	弥生土器・甕	5 条の沈線・刷毛目・ナデ／ナデ	5Y 2/1 黒／ 2.5Y 4/2 暗灰黄	微細，石英・長石・輝石
36	弥生土器・甕	口縁端部刻目，摩耗・刷毛目のちナデ？／ナデ	7.5YR 7/6 橙／ 7.5YR 8/6 浅黄橙	微細，石英・長石・輝石・角閃石多量

図 2-27　SD03 出土土器



番号	種類・器種	法量（cm）			文様・調整（外／内）	色調（外／内）	胎土	層位
		口径	底径	器高				
37	縄文土器・深鉢	-	-	-	口縁端部刻目，ナデ・1 条の貼付突帯文に刻目／ナデ	5YR 5/4 にぶい赤褐／ 5YR 6/6 橙	微細，長石・輝石・角閃石多量	4 層最下部
38	弥生土器・壺	-	-	-	ナデ・ミガキ／剥離・ナデ・ユビオサエ	5YR 5/6 明赤褐／ 10YR 4/1 褐灰	微細，石英・長石多量	4 層下面
39	弥生土器・甕？	-	-	-	刷毛目・ナデ・4 条の沈線／ナデ	10YR 5/2 灰黄褐／ 2.5Y 7/2 灰黄	微細，長石・輝石	4 層
40	弥生土器・蓋	-	(6.6)	-	ナデ・ユビオサエ／ナデ・ミガキ	10YR 7/4 にぶい黄橙／ 10YR 6/4 にぶい黄橙	微細，石英・長石・輝石・角閃石多量	4・5 層
41	弥生土器・甕	-	(8.8)	-	ナデ・板ナデ／ナデ	7.5YR 5/3 にぶい褐／ 10YR 7/3 にぶい黄橙	微細，長石・輝石・角閃石多量	4 層

（　）復元値

図 2-28　包含層出土土器

（4）溝

SD01（図 2-3・4・23・24，図版 3）

調査区の北東隅で検出された溝である。幅は検出部位で 0.45 m、深さは調査区東壁で 0.26m を測り，東西に 2.20 m分検出された。埋土は黒褐色シルトの単層からなる。内部からは弥生土器片が出土した。本遺構は，出土遺物からみて，弥生時代前期末に属するものと考えられる。

SD02（図 2-15・18・21，図版 3）

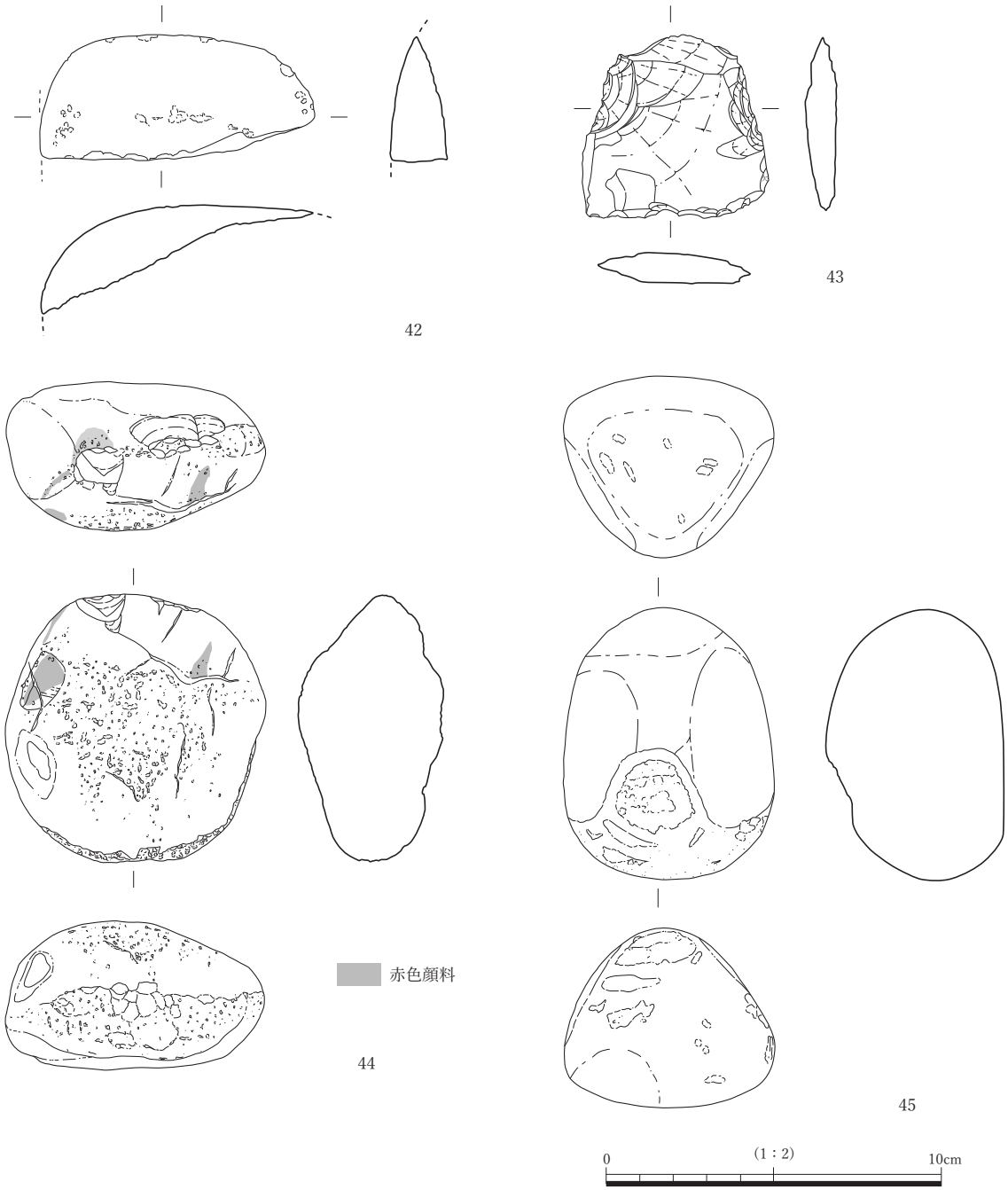
調査区の北西部で検出された溝である。SK01-1 と SK01-2 を切っている。幅 0.24 m，深さ 0.13m を測り，南北に 2.08 m分検出された。内部からは弥生土器片が出土した。本遺構は，出土遺物からみて，弥生時代前期末に属するものと考えられる。

SD03（図 2-25 ～ 27，図版 3）

調査区の南東部で検出された溝である。西側を撹乱によって破壊されている。幅 0.93 m，深さ 0.27m を測り，東西に 2.57 m分検出された。底面は東から西に向かう途中で一段下がっている。このことから，溝の機能時，水は東から西へと流れていたものと推定される。断面形はレンズ形を呈する。埋土は 4 層に分けられ，シルトが主体をなしている。内部からは弥生土器片に加え，刻目突帯文土器片も出土した。本遺構は，出土遺物からみて，弥生時代前期末には埋没したものと考えられる。

3. 包含層出土遺物

包含層からは，土器・石器が出土した（図 2-28・29，図版 3）。土器には，刻目突帯文土器，弥生土器の壺，蓋，底部などがある。37 は刻目突帯文土器の口縁部片である。弥生時代前期前葉に属する。38 は弥生土器の小形の壺である。時期決定は難しい。39 は弥生土器の小片である。器種は甕であろ



番号	器種	法量（cm）			重さ（g）	石材	備考	層位
		長さ	幅	厚さ				
42	石皿	3.7	8.1	1.7	58.09	砂岩	-	4 層
43	スクレイパー	5.5	5.6	0.9	33.38	サヌカイト	-	4 層
44	敲石	7.9	7.7	4.3	350	石英	磨り痕に赤色顔料付着，裏面剥離・敲打痕	4 層下半部
45	磨石	8.1	6.3	5.3	375	?	-	4 層下半部

図 2-29　包含層出土石器

うか。40 は蓋である。小形壺用であろうか。これらは 4 ～ 5 層からの出土である。石器には，石皿，スクレイパー，敲石，磨石がある。42 は小片ではあるが，石皿と判断した。石材は砂岩である。43 はスクレイパーである。石材はサヌカイトである。44 は敲石である。石材は石英で，赤色顔料が付着している。45 は磨石である。いずれも 4 層からの出土である。

（端野晋平）

文献

北條芳隆（編），1998．庄・蔵本遺跡 1 : 蔵本キャンパスにおける発掘調査．徳島大学埋蔵文化財調査室．
橋本達也，2001．弥生時代前期朝鮮系無文土器の展開と徳島．青山考古 18．167-176

第 3 章　第 22 次調査（西病棟新営その他電気設備地点）

第 1 節　調査の概要

1. 調査に至る経緯

蔵本キャンパスの東南部で，西病棟新営に係る電気設備工事が計画された。過去の調査成果にもとづくと，本地点において弥生時代前期を中心とする遺構・遺物が検出されることが予測されたため，発掘調査を実施することとした。

2. 調査体制

調査主体　国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・定森秀夫〔総合科学部・准教授〕）
調査員　中村豊（大学開放実践センター・助教）
調査補助員　板東美幸（施設マネジメント部・技術補佐員）
調査期間　2008 年 1 月 9 日～ 2 月 14 日
調査面積　約 103 ㎡

図 3-1　調査風景（東から）

第 2 節　調査の記録

1. 縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の時期区分

本地点では，庄・蔵本遺跡においてこれまで資料が少なく不明瞭であった，縄文時代から弥生時代への移行期に位置づけられる遺構・遺物が検出された。報告にあたり，まず当該期の時期区分を整理しておく。中村豊の縄文時代晩期後葉（中村，2014）および弥生時代前期（中村，2000，2004）の土器編年を参照し，これらを表 3-1 に整理した。また，中村（2014）による瀬戸内・近畿の土器編年との併行関係および近藤玲（2017）による北部九州の土器編年との併行関係を付した。以下では，表 3-1 の時期区分に従って，遺構・遺物の時期について説明する。

なお，凸帯文Ⅳ期 2[註1)] とⅠ－ 1 様式・古，凸帯文Ⅳ期 3 とⅠ－ 1 様式・新はそれぞれ併行するが，冗長さを避けるため，以降Ⅰ－ 1 様式・古，Ⅰ－ 1 様式・新，一括する場合はⅠ－ 1 様式と表記する。

表 3-1　徳島における縄文時代晩期から弥生時代前期の時期区分

時期区分	土器編年（中村2014）	土器編年（中村2000，2004）	基準資料（中村2014）	基準資料（中村2000）	瀬戸内・近畿との併行関係（中村2014）	北部九州との併行関係（近藤2017）
縄文時代晩期後葉	凸帯文Ⅰ期		土井(SK1023)，光勝院寺院内		前池式・滋賀里Ⅳ	山ノ寺・夜白Ⅰ
	凸帯文Ⅱ期		薬師，大柿		津島岡大13層・口酒井期	夜白Ⅱa
	凸帯文Ⅲ期				沢田式・船橋式	夜白Ⅱb・板付Ⅰ
	凸帯文Ⅳ期1		名東(SX01)，宮ノ本		長原式	
縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭	凸帯文Ⅳ期2（遠賀川式土器共伴共伴期1）	Ⅰ-1様式・古	三谷(SX01，SX02-1，SX02-2，SX03)			板付Ⅱa
	凸帯文Ⅳ期3（遠賀川式土器共伴共伴期2）	Ⅰ-1様式・新	三谷(第3層)，南蔵本(新SB4001，新SK4013，新SP4004)	庄・蔵本6次(配石墓2)，同9次(旧河道)，同10次(溝1)，同15次(SK458，SD427)		
弥生時代前期中葉		Ⅰ-2様式		庄・蔵本15次(SK022，SK403，SK0006，SK0007，SD16，SD17，SI01)		板付Ⅱb～Ⅱc
弥生時代前期末／中期初頭		Ⅰ-3様式		庄・蔵本9次(土壙1)，同10次(土壙1，土壙2，土壙3)，同15次(SD13，SK0029)		
		Ⅰ-4様式		庄・蔵本15次(SK35，SD107)		

また，凸帯文Ⅰ期～同Ⅳ期１を縄文時代晩期後葉，Ⅰ－１様式を縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭，Ⅰ－２様式を弥生時代前期中葉，Ⅰ－３・４様式を弥生時代前期末／中期初頭とよぶものとする。

2. 基本層序

調査区東壁 A-A' と南壁 B-B' の土層断面図（図 3-2）をもとに，基本層序について説明する。周辺の調査地点では，下記１～13 層より上層に上から，表土（明治時代前期の陸軍歩兵第 43 連隊創設に伴う造成土および戦後の大学病院整備に伴う整地層），青灰色粘土層（近代の水田層），緑灰色シルト層（中世～近世の水田層），黒褐色シルト層（弥生時代前期末／中期初頭～中世の土壌化層）の堆積が確認される。しかし，本地点では近年の撹乱が著しく，これらはほとんど残っていなかった。そのため，ここでは黒褐色シルト層より下の１～13 層について説明することとする。なお，黒褐色シルト層は既往調査の「黒褐色土層」（中村，2000）に相当する。

１層　灰黄褐色(10YR5/2)のシルト質細砂である。マンガンを含む。調査区東隅に限り確認される。

２層　灰黄褐色（10YR4/2）のシルト質細砂である。マンガンを含む。

３層　にぶい黄褐色（10YR4/3）のシルト質細砂である。マンガンを含む。

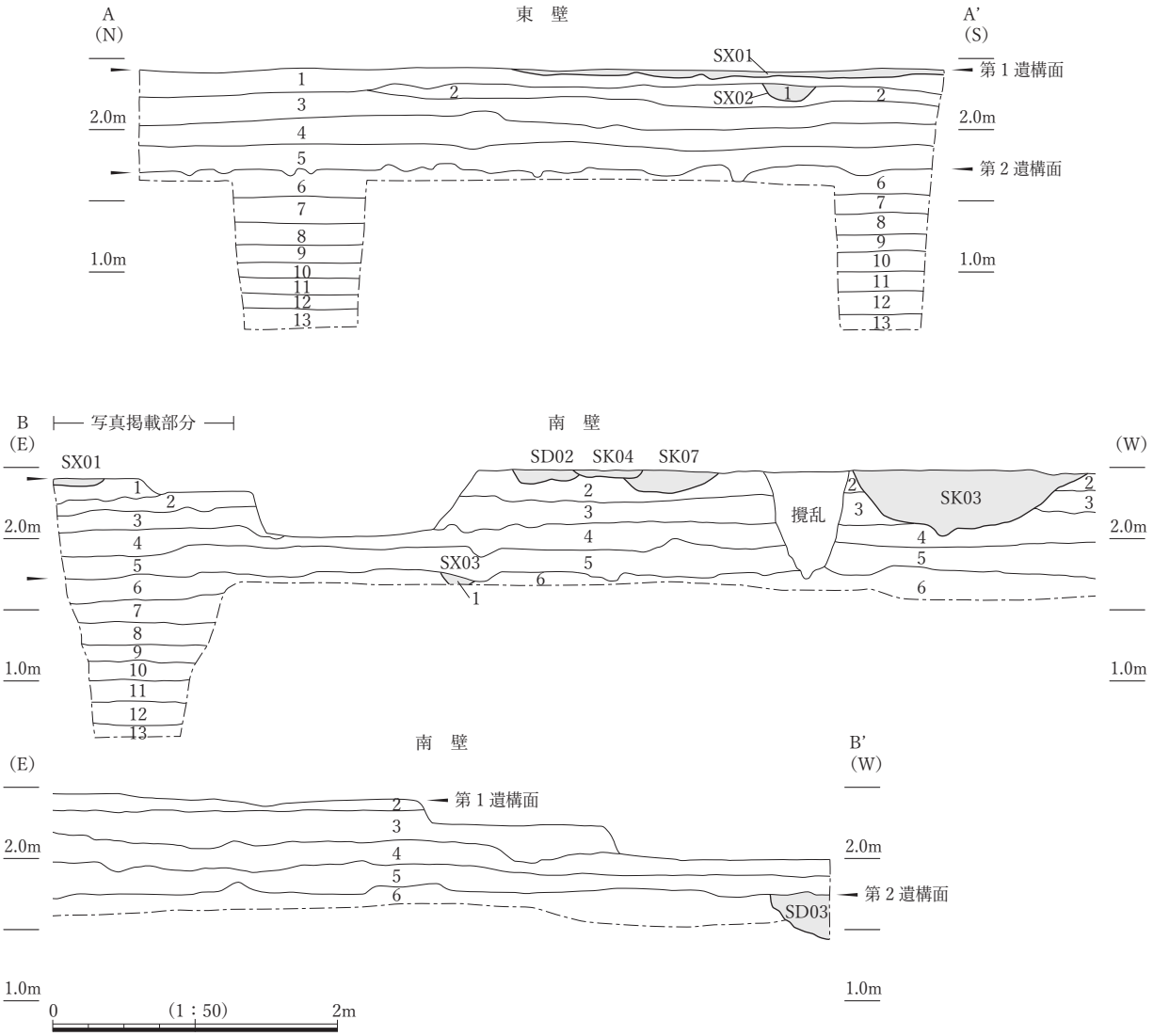
４層　灰黄褐色（10YR4/2）のシルト質細砂である。マンガンを含む。

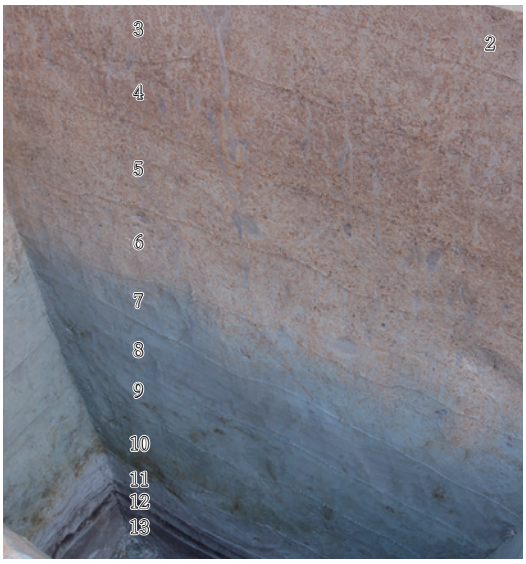
５層　灰黄色（2.5Y6/2）のシルト質極細砂である。マンガンを含む。

６層　灰オリーブ色（5Y6/2）の粘質シルトである。マンガンと鉄分を含む。

７層　暗オリーブ灰色（5GY4/1）の粘土である。鉄分を含む。

８層　暗緑灰色（7.5GY3/1）の粘土である。





〔基本層序〕
1 灰黄褐色(10YR5/2)シルト質細砂　マンガン含む
2 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細砂　マンガン含む
3 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質細砂　マンガン含む
4 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細砂　マンガン含む
5 灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂　マンガン含む
6 灰オリーブ色(5Y6/2)粘質シルト　マンガン・鉄分含む
7 暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土　鉄分を含む
8 暗緑灰色(7.5GY3/1)粘土
9 暗緑灰色(10GY4/1)シルト質極細砂
10 暗緑灰色(10GY4/1)極細砂混じり粘土
11 緑灰色(10G5/1)粘土
12 緑灰色(10GY6/1)粘土と緑黒色(10GY2/1)粘土(有機質層)の互層ラミナ形成
13 オリーブ黒色(7.5Y2/2)粘土

〔SX02埋土〕
1 褐灰色(10YR5/1)シルト

〔SX03埋土〕
1 暗青灰色(10BG4/1)細砂

図 3-2　東壁・南壁の土層断面

９層　暗緑灰色（10GY4/1）のシルト質極細砂である。
10 層　暗緑灰色（10GY4/1）の極細砂混じり粘土である。
11 層　緑灰色（10G5/1）の粘土である。
12 層　緑灰色（10GY6/1）の粘土と緑黒色（10GY2/1）の粘土（有機質層）が互層になる。ラミナが形成される。
13 層　オリーブ黒色（7.5Y2/2）の粘土である。

以下に，調査者である中村（2010）の見解を参照しつつ，各層の時間的位置づけと形成要因について説明する。１～５層は洪水起源砂層と推定され，一括する場合は黄褐色シルト層とよぶ。本層は既往調査の「黄褐色細砂層」（中村，2000）に相当する。他地点の黄褐色細砂層は弥生時代前期中葉～前期末／中期初頭（Ⅰ－２～４様式）の洪水起源砂層と考えられ，その上面からは弥生時代前期末／中期初頭（Ⅰ－３・４様式）～中世の遺構が検出される。一方，本地点では２層上面から縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－１様式）の SK03 が検出されている。こういった点を考慮すると，洪水起源砂層と考えられる黄褐色シルト層のうち，少なくとも２層以下は，縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭頃には他地点より早く微高地化していた推定される（中村，2000）。

６層は土壌化が進行しており，微高地形成直前の旧地表面であったと考えられる。既往調査の「暗褐色粘質土層」に相当し，縄文時代晩期後葉頃に形成されたと推定される（中村，2000）。なお、本地点では同層からの出土遺物は認められない。10 層以下はグライ化した粘土層が堆積する。なかでも 12 層は本遺跡一帯で確認され，縄文時代後期末～晩期初頭頃に形成されたと推定される（中村，2010）。

１層上面もしくは２層上面を第１遺構面，６層上面を第２遺構面とし，調査を実施した。なお，第１遺構面から第２遺構面への掘り下げる時に検出された遺構，つまり１層中または２層中～５層中で検出された遺構を第 1.5 遺構面の遺構とした。

3. 第２遺構面の遺構と遺物

SD03（図 3-3・5・6，図版 4）

調査区南西隅の６層上面で検出された。全形は不明であるが，南北にのびる溝と推定される。残存部の長さ 2.1m，幅 0.4m である。断面は碗形とみられ，深さ 0.3m である。埋土は３層認められる。シルト質粘土～シルト質極細砂で，土色は暗オリーブ灰色・オリーブ灰色・灰オリーブ色である。これは後述する第１・1.5 面で検出された遺構の埋土とは異なる。

［出土遺物］　１は口縁部で，器種は不明である。小片のため時期を限定することは難しいが，形態や胎土からみて，弥生時代前期（Ⅰ－１～４様式）の所産である可能性が高い。

［時期］　６層は縄文時代晩期後葉頃に形成された土壌化層で，その上に堆積する１～５層は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－１様式）頃の洪水起源砂層と推定される。つまり，６層上面に形成された本遺構は，縄文時代晩期後葉～Ⅰ－１様式のある時点で形成された可能性が高いといえる。出土土器が混入したものではなく遺構に伴うものであれば，土器はⅠ－１様式の所産である可能性が高

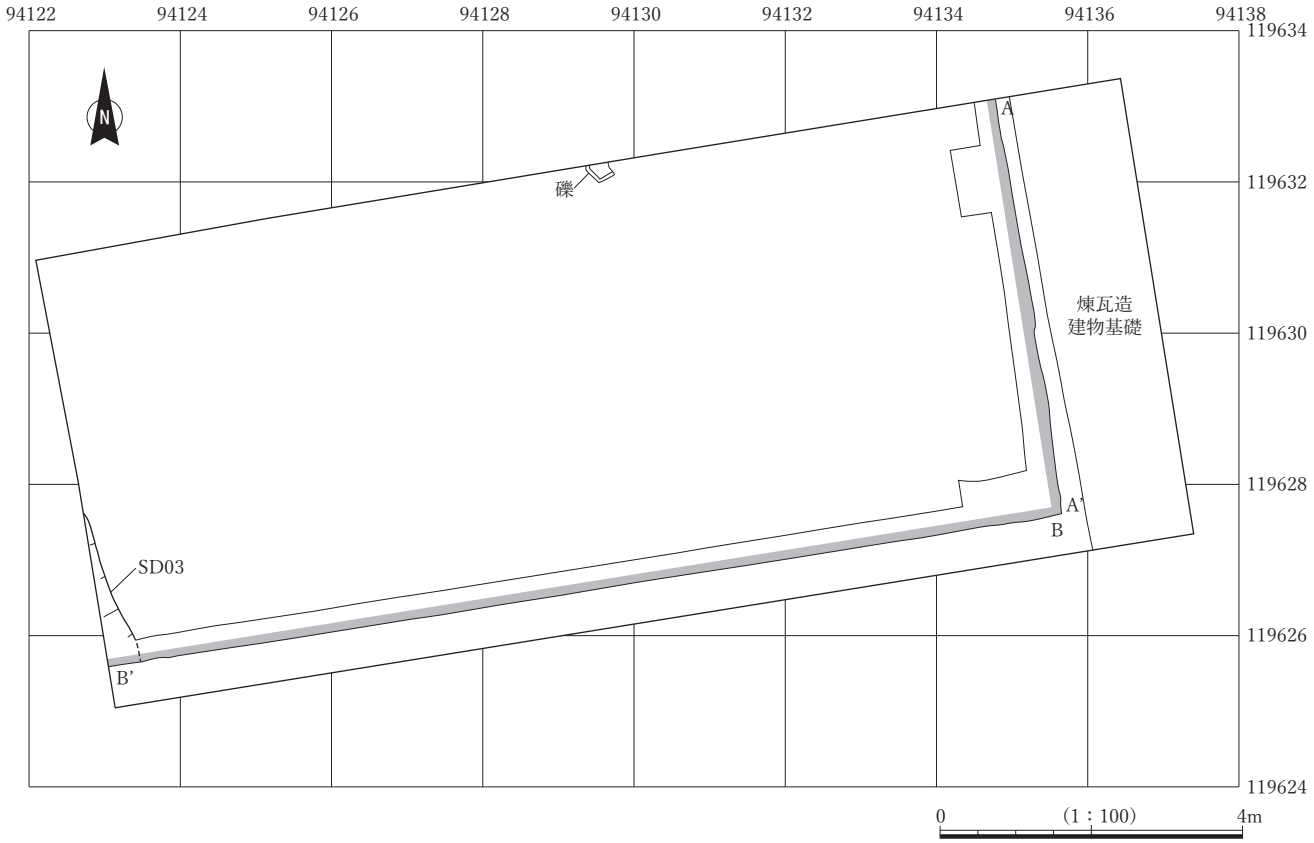
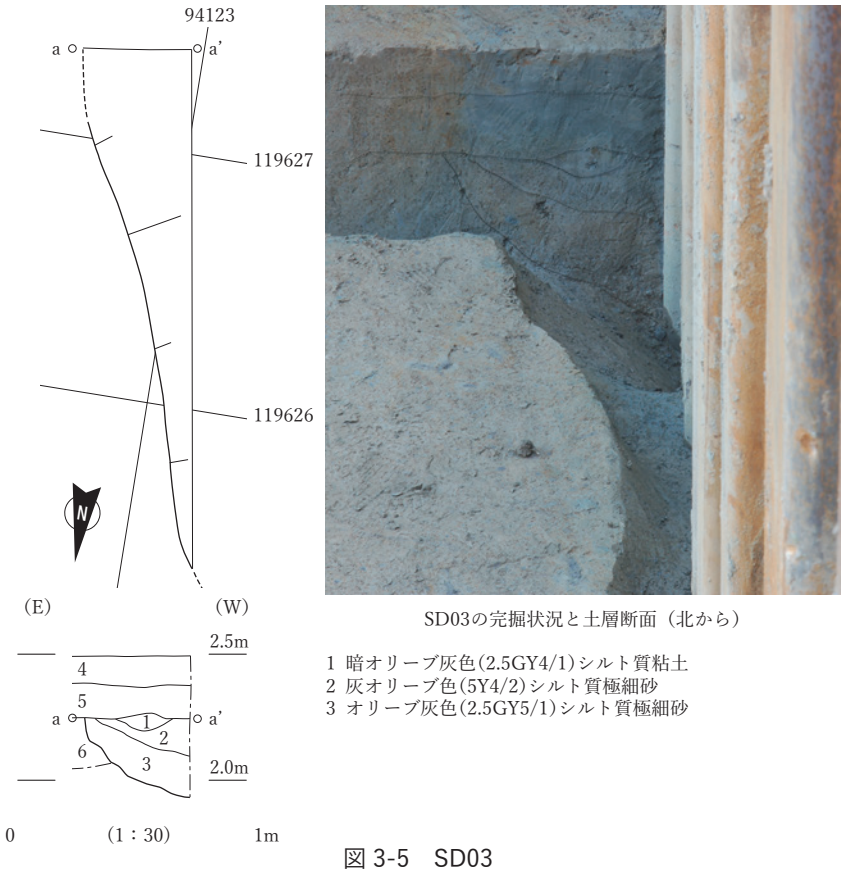


図 3-3　第 2 遺構面の遺構平面図

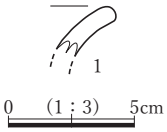
図 3-4　第 2 遺構面の完掘状況（西から）



SD03の完掘状況と土層断面（北から）

1 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト質粘土
2 灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質極細砂
3 オリーブ灰色(2.5GY5/1)シルト質極細砂

図 3-5　SD03



番号	遺構・層位	種類・器種	法量（cm）			文様	調整（外／内）	色調（外／内）	粘土帯の積み上げ方法		
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面長(mm)	粘土帯幅(mm)
1	SD03	弥生土器・器種不明	－	－	－	－	ナデ／ナデ	10YR6/4にぶい黄橙／7.5YR6/4にぶい橙	－	－	－

図 3-6　SD03 出土遺物

い。以上をふまえると，本遺構は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－１様式）に位置づけられる可能性が高いといえる。

SX03（図 3-2）

調査区南壁の 6 層上面で確認された。平面的には検出されておらず，遺構であるかは不明である。残存部の長さ 0.3m である。断面はレンズ形とみられ，深さ 0.1m である。埋土は細砂で，土色は暗青灰色である。埋土から遺物は出土していない。

［時期］　検出層位から縄文時代晩期後葉～同晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－１様式）のある時点で形成されたと考えられる。

4. 第 1.5 遺構面・第 1 遺構面の遺構と遺物

第 1 遺構面から第 1.5 遺構面にかけては，基盤層と遺構埋土が同質に近く，遺構の平面形態を明確

に検出することが困難な場合もあった。そのため，本来の掘り込み面より下層で検出した遺構も含まれる。ここでは，両遺構面で検出された遺構を合わせ，縄文時代晩期末～弥生時代前期とそれ以降に位置づけられるものに区分して説明する。

(1) 縄文時代晩期末～弥生時代前期

SK01・SK01 下層（図 3-7・8・10 ～ 13，図版 4・5）

SK01 は調査区中央部やや北側の第 1 遺構面（2 層上面）で検出された。平面形は長軸を南北方向とする楕円形で，北端は隅丸方形に近い形態を呈する。長さ 2.6m，幅 1.0m である。短軸断面はレンズ形で, 深さ 0.2m である。埋土は 3 層認められる。いずれもシルトに砂が混ざり, 土色は暗灰黄色・黄褐色である。2 層には炭化物が含まれる。

第 1 遺構面を掘り下げ中，つまり第 1.5 遺構面（2 ～ 5 層）において，SK01 の真下，約 0.2m から類似した形態をもち，一回り小さい遺構が検出された。これを SK01 下層とした。平面形は SK01 と同様，長軸を南北方向とする楕円形で，長さ 2.3m，幅 0.9m である。短軸断面は逆台形で深さ 0.3m である。埋土は 5 層認められる。いずれもシルトで砂が混ざり，土色は暗灰黄色・黄褐色・灰黄色・灰オリーブ色である。3 ～ 5 層には炭化物が含まれる。遺物は 5 層を中心に含まれ，平面的には南東隅に集中するが，中央にも分布している。なお，2・3 層は U 字形もしくは逆台形を呈しており，後述するように木棺の痕跡を示す可能性も想定される。3 ～ 5 層に含まれる炭化物も木棺と関係する可能性がある。

さて，調査時に認識された SK01 と SK01 下層の両短軸断面（図 3-10）は連続しておらず，SK01 底部の標高は 2.3m，SK01 下層上面の標高は 2.2m であり，0.1m の開きがある。その一方で，両遺構が平面的にほぼ同じ位置で検出されている点，下位に位置する SK01 下層が一回り小さい点，埋土の粒度と土色が非常に類似している点は，両者がひとつの遺構であることを示唆する。

［SK01 下層出土遺物］　出土遺物は 2 ～ 13 である。2 は壺頸胴部で，頸胴部境に 1 条以上の削出突帯を有し，その上端に縁取沈線（深澤，1989，2000）がみられる。3 は壺胴部である。胴部上半に多条の箆描直線文を有し，その上端と下端の断面にはわずかな段がみられる。これは佐原真（1967）の削出突帯第 II 種（多条）に相当する可能性があり，その場合は 7 条の削出突帯となる。4 は壺頸胴部で，胴部最大径のやや上に 2 条の貼付突帯を有し，その直上に箆描直線文 2 条，直下に箆描直線文 2 条以上が施される。貼付突帯の接合面には，箆描直線文状の沈線が 1 条めぐる。5・6 は壺の底部とみられる。

7 は甕である。口縁部は外反し, 口唇部下端に刻目を有する。口縁部下に箆描直線文 3 条が施される。外面には明瞭な刷毛目調整がみられる。8 ～ 10 は甕の底部と考えられる。10 は外面に赤色顔料が塗布される。11 は器種不明である。縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ｉ－１様式）の三谷遺跡（勝浦編，1997）から出土した，浅鉢・鉢・高坏の屈曲部は 11 と類似する形態を呈しており，11 もこれらの器種の可能性がある。12 は器種不明で，底部または蓋の可能性がある。底部としては非常に厚手であり，上げ底状を呈する。凸帯文Ⅳ期 1 の名東遺跡（勝浦編，1990），Ｉ－１様式の三谷遺跡，Ｉ－２様式に類似した形態の底部はみられない。Ｉ－４様式に出現する紀伊型甕（中村，2000）の

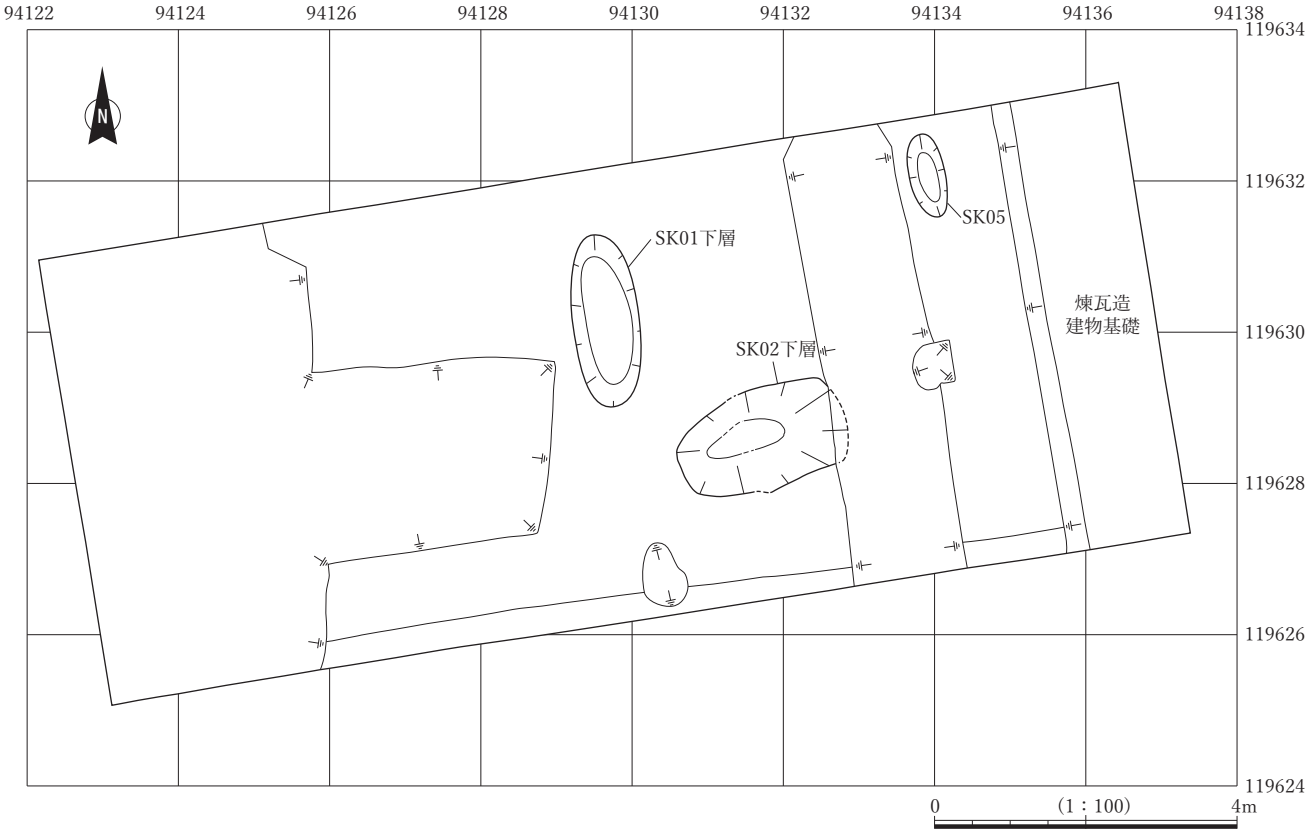
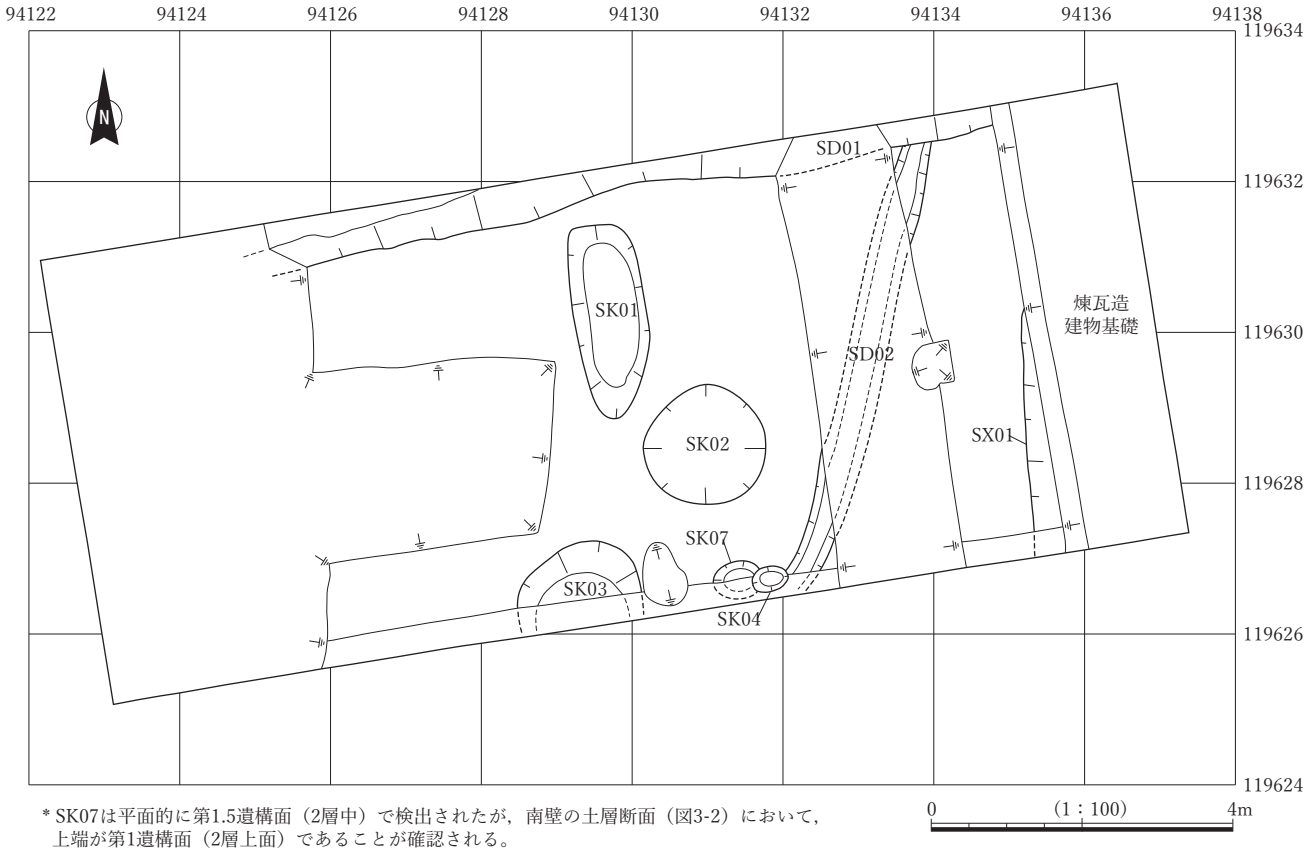


図 3-7　第 1.5 遺構面の遺構平面図



* SK07は平面的に第1.5遺構面（2層中）で検出されたが，南壁の土層断面（図3-2）において，上端が第1遺構面（2層上面）であることが確認される。
** SK06は欠番。

図 3-8　第 1 遺構面の遺構平面図

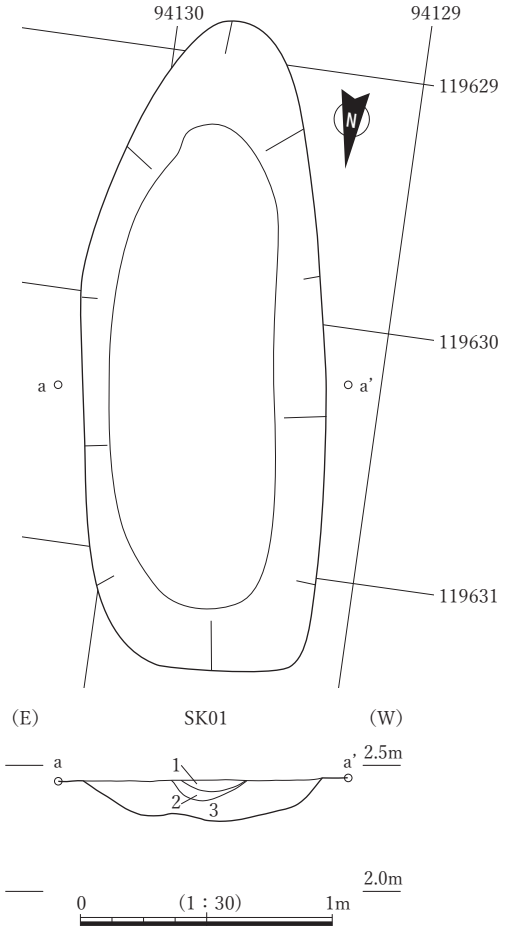
図 3-9　第 1 遺構面の完掘状況（西から）

底部は形態的に類似している。ただし，紀伊型甕は外面の胴部から底部にかけてケズリ調整が認められるが，11 にそれは認められない。

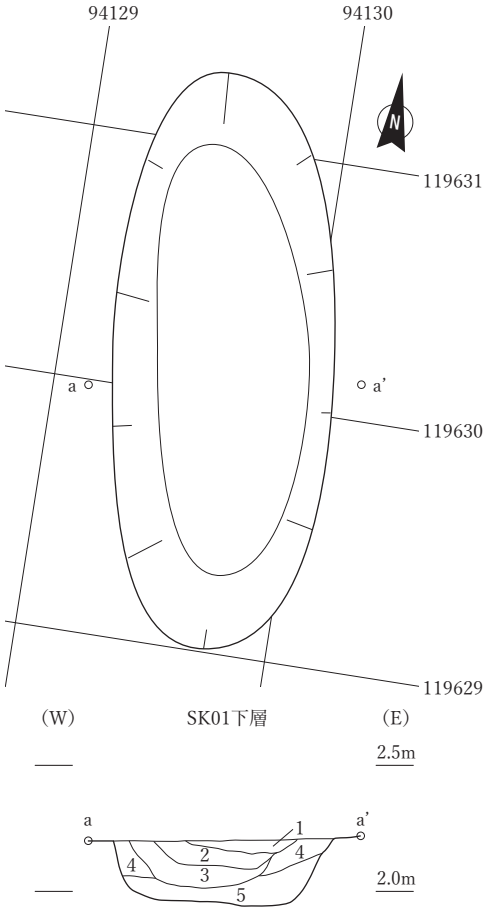
13 はサヌカイト製の粗製剥片石器である。実測図の下端と右端に剥離が連続する部分があり，これらが刃部と考えられる。

中村（2000）の編年案にもとづき，以上の土器の時期を検討する。壺 2 の頸胴部境の削出突帯は弥生時代のⅠ－ 1・2 様式にみられる。壺 3 の頸胴部境の削出突帯第Ⅱ種（多条）は，事例が少なく時期的指標となっていないが，同（少条）に比べ後出する（佐原，1967）と考えれば，Ⅰ－ 2・3 様式に比定されようか。壺 4 の刻目を有する 2 条貼付突帯は貼付 b 種（中村，2000）に相当しⅠ－ 3・4 の特徴とされる。甕 7 の箆描直線文 3 条はⅠ－ 1 ～ 4 様式を通じてみられ，時期は特定できない。以上を整理すると，出土遺物は弥生時代のⅠ－ 2・3 様式を中心とし，Ⅰ－ 1 ～ 4 様式の時期幅が想定される。

［SK01 出土遺物］　出土遺物は 14 ～ 17 である。14 は壺頸胴部で，頸胴部境に 1 条以上の削出突帯を有する。上端に縁取沈線はみられないようである。15 は甕で，外反する口縁部をもち，口唇部全面に刻目を有する。口縁部下の削出突帯上には箆描直線文 1 条を有し，これは佐原（1967）の第Ⅱ種（少条）に相当する。器面が摩耗しており，現状で縁取沈線は確認できない。16・17 は塩基性片岩製である。縦断面の下端が鋭角となり，この部分を中心に剥離を有するため，これが刃部となる可



1 黄褐色(2.5Y5/3)シルト（砂が混じる）　マンガンを含む
2 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト（砂が混じる）　マンガン・炭化物を多く含む
3 黄褐色(2.5Y5/3)シルト（砂が混じる〔1層より砂の量が多い〕）マンガン・鉄分を多く含む

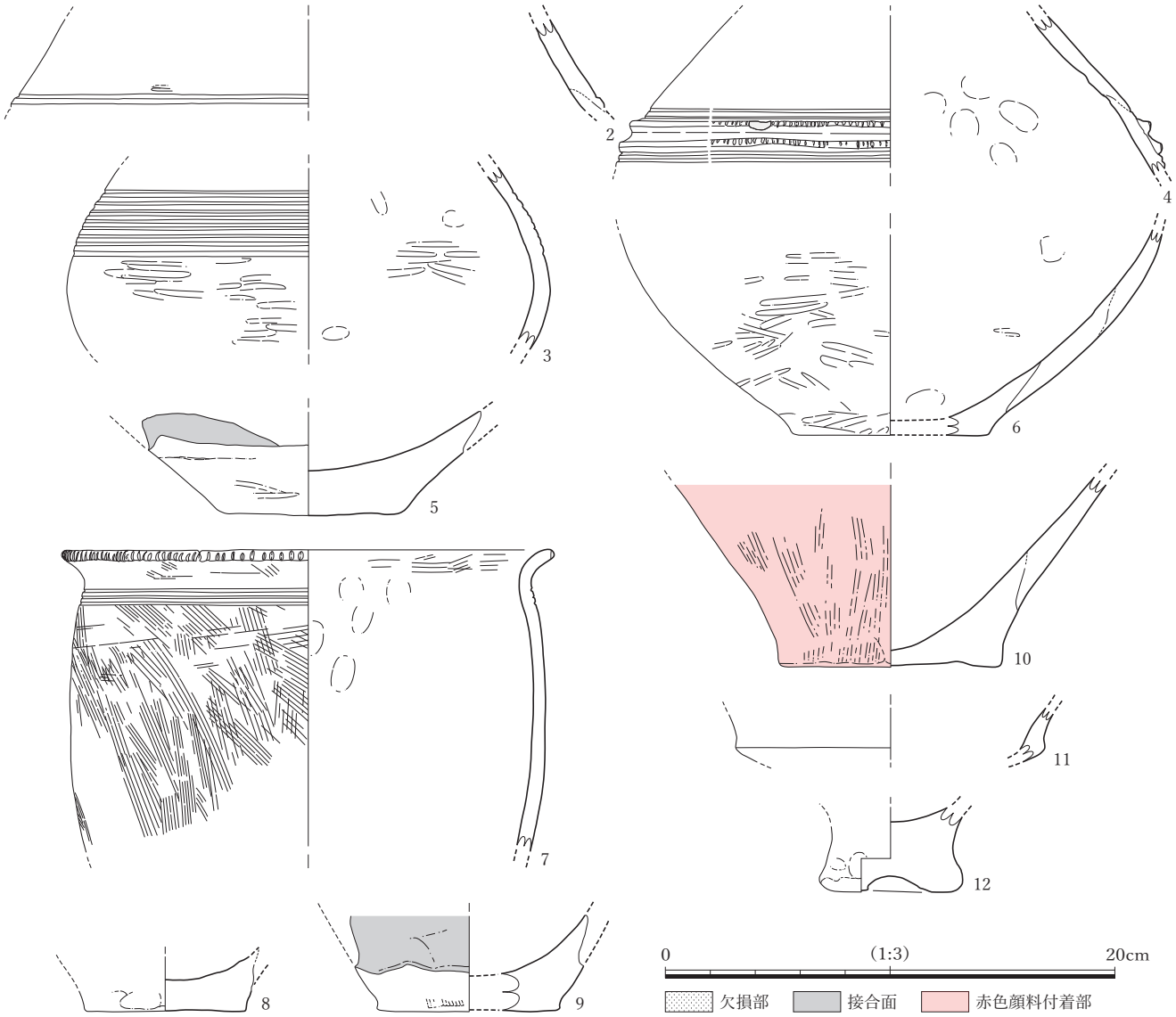


1 灰黄色(2.5Y6/2)シルト（砂が混じる）　黄褐色(2.5Y5/3)シルト（粘性あり)をブロック状に含む　マンガン・鉄分を含む
2 灰オリーブ色(5Y5/3)シルト(砂が混じる〔1層より砂の量が多い〕)黄褐色(2.5Y5/3)シルト(粘性あり)をブロック状に含む
3 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト(砂が混じる)　マンガン・鉄分を少量含む　炭化物を含む
4 灰オリーブ色(5Y5/3)シルト(砂が混じる)　マンガン・鉄分・炭化物を含む
5 黄褐色(2.5Y5/3)シルト(砂が少量混じる・粘性あり)　マンガン・鉄分・炭化物・土器を含む

SK01 完掘状況と土層断面（北から）

SK01 下層の遺物出土状況と土層断面（南から）

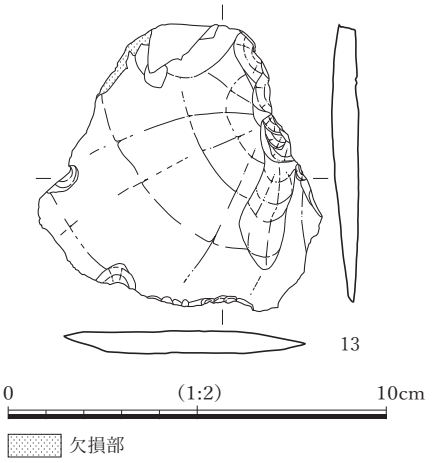
図 3-10　SK01



番号	遺構・層位	種類・器種	法量（cm）			文様	調整（外／内）	色調（外／内）	粘土帯の積み上げ方法			備考
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面長(mm)	粘土帯幅(mm)	
2	SK01 下層	弥生土器・壺	–	–	–	1 条以上削出突帯 + 縁取沈線	ミガキ／ナデ	5YR6/6 橙／10YR7/3 にぶい黄橙	外傾	–	–	–
3	SK01 下層	弥生土器・壺	–	–	–	7 条削出突帯（篦描直線文 9 条）	ナデ，ミガキ／ナデ，ユビオサエ，ミガキ	10YR5/3 にぶい黄褐／2.5Y5/2 暗灰黄	–	–	–	スス付着
4	SK01 下層	弥生土器・壺	–	–	–	篦描直線文 2 条，2 条貼付突帯、篦描直線文 2 条以上	ナデ／ナデ，ユビオサエ	10YR6/3 にぶい黄橙／2.5Y6/1 黄灰	外傾	–	–	–
5	SK01 下層	弥生土器・壺？	–	7.7	–	–	ナデ，ミガキ／ナデ	5YR7/8 橙／5YR7/6 橙	外傾	20.0	–	–
6	SK01 下層	弥生土器・壺？	–	(8.8)	–	–	ナデ，ミガキ／ナデ，ユビオサエ，ミガキ	7.5YR5/3 にぶい褐／2.5Y4/1 黄灰	外傾	27.5	50.0	–
7	SK01 下層	弥生土器・甕	(21.7)	–	–	口唇部刻目，篦描直線文 3 条	刷毛目，ナデ／刷毛目，ナデ，ユビオサエ	10YR5/3 にぶい黄褐／7.5YR6/4 にぶい橙	–	–	–	スス付着
8	SK01 下層	弥生土器・甕？	–	(7.2)	–	–	ナデ，ユビオサエ／ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙／7.5YR6/6 橙	外傾	–	–	–
9	SK01 下層	弥生土器・甕？	–	(8.1)	–	–	刷毛目，ユビオサエ（接合面）／ナデ	5YR6/6 橙／5YR6/6 橙	外傾	21.5	–	–
10	SK01 下層	弥生土器・甕？	–	(9.8)	–	赤色顔料	刷毛目，ナデ／ナデ	2.5YR6/6 橙／10YR7/2 にぶい黄橙	外傾	–	–	–
11	SK01 下層	弥生土器・高坏／浅鉢？	–	–	–	–	不明／ナデ	10YR3/1 黒褐／10YR7/4 にぶい黄橙	–	–	–	外面黒斑／黒色化？
12	SK01 下層	弥生土器・器種不明	–	(6.3)	–	–	ユビオサエ，ナデ／ナデ	5YR6/6 橙／10YR4/2 灰黄褐	–	–	–	コゲ付着？

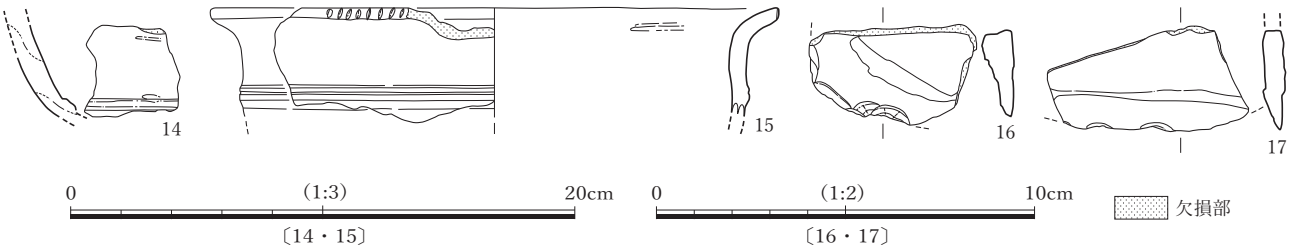
（ ）復元値

図 3-11　SK01 下層出土遺物 (1)



番号	遺構・層位	器種	法量（cm）			重さ(g)	石材
			長さ	幅	厚さ		
13	SK01 下層	粗製剥片石器	7.5	7.4	0.7	41.78	サヌカイト

図 3-12　SK01 下層出土遺物 (2)



番号	遺構・層位	種類・器種	法量（cm）			文様	調整（外／内）	色調（外／内）	粘土帯の積み上げ方法		
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面長(mm)	粘土帯幅(mm)
14	SK01	弥生土器・壺	－	－	－	１条以上削出突帯	ミガキ／ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙／10YR6/3 にぶい黄橙	外傾	－	29.0
15	SK01 ベルト	弥生土器・甕	(22.5)	－	－	口唇部刻目，２条削出突帯 篦描直線文１条	ナデ／ナデ，ミガキ	7.5YR7/6 橙／5YR7/6 橙	－	－	－

番号	遺構・層位	器種	法量（cm）			重さ(g)	石材
			長さ	幅	厚さ		
16	SK01	打製石庖丁？	(2.6)	(4.4)	(0.8)	11.39	塩基性片岩
17	SK01 ベルト	打製石庖丁？	(2.7)	(4.6)	(0.5)	10.68	塩基性片岩

(　) 復元値

図 3-13　SK01 出土遺物

能性がある。打製石庖丁であろうか。

壺 14，甕 15 の削出突帯第Ⅰ・Ⅱ種は，弥生時代のⅠ－１・２様式に確認される（中村，2000）。

（時期）　SK01 は２層上面，SK01 下層は２～５層で検出されている。２～５層は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－１様式）頃に形成されており，両遺構の形成はそれ以降と考えられる。出土土器は，SK01 下層はⅠ－２・３様式を中心にⅠ－１～４様式の時期幅をもち，SK01 はⅠ－１・２様式に位置づけられる。以上より，本遺構の時期は弥生時代のⅠ－１・３様式を中心にⅠ－１～４様式の時期幅が想定される。

SK02・SK02 下層（図 3-7・8・14 ～ 17，図版 5 ～ 7）

SK02 は調査区中央部の第 1 遺構面（2 層上面）で検出された。平面形は円形で直径 1.6m である。さらに，第 1 遺構面の掘り下げ中の第 1.5 遺構面（2 ～ 5 層）において，SK02 に重複しつつやや東にずれた位置から遺構が検出され，これを SK02 下層とした。平面形は，長軸を東西方向とする隅丸方形もしくは楕円形で，長さ 2.2m 以上，幅 1.4m である。短軸断面は碗形で，深さ 0.4m である。埋土は 6 層認められる。いずれもシルトで砂が混ざり，土色は暗灰黄色・黄褐色・灰オリーブ色である。土器は 3 層を中心に含まれ，平面的には北東部に集中する。4 層には炭化物が多量に含まれている。なお，SK02 は基盤層（2 ～ 5 層）と遺構埋土が類似し，平面的に明確な遺構の輪郭を検出するのが困難であった。そのため，SK02 と SK02 下層が，同一または別の遺構であるのかは不明である。

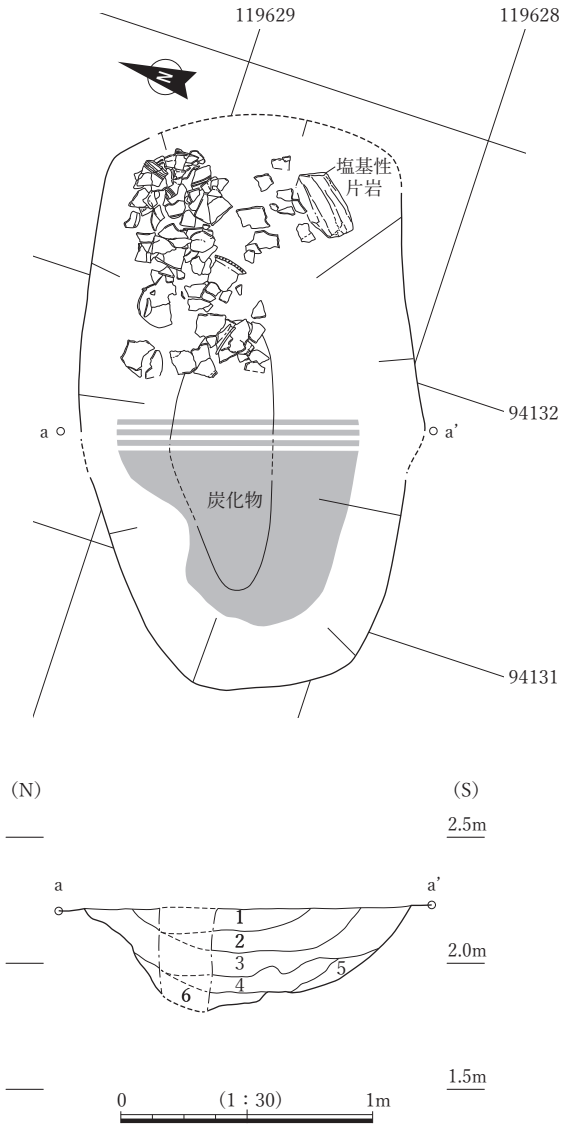
後述するように，少なくとも SK02 下層は土壙墓または配石墓の可能性がある。遺構南東隅の 3 層付近，つまり遺構底部からやや浮いた位置で，長さ 0.3m，幅 0.2m ほどの塩基性片岩 1 点が検出されている。これが配石にあたる可能性がある。さらに，土層断面において明確な木棺の輪郭を確認できるわけではないが，4 層に含まれる多量の炭化物とその平面的な広がりは木棺の存在が示唆される。また，完形に近い土器が遺構北東部に集中している。これらは炭化物が集中する 4 層直上で 3 層に沿うように断面 U 字状に広がっている。本来，木棺の上または外に置かれた土器が，木棺の腐敗により生じた空隙部分に落ち込んだまたは流れ込んだ状況が推定される。

［SK02 下層出土遺物］　出土遺物は 18 ～ 37 である。18 は壺口頸部で，口縁部下に段を有する。19 は壺底部と考えられる。18 と 19 は色調・胎土・サイズが類似し，同一個体である可能性が高い。20 は小片であるが，口縁部下に段を有する壺口縁部とみられる。21 は壺頸胴部である。頸胴部境に段を有するが，段の部分に縁取沈線は確認されない。段より上の頸部に沈線による重弧文または複線山形文が施される。

22 は壺である。頸胴部境に段を有し，直下に箆描直線文が 3 条施される。これは段第 II 種に相当する（佐原，1967）。また，段の部分には縁取沈線がみられる。箆描直線文は，口縁部下に 4 条，胴部最大径やや上に 3 条施されている。口縁部下に箆描直線文の切り合いが観察され，時計周りで施文されている。外面の口縁部～胴部下半から内面の口縁部にかけ，赤色顔料が塗布されている。

23 は壺口頸部である。部分的にではあるが，外面の口頸部から内面の口縁部にかけ赤色顔料が残存している。24・25 は壺の底部から胴部である。24 は器面の摩耗が顕著であり，現状で文様は確認できない。

26-1・2 は壺頸胴部である。両者は接合しないが，色調・胎土・断面形態・器面調整が類似し，同一個体である可能性が高い。26-1 は頸胴部境に段を有し，そこに縁取沈線が観察される。26-2 は残存部上端が段に相当する。26-1・2 ともに，ミガキ調整の後，1mm 以下の沈線で胴部に文様が描かれている。いずれも円形を単位とし，それが横方向に連続するようである。26-1 の左側の円は格子，中央の円は横方向の直線で充填されている。右端にも円形の単位があると推定され，縦または斜めの直線で充填されているようである。器面調整・施文順は，ミガキ調整→外周の円形→内部の充填（縦方向の直線→横方向の直線）の順である。26-2 は中央に横方向の直線または曲線で充填された円形が描かれ，その左右に同様の円形または菱形の単位が連続する。



1 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト（砂が混じる）　マンガン・鉄分・土器片を含む
2 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト（砂が混じる）　1層より鉄分を多く含む　マンガン・炭化物を含む
3 黄褐色(2.5Y5/3)シルト（砂が混じる）　マンガンを多く含む　鉄分・炭化物・土器片を含む
4 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト（砂が混じる・粘性あり）　マンガン・鉄分を含む　炭化物を多く含む　焼土を含む
5 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト（砂が混じる・粘性あり）　マンガン・鉄分を含む
6 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト（砂が混じる・粘性あり）　マンガン・鉄分・炭化物を含む

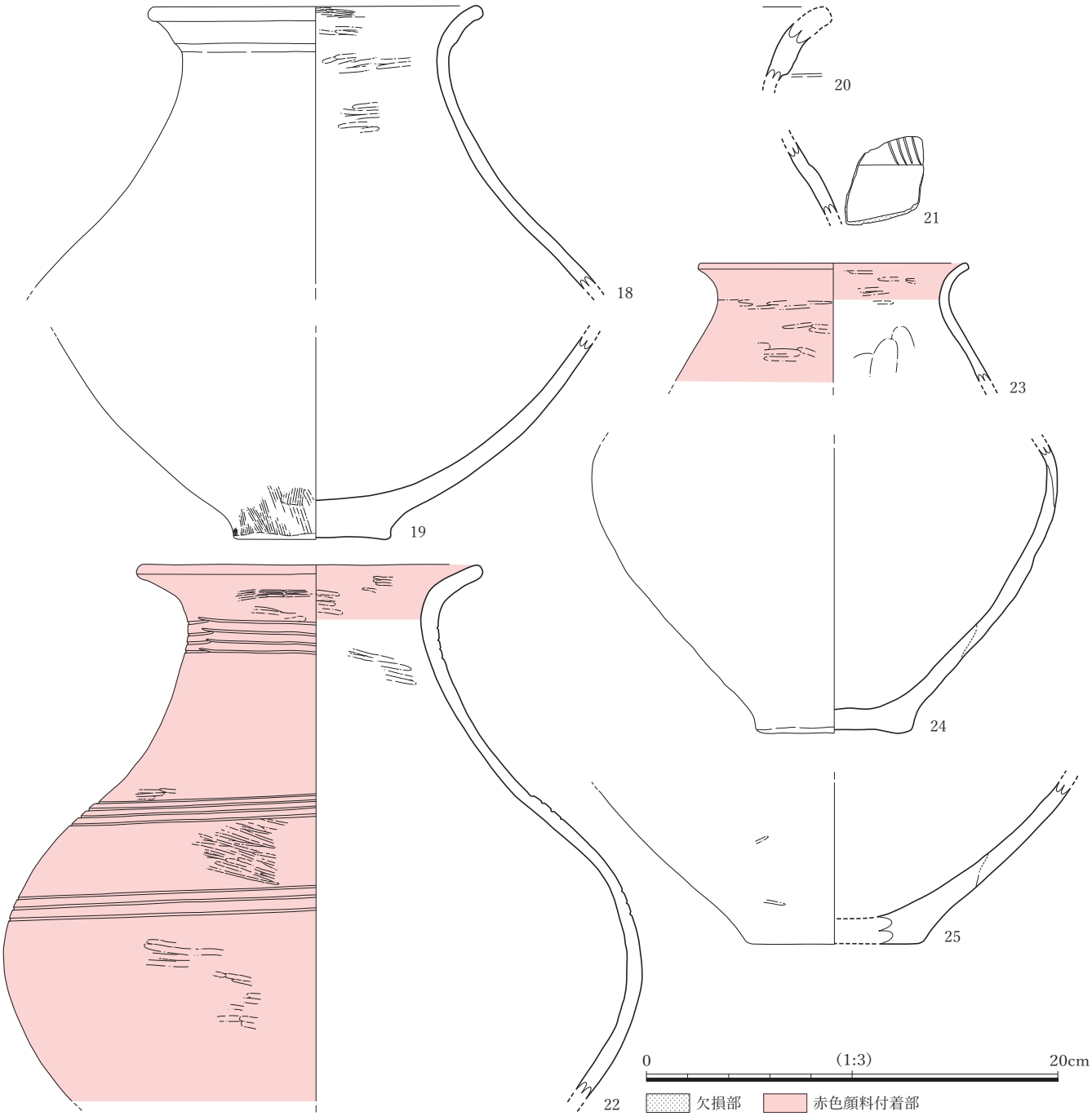
SK02下層の遺物出土状況（東から）

SK02下層の炭化物出土状況（西から）

SK02下層の完掘状況と土層断面（西から）

図 3-14　SK02 下層

27 は壺頸胴部である。頸胴部境に段を有し，直下に箆描直線文２条が施されている点から，22 と同様，段第Ⅱ種に相当する。また，段には縁取沈線がみられる。箆描直線文が頸部に２条以上，胴部最大径に３条，胴部下半に２条施される。さらに，頸胴部境と胴部最大径の箆描直線文を区分文様とし，区分間文様として横型流水文が描かれている。この横型流水文は，沈線を用いた陰影表現による陽刻



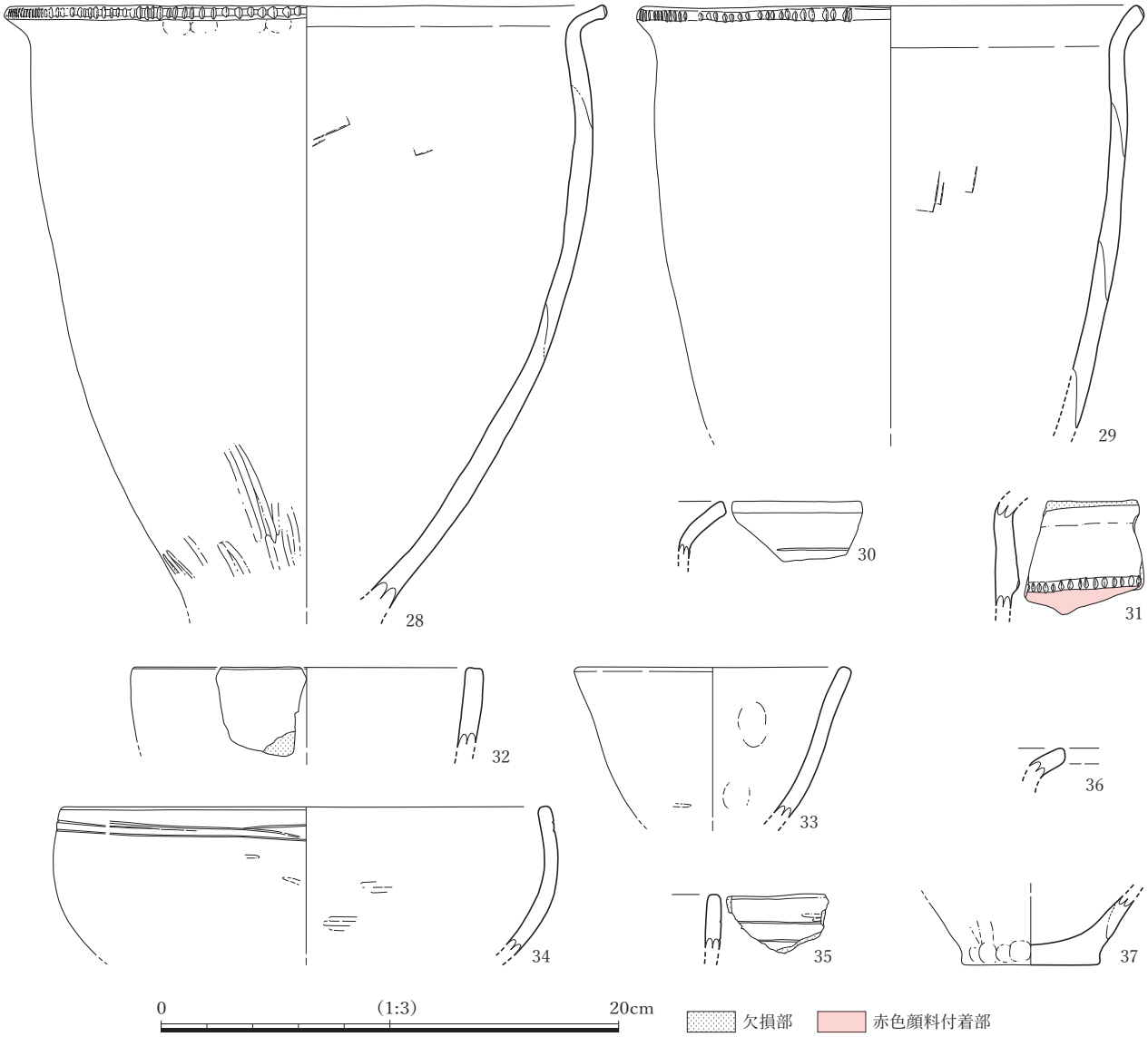
番号	遺構・層位	種類・器種	法量（cm）			文様	調整（外／内）	色調（外／内）	粘土帯の積み上げ方法			備考
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面長(mm)	粘土帯幅(mm)	
18	SK02 下層	弥生土器・壺	(15.8)	–	–	段（口縁部下）	ナデ／ナデ，ミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙／10YR7/3 にぶい黄橙	–	–	–	–
19	SK02 下層	弥生土器・壺？	–	7.3	–	–	刷毛目／ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙／10YR7/3 にぶい黄橙	–	–	–	–
20	SK02 下層	弥生土器・壺	–	–	–	段（口縁部下）	ナデ／ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙／7.5YR6/3 にぶい褐	–	–	–	–
21	SK02 下層	弥生土器・壺	–	–	–	段（頸胴境），重弧文／複線山形文	不明／ナデ	7.5YR7/6 橙／5YR7/6 橙	–	–	–	–
22	SK02 下層	弥生土器・壺	(16.4)	–	–	箆描直線文 4 条，段＋縁取沈線＋箆描直線文 3 条，箆描直線文 3 条，赤色顔料	ナデ，ミガキ／ナデ，ミガキ	5YR6/6 橙／7.5YR6/4 にぶい橙	–	–	–	ミガキ調整→施文，覆い型野焼き
23	SK02 下層	弥生土器・壺	(12.9)	–	–	赤色顔料	ナデ，ミガキ／ナデ，ユビオサエ，ミガキ	7.5YR7/4 にぶい橙／7.5YR7/4 にぶい橙	–	–	–	–
24	SK02 下層	弥生土器・壺	–	7.5	–	–	不明／ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙／2.5Y4/1 黄灰	外傾	21.5	43.0	覆い型野焼き
25	SK02 下層	弥生土器・壺？	(8.6)	–	–	–	ミガキ／不明	5YR6/6 橙／2.5Y7/3 浅黄	外傾	–	–	–

（　）復元値

図 3-15　SK02 下層出土遺物 (1)

番号	遺構・層位	種類・器種	法量（cm）			文様	調整（外／内）	色調（外／内）	粘土帯の積み上げ方法			備考
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面長(mm)	粘土帯幅(mm)	
26-1	SK02 下層	弥生土器・壺	－	－	－	段（頸胴境）＋縁取沈線、沈線による幾何学文	ナデ，ミガキ／ナデ	5YR6/6 橙／7.5YR6/4 にぶい橙	外傾	－	49.0	ミガキ調整→施文
26-2	SK02 下層	弥生土器・壺	－	－	－	段（頸胴境）?，沈線による幾何学文	ナデ，ミガキ／ナデ	5YR6/6 橙／7.5YR6/4 にぶい橙	－	－	－	ミガキ調整→施文
27	SK02 下層	弥生土器・壺	－	－	－	箆描直線文２条以上，段＋縁取沈線＋箆描直線文２条，沈線による流水文，箆描直線文３条，箆描直線文２条	ユビオサエ（接合面），ミガキ／ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙／10YR6/4 にぶい黄橙	外傾	26.5	－	ミガキ調整→施文

図 3-16　SK02 下層出土遺物 (2)



番号	遺構・層位	種類・器種	法量（cm）			文様	調整（外／内）	色調（外／内）	粘土帯の積み上げ方法			備考
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面長(mm)	粘土帯幅(mm)	
28	SK02 下層	弥生土器・甕	26.0	–	–	口唇部刻目	ナデ，ユビオサエ，ミガキ／ナデ，板ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙／10YR7/2 にぶい黄橙	外傾	25.0	48.0	スス付着，覆い型野焼き
29	SK02 下層	弥生土器・甕	(21.6)	–	–	口唇部刻目	ナデ／ナデ，板ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙／7.5YR6/4 にぶい橙	外傾	25.0	57.5	–
30	SK02 下層	弥生土器・甕？	–	–	–	篦描直線文 1 条以上	ナデ／ナデ	7.5YR7/6 橙／7.5YR7/4 にぶい橙	–	–	–	–
31	SK02 下層	弥生土器・甕	–	–	–	刻目段，赤色顔料	ナデ／ナデ	7.5YR7/6 橙／10YR7/2 にぶい黄橙	–	–	–	–
32	SK02 下層	弥生土器・鉢？	(15.1)	–	–	–	ナデ／ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙／7.5YR6/4 にぶい橙	–	–	–	–
33	SK02 下層	弥生土器・鉢	(11.6)	–	–	–	ミガキ／ナデ，ユビオサエ	10YR5/3 にぶい黄褐／10YR7/3 にぶい黄橙	–	–	–	–
34	SK02 下層	弥生土器・鉢	(21.0)	–	–	篦描直線文 2 条	ナデ，ミガキ／ナデ，ミガキ	7.5YR6/4 にぶい橙／10YR6/3 にぶい黄橙	–	–	–	–
35	SK02 下層	弥生土器・鉢？	–	–	–	篦描直線文 2 条以上	ミガキ／ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙／7.5YR6/4 にぶい橙	–	–	–	–
36	SK02 下層	弥生土器・器種不明	–	–	–	–	ナデ／ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙／10YR6/2 灰黄褐	–	–	–	–
37	SK02 下層	弥生土器・器種不明	(6.0)	–	–	–	ナデ，ユビオサエ／ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐／10YR7/2 にぶい黄橙	外傾	–	–	覆い型野焼き

（　）復元値

図 3-17　SK02 下層出土遺物 (3)

表現に分類される（深澤, 1989）。器面調整･施文の順は，ミガキ調整→区分文様→区分間文様である。

28・29 は甕である。ともに口縁部は外反する。屈曲度は 28 が強く，29 は弱い。ともに口唇部全面に刻目が施される。また, 幅広粘土帯－外傾（三阪, 2014）による粘土帯の積み上げ方法が確認され, とくに 29 は積み上げ単位が明瞭に観察される。器面調整については，内外面とも明瞭な刷毛目調整はなく，内面に板ナデ調整の起点が数か所ずつ観察される。28 は外面の底部～胴部下位に縦方向のミガキ調整が施されている。30 は口縁部である。甕であろうか。口縁部は外反し，口唇部は平らに面取りされる。刻目はみられない。口縁部下に 1 条以上の箆描直線文が施される。31 は甕と推定される。頸胴部境に段を有し, そこに刻目が施されている。これは深澤芳樹(2000)の刻目段に相当する。屈曲部以下に赤色顔料が塗布される。

32 ～ 35 は鉢と考えられる。32・34・35 の口縁部は直立またはわずかに内湾しているのに対し, 33 の口縁部はわずかに外反し外に開く。34・35 は口縁部下に細い箆描直線文が施され，その条数は 34 が 2 条，35 が 2 条以上である。36 は口縁部片，37 は底部である。

以下に，出土土器の時期を検討する。なお，図化した個体だけではなく，残存率が低く図化できない個体を含め，確実に刻目突帯文土器といえる土器は含まれていない。壺には段を有するものがみられ，箆描直線文を有さない第Ⅰ種と有する第Ⅱ種が含まれる。口頸部境の段第Ⅰ種（18・20）は弥生時代のⅠ－ 1・2 様式，頸胴部境の段第Ⅰ種（21・26-1・26-2）および段第Ⅱ種（22・27）はⅠ－ 1 様式にみられる属性である（中村，2000）。甕は箆描直線文をもたないものが 2 点（28･29）と, 1 条以上のものが 1 点（30）出土している。甕に箆描直線文が 4 条以上施されるものが含まれていない点はⅠ－ 1 様式の特徴といえる（中村，2000）。

31 は刻目段をもち, 甕と推定される。深澤（2000）は, 刻目段→直線紋（文）刻目段→両直線紋（文）間刻目の順での型式変化を想定した。直線文刻目段は板付Ⅱ a 式中頃～Ⅱ b 式前半に併行し，徳島では弥生時代のⅠ－ 1・2 様式頃に相当（近藤玲，2017）する。刻目段はこれより一段階古く，徳島ではⅠ－ 1 様式に位置づけられる庄・蔵本遺跡第 10 次調査の溝 1（北條編，1998）や，Ⅰ－ 1 様式の三谷遺跡の自然凹地 SX02-2（勝浦編，1997）などで出土例がある。よって，刻目段はⅠ－ 1 様式に位置づけられる可能性が高いことがわかる。さらに，縁取沈線（22・26-1・27）や，ミガキ調整後に文様または区分文様・区分間文様を施す手法（22・26-1・26-2・27）は刻目段～直線文刻目段の段階（深澤，2000），つまりⅠ－ 1・2 様式頃の特徴であることが指摘されている。

以上を整理すると，SK02 下層出土土器の時期は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－ 1 様式）と合致する特徴が最も多く，当該期に位置づけられる可能性が高いといえる。

これをふまえ，流水文をもつ壺 27 について検討する。深澤（1989）は弥生時代の流水文を整理している。これによると，木器や骨角器には，前期弥生土器の古中段階に，縄文時代晩期に由来する陽刻表現の長方型と横型の流水文が施されている。一方，土器に陽刻表現による横型流水文が施された事例はわずかである。その出現は古中段階でもかなり新しい段階で，新段階には確実に存在すると指摘されている。壺 24 は上に述べたように区分文様・区分間文様ともミガキ調整の後に施されている点や，縁取沈線を有する点などの古い要素をもち（深澤，1989，2000），縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－ 1 様式）に位置づけられる。すでに中村（2010）が指摘しているが，土器における

陽刻表現の横型流水文の出現は、当時の深澤（1989）の想定より古くなり，Ⅰ－1 様式に遡ることが明らかとなった。

［時期］ SK02 は 2 層上面、SK02 下層は 2 ～ 5 層で検出されており，上述のように両遺構の形成は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－1 様式）以降と考えられる。SK02 下層の出土土器はⅠ－1 様式頃にまとまる。また, 完形に近いものや大型の破片が含まれ, 遺構に伴う遺物であろう。よって, 少なくとも SK02 下層は，Ⅰ－1 様式頃に位置づけられる可能性が高いといえる。

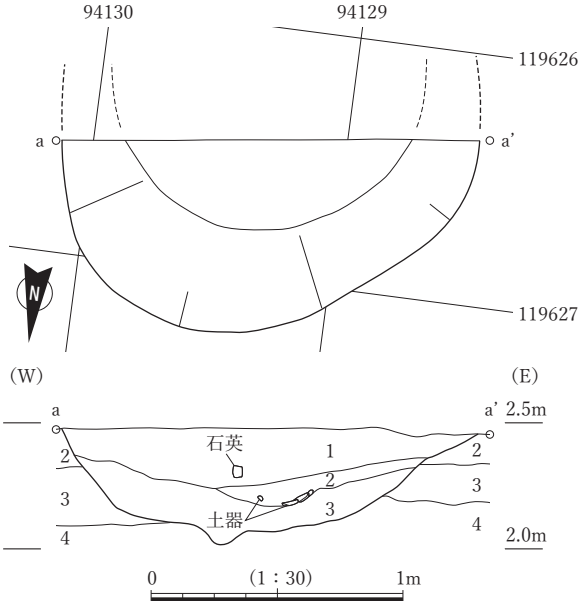
SK03（図 3-8・18・19，図版 7）

調査区中央部南隅の第 1 遺構面（2 層上面）で，遺構の北端が検出された。調査区外に遺構が続いており, 平面の全形は不明であるが, 検出された部分は半円形を呈する。残存部の長さ 1.7m, 幅 0.8m である。断面は碗形で中央部がやや窪み，深さ 0.5m である。埋土は 3 層認められる。いずれもシルトで砂が混ざり，土色は灰黄褐色・にぶい黄褐色・暗灰黄色で，炭化物を含む。2 層を中心に土器が出土している。

［出土遺物］ 38 ～ 46 は刻目突帯文土器の深鉢と考えられる。口唇部刻目は，施されないもの（38・39），口唇部全面に施されるもの（40 ～ 42），口唇部下端に施されるもの（43）の 3 者がある。43 の口唇部と口縁部下の突帯文上の刻目は, 上下一度に施されたものと考えられる。口縁部の突帯文は, 口唇部からわずかに下がった位置にめぐるもの（38）と，口唇部から 1cm 程下にめぐるもの（39 ～ 43）がある。突帯文の断面形態は，低く不明瞭で蒲鉾型・三角形・台形を呈するもの（38 ～ 42・44 ～ 46）と，高く明瞭で三角形を呈するもの（43）に分かれる。突帯文上の刻目は平面菱形を呈するもの（38・40 ～ 45）が中心で，中央部に縦方向の稜が残る。木製板工具によって施文されたものであろうか。46 は器面の摩耗が顕著で刻目は不明瞭である。39 の突帯文は不整形で，残存部に刻目はみられない。43 は外面の口縁部下に縦方向の沈線が 3 条施されており，これらは文様と考えられる。同様の事例は，縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－1 様式）に位置づけられる三谷遺跡の自然凹地 SX02-2（勝浦編，1997）でも確認される。38 ～ 46 の器面調整は，すべての個体でナデ調整が確認され，一部（39・45・46）には外面にケズリ調整が観察される。47 は外面にケズリ調整が確認される点をふまえると，刻目突帯文土器の胴部と推定される。粘土帯の積み上げ方法は，幅狭粘土帯－内傾（三阪，2014）によるもの（39・41・44 ～ 47）のみ確認される。

48 は甕の口縁部と考えられる。外反する口縁部をもち，口唇部下端に刻目を有する。

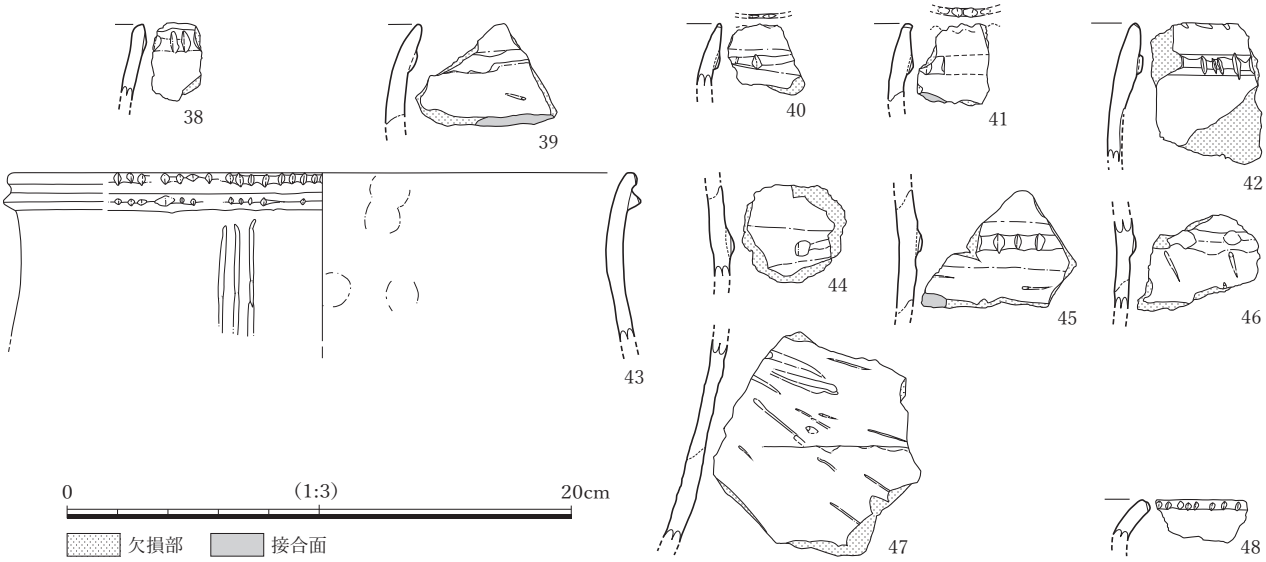
以上の土器の時期について検討する。本遺構から出土した土器のうち，図化できたものは刻目突帯文土器の深鉢 10 点，遠賀川式土器の甕とみられる個体 1 点である。図化したもの以外に，赤色磨研を施した壺胴部と推定される破片も含まれる。図化していない小片を含めると，突帯文土器の比率が遠賀川式土器より高いと考えられる。また，完形品やそれに近いものはなく，いずれも小片で出土している点が特徴である。勝浦康守（2000）は，三谷遺跡出土の刻目突帯文を有する深鉢について，時期が新しくなるにつれ，口唇部刻目を有する個体が増加し，突帯文が口唇部から下に離れていくという型式変化を想定している。これは漸移的な傾向を示すものであり，SK03 の刻目突帯文土器の細かな所属時期を決定することは難しいが，Ⅰ－1 様式におさまることは確実である。遠賀川式土器の



SK03の完掘状況と土層断面（北から）

1 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細砂　炭化物を含む
2 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質細砂　炭化物を含む
3 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細砂　炭化物を含む

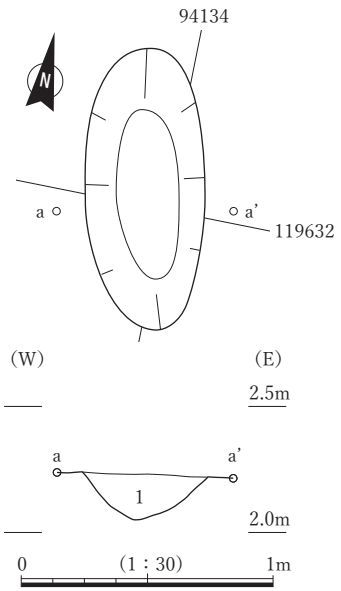
図 3-18　SK03



番号	遺構・層位	種類・器種	法量（cm）			文様	調整（外／内）	色調（外／内）	粘土帯の積み上げ方法			備考
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面長(mm)	粘土帯幅(mm)	
38	SK03	縄文/弥生土器・深鉢	–	–	–	刻目突帯文	ナデ／ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐／2.5YR5/6 明赤褐	–	–	–	–
39	SK03	縄文/弥生土器・深鉢	–	–	–	無刻目？突帯文	ケズリ，ナデ／ナデ	5YR5/3 にぶい赤褐／7.5YR5/3 にぶい褐	内傾	0.8	–	–
40	SK03	縄文/弥生土器・深鉢	–	–	–	口唇部刻目，刻目突帯文（口縁部下）	ナデ／不明	7.5YR6/4 にぶい橙／10YR7/3 にぶい黄橙	–	–	–	–
41	SK03	縄文/弥生土器・深鉢	–	–	–	口唇部刻目，刻目突帯文（口縁部下）	ナデ／ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐／5YR6/4 にぶい橙	内傾	0.8	–	–
42	SK03	縄文/弥生土器・深鉢	–	–	–	口唇部刻目，刻目突帯文（口縁部下）	ナデ／不明	5YR6/6 橙／10YR6/3 にぶい黄橙	–	–	–	–
43	SK03	縄文/弥生土器・深鉢	(24.4)	–	–	口唇部刻目，刻目突帯文（口縁部下），沈線による文様	ナデ／ナデ，ユビオサエ	10YR7/3 にぶい黄橙／7.5YR6/3 にぶい褐	–	–	–	–
44	SK03	縄文/弥生土器・深鉢	–	–	–	刻目突帯文（胴部）	ナデ／ナデ	7.5YR5/2 灰褐／7.5YR5/3 にぶい褐	内傾？	–	–	–
45	Sk03	縄文/弥生土器・深鉢	–	–	–	刻目突帯文（胴部）	ケズリ，ナデ／ナデ	10YR5/2 灰黄褐／2.5Y5/1 黄灰	内傾？	–	–	–
46	SK03	縄文/弥生土器・深鉢	–	–	–	刻目突帯文（胴部）	ナデ，ケズリ／ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐／10YR5/2 灰黄褐	内傾？	0.7	–	種実圧痕（外面）？
47	SK03	縄文/弥生土器・深鉢？	–	–	–	–	ケズリ，ナデ／ナデ	10YR4/2 灰黄褐／10YR4/1 褐灰	内傾？	0.9	–	–
48	SK03	弥生土器・甕？	–	–	–	口唇部刻目	ナデ／ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙／7.5YR6/6 橙	–	–	–	スス付着

（　）復元値

図 3-19　SK03 出土遺物



SK05の完掘状況と土層断面（南から）

1 黄褐色(2.5Y5/3)シルト（砂が混じる・粘性あり）　マンガン・鉄分を含む

図 3-20　SK05

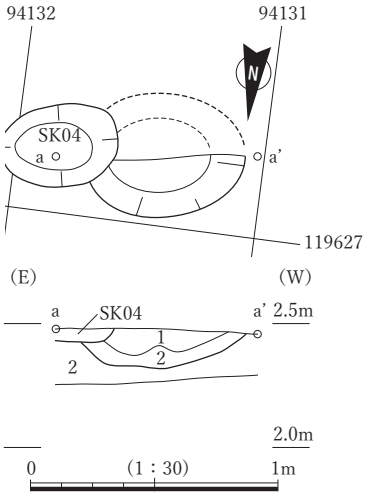
甕のなかで，口唇部下端に刻目を有するもの（48）は，Ⅰ－1 様式の特徴とされ（中村，2000），三谷遺跡の甕にも多く観察される。以上より，本遺構出土土器は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－1 様式）に位置づけられる。

［時期］　本遺構は 2 層上面で検出されており，その形成は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－1 様式）以降と考えられる。埋土出土土器の時期はⅠ－1 様式にまとまる。以上から，本遺構の時期はⅠ－1 様式に位置づけられる。

SK05（図 3-7・20）

調査区北東部の第 1.5 遺構面（2 ～ 5 層）において検出された。平面形は，長軸を南北方向とする楕円形で，長さ 1.1m，幅 0.5m である。短軸断面は碗形で、深さ 0.2m である。埋土は 1 層認められる。シルトに砂が混ざり，土色は黄褐色である。埋土に土器が含まれる。土器が出土しているが，図化できるものはない。ただし，これらは他遺構の弥生時代前期の土器と胎土や色調が類似し，当該期の所産である可能性が高い。

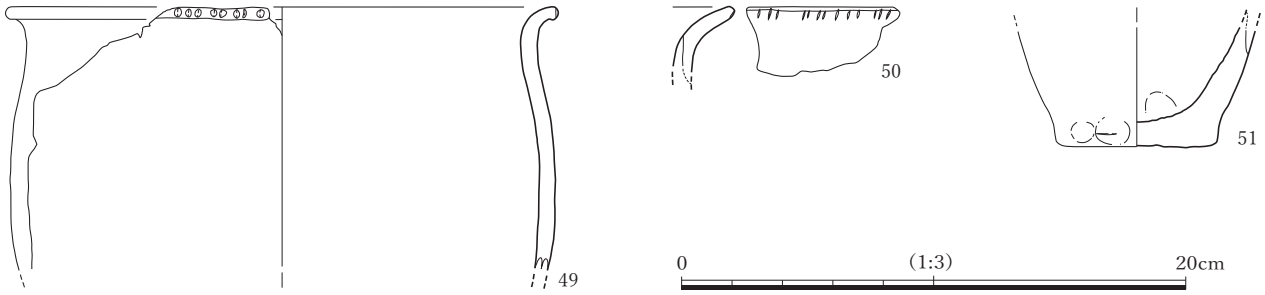
［時期］　本遺構は 2 ～ 5 層で検出されており，その形成は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－1 様式）以降と考えられる。また，後述する古墳時代中期～平安時代と推定される SD02 より下層に形成されている点から，縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－1 様式）～平安時代の時期幅が想定される。さらに，埋土から出土した土器は小片しかないが，弥生時代前期の可能性が高い。加えて，埋土は弥生時代前期の SK01・02・03 と類似する。以上から，本遺構の時期は弥生時代のⅠ－1 ～ 4 様式に位置づけられる可能性が高いといえる。また，弥生時代前期の SK01 と長軸を同じくする点もこれを傍証する。



SK07の土層断面（北から）

1 黄褐色（2.5Y5/3）シルト質細砂　炭化物・焼土を含む
2 灰黄褐色（10YR4/2）シルト質細砂　マンガン含む　炭化物・焼土(赤褐色2.5YR4/6)を多量に含む

図 3-21　SK07



番号	遺構・層位	種類・器種	法量（cm）			文様	調整（外／内）	色調（外／内）	粘土帯の積み上げ方法		
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面長(mm)	粘土帯幅(mm)
49	SK07	弥生土器・甕	(21.6)	－	－	口唇部刻目	ナデ／ナデ	7.5YR4/2 灰褐／7.5YR4/3 褐	－	－	－
50	SK07	弥生土器・甕？	－	－	－	口唇部刻目	ナデ／ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙／7.5YR6/4 にぶい橙	外傾	－	－
51	SK07	弥生土器・甕？	－	(6.4)	－	－	ナデ，ユビオサエ／ナデ，ユビオサエ	2.5YR5/6 明赤褐／5YR5/6 明赤褐	外傾	－	－

（　）復元値

図 3-22　SK07 出土遺物

SK07（図 3-8・21・22，図版 8）

調査区中央部南隅の第 1.5 遺構面（2 層中）で，遺構の北端が検出された。南壁の土層断面において，上端が 2 層上面であることが確認される（図 3-2）。調査区外に遺構が続いており，平面の全形は不明であるが，検出された部分は半円形を呈する。残存部の長さ 0.7m，幅 0.2m である。断面はレンズ形で，深さ 0.2m である。埋土は 2 層認められる。いずれもシルト質細砂で，土色は黄褐色・灰黄褐色である。炭化物・焼土・土器が含まれる。SK04 に切られる。

［出土遺物］　49・50 は外反する口縁部をもつ甕である。49 は口唇部全面に刻目が施される。箆描直線文はみられず無文である。50 の口縁部は大きく開き，口唇部下端に幅狭の刻目が施される。51 は

底部である。50・51 には幅広粘土帯－外傾による粘土の積み上げ方法が確認される。

以上の土器の時期について検討する。甕の口唇部下端の刻目（50）は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－1様式）の特徴とされる。また，甕の胴部上半が無文であるもの（49）はⅠ－1～4様式にかけ存続する。土器の出土数が少なく時期を絞り込むことは難しいが，Ⅰ－1～4様式の時期幅が想定される。図化できない土器についても，弥生時代前期の土器と胎土や色調が類似するものに限られる。

［時期］　本遺構は 2 層上面で検出されている点から，その形成は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－1様式）以降と考えられる。また，後述する古墳時代中期～近世・近代の SK04 に切られている点から，縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－1様式）～近世･近代の時期幅が想定される。これに加え，出土遺物が弥生時代のⅠ－1～4様式の時期幅におさまる点と，埋土が SK01 ～ 03・05 と類似する点から，本遺構は弥生時代前期に位置づけられる可能性が高いといえる。

SX02（図 3-2）

調査区東壁の 2 層上面で検出され，1 層に被覆されている。平面的には検出されておらず，遺構であるかは不明である。残存部の長さ 0.4m である。断面は碗形で，深さ 0.1m である。埋土は 1 層認められる。シルトで土色は褐灰色である。埋土に遺物は含まれない。東壁断面において，後述する時期不明の SX01 より下層に形成されていることがわかる。

［時期］　本遺構は 2 層上面で検出され，1 層に被覆されている点から，その形成は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－1様式）と考えられる。

(2) 弥生時代前期以降

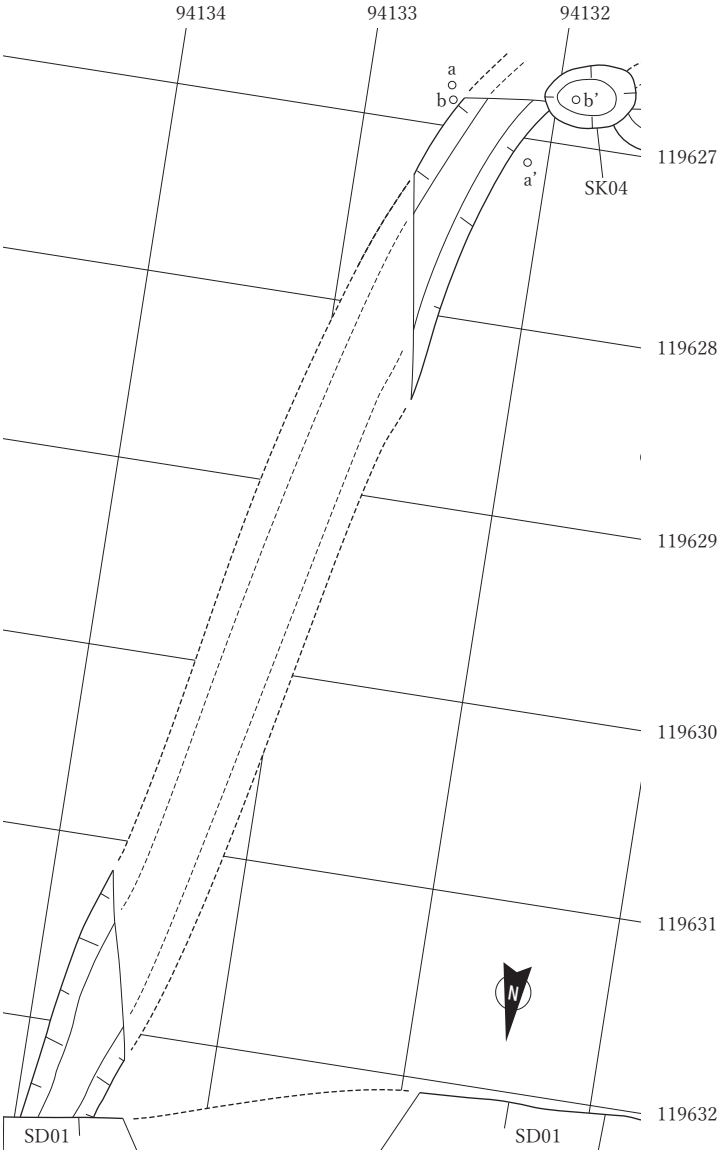
SD02（図 3-8・23・24，図版 8）

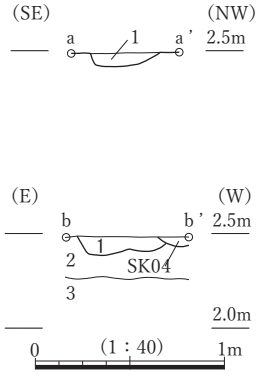
調査区東側の第 1 遺構面(1 層上面もしくは 2 層上面)で検出された。北側と南側で離れて検出され，その間は撹乱により残存していないが，幅・深さ・埋土や平面的な角度からみて一連の溝である可能性が高い。南北方向にのび，撹乱部分を含めると残存部の長さ 5.9m，幅 0.5m である。埋土は 1 層認められ，粘性をもつシルトで土色は暗オリーブ褐色である。土器が出土している。SD01 と SK04 に切られ，SK05 よりも上に形成される。

［出土遺物］　52 は壺の胴部であろうか。箆描直線文が 1 条施される。53 は 2 条以上の貼付突帯で，刻目を有する。壺の頸部付近に施されたものであろうか。54 は甕胴部であろうか。幅広粘土帯－外傾による粘土の積み上げ方法が確認される。

以下に土器の時期について検討する。52 に箆描直線文が施される点，54 に幅広粘土帯－外傾による粘土の積み上げ方法が採用されている点から，弥生時代のⅠ－1～4様式の時期幅が想定される。53 は中村（2000）の貼付突帯 b 種に相当し，Ⅰ－3・4様式に位置づけられる。このほかに，図化できないもののなかに須恵器の小片が含まれている。その時期を特定するのは難しいが，古墳時代中期以降～平安時代の所産といえる。

［時期］　本遺構は南端部は 2 層上面で検出されており，その形成は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭(Ⅰ－1様式)以降と考えられる。さらに，弥生時代前期と推定される SK05 より上に形成され，近世･

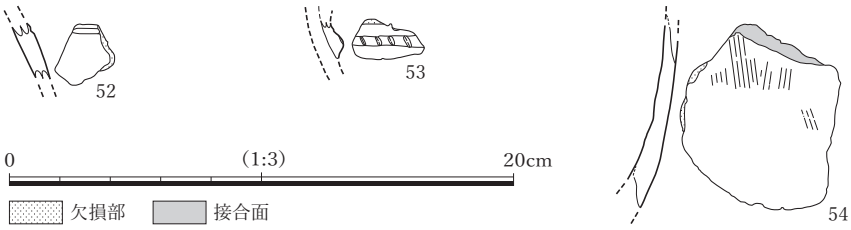




1 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト（粘性あり）　暗オリーブ色(5Y4/3)シルト（砂が混じる）がブロック状に混入，マンガンを少量含む　鉄分を多量に含む

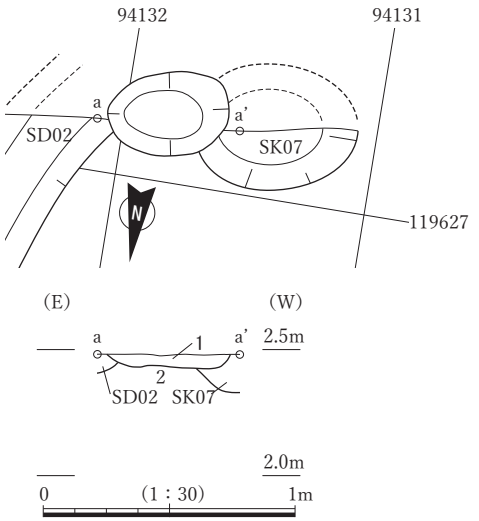
SD02南側の完掘状況（北から）

図 3-23　SD02



番号	遺構・層位	種類・器種	法量（cm）			文様	調整（外／内）	色調（外／内）	粘土帯の積み上げ方法		
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面長(mm)	粘土帯幅(mm)
52	SD02	弥生土器・壺？	－	－	－	箆描直線文１条以上	ナデ／ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐／7.5YR6/4 にぶい橙	－	－	－
53	SD02	弥生土器・壺？	－	－	－	２条以上貼付突帯	ナデ／不明	10YR5/4 にぶい黄褐／10YR7/4 にぶい黄橙	－	－	－
54	SD02	弥生土器・甕？	－	－	－	－	刷毛目，ナデ／ナデ，ユビオサエ	10YR5/3 にぶい黄褐／5YR6/6 橙	外傾	－	58.5

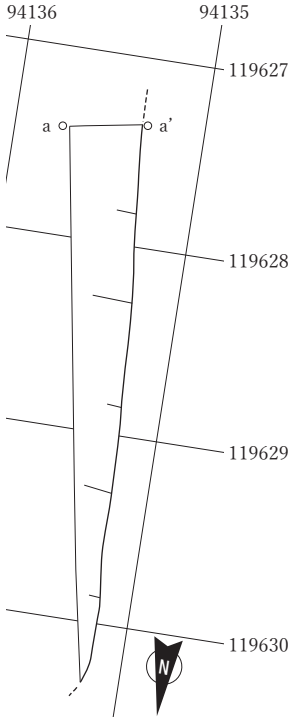
図 3-24　SD02 出土遺物

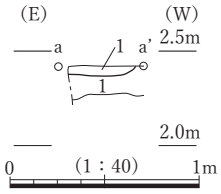


1 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト(砂が混じる)　暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト（砂が混じる・粘性あり）がブロック状に混入　マンガン・鉄分を含む

SK04土層断面（北から）

図 3-25　SK04





1 褐灰色(10YR4/1)シルト

SX01土層断面（西から）

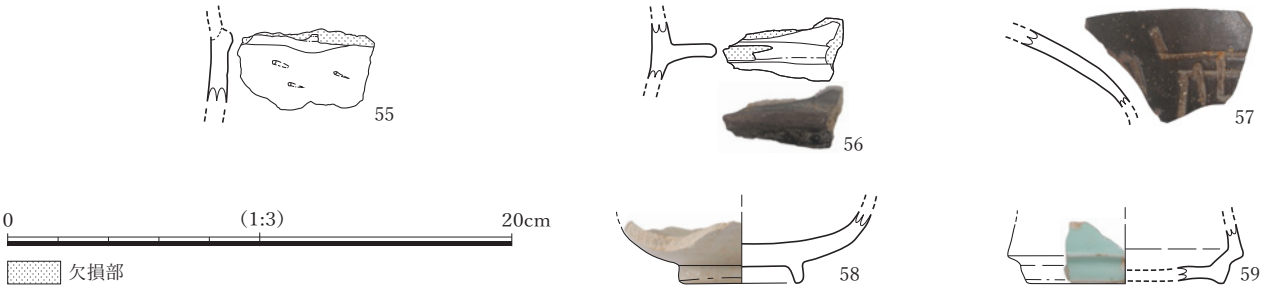
図 3-26　SX01

近代の SD01 に切られている点から，弥生時代前期～近世・近代に絞り込まれる。埋土からは弥生時代前期の土器と須恵器が出土している。この須恵器が混入したものではないとすれば，本遺構は古墳時代中期～平安時代に所属する可能性が高いといえる。埋土は粘性をもつシルトで土色の明度も低く，弥生時代前期の SK01 ～ 03・05・07 のものとは異質である。この点は本遺構が弥生時代前期とは異なる時期の所産であることを示唆する。

SK04（図 3-8・25）

調査区中央部南隅の第 1 遺構面（2 層上面）で検出された。平面形は楕円形で，長径 0.5m，短径 0.3m である。埋土は 1 層認められる。シルトで砂が混じり，土色はオリーブ褐色である。弥生土器もしくは土師器とみられる小片が含まれるが，図化できるものはなく時期は不明である。SD02 と SK07 を切る。

［時期］　本遺構は 2 層上面で検出されている点から，その形成は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－1 様式）以降と考えられる。弥生時代前期の SK07 と古墳時代中期～平安時代と推定される SD02 を切っている。遺構の切り合い関係から，古墳時代中期～近世・近代のいずれかの時期に所属するものと推定される。なお，埋土は弥生時代前期の SK01 ～ 03 と類似しているが，上述の遺構の



番号	遺構・層位	種類・器種	法量（cm）			文様	調整（外／内）	色調（外／内）	粘土帯の積み上げ方法		
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面長(mm)	粘土帯幅(mm)
55	SD01	縄文 / 弥生土器・深鉢？	－	－	－	刻目？突帯文	ケズリ／ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐／7.5YR5/2 灰褐	内傾？	－	－

番号	遺構・層位	胎質	器種	生産地	法量（cm）			成形技法	調整（外 / 内）	釉薬	銘・刻印・墨書	胎土色調（外／内）	製作年代	備考
					口径	底径	器高							
56	SD01	瓦質土器	羽釜／茶釜	不明	－	－	－	型成形，貼付（鍔部）	回転ナデ／回転ナデ	－	－	10YR4/1 褐灰／7.5YR6/1 褐灰	不明	スス付着
57	SD01	陶器	瓶	大谷焼	－	－	－	ロクロ	－	鉄釉（外面）	陰刻（ヘラ彫り）「酒」？の文字	10YR2/3 黒褐／2.5YR4/4 にぶい赤褐	19 世紀	慣用名「口長」
58	SD01	陶器	碗	瀬戸・美濃系	－	4.9	－	ロクロ	－	灰釉／透明釉（畳付除く）	－	2.5Y8/1 灰白／2.5Y8/1 灰白	不明（太白手であれば 18 世紀後葉～19 世紀前葉）	太白手？，貫入あり
59	SD01	磁器	水注？	関西系	－	(7.8)	－	ロクロ	－	青磁釉（畳付除く）	－	－	不明	－

（　）復元値

図 3-27　SD01 出土遺物

切り合いから弥生時代前期の遺構とは考えにくい。

SX01（図 3-8・26）

調査区東南隅の第 1 遺構面（1 層上面）で検出された。遺構の全形は不明であるが，残存部は南北方向にのびる。残存部の長さ 3.0m，幅 0.4m である。埋土は 1 層認められる。シルトで土色は褐灰色である。弥生土器または土師器とみられる小片が含まれるが，図化できるものはなく時期は不明である。

［時期］　本遺構は 1 層上面で検出されている点から，その形成は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－ 1 様式）以降と考えられる。また、埋土は弥生時代前期の SK01 ～ 03 のものとは異なる。これは本遺構がこれらと異なる時期の所産であることを示唆するが，具体的な時期は不明である。

SD01（図 3-8・27，図版 8）

調査区北隅の第 1 遺構面（1 層上面もしくは 2 層上面）で，その南半部が検出されている。東西方向にのびる溝と考えられ，残存部の長さ 9.3m，幅 0.7m である。埋土からは土器と陶磁器が出土している。SD02 を切る。

［出土遺物］　55 は刻目突帯文土器の深鉢で，胴部屈曲部付近と考えられる。突帯文を有するが刻目の有無は不明である。器面調整は，外面が横方向のケズリ調整，内面がナデ調整である。また，屈曲部に幅狭粘土帯－内傾と推定される粘土帯の積み上げ方法がみられる。56 は瓦質土器の羽釜鍔部である。外面にススが付着し，とくに鍔部以下はススの付着が顕著である。57 は大谷焼の瓶肩部である。

陰刻によって「酒」と推定される文字が施される。58 は瀬戸・美濃系陶器の碗である。釉薬は灰釉もしくは透明釉である。高台内にも施釉されており，こういった事例は瀬戸･美濃系陶器では少ない。太白手の可能性もあるが，口縁部が欠損しているため不明である。59 は関西系磁器である。器種不明である。水注であろうか。青磁釉が施される。

以上の出土遺物の時期を検討する。刻目突帯文土器 55 は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－ 1 様式）に位置づけられる。瓦質土器羽釜 56 の時期を特定することは難しい。近世のものであろうか。大谷焼 57 は 19 世紀代とみられる（日下, 2002）。瀬戸･美濃系陶器 58 の時期は不明であるが，太白手であれば製作年代は 18 世紀後葉～ 19 世紀前葉となる（長佐古，1991）。図化した遺物以外には，弥生土器，土師器，陶磁器の小片が含まれる。

［時期］　本遺構は 1 層上面もしくは 2 層上面で検出されている点から，その形成は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－ 1 様式）以降と考えられる。さらに，古墳時代中期～平安時代と推定される SD02 を切っている点から，本遺構の時期は少なくとも古墳時代中期以降といえる。さらに，近世･近代の陶磁器の量が一定程度含まれている点から，本遺構は近世・近代の所産である可能性が高いと推定される。

5. 包含層出土遺物

本地点の包含層では，縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－ 1 様式）の洪水起源砂層と推定される黄褐色シルト層（1 ～ 5 層）を中心に，その直上の弥生時代前期末／中期初頭（Ⅰ－ 3・4 様式）～中世の土壌化層と考えられる黒褐色シルト層にかけてより，遺物が出土している。

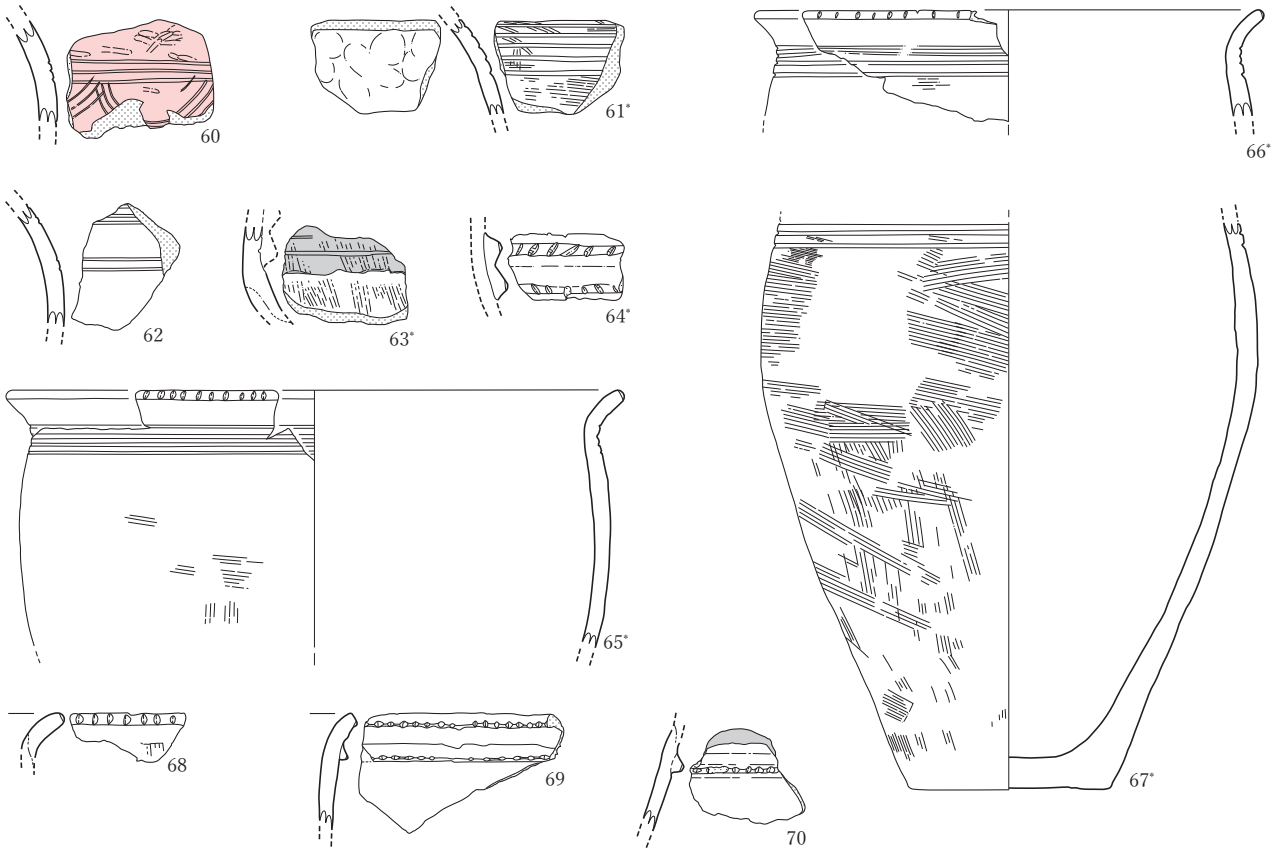
(1) 黄褐色シルト層出土遺物（図 3-28・29，図版 8・9）

61・63 ～ 67・71 ～ 73・77 は一か所からまとまって検出され，調査時には土器溜まりとして取り上げられた。ただし，これらの周囲に遺構は検出されておらず，ここでは包含層出土遺物として報告した。

60 ～ 64 は壺胴頸部とみられる。60 の上下は不明で、篦描直線文 3 条を施文した後，その下もしくは上に重弧文が施される。また，外面には赤色顔料が塗布される。61 は篦描直線文 5 条を有する。62 は篦描直線文を有し，胴部上半に 3 条以上，胴部最大径に 2 条が施される。63 は壺頸部とみられ，貼付突帯の接合面が観察される。接合面には篦描直線文状の沈線が 2 条みられる。64 は壺頸部付近に付された，刻目を有する 2 条の貼付突帯と推定される。

65 ～ 68 は甕である。65・66 は外反する口縁をもち口唇部全面に刻目を有する。ともに口縁部下に篦描直線文 4 条が施される。67 は口縁部下に 3 条以上の篦描直線文を有する。66 と 67 に接点はないものの, 胎土や頸部径が類似する点から, 同一個体の可能性がある。68 は外反する口縁部をもち，口唇部全面に刻目を有する。

69・70 は刻目突帯文を有する甕または深鉢と考えられる。69 の口縁部は弱く外反する。口唇部は平坦で下端に刻目が施される。口縁部下には断面三角形の刻目突帯文を有する。70 は胴部下半と推



0　(1:3)　20cm

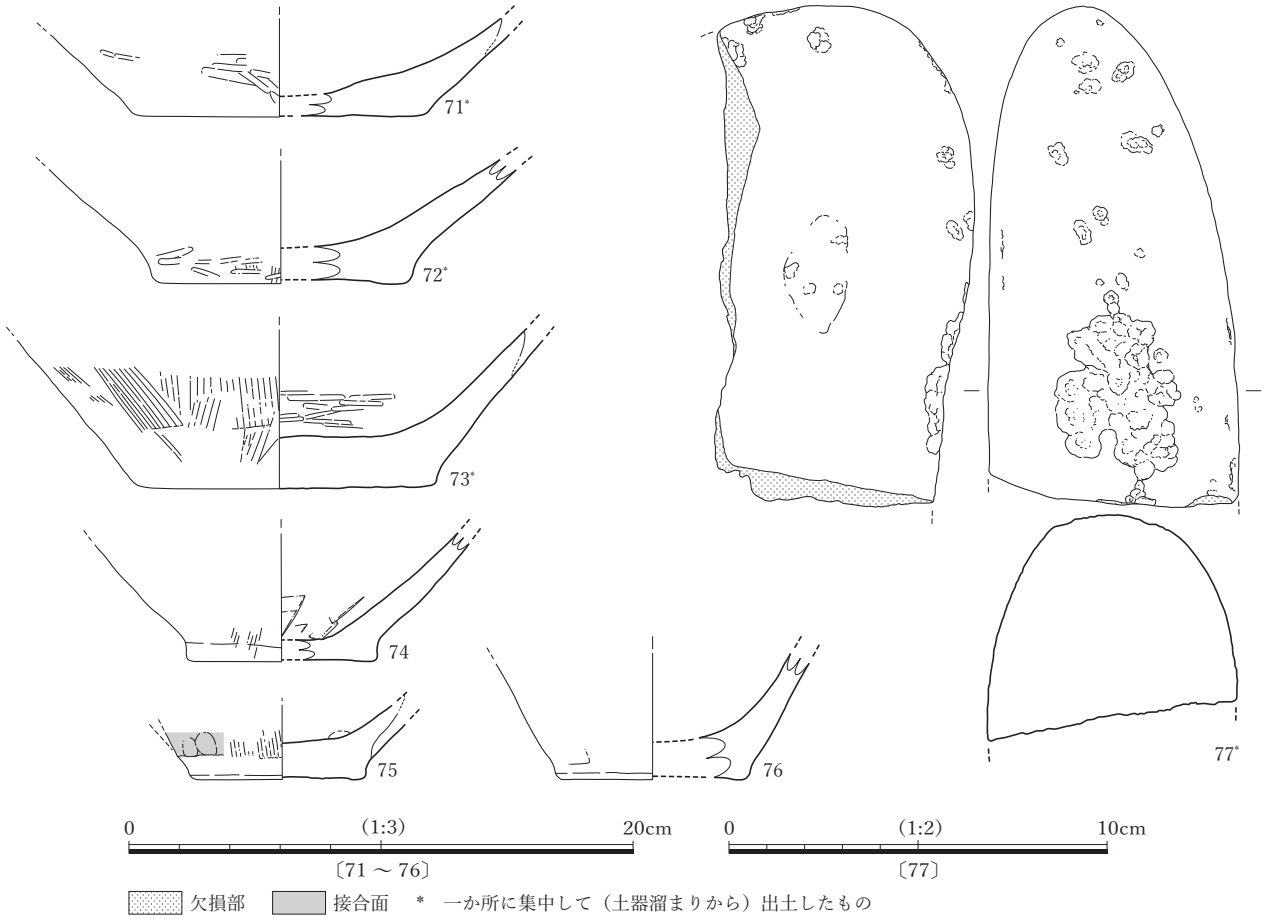
欠損部　接合面　赤色顔料付着部

*　一か所に集中して（土器溜まりから）出土したもの

番号	遺構・層位	種類・器種	法量（cm）			文様	調整（外／内）	色調（外／内）	粘土帯の積み上げ方法			備考
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面長(mm)	粘土帯幅(mm)	
60	包含層・黄褐色シルト上半	弥生土器・壺	–	–	–	箆描直線文３条，重弧文，赤色顔料	ミガキ／ナデ	5YR6/6 橙／2.5Y8/1 灰白	–	–	–	ミガキ調整→施文
61	包含層・黄褐色シルト上半（土器溜まり）	弥生土器・壺	–	–	–	箆描直線文５条	刷毛目，ナデ／ナデ，ユビオサエ	10YR6/2 灰黄褐／10YR6/3 にぶい黄橙	–	–	–	–
62	包含層・黄褐色シルト上半	弥生土器・壺	–	–	–	箆描直線文３条以上，箆描直線文２条	不明／不明	5YR6/6 橙／2.5Y3/2 黒褐	–	–	–	–
63	包含層・黄褐色シルト上半（土器溜まり）	弥生土器・壺？	–	–	–	貼付突帯の接合痕（接合面に沈線）	刷毛目、刷毛目（接合面）／ナデ	7.5YR7/6 橙・10YR6/3 にぶい黄橙／10YR6/2 灰黄褐	外傾	–	–	–
64	包含層・黄褐色シルト上半（土器溜まり）	弥生土器・壺？	–	–	–	２条貼付突帯	ナデ／不明	10YR6/3 にぶい黄橙／7.5YR7/4 にぶい橙	–	–	–	–
65	包含層・黄褐色シルト上半（土器溜まり）	弥生土器・甕	(24.2)	–	–	口唇部刻目，箆描直線文４条	刷毛目，ナデ／ナデ	10YR5/4 にぶい黄褐／7.5YR5/4 にぶい褐	–	–	–	スス・コゲ付着
66	包含層・黄褐色シルト上半（土器溜まり）	弥生土器・甕	(20.0)	–	–	口唇部刻目，箆描直線文４条	刷毛目，ナデ／ナデ	10YR4/3 にぶい黄褐／7.5YR5/4 にぶい褐	–	–	–	スス付着
67	包含層・黄褐色シルト上半（土器溜まり）	弥生土器・甕	–	(8.0)	–	箆描直線文３条以上	刷毛目，ナデ／ナデ	7.5YR4/3 褐／7.5YR5/4 にぶい褐	–	–	–	スス・コゲ付着
68	包含層・黄褐色シルト上半	弥生土器・甕？	–	–	–	口唇部刻目	刷毛目，ナデ／ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙／7.5YR6/4 にぶい橙	外傾	–	–	–
69	包含層・黄褐色シルト上半	縄文／弥生土器・深鉢／甕？	–	–	–	口唇部刻目，刻目突帯文（口縁部下）	ナデ／ナデ	5YR6/4 にぶい橙／5YR6/6 橙	–	–	–	–
70	包含層・黄褐色シルト下半	縄文／弥生土器・深鉢／甕？	–	–	–	刻目突帯文（胴部）	ナデ／ナデ	5YR6/4 にぶい橙／5YR5/4 にぶい赤褐	外傾？	–	–	–

（　）復元値

図 3-28　包含層（黄褐色シルト層）出土遺物（1）

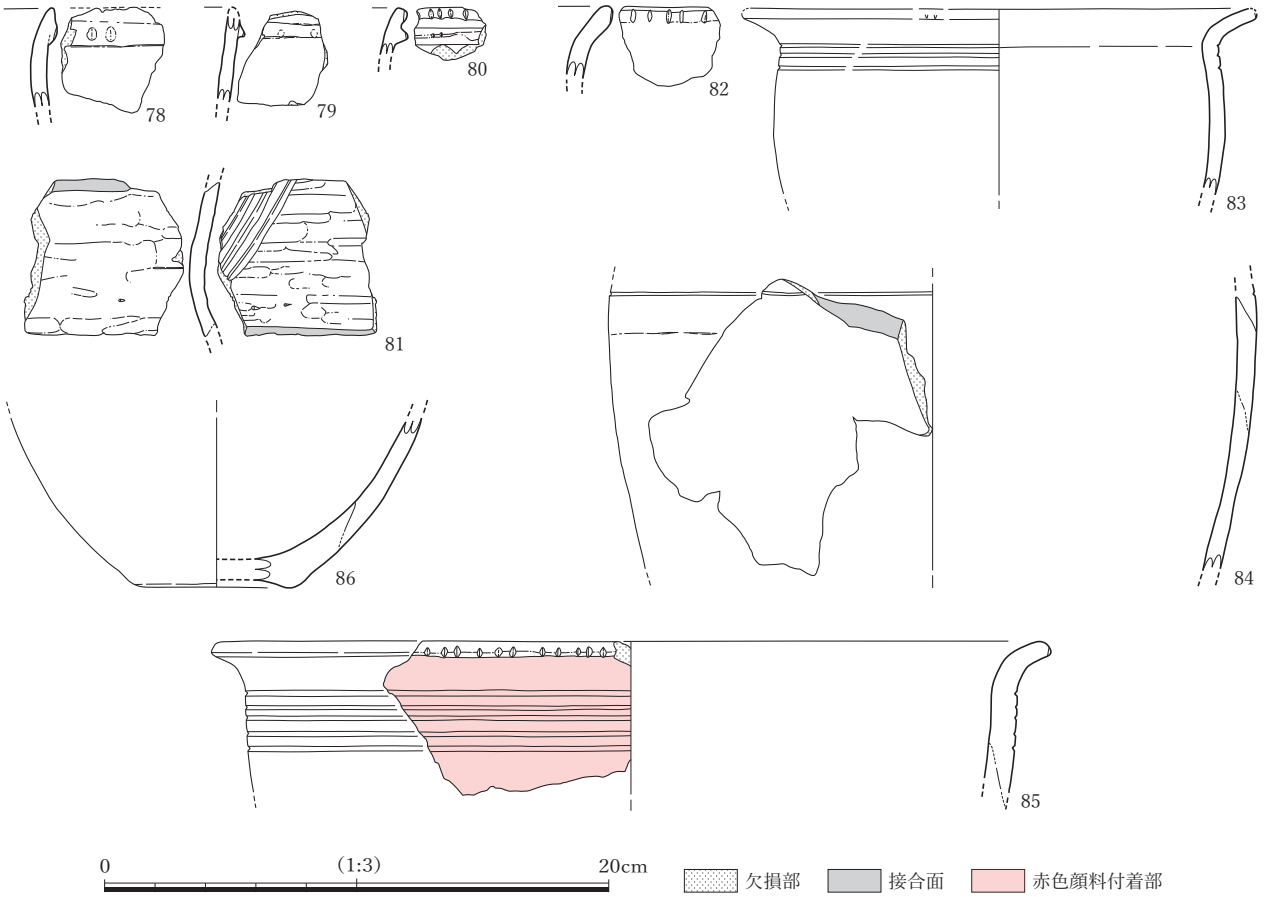


番号	遺構・層位	種類・器種	法量（cm）			文様	調整（外／内）	色調（外／内）	粘土帯の積み上げ方法			備考
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面長(mm)	粘土帯幅(mm)	
71	包含層・黄褐色シルト上半（土器溜まり）	弥生土器・壺？	－	(11.5)	－	－	ナデ，ミガキ／不明	7.5YR6/3 にぶい褐／10YR7/3 にぶい黄橙	外傾	－	－	－
72	包含層・黄褐色シルト上半（土器溜まり）	弥生土器・壺？	－	(10.0)	－	－	刷毛目，ナデ，ミガキ／ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙／7.5YR6/4 にぶい橙	－	－	－	－
73	包含層・黄褐色シルト上半（土器溜まり）	弥生土器・壺？	－	11.8	－	－	刷毛目，ナデ／ナデ，ミガキ	10YR7/3 にぶい黄橙／10YR7/2 にぶい黄橙	外傾	－	－	覆い型野焼き
74	包含層・黄褐色シルト上半	弥生土器・壺？	－	(7.5)	－	－	刷毛目，ナデ／板ナデ	10YR6/2 灰黄褐／10YR7/3 にぶい黄橙	－	－	－	－
75	包含層・黄褐色シルト上半	弥生土器・甕？	－	(6.8)	－	－	刷毛目，ナデ，ユビオサエ（接合面）／ナデ，ユビオサエ	10YR6/3 にぶい黄橙／10YR7/3 にぶい黄橙	外傾	27.0	－	－
76	包含層・黄褐色シルト上半	弥生土器・甕？	－	(7.4)	－	－	板ナデ，ナデ／ナデ	5YR7/6 橙／10YR7/4 にぶい黄橙	－	－	－	－

番号	遺構・層位	器種	法量（cm）			重さ（g）	石材
			長さ	幅	厚さ		
77	包含層・黄褐色シルト上半（土器溜まり）	敲石	(13.2)	(6.6)	6.5	840.0	砂岩

（　）復元値

図 3-29　包含層（黄褐色シルト層）出土遺物（2）



番号	遺構・層位	種類・器種	法量（cm）			文様	調整（外／内）	色調（外／内）	粘土帯の積み上げ方法			備考
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面長(mm)	粘土帯幅(mm)	
78	包含層・黄褐色シルト～黒褐色シルト	縄文/弥生土器・深鉢	–	–	–	刻目突帯文（口縁部下）	ナデ／不明	5YR6/6 橙／2.5Y7/4 浅黄	–	–	–	–
79	包含層・黄褐色シルト～黒褐色シルト	縄文/弥生土器・深鉢	–	–	–	刻目突帯文（口縁部下）	ナデ／ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙／5YR6/6 橙	–	–	–	–
80	包含層・黄褐色シルト～黒褐色シルト	縄文/弥生土器・深鉢/甕？	–	–	–	口唇部刻目，刻目突帯文（口縁部下）	ナデ／ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙／5YR7/6 橙	–	–	–	–
81	包含層・黄褐色シルト～黒褐色シルト	縄文/弥生土器・深鉢	–	–	–	沈線による文様	ケズリ，ナデ／ケズリ，ナデ	10YR4/2 灰黄褐／2.5Y3/1 黒褐	内傾	7.0	–	–
82	包含層・黄褐色シルト～黒褐色シルト	弥生土器・甕？	–	–	–	口唇部刻目	ナデ／ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙／5YR7/4 にぶい橙	–	–	–	–
83	包含層・黄褐色シルト～黒褐色シルト	弥生土器・甕	–	(20.4)	–	口唇部刻目，箆描直線文 3 条	ナデ／ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙／7.5YR7/6 橙	–	–	–	口唇部欠損
84	包含層・黄褐色シルト～黒褐色シルト	弥生土器・甕	–	–	–	箆描直線文 1 条以上	ナデ／ナデ	7.5YR6/6 橙／7.5YR6/6 橙	外傾	17.0	39.0	–
85	包含層・黄褐色シルト～黒褐色シルト	弥生土器・鉢/甕	–	(32.7)	–	口唇部刻目，箆描直線文 5 条，赤色顔料	ナデ／ナデ	5YR6/6 橙／5YR6/6 橙	内傾	–	–	–
86	包含層・黄褐色シルト～黒褐色シルト	弥生土器・器種不明	–	(6.5)	–	–	不明／不明	10YR6/6 明黄褐／10YR6/2 灰黄褐	内傾	21.0	–	–

（　）復元値

図 3-30　包含層（黄褐色シルト層～黒褐色シルト層）出土遺物

定され，断面三角形の刻目突帯文を有する。70 の上下を確定することは難しいが，図のとおりであれば，弥生時代前期の土器に普遍的にみられる，幅広粘土帯－外傾による粘土帯の積み上げ方法が採用されていたことになる。69・70 は形態や胎土・色調・製作技術からみて，刻目突帯文土器そのものではなく，弥生土器化したあるいは変容した刻目突帯文土器といえる。

71 ～ 74 は壺の底部，75・76 は甕の底部と推定される。

77 は砂岩製の敲石である。敲打痕が全体にみられるが，平面中央部と側面に敲打痕が集中し，弱く窪む部分がある。

上記の土器の時期を以下に検討する。壺 60 の重弧文は弥生時代のⅠ－ 1・2 様式，65 の刻目をもつ 2 条貼付突帯（貼付突帯 b 種）はⅠ－ 3・4 様式，甕 65・66 の口縁部下の箆描直線文 4 条はⅠ－ 2 ～ 4 様式に位置づけられる（中村，2000）。全体では弥生時代のⅠ－ 1 ～ 4 様式の時期幅をもつといえる。

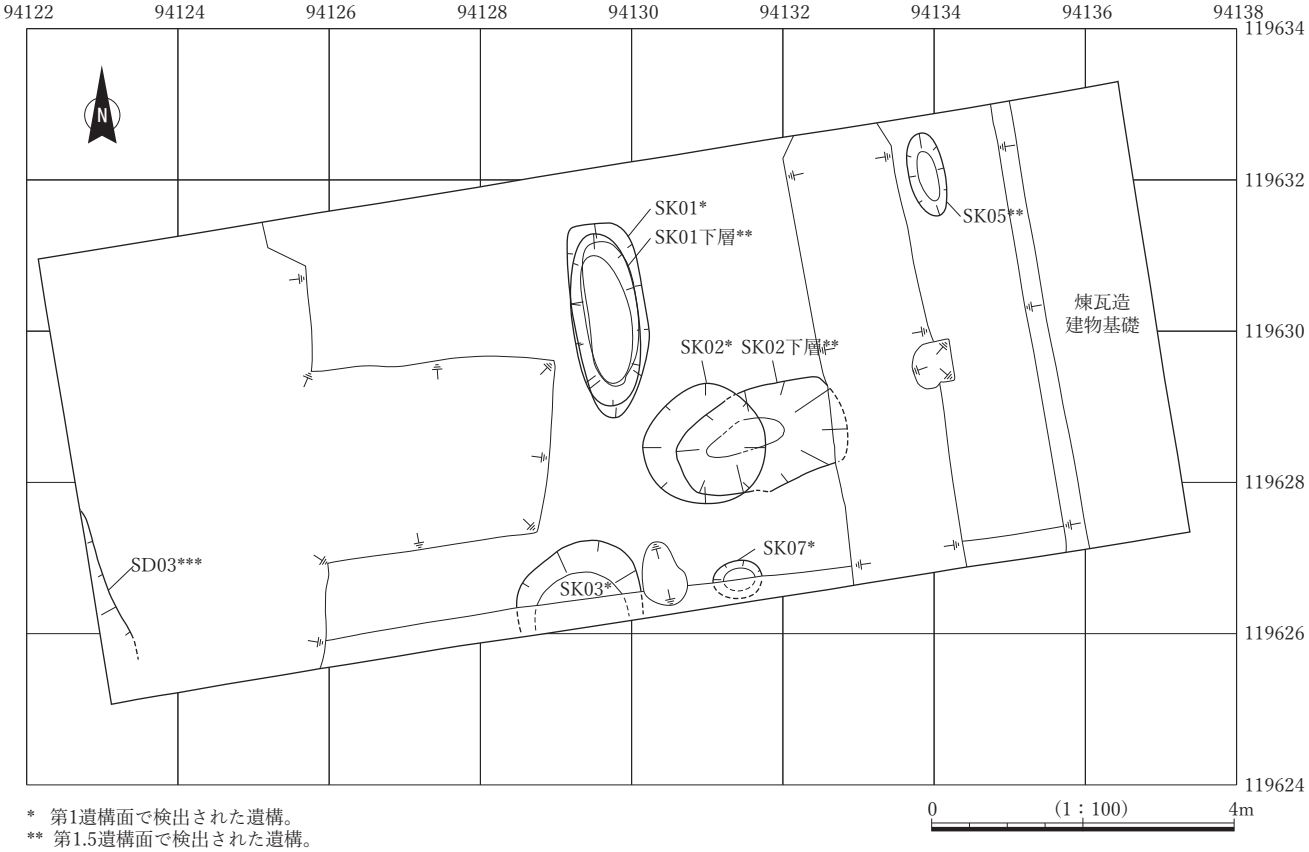
(2) 黄褐色シルト層～黒褐色シルト層出土遺物（図 3-30，図版 9）

78・79 は刻目突帯文を有する深鉢である。78 の口縁部は弱く外反し，口唇部よりわずかに下がった位置に刻目突帯文を有する。突帯文の断面形態は低く蒲鉾形を呈する。79 は直線的に立ち上がっており，口縁部または胴部屈曲部の可能性もある。突帯文の断面形態は小型の三角形である。刻目と推定される不明瞭な窪みが観察される。80 は刻目突帯文を有する甕または深鉢である。口縁部は弱く外反する。口唇部は平坦に面取りされ、下端に刻目が施される。口縁部下に刻目突帯文を有し，その断面は三角形を呈する。上述の 69 と類似する形態をもち，刻目突帯文土器そのものではなく，弥生土器化したあるいは変容した刻目突帯文土器の可能性がある。

81 は屈曲する深鉢と考えられる。外面の屈曲部より上に文様を有する。文様の全形は不明であるが，残存部には，沈線によって斜め方向の直線または曲線が並行して少なくとも 3 条施されている。器面調整は内外面ともに横方向の粗いナデ調整で，一部に横方向のケズリ調整が観察される。また，粘土帯の積み上げ方法は、幅狭粘土帯－内傾による。深鉢に沈線で文様が描かれた事例は，三谷遺跡の縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－ 1 様式）の土器にも確認される。

82 ～ 84 は甕である。82 の口縁部は外反し，口唇部下端に刻目が施される。83 の口縁部は強く外反し，口唇部に刻目を有する。口縁部下には箆描直線文 3 条が施される。84 は胴部で，口縁部下に箆描直線文 1 条以上を有する。85 は鉢または甕である。口縁部は外反し，口唇部下端に刻目が施される。口縁部下に箆描直線文 5 条を有する。外面に赤色顔料が塗布される。86 は底部である。

上記の土器の時期について検討する。刻目突帯文をもつ深鉢 78・79 は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－ 1 様式）に位置づけられる。深鉢 81 はⅠ－ 1 様式以前と考えられ，縄文時代晩期に遡る可能性もある。甕 82 の口唇部下端の刻目はⅠ－ 1 様式の特徴とされる（中村，2000）。甕 83 の口縁部下の箆描直線文 3 条はⅠ－ 1 ～ 4 様式に継続してみられる。甕 85 の口唇部下端の刻目はⅠ－ 1 様式，口縁部下の 4 条以上の箆描直線文はⅠ－ 2 ～ 4 様式の特徴とされ（中村，2000），両者の特徴をあわせもつ点を勘案すればⅠ－ 2 様式頃の所産といえようか。全体では弥生時代のⅠ－ 1 ～ 2 様式を中心に，最大で縄文時代晩期～弥生時代のⅠ－ 4 様式の時期幅が想定される。



* 第1遺構面で検出された遺構。
** 第1.5遺構面で検出された遺構。
*** 第2遺構面で検出された遺構。

図 3-31　縄文時代晩期末～弥生時代前期の主要遺構

図 3-32　縄文時代晩期末～弥生時代前期の主要遺構とその時期

6. 縄文時代晩期末～弥生時代前期の遺構とその性格

うえで検討したように，第２・1.5・１遺構面から検出された遺構のうち，縄文時代晩期末～弥生時代前期（Ⅰ－１～４様式）に位置づけられる可能性が高いものは，SD03，SK01・SK01 下層，SK02・SK02 下層，SK03，SK05，SK07 である（図 3-31）。各遺構の所属時期について図 3-32 に整

理した。

本地点で検出された遺構の性格を検討するために，庄・蔵本遺跡第 6 次調査（北條編，1998）で検出された墓群との比較を行う。後者は時期的にはⅠ－ 1 様式を中心とし，遅くともⅠ－ 2 様式までにおさまる。墓は少なくとも 22 基が検出されており, 石棺墓 2 基, 配石（木棺）墓 13 基, 土壙墓（木棺墓）6 基，甕（土器）棺墓 1 基で構成される。長軸を東西方向とするものが多数を占め，東西方向に列状に並んで築造されている。本地点の SK01・SK01 下層，SK02・SK02 下層，SK05 は，第 6 次調査の土壙墓や配石墓と平面形・断面形・サイズ等が類似している。加えて，Ⅰ－ 1 様式の SK02・SK02 下層も第 6 次調査の墓と同様，長軸が東西方向である。これに対し，やや時期が下るⅠ－ 2 ～ 3 様式の SK01・SK01 下層と，Ⅰ－ 1 ～ 4 様式の SK05 は長軸が南北方向である点で異なっている点は注目される。これらは本地点の遺構が墓である可能性を示唆する。さらに，時期によって，墓の長軸方向が変化した可能性がうかがわれる。

さて，第 6 次調査の配石墓や土壙墓は刳り抜き木棺が存在した可能性が指摘されている（北條，1998)。地域は異なるが，北部九州の江辻遺跡では墓壙内から木棺に伴う木質が検出され，配石の上に刳り抜き木棺が設置されたことがわかっている（粕屋町教育委員会，2002，端野，2003)。SK02 下層では，南東隅の底部からやや浮いた位置に，長さ 0.3m，幅 0.2m ほどの塩基性片岩 1 点が認められる。第 6 次調査の配石墓では配石数が 1 ～ 7 程度の幅があり，配石のサイズは SK02 下層と同程度のものもみられる。また，配石墓・石棺墓ともに石材はすべて塩基性片岩である点（北條編，1998）が共通する。つまり，SK02・SK02 下層は配石墓の可能性がある。加えて，断面に明確な木棺の輪郭は確認できないが，U 字形を呈する 4 層には多量の炭化物が含まれ，平面的には楕円形に広がっている。この点は，刳り抜き木棺の存在を暗示する。土器は遺構北東部に集中し，4 層直上の 3 層から出土している。木棺が存在したと仮定すれば，木棺の腐食によって棺外から土器が流れ込んだ状況が想定される。SK01 下層に配石は認められないが，底部から 0.1m ほど上に U 字形もしくは逆台形を呈する部分が認められ，埋土各層には炭化物が含まれている。これが刳り抜き木棺の痕跡であれば木棺墓，木棺がない場合は土壙墓の可能性があろう。

つぎに両地点の出土遺物について検討する。第 6 次調査で遺物が伴うものは，土壙墓 6 基中 3 基，配石墓 13 基中 6 基，石棺墓 2 基中 1 基で，いずれも半数程度である。このうち石製品は，土壙墓 3 で管玉 11 点・サヌカイト製石鏃 8 点，配石墓 4 で管玉 1 点，配石墓 5 で管玉 5 点が出土しているが, これらを伴わない墓の方が多数である。本地点では管玉やサヌカイト製石鏃を伴うものはないが, SK01・SK01 下層で，サヌカイト製粗製剥片石器や石庖丁の可能性がある石器が出土している。

出土土器の数量と内容について比較する。第 6 次調査では, 土壙墓 2 で壺 1 点(細片)･底部片(甕？) 1 点，土壙墓 5 で鉢 1 点（残存率 8 割程度)，配石墓 1 で高坏？ 1 点（残存率 6 割程度)，配石墓 2 で壺 3 点・底部 1 点（破片～残存率 8 割程度)，配石墓 7 で壺 1 点（細片)，配石墓 10 で壺 1 点（破片)・底部片 1 点，石棺墓 2 で甕 1 点（ほぼ完形）である。土壙墓，配石墓，石棺墓で土器を伴っており，器種は壺・甕・鉢などが存在し，特定器種に限られない。残存度は完形に近いものから細片まで含まれ，1 遺構からの出土数は 1 ～ 4 点程度である。本地点の SK01・SK01 下層では大型の破片から細片を含む壺・甕などの土器が少なくとも 14 点が出土している。SK02 下層では完形に近いも

のから細片を含む壺・甕・鉢などの土器が少なくとも 20 点が出土している。土器は特定器種に限られず，完形から細片までを含む点は第 6 次調査と共通している。ただし，第 6 次調査では土器の数量が 1 ～ 4 点であるのに対し，本地点では図化できるものだけでも 14 ～ 20 点と多数の土器が伴っている点で異なっている。

上記の検討の結果、決定的な根拠に欠けるものの，SK01・SK01 下層，SK02・SK02 下層，SK05 が土壙墓（木棺墓）や配石（木棺）墓の可能性があることを指摘した。

7. ま　と　め

本調査の主な成果を整理すると以下のとおりである。

① SK02・SK02 下層と SK03 で縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－１様式）にまとまる土器が出土した。当該期の遺構・遺物は，三谷遺跡で検出されているが，庄・蔵本遺跡では不明瞭な状況であった。本地点で当該期の遺構・遺物の存在を確認し，当時の人々の生活痕跡を明らかにした点は成果といえる。

② SK02・SK02 下層では遠賀川式土器のみ出土しているのに対し，SK03 では突帯文土器と遠賀川式土器の両者が出土し，前者の比率が高い状況がみられた。現状で両遺構の出土土器から時間差を示す明確な型式学的な差は見いだせないが，両遺構の出土土器の違いを説明する点が課題となろう。

③縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－１様式）に位置づけられる横型流水文が描かれた壺が確認された。弥生土器に描かれた流水文としては全国的にみても最古の事例のひとつであり，注目すべき資料といえよう。

④弥生時代前期の SK01・SK01 下層，SK02・SK02 下層，SK05 について，形態・サイズ，長軸方向，埋土の堆積状況，出土遺物の検討を通じ，土壙墓（木棺墓）や配石（木棺）墓である可能性を指摘した。

⑤縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－１様式）の SK02・SK02 下層と，ほぼ同時期の第 6 次調査地点の墓群は，長軸が東西方向であった。これに対し，やや時期が下るⅠ－２・３様式頃の SK01・SK01 下層とⅠ－１～４様式の SK05 は，長軸が南北方向である点で異なっていた。この点は，弥生時代前期のなかでも時期により，墓の主軸方向が変化していた可能性が示唆された。

（三阪一徳）

註

1.　突（凸）帯文土器については基本的に「突」と表記するが，中村（2014）の土器編年により時期を示す場合は「凸」の字を用いることとした。

文献

深澤芳樹，1989．木葉紋と流水紋．考古学研究 36（3）．39-66.

深澤芳樹，2000．刻目段甕のゆくえ：前期弥生土器における広域編年の試み．突帯文と遠賀川（田崎博之編）．土器持寄会論文集刊行会，愛媛．983-999.

端野晋平，2003．支石墓伝播のプロセス：韓半島南端部・北部九州を中心として．日本考古学 16．1-25.

端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治，2015．庄・蔵本遺跡第 27 次調査 (立体駐車場地点) の成果．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 1．43-97.
北條芳隆（編），1998．庄・蔵本遺跡 1：徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査．徳島大学埋蔵文化財調査室.
粕屋町教育委員会，2002．江辻遺跡第 5 地点.
勝浦康守（編），1990．名東遺跡発掘調査概要：名東町 2 丁目・宗教法人天理教国名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査．名東遺跡発掘調査委員会，徳島.
勝浦康守（編），1997．三谷遺跡：徳島市佐古配水場施設増設工事に伴う発掘調査．徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会.
勝浦康守，2000．徳島の突帯文土器と遠賀川式土器：三谷遺跡・名東遺跡資料の検討．突帯文と遠賀川（田崎博之編）．土器持寄会論文集刊行会，愛媛．453-469.
近藤玲（編），2014．南蔵本遺跡：県立中央病院改築事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書．徳島県埋蔵文化財センター.
近藤玲，2017．四国東部における灌漑水田農耕の受容期の年代について：炭素 14 年代法を用いた地域事例．総研大文化科学研究 13．149-193.
日下正剛，2002．大谷焼の生産と流通．関西近世考古学研究 10．17-34.
三阪一徳, 2014．土器からみた弥生時代開始過程．列島初期稲作の担い手は誰か（古代学協会編, 下條信行監修）．すいれん舎, 東京．125-174.
三阪一徳（編），2016．庄・蔵本遺跡 2：藤井節郎記念医科学センター新営，附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期，大塚講堂改修，外来診療棟新営，学生支援センター改修．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室 .
長佐古真也，1991．瀬戸美濃産『太白焼』小考．研究論集 10．東京都教育文化財団・東京都埋蔵文化財センター．405-418.
中村豊，2000．阿波地域における弥生時代前期の土器編年．突帯文と遠賀川（田崎博之編）．土器持寄会論文集刊行会，愛媛．471-497.
中村豊，2004．弥生時代・前期末中期初頭を考える：東四国の視点から．古代文化 56(4)．22-30.
中村豊，2008．東部瀬戸内・紀伊水道沿岸地域における凸帯文土器：徳島地域を中心に．古代文化 60(3)．99-106.
中村豊，2010．庄・蔵本遺跡・西病棟新営その他電気設備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 2．11-21.
中村豊，2014．東部瀬戸内地域における縄文時代晩期後葉の歴史像．中四国地域における縄文時代晩期後葉の歴史像（中村豊編），第 25 回中四国縄文研究会徳島大会．1-16.
中村豊（編），2017．縄文／弥生移行期における農耕の実態解明に関する研究，平成 26 ～ 28 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書．徳島大学大学院総合科学研究部.
岡田憲一，2014．瀬戸内海東辺における凸帯文土器と遠賀川式土器．中四国地域における縄文時代晩期後葉の歴史像（中村豊編），第 25 回中四国縄文研究会徳島大会．49-164.
佐原真，1967．山城における弥生文化の成立：畿内第Ⅰ様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置．史林 50(5)．103-127.
若林邦彦，2015．近畿．弥生土器：考古調査ハンドブック 12（佐藤由紀夫編）．ニューサイエンス社，東京．209-268.

第 4 章　第 30 次調査（渡り廊下建設地点）

第 1 節　調査の概要

1．調査に至る経緯

蔵本キャンパスの北半中央部に位置する，旧外来診療棟の取り壊し工事が進められるなかで，同建物西側の一部を残し，倉庫棟（仮称）として再利用することとなった。さらに，これと南側の医学臨床 A 棟の 2 階部分をつなぐ渡り廊下の建設が計画され，その基礎部分の発掘調査を実施することとした。

2．調査体制

調査主体　国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・端野晋平）
調査員　三阪一徳（大学院総合科学研究部・助教）
調査補助員　中原尚子・板東美幸・山本愛子（施設マネジメント部・技術補佐員）
作業員　佐藤亜一・楢村千晶・宮本椋太（徳島大学総合科学部学生）
清野尚義・城明弘・松崎八郎
調査期間　2016 年 11 月 14 日～ 12 月 1 日
調査面積　約 70 ㎡

3．調査の経過

2016 年 11 月 11 日に，測量業者に依頼し，調査区周辺の 3 か所に座標を設置した。

14 日から発掘調査を開始した。アスファルトを除去したところ，調査区北半の東西にまたがり配管が埋設されていた。その除去には検査等の時間を要するため，これを残した状態で調査を進めることとした。配管より北側を A 区，南側を B 区とした。同日，A 区の重機掘削を開始した。

15 日も A 区の重機掘削を継続したが，表土・撹乱層から廃棄薬品が検出されたため，慎重に掘削を進め，その処理については本学担当部局に依頼した。表土・撹乱層除去後，1 ～ 3 層において遺構は検出されず，4 層上面まで掘り下げた。なお，重機掘削中に，3 層以上の包含層もしくは撹乱に包含されていたと考えられる土器 1 点が出土した。4 層上面で遺構を確認したため，これを第 1 遺構面とし，調査を行った。

16 日から 17 日にかけ，A 区の第 1 遺構面（4 層上面）を精査し，遺構 SK101・SK103・SX102・SX104 を検出した。調査区が狭く，いずれも遺構の全形は不明であった。遺構検出の写真を撮影後，断面観察用のセクションベルトを残し，遺構埋土を掘削したが，遺物は検出されなかった。その後，

遺構完掘写真の撮影，平面図・断面図の実測を行い，第1遺構面の調査を終えた。なお，北壁に沿って排水・土層観察用のサブトレンチを設定した。また，A区の精査と並行して，16日以降，B区の重機掘削を開始した。

B区では，4層上面で遺構は確認されず，5層上面まで重機掘削を行った。5層上面でわずかに遺構が検出され，これを第2遺構面とした。精査の結果，土坑もしくは柱穴と考えられるSP201・SP202が検出された。なお，B区南半部は，撹乱によって5層上面がすでに削平されていた。とくに南端部は医学臨床A棟の基礎に伴うと推定される，東西にのびる深い撹乱が確認された。18日までに，B区第2遺構面の写真撮影，平面図・断面図の実測を完了し，同遺構面の調査を終えた。

周辺の調査地点では，本調査地点の7層上面に相当する層において，弥生時代前期の水田や，これに伴う用水路が検出されている。そのため，21日以降，A区・B区とも人力掘削により6層下位まで掘り下げ，そこから7層上面までは慎重に遺構検出を行った。また，西壁・北壁・東壁に沿って，排水・土層観察用のサブトレンチを設定した。その結果，B区の7層上面において，東西方向にのびる溝状の遺構SD301・SD302・SD304・SX303を検出した。これにより，7層上面を第3遺構面とし調査を行った。

28日に，B区の遺構検出写真を撮影した後，SD301・SD302・SD304・SX303について，土層観察用のセクションベルトを残し，埋土の掘削を開始した。29日にSD301・SD302は完掘，SX303は11層上面まで掘り下げた段階で（この時点で10層までが埋土と想定していた），B区の遺構完掘写真を撮影した。その後，平面図・断面図の実測を開始し，30日までに作業を終えた。なお，調査区壁面の土層断面図については，A区の北壁・東壁，B区の西壁・北壁・東壁を実測することとした。本作業は24日から開始し，以降，適宜修正を加えた。

A区の第3遺構面（7層上面）については，29日に精査を行ったが遺構は検出されず，全景写真を撮影した。なお，26・27日の大雨により，A区北壁の東側1/3ほどが大きく崩れ，28日以降も崩落が進行していたため，当該範囲については遺構検出を断念せざるをえなかった。

30日は，B区のSX303について，東側と中央部に設定したセクションベルトと，B区西壁のサブトレンチを追加で掘り下げ，その底部および埋土を確認した。その結果，埋土は基本層序と同様の層序をなして水平に堆積しており，これが基本層序より1～3層程，落ち込んだ状況であることがわかった。さらに，B区西壁では，SX303の上端が基本層序の1層よりさらに上の表土・撹乱まで及んでいることが判明した。平面的にはこの溝状の落ち込みは，B区の南側を東西方向にのびている。

12月1日に，溝状落ち込みSX303に関連する掘り下げ部分について，写真撮影および断面図への加筆を行った。また，すべての図面の確認・修正を行い，調査を完了した。遺物の検出は慎重に行ったものの，その出土量は数点とごくわずかであり，コンテナ1箱におさまる。

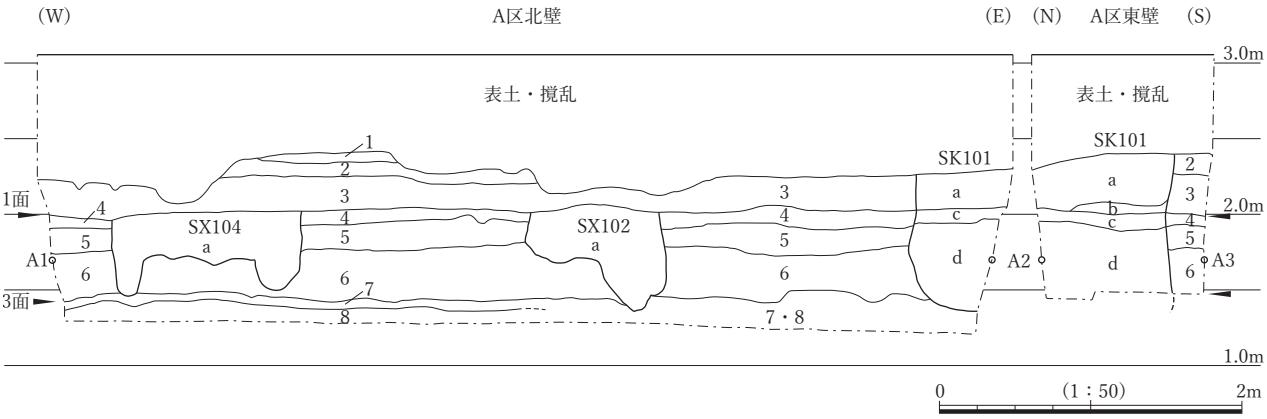
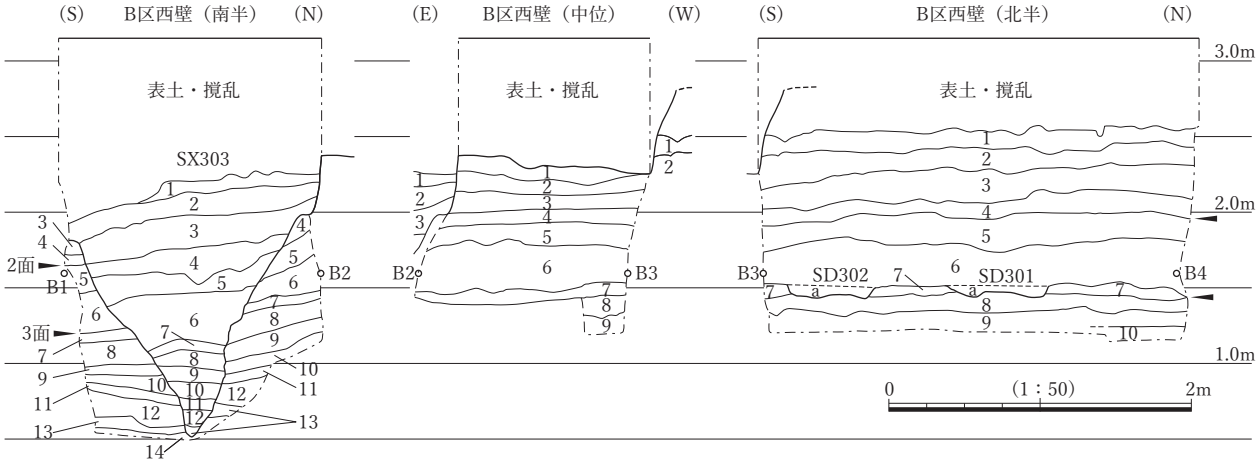


図 4-1　A 区北壁・東壁の土層断面図



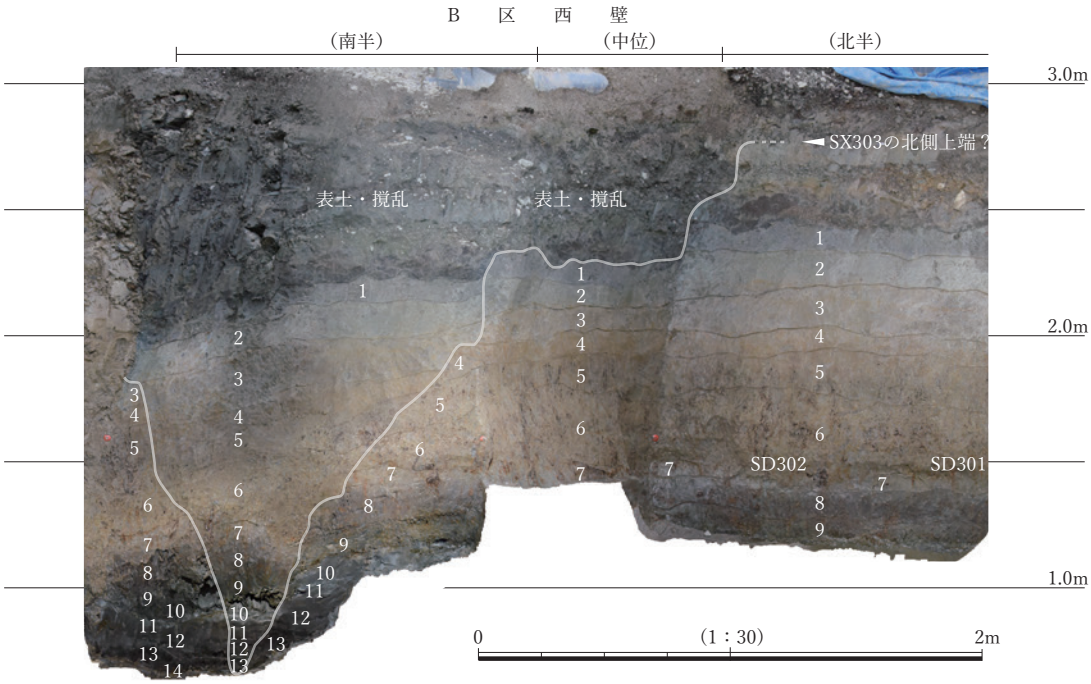
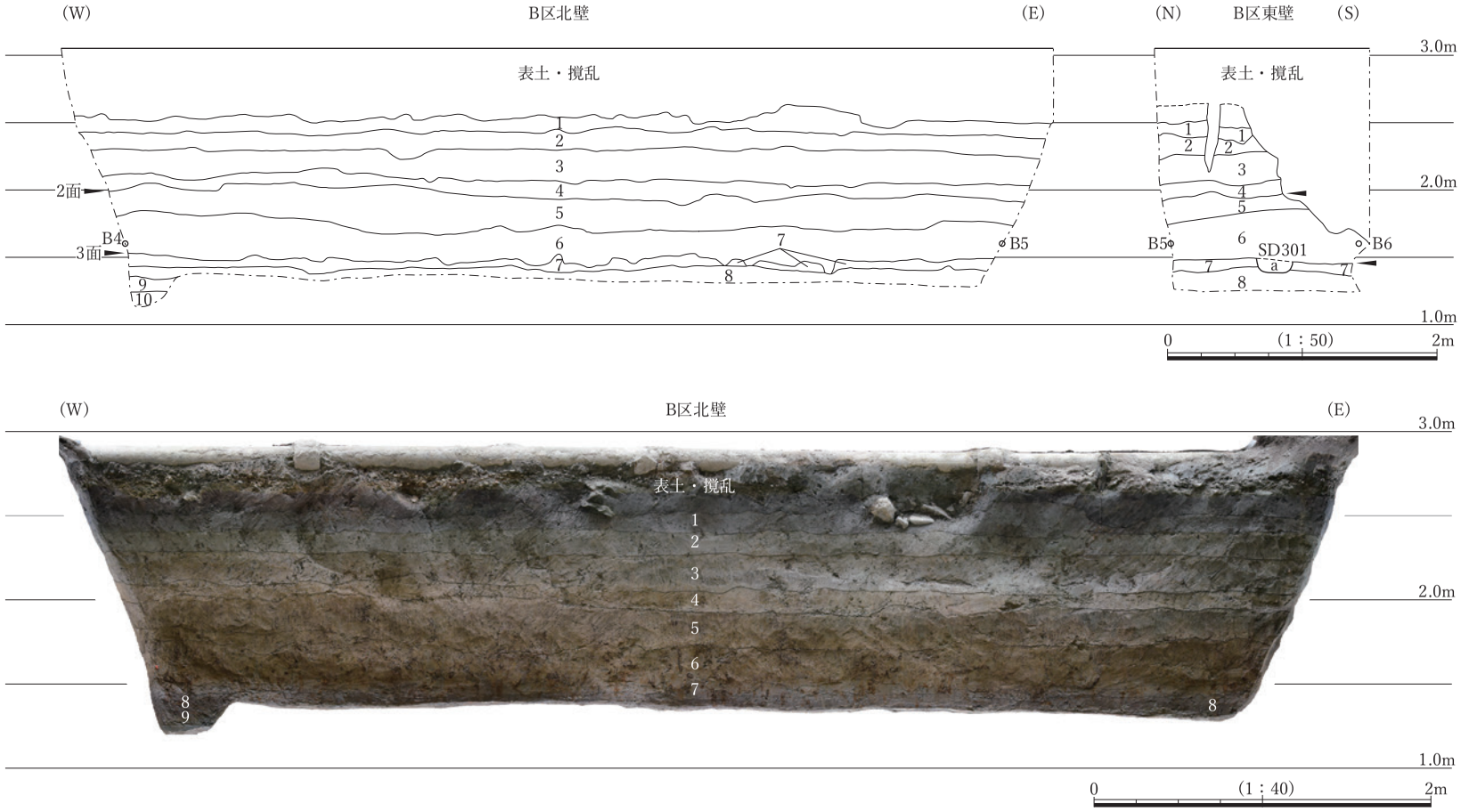


図 4-2　B 区西壁の土層断面図（上）とオルソ画像（下）



1　灰色(N6)粘土混シルト
2　緑灰色(5G6/1)粘土混シルト
3　灰色(7.5Y6/1)粘土混シルト
4　灰黄色(2.5Y6/2)細砂混シルト　鉄分含む
5　にぶい黄色(2.5Y6/3)細砂　マンガン含む
6　浅黄色(2.5Y7/3)シルト混細砂　マンガン多量に含む
7　黄灰色(2.5Y5/1)シルト　マンガン含む
8　褐灰色(10YR5/1)シルト混粘土　マンガン含む
9　暗緑灰色(10GY4/1)細砂混シルト　鉄分含む
10　灰色(N5)粘土
11　青灰色(10BG6/1)細砂混粘土　鉄分含む
12　灰色(10Y5/1)粘土
13　暗紫灰色(5P3/1)粘土
14　灰色(5Y5/1)粘土

図 4-3　B 区北壁・東壁土層断面図（上）と北壁オルソ画像（下）

第 2 節　調査の記録

1．基本層序

基本層序について以下に説明する。A 区は北壁・東壁（図 4-1），B 区は西壁・北壁・東壁の実測図およびオルソ画像を掲載している（図 4-2・3）。壁面断面図（図 4-1 ～ 3）には，A1 ～ 3・B1 ～ 6 の基準点を示しており，これらは第 3 遺構面の遺構平面図（図 4-4）のそれに対応する。図 4-2・3・8 に掲載したオルソ画像の作成方法については後述する。

なお，本調査地点では，基本層序にほとんど遺物は含まれていなかったが，既往の調査成果と対応可能である。これに基づき，想定される各層の時期を示している。

1 層　灰色 (N6) の粘土混じりシルトである。近世の水田層と推定される。

2 層　緑灰色 (5G6/1) の粘土混じりシルトである。近世の水田層と推定される。

3 層　灰色 (7.5Y6/1) の粘土混じりシルトである。

4 層　灰黄色 (2.5Y6/2) の細砂混じりシルトである。鉄分を含む。弥生時代前期末・中期初頭～中世の土壌化層と考えられる。A 区では本層上面を第 1 遺構面とした。

5 層　にぶい黄色 (2.5Y6/3) の細砂である。マンガンを含む。弥生時代前期中葉～前期末・中期初頭の洪水起源砂層と考えられる。B 区では本層上面を第 2 遺構面とした。

6 層　浅黄色 (2.5Y7/3) のシルト混じり細砂である。マンガンを多量に含む。弥生時代前期中葉～前期末・中期初頭の洪水起源砂層と考えられる。

7 層　黄灰色 (2.5Y5/1) のシルトである。マンガンを含む。弥生時代前期中葉の遺構面のベース層と考えられる。A 区・B 区ともに 7 層上面を第 3 遺構面とした。

8 層　褐灰色 (10YR5/1) のシルト混じり粘土である。マンガンを含む。弥生時代前期中葉の遺構面のベース層と考えられる。

9 層　暗緑灰色 (10GY4/1) の細砂混じりシルトである。鉄分を含む。

10 層　灰色 (N5) の粘土である。

11 層　青灰色 (10BG6/1) の細砂混じり粘土である。鉄分を含む。

12 層　灰色 (10Y5/1) の粘土である。

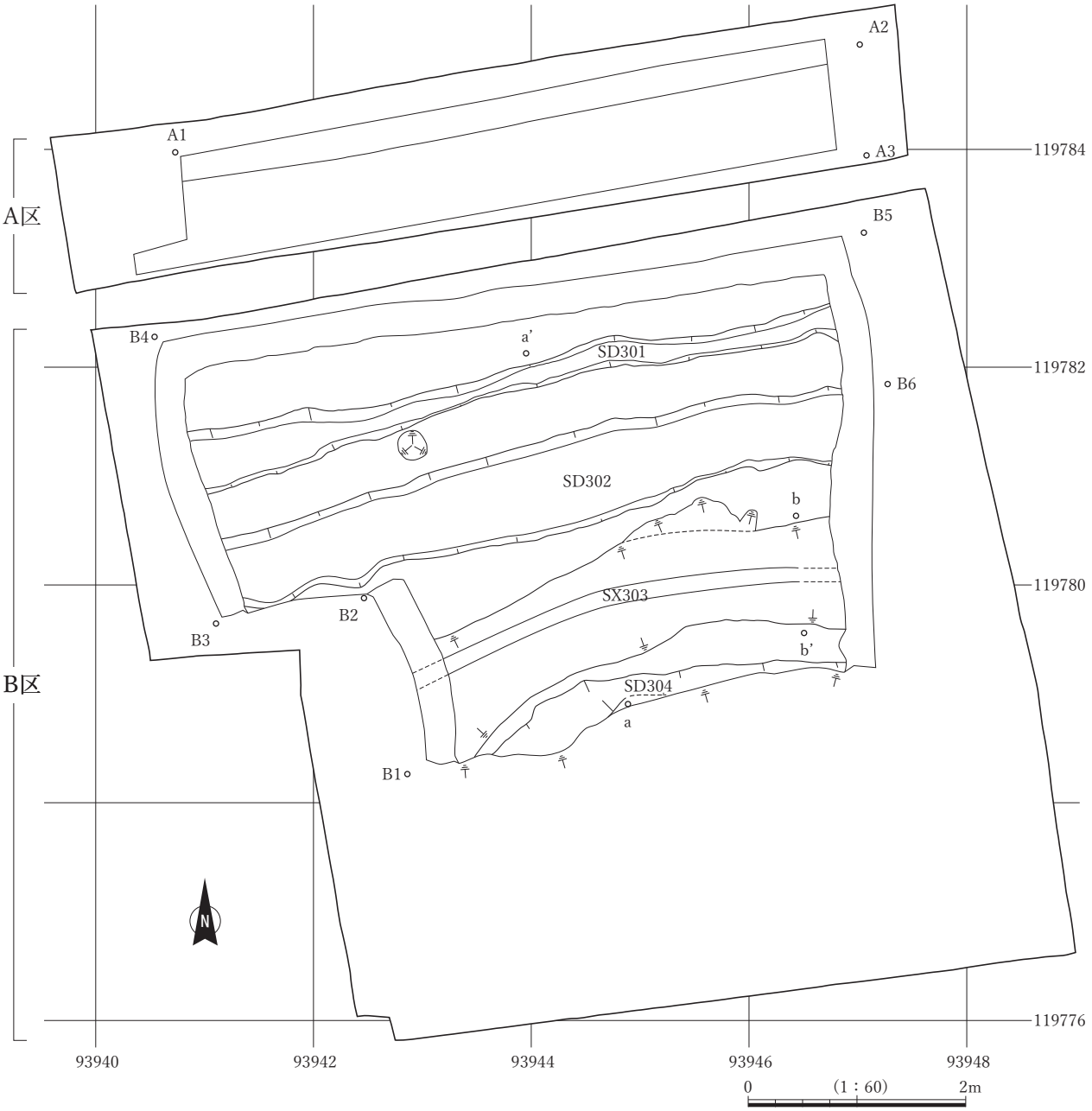
13 層　暗紫灰色 (5P3/1) の粘土である。

14 層　灰色 (5Y5/1) の粘土である。13 層と同質であるが，グライ化の度合いにより，両層の色調が異なっていると推定される。

2．第 3 遺構面の遺構

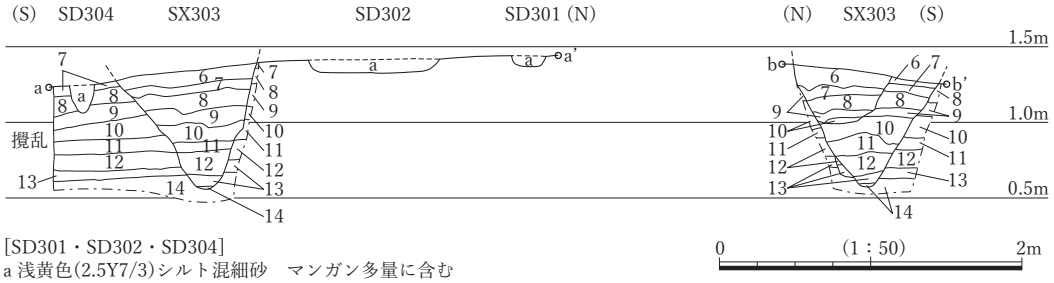
(1) 溝状遺構

SD301（図 4-2 ～ 6・8）



◦ A1-3，B1-6は壁面土層断面図に対応。

図 4-4　第 3 遺構面の遺構平面図



[SD301・SD302・SD304]
a 浅黄色(2.5Y7/3)シルト混細砂　マンガン多量に含む

* SD301・SD302・SX303の埋土については図4-2・4-3も参照。

図 4-5　第 3 遺構面の遺構断面図

図 4-6　B 区第 3 遺構面の遺構検出写真（東より）

図 4-7　SD302 検出状況と西壁土層断面の写真（東より）

図 4-8　B 区第 3 遺構面のオルソ画像

B 区の 7 層上面で検出された。B 区の北側を東西にのびる。残存部の長さ 6.0m，幅 0.2 ～ 0.6m，深さ 0.1m で，断面形はレンズ形である。埋土は浅黄色（2.5Y7/3）のシルト混じり細砂で，マンガンを多く含む。洪水起源砂層である 6 層とほぼ同質であり，分層は難しい。SD302・SD304 の埋土も同様である。遺物は出土していない。

SD302（図 4-2・4 ～ 8）

B 区の 7 層上面で検出された。B 区の中央を東西にのびる。残存部の長さ 5.7m，幅 0.6 ～ 0.9m，深さ 0.1m で，断面形はレンズ形である。埋土は SD301･SD304 と同様である。遺物は出土していない。

SD304（図 4-4 ～ 6・8）

B 区の 7 層上面で検出された。B 区の南端を，南西から東にわずかに屈曲してのびる。残存部の長さ 3.3m，幅 0.2m 以上，深さ 0.2m で，断面形は U 字形である。埋土は SD301･SD302 と同様である。遺物は出土していない。

これら溝状遺構の時期や機能については後述する。

（2）溝状落ち込み

SX303（図 4-2・4 ～ 6・8）　B 区の 7 層上面で検出された。B 区の南側を東西にのびる。当初，SX303 を第 3 遺構面に伴う溝状の遺構であると想定した。しかし，B 区西壁では，SX303 の上端が，基本層序 1 層よりさらに上の表土・撹乱まで及んでいる。上端と推定される付近では幅 1.7m 以上，深さ 2.3m で，断面形はＶ字形を呈する。なお，7 層上面においては，残存する長さ 3.7m，幅 0.8 ～ 1.1m，深さ 0.8 ～ 1.0m である。埋土は水平に堆積し，これらは基本層序と同じ層序をなし，基本層序から一段落ち込んでいる状況であった。遺物は出土していない。

上端が表土・撹乱に及ぶ点から，その形成は近・現代とみられる，少なくとも弥生時代～近世の遺構ではないといえる。こうした痕跡は人為的営力により生じたとはとうてい考えられず，確証はないが，地震に伴う地割れ痕跡の可能性があろうか。今後，付近での調査があれば，同様の痕跡がないか，注意を払う必要があろう。

３．第 1・2 遺構面の遺構

（1）土坑・ピット

SP201（図 4-9・10）

B 区北端中央の 5 層上面で検出された。平面形は円形もしくは楕円形と推定される。残存部の長さ 0.2m，幅 0.1m 以上，深さ 0.1m で，断面はレンズ形である。埋土は青灰色（5BG6/1）のシルト混じり細砂である。同じく 5 層上面で検出された SP202 と類似する。遺物は出土していない。ピットであろうか。

5 層は弥生時代前期中葉～前期末・中期初頭，4 層は弥生時代前期末・中期初頭～中世に形成されたと推定される。ただし，4 層は土壌化が進行し，遺構の掘り込み面や埋土の識別が困難な場合がある。SP201 の時期は，掘り込み面が 5 層上面である場合は弥生時代前期中葉～前期末・中期初頭，4 層中である場合は弥生時代前期末・中期初頭頃～中世の可能性が高いといえる。

SP202（図 4-9・10）

B 区北端中央の 5 層上面で検出された。平面形は円形もしくは楕円形と推定される。残存部の長さ 0.2m，幅 0.1m 以上，深さ 0.2m で，断面はＵ字形である。埋土は，同じく 5 層上面で検出された SP201 と同様である。ピットであろうか。遺物は出土していない。

SP201 と同様，5 層上面で検出されている点から，弥生時代前期中頃～中世の遺構と推定される。

SK101（図 4-1・9・10）

A 区東隅の 4 層上面で検出された。本来の掘り込み面は 2 層上面である。平面形は不明である。残存部の長さ 1.1m 以上，幅 0.8m 以上，深さ 1.1 ～ 1.3m で，断面形はＵ字形である。埋土は 4 層に分層され，いずれも灰色系でシルトもしくは細砂である。土坑もしくは井戸であろうか。遺物は出土していない。

近世の水田層と推定される，2 層上面から掘り込まれている点から，近世以降の遺構と考えられる。

SK103（図 4-9・10）

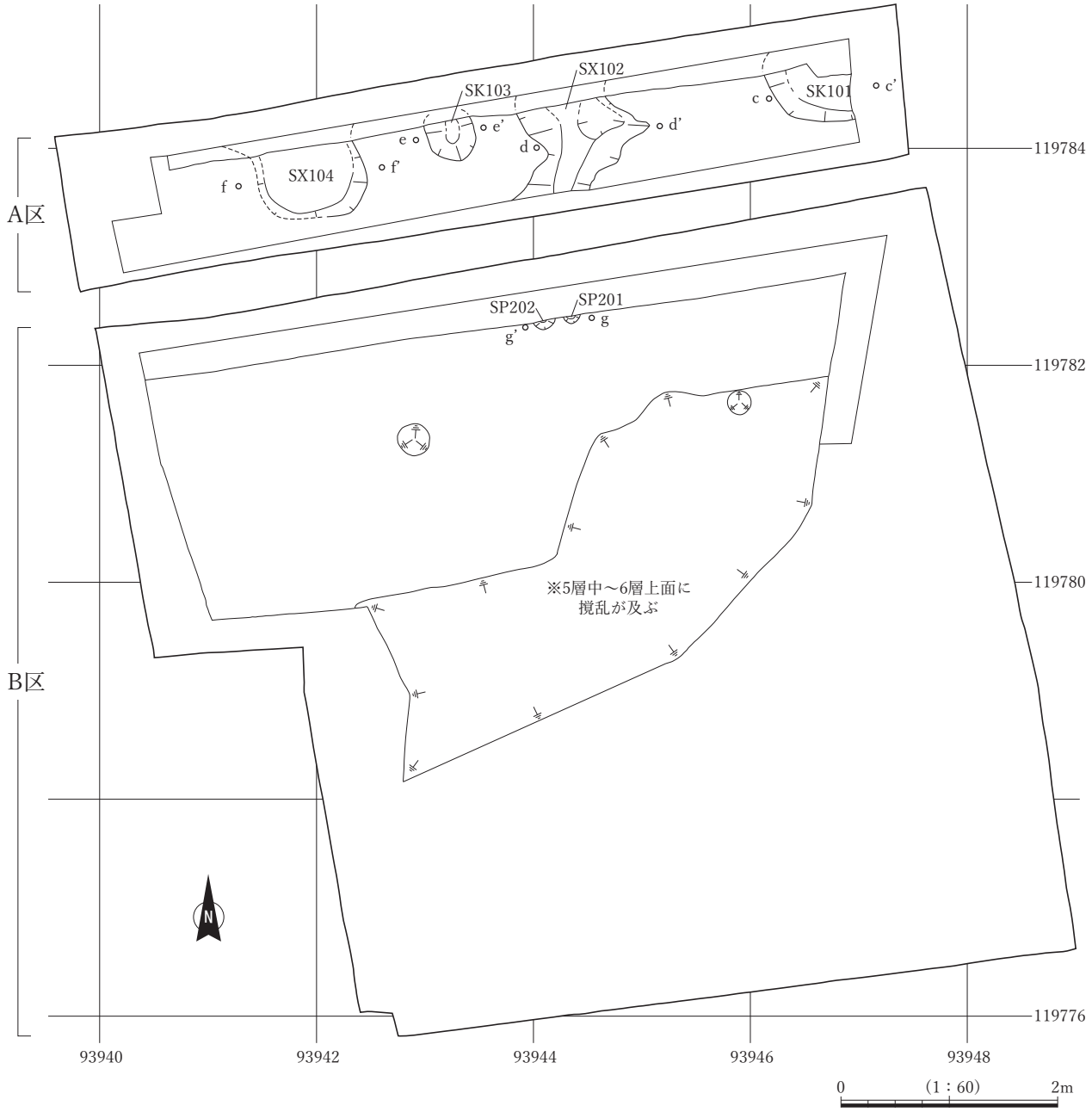
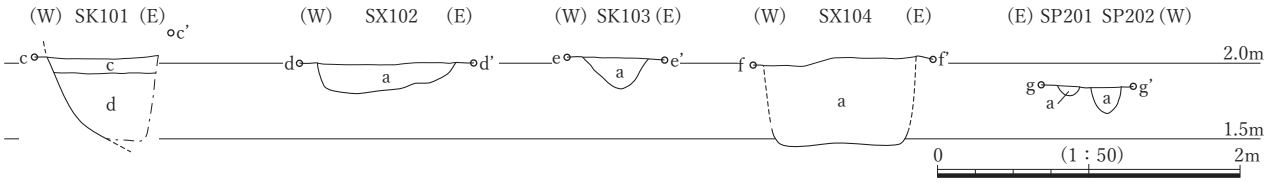


図 4-9　第２・１遺構面の遺構平面図



[SK101]
a 灰色(7.5Y5/1)細砂混シルト
b 灰色(7.5Y6/1)シルト混粘土
c オリーブ灰色(5GY5/1)細砂混シルト
d 緑灰色(7.5GY5/1)細砂

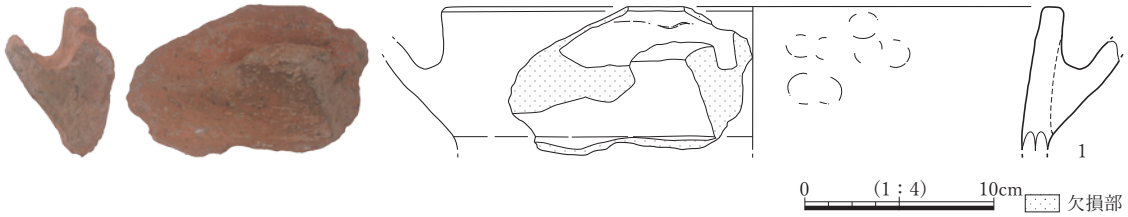
[SX102・SK103]
a 灰白色(5Y7/1)細砂混シルト
鉄分少量含む

[SX104]
a 灰白色(5Y7/1)細砂混シルト
鉄分少量含む（底付近：オリーブ灰色(2.5GY6/1)細砂混シルト　マンガン多量に含む）

[SP201・SP202]
a 青灰色(5BG6/1)シルト混細砂

* SK101・SX102・SX104の埋土については，図4-1も参照。

図 4-10　第２・１遺構面の遺構断面図



番号	調査区	遺構	層位	種類・器種	法量（cm）			文様等	器面調整	色調	胎土
					口径	底径	器高				
1	A 区	包含層／撹乱	3 層以上 （重機掘削中）	土師質土器・ 不明	(33.0)	-	-	取手？ 鍔部？	（外）ナデ （内）ナデ	（外）橙色 2.5YR6/6 （内）橙色 2.5YR6/6	～ 3mm 石英，～ 5m 白色， ～ 2mm 暗褐色砂粒含む

（　）復元値

図 4-11　遺物実測図

A 区中央付近の 4 層上面で検出された。平面形は楕円形と推定される。残存部の長径 0.4m 以上，短径 0.4m，深さ 0.3m で，断面形は V 字形である。埋土は灰白色（5Y7/1）の細砂混じりシルトで，鉄分を少量含む。同じく 4 層上面で検出された SX102・SX104 の埋土と類似する。土坑であろうか。遺物は出土していない。

4 層は弥生時代前期末・中期初頭～中世に形成された土壌層と考えられる。SK103 は 4 層上面で検出されており，弥生時代前期末・中期初頭～中世に位置づけられる可能性がある。

（2）不明遺構

SX102（図 4-1・9・10）

A 区中央付近の 4 層上面で検出された。平面形は不整形である。残存部の長さ 1.0m, 幅 0.5 ～ 1.0m, 深さ 0.2 ～ 0.8m で，断面形は不整形である。埋土は，同じく 4 層上面で検出された SK103・SX104 と類似する。遺物は出土していない。

SK103 と同様，4 層上面で検出されている点から，弥生時代前期末・中期初頭～中世に位置づけられる可能性がある。

SX104（図 4-1・9・10）

A 区西側の 4 層上面で検出された。平面形は，南側が楕円形を呈するが，A 区北壁に向かい広がる。残存部の長さ 1.5m，幅 0.8m，深さ 0.4 ～ 0.7m である。断面形は U 字形であるが（図 4-10），A 区北壁の断面は中央部が浅くなる（図 4-1）。埋土は，同じく 4 層上面で検出された SX102・SK103 と類似するが，底付近はマンガンを多量に含む。遺物は出土していない。

SK103 と同様，4 層上面で検出されている点から，弥生時代前期末・中期初頭～中世に位置づけられる可能性がある。

4．包含層出土遺物

本調査では，実測可能な遺物は土器 1 点のみである（図 4-11）。同土器は，A 区の重機掘削中に出土したため，明確な出土層位は不明であるが，3 層以上の包含層もしくは撹乱に包含されていたと考

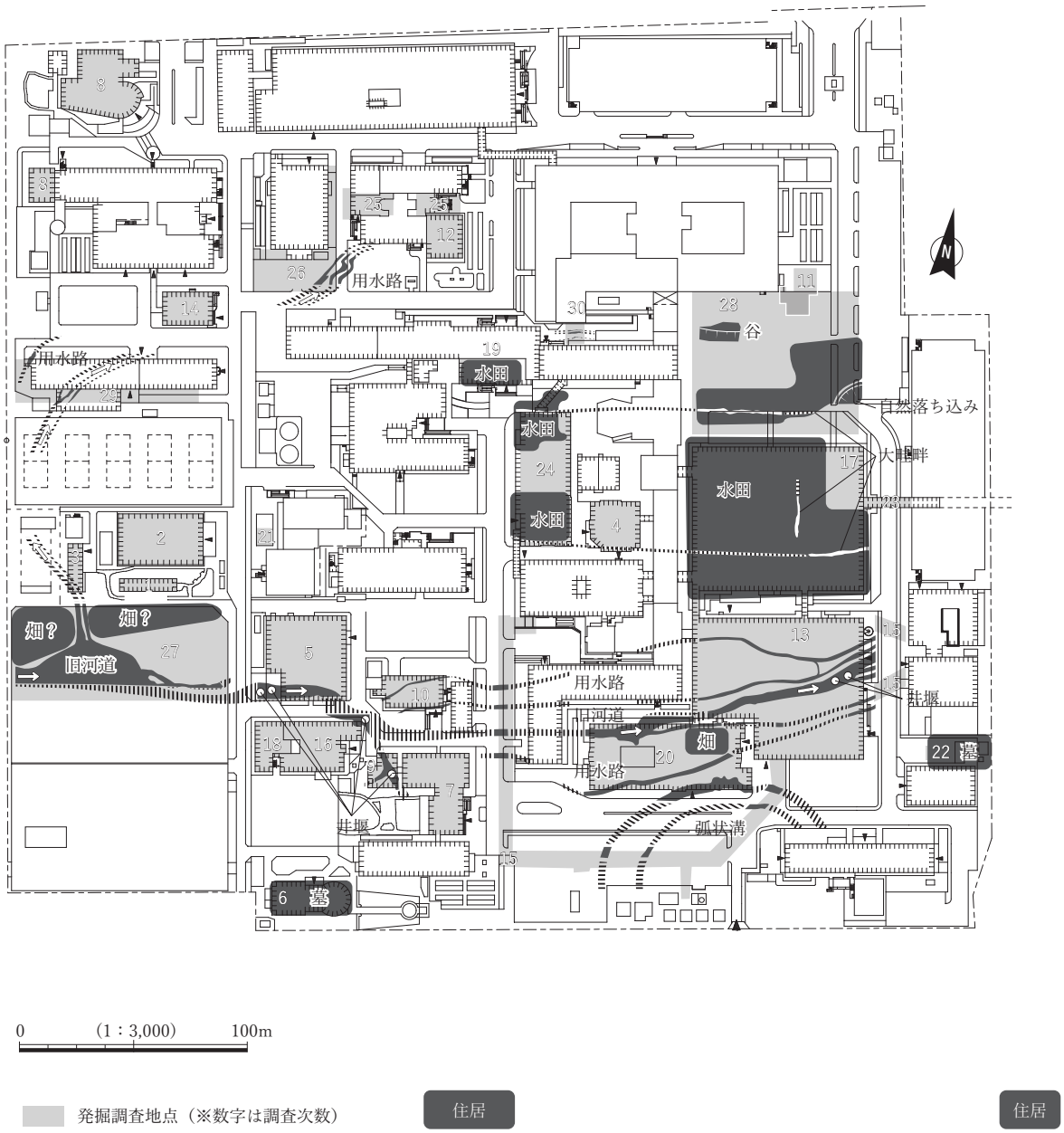


図 4-12　弥生時代前期前葉～中葉の遺構

えられる。

土師質であるが，その全形や上下は不明である。口縁部と想定される部分が残存し，復元径は 33.0cm 程である。口縁部下に突出する部分を有し，これが口縁部下を一周し鍔状を呈するのか，一部に留まり取手状になる可能性がある。古代の羽釜や取手付土器，古墳時代の形象埴輪の一部である可能性などが想定されるが，器種は不明である。

第３節　溝状遺構の機能

7 層上面で検出された溝状遺構 SD301・SD302・SD304 の特徴について，以下に整理する。検出

面での幅 0.2 ～ 0.9m と狭く，深さは 0.1 ～ 0.2m と浅く，これらはおおよそ並行して東西にのびている。埋土は，いずれも浅黄色のシルト混じり細砂であり，洪水起源砂層である 6 層との区分は難しい。また，7 層上面は，北から南に向かい標高が緩やかに低くなる。以上の調査成果のみでは，溝状遺構の位置づけを行うことは難しいため，周辺の調査地点の成果（図 4-12）をふまえ検討する。

本調査地点の南側には，弥生時代前期の水田が広がっており（第 17・19・24・28 次調査），北西側では 3 条前後が並行してのびる溝が検出されている（第 26・29 次調査）。後者は，本遺跡の南側を東流する旧河道（第 5・13・16・20・27 次調査）から分岐させた，水田に伴う用水路と推定される（三阪編，2016）。これらは，本調査地点の溝状遺構と同様，7 層上面に相当する層で検出され，出土遺物などからも弥生時代前期中葉に位置づけられる。よって，SD301・SD302・SD304 も当該期に所属する可能性が高いといえる。

当初，水田域が本調査地点まで広がることが予想され，溝状遺構が東西方向の水田畦畔である可能性が想定された。しかし，南北方向の畦畔が検出されなかったため，水田である可能性は棄却された。なお，本調査地点には水田が存在せず，水田域の北限を確認した点は重要である。

これ以外にどのような機能が想定しうるのであろうか。第 26・29 次調査の用水路と推定される溝は，検出面での幅 1 ～ 2m，深さ 0.2 ～ 0.7m で，深さは 0.5m 前後のものが中心である。これに比べると，本調査地点の溝状遺構は狭く，浅いといえる。これが，後世の土地改変により上部が削平された結果であるのか，機能時の形態をほぼ留めているのかは不明である。周辺の調査成果からは，本調査地点のすぐ南側まで，水田域が広がっていた可能性が予測される。また，本調査地点の 7 層上面は北から南に向かい傾斜している。東側の第 28 次調査の北西部でも，水田に向かい南に落ち込む谷状の地形が確認されている。こういった状況から，溝状遺構はもとより狭く浅く造られた用水路の末端部にあたり，水をオーバーフローさせて，南側の水田に水を流し込こむという機能も想定されようか[註 1)]。

このほかには，溝状遺構が畑の畝である可能性が想定される。第 20 次調査で畝をもつ畑が検出されており（中村，2009），第 27 次調査ではその可能性がある溝状遺構が確認されている（端野ほか，2015）。これらの畑の畝間と，本調査地点の溝状遺構の幅や深さは類似しており，畑の可能性も想定されるが，その確証はない。

溝状遺構について，いくつかの機能を推定したが，どれも決め手に欠ける。今後の調査によって，その機能が解明されることを期待したい。

第 4 節　SfM/MVS による遺跡の三次元計測とオルソ画像の作成

1．目的

従来の発掘調査における測量では，遺跡がもつ三次元情報を，二次元情報に集約し記録する方法が実施されてきた。近年は，遺跡がもつ三次元情報を，三次元で記録する試みがなされている。これは，従来の実測図よりも多様な情報を記録できるだけではなく，作業時間や人員が削減できることが期待されている。

上記をふまえ，本調査では，従来の二次元による記録と並行して，SfM/MVSによる三次元計測を行い，三次元モデルとオルソ画像を作成した。小稿は，作成した図面および作業手順を具体的に示すことにより，これらの有効性や問題点・改善点に関する議論の素材として活用されることを期待するものである。

2．資料と方法

庄・蔵本遺跡第30次調査のB区第3遺構面の完掘状況（約50㎡）およびB区の北壁と西壁を対象とし，三次元計測を作成し，これをもとにオルソ画像を生成した（図4-2・3・8）。B区第3遺構面では，弥生時代前期の溝状遺構3基が検出された。また，上層に形成された溝状落ち込み1基も本遺構面まで達している。

三次元計測は，金田明大（2016a・b）に示されたSfM/MVSによる方法を参照し，下に示した手順で作業を行った。使用した機材等はつぎのとおりである。

［カメラ］　ボディ：Nikon D810，レンズ：AF-S NIKKOR 24-85mm f/3.5-4.5G ED VR

［ソフトウェア］　Agisoft PhotoScan Professional（Ver.1.3.1.4030），QGIS（Ver.2.18.4），
Adobe Illustrator CC（2017）

［パソコンの仕様］　CPU：Intel Xeon E3-1505M v5（2.8GHz），メモリ：32GB，
GPU：NVIDIA Quadro M1000M（2GB）

3．手順

(1) 座標の設置

調査区周辺の地表面に設置した測量用の鋲，調査区内に設置した壁面の鋲，遺構上端の角など識別しやすい点に，トータルステーションで世界測地系・平面直角座標系Ⅳ系による座標を与えた。壁面の鋲については，断面図実測用に水糸を張る五寸釘を利用した。また，その頭に樹脂製の赤いキャップを装着することで，三次元モデル作成時に認識されやすいようにした。

なお，座標を与える点は，調査区にまんべんなく配置した方が，より誤差が少なくなると予想される。

(2) 写真撮影

B区第3遺構面の完掘状況に加え，調査区の西壁・北壁・東壁のデジタルカメラによる写真撮影を行った。その後，西壁のサブトレンチを深掘りするとともに，新たに分層したため，再度撮影を行った。

写真撮影においては，60%程度をオーバーラップさせつつ，調査区全体に欠落部が生じないようにした。また，座標を与えた鋲や点が写り込むようにした。同一の焦点距離での撮影が推奨されているため，焦点距離24-85mmのズームレンズを使用し，広角端の24mmで撮影を行うこととした。ただし，今回は24mmで撮影した写真だけでは，カバーできていない部分が確認されたため，24mm以外の焦点距離で撮影した写真も一部に使用した。なお，写真はRAW形式とjpeg形式で保存した。

（3）三次元モデルの作成

下の手順で，B 区第 3 遺構面の壁面を含む完掘状況の三次元モデルと，西壁の三次元モデルを作成した。

a．画像の選別

まず，撮影した画像について，手ぶれがあるものや人が写り込んでいるものを排除した。その結果，第 3 遺構面は 218 カット，西壁は 28 カットを選別した。なお，1 カットのデータサイズは，RAW 形式が 45MB 程，jpeg 形式が 17MB 程であった。RAW 形式の画像を用いた方がより鮮明な三次元モデルが再現されると予想されるが，カット数とパソコンの性能を勘案し，今回は jpeg 形式の画像を使用することとした。なお，色調の補正等は行っていない。

b．三次元モデルの作成

PhotoScan Pro を用いて，選別した画像から三次元モデルを作成した。手順と設定はつぎのとおりである。

1）ワークフロー➡写真のアラインメント［精度＝中］

2）ワークフロー➡高密度（Dence）クラウド構築［品質＝中］

3）ワークフロー➡メッシュ構築［サーフェイスタイプ＝ 3D 形状, ソースデータ＝高密度（Dence）クラウド，ポリゴン数＝高］

4）ワークフロー➡テクスチャー構築［マッピングモード＝汎用, ブレンドモード＝モザイク（標準），テクスチャーサイズ／カウント＝ 4096 × 1］

パソコンがより高性能で，時間に余裕があれば，写真のアラインメントの精度や高密度（Dence）クラウド構築の品質を高に設定することで, より精度の高い三次元モデルが生成されると考えられる。ただし，写真のアラインメントの精度を高くすると，三次元モデルに採用される画像はより厳密に選別され，欠損部が生じてしまう可能性もある。なお，これらの設定を最高にした場合，かなりの時間を要することが予想される。

（4）オルソ画像の作成

B 区第 3 遺構面の壁面を含む完掘状況の三次元モデルから平面図と北壁断面のオルソ画像（図 4-3・8），西壁断面の三次元モデルからそのオルソ画像（図 4-2）を作成した。金田（2016b）を参照し，下記の手順で作業を行った。

a．座標の設定

PhotoScan Pro を用いる。三次元モデルにおいて，座標を有する鋲や点に，右クリックでマーカーを設定し，座標値を入力する。このうち，誤差が大きいマーカーのチェックをはずした結果，誤差 4cm 程度となった。X 座標にマイナスをつけた値を入力すると，座標に矛盾が生じないようである。

b．オルソ画像の作成

1）平面図

PhotoScan Pro を用い，ワークフロー➡モザイク構築［タイプ＝平面，プロジェクション面＝上 XY］を選択する。

2）断面図

PhotoScan Proを用いる。まず，オルソ画像を作成した場合に，断面図に重複する部分がある場合は，三次元モデルの該当箇所を，長方形ツールなどを用いて削除しておく。

つぎに，ワークフロー➡モザイク構築［タイプ＝平面，プロジェクション面＝現在のビューもしくはマーカー］に設定する。なお，プロジェクション面＝現在のビューを選択する場合は，ビュー➡プリセットビューなどを用い，Z軸を中心に作成したい断面図の角度に回転させておく。

3）オルソ画像の出力

PhotoScan Proを用い，ファイル➡オルソモザイクのエクスポート［ファイルの種類＝Tiff/GeoTiff（*.tiff）］を選択し，座標情報が含まれたオルソ画像を出力する。

（5）オルソ画像の装飾

a．座標グリッドの追加

QGISを用いて，つぎの作業を行った。

レイヤ➡レイヤの追加➡ラスタレイヤの追加を選択し，GeoTiff形式の画像を貼り付ける。

プロジェクト➡新規コンポーザー➡地図を追加と選択し，画像を配置する。

コンポジションとアイテムプロパティから，解像度・縮尺・座標グリッドなどを設定する。

コンポーザー➡PDFとしてエクスポートもしくは画像としてエクスポートを用い，出力したいファイル形式で出力する。

b．座標値・方位・スケールなどの追加

Illustratorを用いて，つぎの作業を行った。

QGISで座標グリッドを追加した画像を貼り付ける。

クリッピングマスクで，必要部分のみ表示させる。

クリッピングマスクで座標のグリッドが途切れた場合は，グリッドを追加する。

座標値・方位・スケール・キャプションなどを作成する。なお，QGISでも座標値を入力することは可能であるが，X座標がマイナスになっているため，Illustratorで座標を入力することとした。

4．結果

（1）精度

上記の手順により，B区第3遺構面の完掘状状況の平面図（図4-8），西壁断面図（図4-2），北壁断面図（図4-3）のオルソ画像を作成した。

本調査では，二次元の平面図の測量は，つぎの手順で行った。まず，トータルステーションを用いて，遺構上端・下端の座標を直接計測し，これらの点を方眼紙に記入したうえで，実際の遺構をみながら線をつないだ。

上の手順で作成した二次元の平面図と，SfM/MVSによって作成したオルソ画像を，Illustratorで重ねあわせて比較した結果，大きなズレや矛盾はなかった。さらに，調査区の写真をもとに，両図面

を比較した場合, SfM/MVS によるオルソ画像の方が, 遺構や土層の細部まで表現されていた。よって, SfM/MVS による方法では，従来の二次元による測量でえられる精度は十分確保されているといえよう。ただし，三次元レーザー測量などのほかの方法を通じ，さらに精度を検証していく必要があろう。

(2) 作業時間と人員

現場での作業時間と人員に関して，従来の測量方法では，平面図と断面図の作成にそれぞれ 2 人× 1 日程，計 4 人× 2 日程を要した。一方，SfM/MVS による測量では，平面と断面を含め 1 人× 2 時間程で，現場の作業時間と人員がかなり少なくすむといえる。また，調査面積が広い場合は，さらに時間・人員が削減できることが予想される。

その後の室内作業においては，二次元の実測図では，図面のスキャン・補正・トレースに 1 人× 2 日程を要した。一方，SfM/MVS による方法では，三次元モデルとオルソ画像の作成に 1 人× 1 日程，さらにオルソ画像をトレースし, 前者と同様の図面を作成する場合は 1 人× 1 日程を要する。よって，作業時間と人員はさほどかわらないといえる。ただし，三次元モデルとオルソ画像の作成に要する時間は，パソコンの性能によるところが大きい。

第 5 節　ま　と　め

本調査地点の第 3 遺構面では，7 層上面から，溝状遺構 3 基（SD301・SD302・SD304）を検出した。いずれも遺物は出土していないが，既往の調査成果を参照すると，弥生時代前期中葉に位置づけられる可能性が高い。また，溝状遺構は用水路や畑の畝の可能性が想定されるが，明確な機能は不明であった。ただし，本調査地点には水田が存在せず，水田域の北限を確認した点は重要である。

第 1・2 遺構面では，土坑・ピット 4 基（SP201・SP202・SK101・SK103），不明遺構 2 基（SX102・SX104）を検出した。しかし，これらの全形は不明で，埋土からの出土遺物もなく，その性格や所属時期の特定は難しい。既往調査の成果をふまえると，5 層上面で検出された SP201・SP202 は弥生時代前期中葉～中世，4 層上面で検出された SK103・SX102・SX104 は弥生時代前期末・中期初頭～中世，2 層上面で検出された SK101 は近世以降に位置づけられる可能性が高いと推定される。

また，SfM/MVS による方法で，三次元計測およびオルソ画像の作成を行った。その結果，従来の二次元での測量による実測図に比べ，同様あるいはそれ以上の精度を確保できる可能性が高いといえた。また, 作業時間と人員は, 調査現場では前者の方がより少なくすみ, 室内作業では同程度であった。

（三阪一徳）

註

1. 中村豊氏よりご教示いただいた。

文献

金田明大，2016a．SfM/MVS による遺構の計測．文化財の壺 4．4-7.
金田明大，2016b．PhotoScan を用いた三次元モデル生成とその後：ジオレファレンスを中心に．文化財の壺 4．32-

34.
中村豊，2009．西病棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 1．11-28.
端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治，2015．庄・蔵本遺跡第 27 次調査（立体駐車場地点）の成果．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 1．43-97.

第5章　総　括

第1節　庄・蔵本遺跡一帯における弥生時代前期墓制の検討

は　じ　め　に

庄・蔵本遺跡一帯では，これまでの調査によって，弥生時代前期の墓域が複数確認されている。本書で報告したボイラータンク地点（1998年度立会），第22次調査地点（西病棟新営その他電気設備地点）はその一部である。そのほか，徳島大学蔵本キャンパスの南東部に位置する第6次調査地点（青藍会館地点）（徳大埋文，1998），同キャンパス南側に位置する南蔵本遺跡住宅開発工事地点（勝浦，1999），東側に位置する南蔵本遺跡県立中央病院地点（徳島県教委・徳島県埋文，2014）をあげることができる（図5-1）。

第6次調査地点では，石棺墓1基，石蓋土壙墓1基，配石墓13基，土壙墓6基，甕棺墓1基が確認されている（図5-2）。これらの所属時期は，弥生時代前期前葉～中葉に収まり，墓の多くは，主軸方位をほぼ東西にそろえて，列状の墓域を形成している。石蓋土壙墓，配石墓や土壙墓の一部には，刳り抜き式木棺が使用された可能性がある。墓からは，副葬品とみられる土器・管玉・石鏃などの遺物が出土している。これらの墓の系譜については，これまで各氏によって，響灘沿岸地域，石棺墓については朝鮮半島中西部（北條，1998a），北部九州・響灘沿岸地域（中村，1998），北部九州（橋本，2001）といった地域の墓制に求める見解が提出されている。

庄・蔵本遺跡に隣接する南蔵本遺跡の住宅開発工事地点では，墓の可能性をもつ土坑や甕棺墓が確認されている（図5-3）。これらは弥生時代前期初葉～中期初頭に属する。同遺跡の県立中央病院地点で検出された，弥生時代前期前葉～末葉の土坑のなかにも，墓の可能性のあるものが含まれているようである（図5-4）。

本書で報告した通り，1998年度立会調査地点，第22次調査地点でも，こうしたものに類する弥生時代前期初葉～中期初頭の墓が数基確認されている（図5-5）。このうち，第22次調査地点については，概報が刊行され，そこから出土した横型流水文土器に，庄・蔵本遺跡と近接する三谷遺跡，さらには列島東部との関係をみる見解（中村，2010）も提出されている。

こうした墓域あるいは墓制が，当時の社会・文化を理解するうえでの有益な資料となりうることは言うまでもない。筆者はいちど，これらを取り上げ，その系譜と背景にある社会像を論じたことがある（端野，2017b）。しかし，紙幅の都合上，事実関係の詳細を提示し得ず，自論の概要を述べるにとどまった。そこで，ここで再論することとする。

1．墓制の実態

ここで分析の対象とするのは，先述の5地点で得られた資料に加え[註1)]，第27次調査地点（立体駐

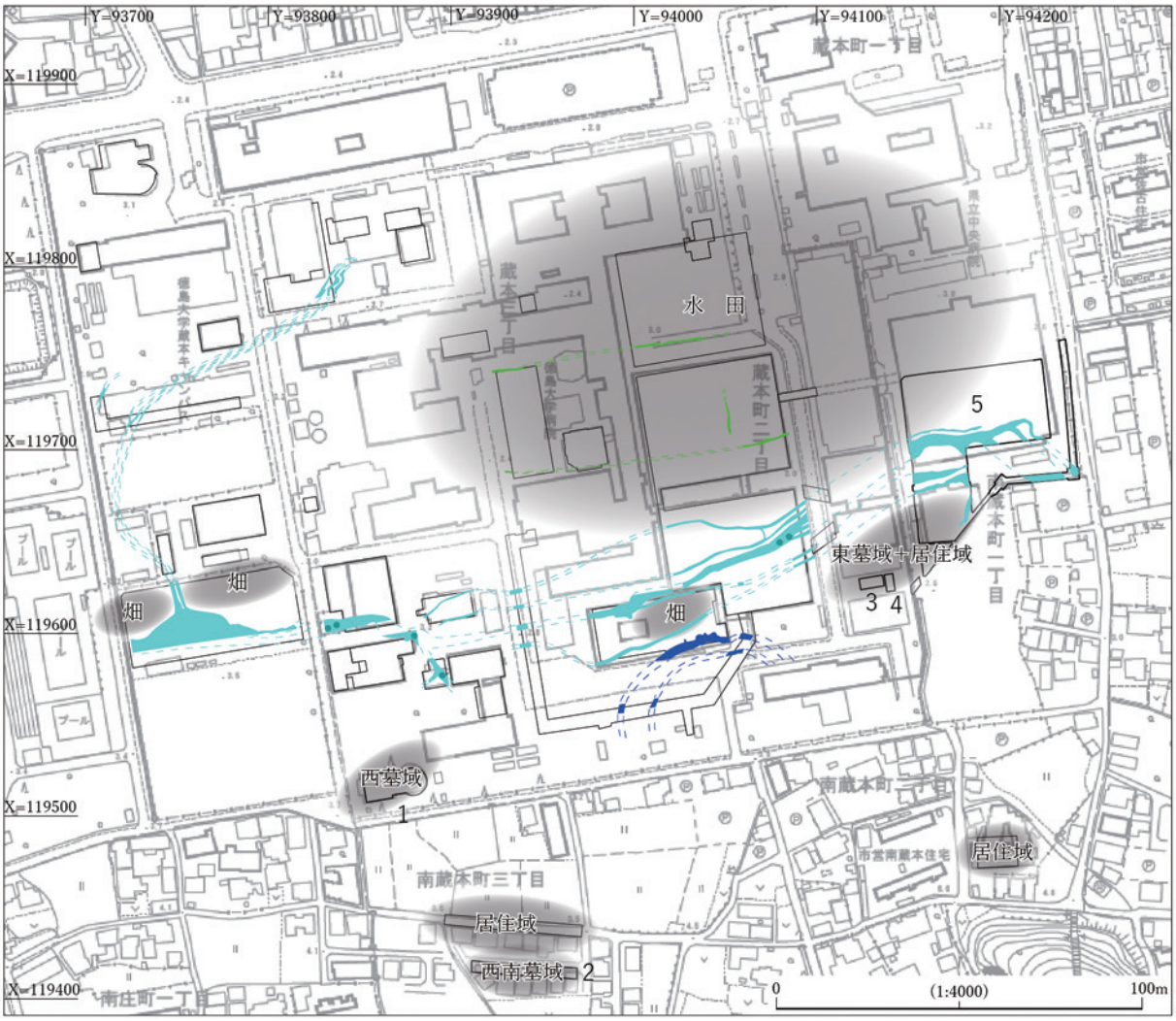


図 5-1　弥生時代前期前葉～中葉における庄・蔵本集落一帯の様相

この地図は，徳島市長の承認を得て，1/2,500 地形図を複製したものである。（承認番号　平 29 徳島市指令都政第 828 号）

車場地点）（端野ほか，2015）で検出された，甕棺墓の可能性がある S1843 である。第 6 次調査地点の資料は，基本的に報告にもとづくが，一部，実測図の原図より得た情報もある。なお，被葬者の年齢区分は，乳児（1 歳未満），幼児（1 ～ 5 歳），小児（6 ～ 11 歳），若年（12 ～ 19 歳），成年（20 ～ 39 歳），熟年（40 ～ 59 歳），老年（60 歳以上）と表記する。また，乳児～若年までを未成人，成年以上を成人と呼ぶ。

分析は，石棺墓・配石墓・土壙墓と甕棺墓とに分けたうえで行う。石棺墓・配石墓・土壙墓については，まず墓を構成する各属性の変異を提示する。つづいて，各属性と時期との関係を検討する。さらに，これをふまえて，墓を構成する属性が何を表すのかを検討する。甕棺墓については，数が限られているので，各属性の特徴を概観するにとどめる。

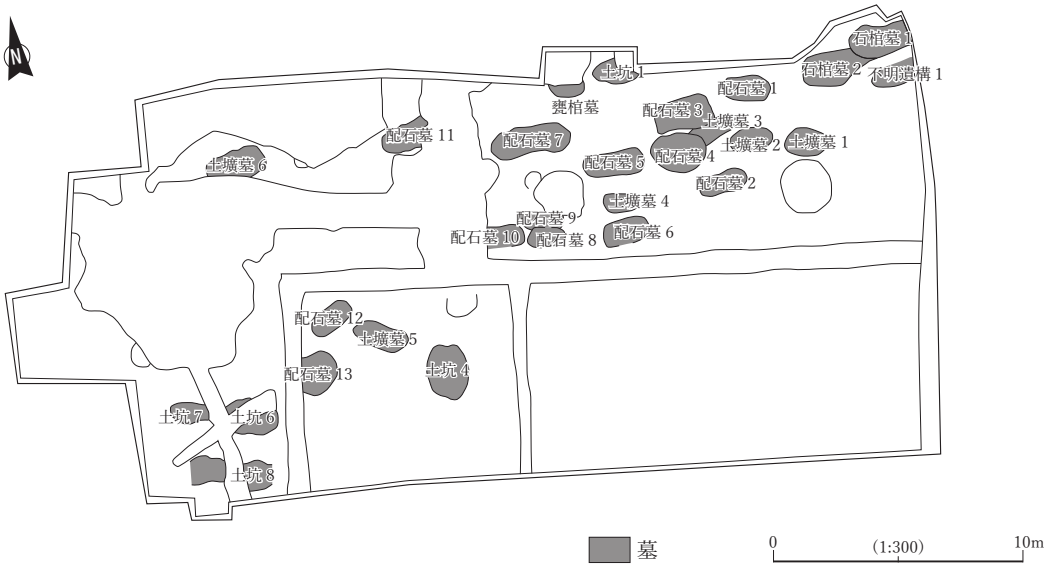


図 5-2　庄・蔵本遺跡第 6 次調査地点
徳大埋文（1998）よりトレース・改変。

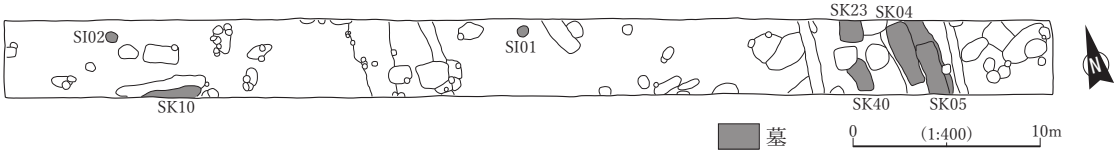


図 5-3　南蔵本遺跡住宅開発工事地点
勝浦（1999）よりトレース・改変。

（1）石棺墓・配石墓・土壙墓

A　属性変異

以下，墓を構成する属性の変異を示す。対象とする墓を構成する属性は，大きく計測的属性と非計測的属性とに分けられる。計測的属性は墓壙の規模，主軸方位，非計測的属性は墓域，墓壙の形態，石を用いた施設，遺物の種類・出土位置，混入物である。計測的属性のうち，主軸方位は出現頻度により類型化し，非計測的属性に変換する。

〔計測的属性〕

墓壙上面での長さ・幅・深さ，墓壙底の長さ・幅，墓壙の主軸方位の三つがある。

〔非計測的属性〕

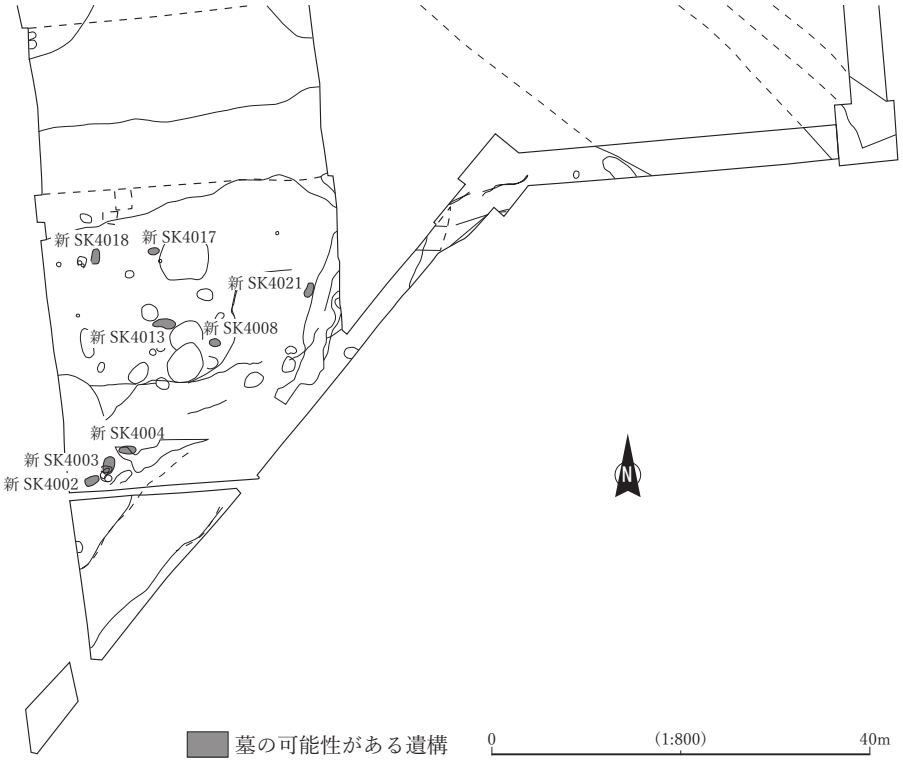
墓域　庄・蔵本遺跡第 6 次調査地点に位置する西墓域，庄・蔵本遺跡第 22 次調査地点・排水管地点・ボイラータンク地点，南蔵本遺跡県立中央病院地点をあわせた東墓域，南蔵本遺跡住宅開発工事地点に位置する西南墓域の三つがある（図 5-1）。

墓壙平面形　隅丸長方形・不整隅丸長方形を含む長方形と，長楕円形・不整長楕円形を含む楕円形の二つがある。

墓壙断面形（短軸）　逆台形を含む箱形と，逆三角形を含む U 字形の二つがある。

墓壙主軸方位　図 5-6 の右図は，360° を 16 分割し，各区分での主軸方位の出現頻度を表したグ

第４遺構面（Ⅰ－１様式～Ⅰ－２様式）



第３遺構面（Ⅰ－３様式）

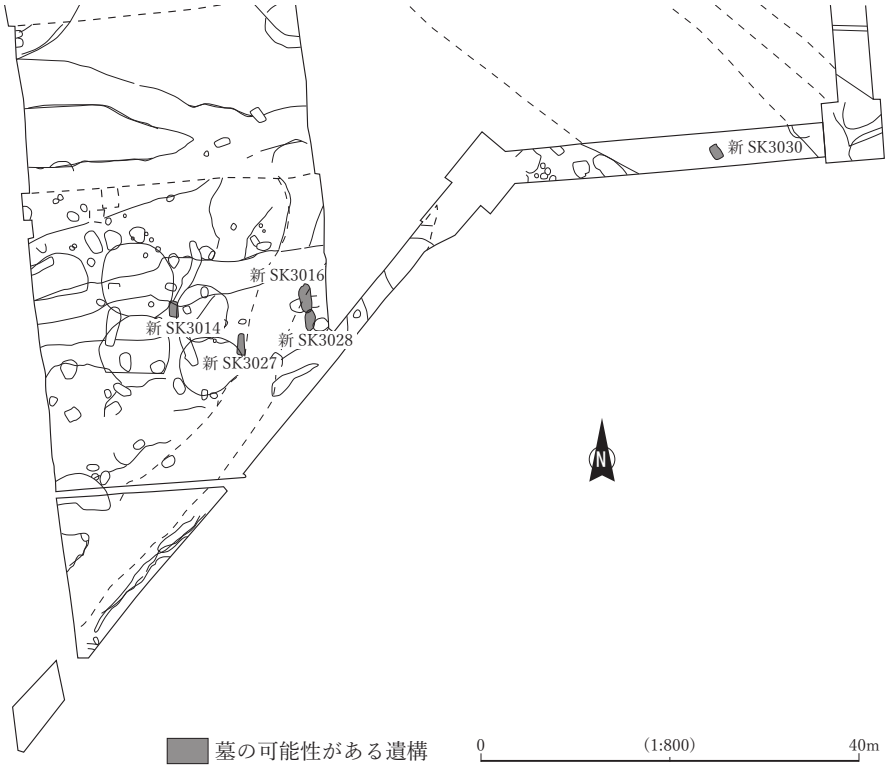


図 5-4　南蔵本遺跡県立中央病院地点

徳島県教委・徳島県埋文（2014）よりトレース・改変。

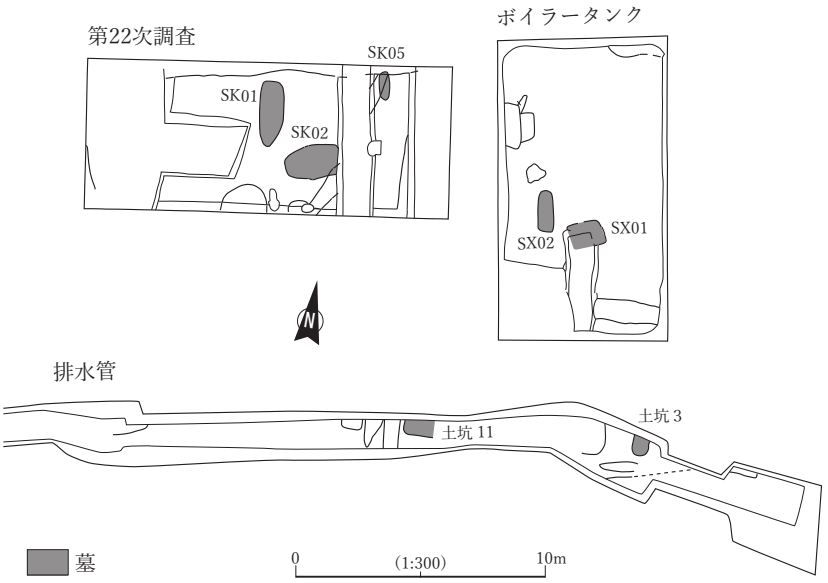
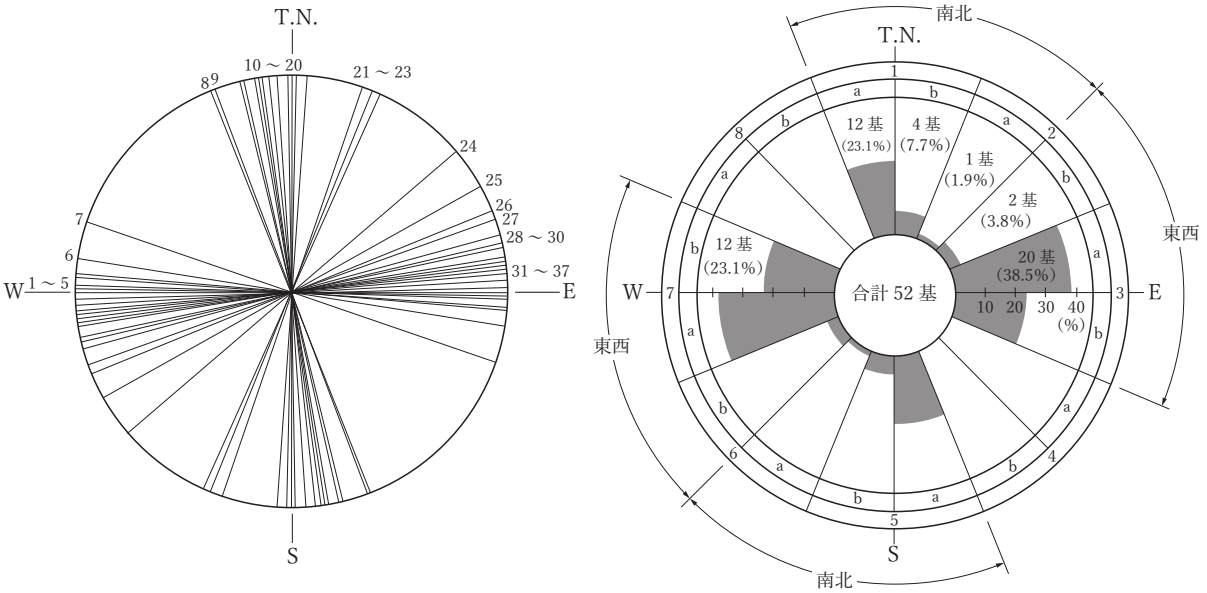


図 5-5　庄・蔵本遺跡 1998 年度立会地点と第 22 次調査地点

徳島県教委・徳島県埋文（2014）よりトレース・改変。



1．６次土壙墓２・６次土壙墓４
2．６次石棺墓２
3．６次配石墓９・６次配石墓 10・中央 4013
4．６次配石墓１・６次配石墓４
5．６次土坑７・６次土坑８
6．６次土坑６
7．６次土壙墓５
8．住宅 SK40
9．中央 SK3030
10．住宅 SK04
11．22 次 SK05
12．６次土坑４・住宅 SK05
13．中央 SK3016
14．22 次 SK01 下層
15．ボイラー SX02
16．中央 SK3014
17．排水管土坑３・中央 SK3028
18．中央 SK3027
19．中央 4018
20．住宅 SK23
21．中央 4003
22．中央 402123．６次配石墓 13
24．６次配石墓 12
25．６次土壙墓３
26．中央 4002
27．６次配石墓２・６次土壙墓６・ボイラー SX01・22 次 SK02 下層
28．６次配石墓３・６次配石墓 11
29．６次配石墓６
30．６次不明遺構
31．６次石棺墓１・６次配石墓７
32．住宅 SK10
33．中央 4008
34．６次配石墓５・６次土坑１
35．排水管土坑 11
36．６次配石墓８・中央 4004
37．６次土壙墓１・中央 4017

６次：庄・蔵本遺跡６次調査地点　ボイラー：庄・蔵本遺跡 1998 年度立会ボイラータンク地点　22 次：庄・蔵本遺跡 22 次調査地点
排水管：庄・蔵本遺跡 1998 年度立会排水管地点　住宅：南蔵本遺跡住宅開発工事地点　中央：南蔵本遺跡県立中央病院地点

図 5-6　墓壙の主軸方位

ラフである。これによれば，区分 1a ～ 2a（5a ～ 6a）と区分 2b ～ 3b（6b ～ 7b）との間に，不連続を見出せる。そこで, 区分 1a ～ 2a（5a ～ 6a）を「南北」, 区分 2b ～ 3b（6b ～ 7b）を「東西」と呼ぶこととする。

石を用いた施設　墓壙内に設置された石棺，配石などの施設である。配石については，すでに北條（1998a）で分類が試みられているが，一部，実際の運用にあたって区別が難しい場合があるため，改めて分類すると以下の通りである（図 5-7)。

石棺：複数の石材を組み合わせて棺をなすもの（６次石棺墓 1，ボイラー SX01)。石を３段ほど積み上げて側壁を造った６次石棺墓１を「石槨」とみなす見解（橋本，2001）もある。しかし，ボイラー SX01 のように，石棺の特徴である長壁・短壁の床面に掘り込みを有する例も確認されていることから，ここではこれらを石棺とみなす。

配石１類：墓壙上面の中心部および外形に沿って石を配置したもの（６次石棺墓２[註 2)])。

配石２類：墓壙底の小口・側辺に石を配置したもの。以下の通り，細分しうる。

2a 類：両小口・両側辺に石を配するもの（６次配石墓 7)。

2b 類：両小口に石を配するもの（６次配石墓 5)。

2c 類：両側辺に石を配するもの（６次配石墓 12)。

2d 類：片側の側辺に石を配するもの（６次配石墓３・11)。

2e 類：片側の小口に石を配するもの（中央新 SK4003）

なお，これらには墓壙中心部に浮いた石を有するものも含む。

配石３類：墓壙上面主軸上あるいは外形に沿って，石を配したもの。以下の通り，細分しうる。

3a 類：主軸上に石を配するもの（６次配石墓１・２・９・10，土壙墓１ほか)。

3b 類：主軸上と外形に沿って石を配するもの（６次配石墓４・６・８ほか）

3c 類：外形に沿って石を配するもの（22 次 SK02 下層)。

なし：石を用いた施設が全く確認されなかったもの。

遺物の種類　壺・甕・高坏・深鉢・鉢・蓋などの土器類，石鏃・石庖丁・台石・砥石などの石器類，管玉からなる玉類の三つがある。

遺物の出土位置　「石の上面」「墓壙底より浮いた位置」「墓壙底近く」「墓壙底より浮いた位置と墓壙底近く」の四つがある。

混入物　炭化物と焼土の二つがある。

これらの属性を各遺構ごとに整理すると，表 5-1 ～ 3 の通りである。

B　各属性と時期との関係（図 5-8）

ここでは，Ⅰ－１・２様式＝Ⅰ期，Ⅰ－３・４様式＝Ⅱ期として，属性ごとの時期的な変化を検討する。

墓域　西はⅠ期だけ，東と西南はⅠ・Ⅱ期の両方があるが，東はⅠ期がやや多く，西南はⅡ期が多いという違いがある。

墓壙平面形　Ⅰ期では楕円が多いが，Ⅱ期になると，長方形がやや多くなる。

墓壙断面形　Ⅰ・Ⅱ期ともに，箱形が多く，変化は看取されない。

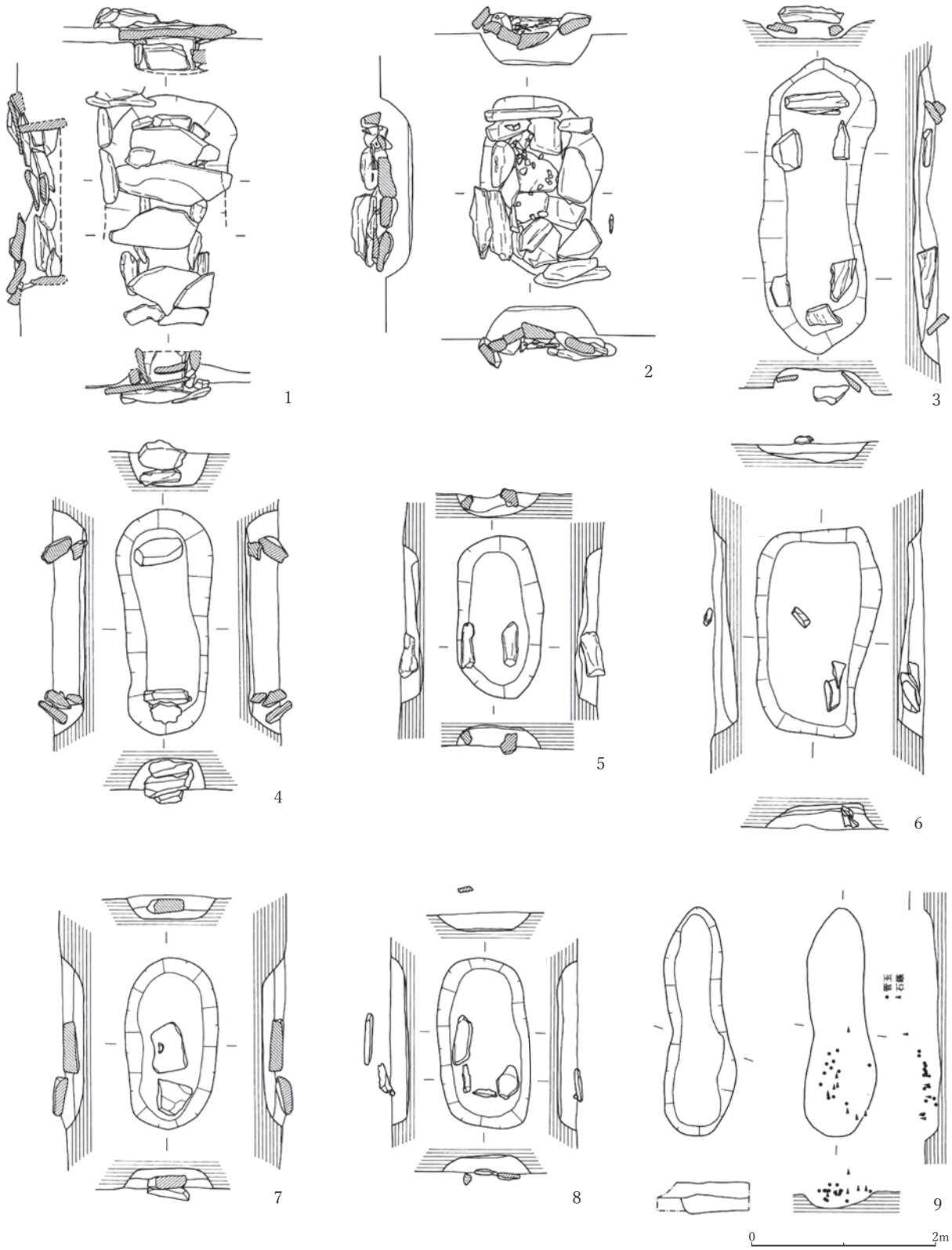


図 5-7　庄・蔵本遺跡第 6 次調査地点における石棺墓・配石墓・土壙墓

1．石棺墓 1　2．石棺墓 2　3．配石墓 7　4．配石墓 5　5．配石墓 12　6．配石墓 3　7．配石墓 1　8．配石墓 6　9．土壙墓 3　徳大埋文（1998）より引用・改変。

表 5-1　石棺墓・配石墓・土壙墓の計測的属性一覧

No.	遺跡	地点	遺構	墓壙上面			墓壙底（石組み内法）		主軸方位
				長さ	幅	深さ	長さ	幅	
1	庄・蔵本	第６次調査	石棺墓1	252	130	40	(154)	(44)	N81° E
2	庄・蔵本	第６次調査	石棺墓2	194	126	34	141	80	N89° W
3	庄・蔵本	第６次調査	配石墓1	185	100	24	160	66	N86° W
4	庄・蔵本	第６次調査	配石墓2	186	80	20	170	62	N70° E
5	庄・蔵本	第６次調査	配石墓3	220	120	30	196	96	N75° E
6	庄・蔵本	第６次調査	配石墓4	216	178	18	192	132	N86° W
7	庄・蔵本	第６次調査	配石墓5	240	88	34	200(150)	56	N84° E
8	庄・蔵本	第６次調査	配石墓6	182	98	20	160(130)	78	N77° E
9	庄・蔵本	第６次調査	配石墓7	320	100	24	284(240)	68(46)	N81° E
10	庄・蔵本	第６次調査	配石墓8	148	82	14	120	52	N87° E
11	庄・蔵本	第６次調査	配石墓9	160+	80+	7	142	46+	N88° W
12	庄・蔵本	第６次調査	配石墓10	154+	78	10	142+	52	N88° W
13	庄・蔵本	第６次調査	配石墓11	160+	100	40	146+	70	N75° E
14	庄・蔵本	第６次調査	配石墓12	176	92	24	144	62(40)	N50° E
15	庄・蔵本	第６次調査	配石墓13	150+	150	40	106+	80	N24° E
16	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓1	170	110	20	138	78	N89° E
17	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓2	170	90	10	139	70	N90° W
18	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓3	248	60	18	229	40	N61° E
19	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓4	128	64	12	112	48	N90° W
20	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓5	204	92	14	179	62	N71° W
21	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓6	233	120+	22	182	82	N70° E
22	庄・蔵本	第６次調査	土坑1	192	104	30	152	64	N84° E
23	庄・蔵本	第６次調査	土坑4	208	164	47	88	64	N10° W
24	庄・蔵本	第６次調査	土坑6	216	140	36	172	96	N81° W
25	庄・蔵本	第６次調査	土坑7	152	80	35	132	28	N85° W
26	庄・蔵本	第６次調査	土坑8	352	108	46	132	28	N85° W
27	庄・蔵本	第６次調査	不明遺構	180＋	70	?	?	?	N78° E
28	庄・蔵本	第22次調査	SK01下層	228	88	26	170	60	N8° W
29	庄・蔵本	第22次調査	SK02下層	228	138	42	108	40	N70° E
30	庄・蔵本	第22次調査	SK05	112	48	18	68	24	N13° W
31	庄・蔵本	排水管	土坑3	72+	42	10	52+	22	N1° W
32	庄・蔵本	排水管	土坑11	96+	52+	16	80+	46+	N85° E
33	庄・蔵本	ボイラータンク	SX01	128	98	50	109(95)	75(37)	N70° E
34	庄・蔵本	ボイラータンク	SX02	161	72	59	92	47	N6° W
35	南蔵本	県立中央病院	新SK4002	150	90+	40	107	52	N68° E
36	南蔵本	県立中央病院	新SK4003	205	102	27	163	65	N19° E
37	南蔵本	県立中央病院	新SK4004	178	65+	11	149	53+	N87° E
38	南蔵本	県立中央病院	新SK4008	121	77	11	88	49	N83° E
39	南蔵本	県立中央病院	新SK4013	243	95	24	188	59	N88° W
40	南蔵本	県立中央病院	新SK4017	118	68	23	88	40	N89° E
41	南蔵本	県立中央病院	新SK4018	155	91	9	110	47	N1° E
42	南蔵本	県立中央病院	新SK4021	177	82	17	136	36	N22° E
43	南蔵本	県立中央病院	新SK3014	160	91	10	155	89	N4° W
44	南蔵本	県立中央病院	新SK3016	300	132	32	204	72	N9° W
45	南蔵本	県立中央病院	新SK3027	237	86	22	200	58	N0°
46	南蔵本	県立中央病院	新SK3028	217	100	13	173	54	N1° W
47	南蔵本	県立中央病院	新SK3030	156	94	40	149	85	N21° W
48	南蔵本	住宅開発工事	SK04	340	120	60	316	104	N14° W
49	南蔵本	住宅開発工事	SK05	292+	112	60	264+	80	N10° W
50	南蔵本	住宅開発工事	SK10	300+	60+	80	40+	20+	N82° E
51	南蔵本	住宅開発工事	SK23	116+	128	50	80+	96	N4° E
52	南蔵本	住宅開発工事	SK40	188+	104	40	140+	72+	N22° W

長さ・幅・深さの単位はcm。

表 5-2　石棺墓・配石墓・土壙墓の非計測的属性一覧（1）

No.	遺跡	地点	遺構	時期	墓域			墓壙平面形		墓壙断面形		主軸方位	
					西	東	西南	長方	楕円	箱形	U字	東西	南北
1	庄・蔵本	第６次調査	石棺墓1	Ⅰ－１・２	○			△		○		○	
2	庄・蔵本	第６次調査	石棺墓2	Ⅰ－１・２	○			○		○		○	
3	庄・蔵本	第６次調査	配石墓1	Ⅰ－１・２	○				○	○		○	
4	庄・蔵本	第６次調査	配石墓2	Ⅰ－１	○				○		○	○	
5	庄・蔵本	第６次調査	配石墓3	Ⅰ－１・２	○			○		○		○	
6	庄・蔵本	第６次調査	配石墓4	Ⅰ－１・２	○				○	○		○	
7	庄・蔵本	第６次調査	配石墓5	Ⅰ－１・２	○			○		○		○	
8	庄・蔵本	第６次調査	配石墓6	Ⅰ－１・２	○			○		○		○	
9	庄・蔵本	第６次調査	配石墓7	Ⅰ－１・２	○				○	○		○	
10	庄・蔵本	第６次調査	配石墓8	Ⅰ－１・２	○				○			○	
11	庄・蔵本	第６次調査	配石墓9	Ⅰ－１・２	○				△			○	
12	庄・蔵本	第６次調査	配石墓10	Ⅰ－２	○				△			○	
13	庄・蔵本	第６次調査	配石墓11	Ⅰ－１・２	○				△		○	○	
14	庄・蔵本	第６次調査	配石墓12	Ⅰ－１・２	○			○			○	○	
15	庄・蔵本	第６次調査	配石墓13	Ⅰ－１・２	○				○	○			○
16	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓1	Ⅰ－１・２	○				○		○	○	
17	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓2	Ⅰ－１・２	○				○		○	○	
18	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓3	Ⅰ－１・２	○				○		○	○	
19	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓4	Ⅰ－１・２	○			○		○		○	
20	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓5	Ⅰ－１・２	○				○		○	○	
21	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓6	Ⅰ－１・２	○			○		○		○	
22	庄・蔵本	第６次調査	土坑1	Ⅰ－１・２	○				△			○	
23	庄・蔵本	第６次調査	土坑4	Ⅰ－１・２	○				○		○		○
24	庄・蔵本	第６次調査	土坑6	Ⅰ－１・２	○				△		△	○	
25	庄・蔵本	第６次調査	土坑7	Ⅰ－１・２	○				○		○	○	
26	庄・蔵本	第６次調査	土坑8	Ⅰ－１・２	○				○		○	○	
27	庄・蔵本	第６次調査	不明遺構	Ⅰ－１・２	○				○			○	
28	庄・蔵本	第22次調査	SK01下層	Ⅰ－３・４		○			○	○			○
29	庄・蔵本	第22次調査	SK02下層	Ⅰ－１		○		○			○	○	
30	庄・蔵本	第22次調査	SK05	Ⅰ－１～４		○			○		○		○
31	庄・蔵本	排水管	土坑3	Ⅰ－１		○			△				○
32	庄・蔵本	排水管	土坑11	Ⅰ－１～４		○		△		△		○	
33	庄・蔵本	ボイラータンク	SX01	Ⅰ－１・２		○		△		○		○	
34	庄・蔵本	ボイラータンク	SX02	Ⅰ－３		○		○			○		○
35	南蔵本	県立中央病院	新SK4002	Ⅰ－２		○		○				○	
36	南蔵本	県立中央病院	新SK4003	Ⅰ－１		○		○					○
37	南蔵本	県立中央病院	新SK4004	Ⅰ－１		○			○	△		○	
38	南蔵本	県立中央病院	新SK4008	Ⅰ－２？		○			○			○	
39	南蔵本	県立中央病院	新SK4013	Ⅰ－１		○			○			○	
40	南蔵本	県立中央病院	新SK4017	Ⅰ－１		○			○			○	
41	南蔵本	県立中央病院	新SK4018	Ⅰ－２？		○		○					○
42	南蔵本	県立中央病院	新SK4021	Ⅰ－２		○			○				○
43	南蔵本	県立中央病院	新SK3014	Ⅰ－3		○		○					○
44	南蔵本	県立中央病院	新SK3016	Ⅰ－3		○			○				○
45	南蔵本	県立中央病院	新SK3027	Ⅰ－3		○		○					○
46	南蔵本	県立中央病院	新SK3028	Ⅰ－3		○			○				○
47	南蔵本	県立中央病院	新SK3030	Ⅰ－3		○		○					○
48	南蔵本	住宅開発工事	SK04	Ⅰ－２			○	○		○			○
49	南蔵本	住宅開発工事	SK05	Ⅰ－３			○	○		○			○
50	南蔵本	住宅開発工事	SK10	Ⅰ－４			○		○			○	
51	南蔵本	住宅開発工事	SK23	Ⅰ－３			○	△		○			○
52	南蔵本	住宅開発工事	SK40	Ⅰ－３			○	○					○

△は残存部位からの推定。

表 5-3　石棺墓・配石墓・土壙墓の非計測的属性一覧（2）

No.	遺跡	地点	遺構	石を用いた施設					遺物の種類			遺物の出土位置				混入物	
				石棺	配１	配２	配３	なし	土器	石器	玉類	石上	浮	底	浮底	炭化	焼土
1	庄・蔵本	第６次調査	石棺墓1	○													
2	庄・蔵本	第６次調査	石棺墓2		○				○			○					
3	庄・蔵本	第６次調査	配石墓1				○		○			○					
4	庄・蔵本	第６次調査	配石墓2				○		○			○					
5	庄・蔵本	第６次調査	配石墓3			○											
6	庄・蔵本	第６次調査	配石墓4				○				●			○			
7	庄・蔵本	第６次調査	配石墓5			○											
8	庄・蔵本	第６次調査	配石墓6				○										
9	庄・蔵本	第６次調査	配石墓7			○			○					○			
10	庄・蔵本	第６次調査	配石墓8				○										
11	庄・蔵本	第６次調査	配石墓9				○										
12	庄・蔵本	第６次調査	配石墓10				○		○			?	?	?	?		
13	庄・蔵本	第６次調査	配石墓11			○					○		○				
14	庄・蔵本	第６次調査	配石墓12			○											
15	庄・蔵本	第６次調査	配石墓13				○										
16	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓1				○										
17	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓2					○	○			?	?	?	?		
18	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓3					○		○	○				○		
19	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓4					○									
20	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓5					○	○			?	?	?	?		
21	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓6					○									
22	庄・蔵本	第６次調査	土坑1					○									
23	庄・蔵本	第６次調査	土坑4					○									
24	庄・蔵本	第６次調査	土坑6					○									
25	庄・蔵本	第６次調査	土坑7					○									
26	庄・蔵本	第６次調査	土坑8					○									
27	庄・蔵本	第６次調査	不明遺構						○			?	?	?	?		
28	庄・蔵本	第22次調査	SK01下層					○	○	○				○		○	
29	庄・蔵本	第22次調査	SK02下層				○		○				○			○	○
30	庄・蔵本	第22次調査	SK05					○	○			?	?	?	?		
31	庄・蔵本	排水管	土坑3				○		○					○		○	○
32	庄・蔵本	排水管	土坑11					○	○			?	?	?	?		
33	庄・蔵本	ボイラータンク	SX01	○													
34	庄・蔵本	ボイラータンク	SX02				○		○	○		○				○	
35	南蔵本	県立中央病院	新SK4002					○	○						○	○	
36	南蔵本	県立中央病院	新SK4003			○			○					○			
37	南蔵本	県立中央病院	新SK4004					○	○						○	○	
38	南蔵本	県立中央病院	新SK4008				○		○			?	?	?	?		
39	南蔵本	県立中央病院	新SK4013					○	○				○			○	
40	南蔵本	県立中央病院	新SK4017				○		○				○				
41	南蔵本	県立中央病院	新SK4018					○	○			?	?	?	?		
42	南蔵本	県立中央病院	新SK4021					○	○						○	○	
43	南蔵本	県立中央病院	新SK3014					○	○						○		
44	南蔵本	県立中央病院	新SK3016					○	○			?	?	?	?		
45	南蔵本	県立中央病院	新SK3027					○	○			?	?	?	?		
46	南蔵本	県立中央病院	新SK3028					○	○	○		?	?	?	?		
47	南蔵本	県立中央病院	新SK3030					○	○			?	?	?	?		
48	南蔵本	住宅開発工事	SK05					○	○			?	?	?	?		
49	南蔵本	住宅開発工事	SK10					○	○			?	?	?	?	○	
50	南蔵本	住宅開発工事	SK23					○	○	○		?	?	?	?		
51	南蔵本	住宅開発工事	SK40					○	○			?	?	?	?	○	

●は混入の可能性あり。

		墓域			平面形		断面形		石を用いた施設					遺物の種類			遺物の出土位置				混入物		主軸方位	
		西	東	西南	長方	楕円	箱形	U字	石棺	配1	配2	配3	なし	土器	石器	玉類	石上	浮	底	浮底	炭化	焼土	東西	南北
時期	Ⅰ	27	9	1	11	18	13	11	2	1	6	12	15	17	1	2(1)	3	4	4	4	6	2	31	6
	Ⅱ		7	4	6	4	3	1				1	10	11	4		1		1	1	4		1	10

図 5-8　各属性と時期との関係
（　）は混入の可能性あり。

石を用いた施設　Ⅰ期では石棺・配石１～３類・「なし」のすべてが存在し，石棺・配石１～３類をあわせた数が，「なし」の数を上回る。Ⅱ期になると，石を用いたのは配石３類の１例のみで，「なし」がほとんどとなる。すなわち，石の使用から不使用への変化が看取される。

遺物の種類　Ⅰ期では多数の土器に，ごく少数の石器・玉類という構成であったのが，Ⅱ期になると，そこから玉類が欠落する。

遺物の出土位置　Ⅰ期では「石の上面」「墓壙底より浮いた位置」「墓壙底近く」「墓壙底より浮いた位置と墓壙底近く」の四つがみられる。Ⅱ期は出土位置が把握し得た例は「石の上面」「墓壙底近く」「墓壙底より浮いた位置と墓壙底近く」の３例にとどまり，時期的な傾向は不明である。

混入物　Ⅰ期では炭化物・焼土の両者がみられ，炭化物が多い。Ⅱ期では，炭化物だけが確認される。

主軸方位　Ⅰ期では東西・南北の両方がみられるが，東西が多くを占める。Ⅱ期になっても，東西・南北の両方があるが，南北が多くを占めるようになる。すなわち，東西から南北への変化が看取される。

なお，計測的属性である墓壙底の長さ・幅についても，時期との関係を検討したが，有意な結果は得られなかった。

		遺物の種類		
		土器	石器	玉類
石を用いた施設	石棺			
	配１	1		
	配２	2		1
	配３	8	1	(1)
	なし	20	4	1

図 5-9　石を用いた施設と遺物の種類の相関状況
（　）は混入の可能性あり。

		遺物の種類		
		土器	石器	玉類
墓域	西	8	1	2(1)
	東	19	3	
	西南	5	1	

図 5-10　墓域と遺物の種類の相関状況
（　）は混入の可能性あり。

C　墓の属性は被葬者の何を表すのか

石を用いた施設と遺物の種類の相関状況（図 5-9）をみると，土器は石の使用頻度に関係なく，配石１～３類・「なし」で確認される。石器は配石３類・「なし」，玉類は配石２類（3類）・「なし」でみられるが，石の使用頻度の高い石棺・配石１類との結びつきは認められない。こうしたことから，石の使用頻度と土器・石器・玉類のいずれの間にも，明確な相関関係は認めがたく，石を用いた施設，遺物の種類の両者が，被葬者の階層差を表している可能性は低い。

墓域と遺物の種類の相関状況（図 5-10）をみると，西は土器・石器・玉類がみられる一方で，東と西南は三つのうち，玉類が欠落するというように，違いが認められる。これらのあいだの違いは，先に行った分析をふまえれば，時期差によるものも含まれているものと考えらえる。西と東・西南は相互に重複期間を有するが，先述のように，玉類が階層差を表示するとはいえないため，この両者の

あいだで階層差を認めることは難しい。

図5-11は，個々の遺構における墓壙底の規模を示した散布図である。これによれば，分布の粗密により，大小二つの群に分けることができる。小さい方をA群，大きい方をB群と呼ぶとすれば，これらは被葬者の何を反映したものであろうか。

大小の違いを生んだ背景として，容易に想像されるのが，被葬者の身体のサイズと，それに大きく関わる性差，年齢差である。しかし，本稿の対象資料のなかには，遺存した人骨から，被葬者の身体サイズ，性別，年齢を知り得た例は全くなく，これらと墓壙底規模との関係を検討することはできない。そこで，福岡県新町遺跡の調査（志摩町教委，1987）で得られた情報をもとに，この問題に一定の答えを示したい。新町遺跡は，支石墓などの多様な墓制からなる縄文時代晩期後葉～弥生時代前期前葉の墓地で，この時期に属する人骨資料が得られた稀有な遺跡として著名である。

図5-12は，新町遺跡における墓壙底の規模を示した散布図である。この図では，出土人骨により，判明した被葬者の年齢･性別（中橋･永井，1987）を，異なる記号で示している。これによれば，個々の墓は，まず分布の粗密にもとづいて，庄・蔵本遺跡，南蔵本遺跡の場合と同じく，大小二つの群に分けることができる。ここでは小さい方をα群，大きい方をβ群と呼ぶとすれば，α群には成年女性が，β群には熟年男性，成年男性が含まれることがわかる。後の検討で明らかにするように，5～6歳までの乳幼児が土器棺に埋葬されたとすれば，α群は，一部に身体の小さな成人女性を含みつつ，多くは未成人の埋葬からなり，いっぽうのβ群は，成人埋葬におおむね対応する可能性を指摘できよう。

さて，新町遺跡でのα群とβ群との境界は，庄・蔵本遺跡などでのA群とB群との境界とよく似ている。断定することはできないが，新町遺跡で得られた結果を，庄・蔵本遺跡などの例に適用するならば，A群は未成人墓，B群は成人墓におおむね対応しようか。このことをふまえつつ，以下，庄･蔵本遺跡などにおける，墓壙底規模と，石を用いた施設，遺物の種類の関係をみていこう。

図5-13は，墓壙底の規模を，石を用いた施設の類型ごとに異なる記号で示した散布図である。これによれば，A群には配石3類･「なし」が，B群にはこれらに加え，石棺・配石1・2類が含まれることがわかる。先に示したように，A・B群がそれぞれ未成人墓，成人墓に対応するとすれば，石の使用頻度や石の置き方には，被葬者の年齢差が反映されている可能性がある。

図5-14は，墓壙底の規模を，遺物の種類ごとに異なる記号で示した散布図である。これによれば，A群には土器＋石器･土器･「なし」が，B群にはこれらに加え，石器＋玉類が含まれることがわかる。玉類が出土した6次配石墓11は，墓壙が欠損していることから，この図に示されていないが，墓壙の残存長からみて，B群に属するものと考えられる。先に示したように，A･B群がそれぞれ未成人墓，成人墓におおむね対応するとすれば，玉類の副葬には，被葬者の年齢差が反映されている可能性がある。このように，石の使用頻度・置き方，遺物の種類からは，埋葬行為において，階層差よりむしろ年齢区分が強調されたことがうかがえる。

(2) 甕棺墓

甕棺墓は，庄・蔵本遺跡第6次調査地点・第27次調査地点，南蔵本遺跡住宅開発地点の3地点で

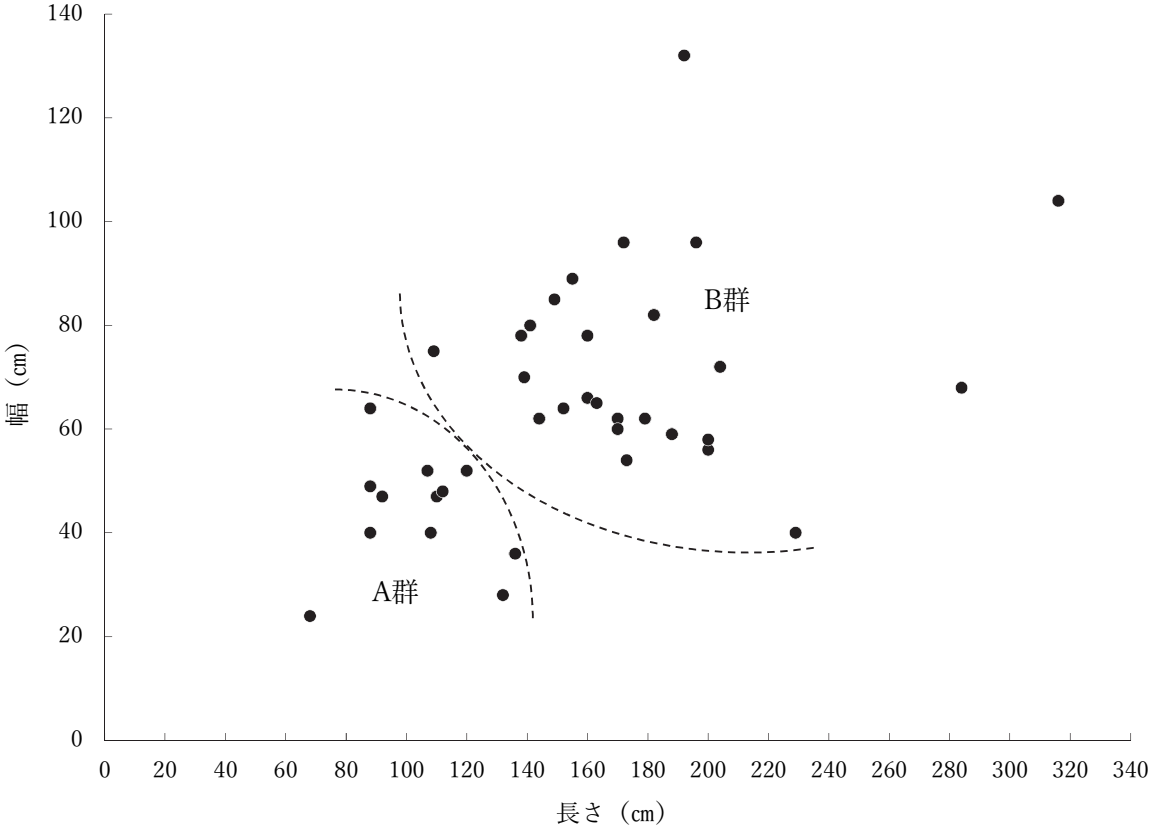


図 5-11　墓壙底の規模

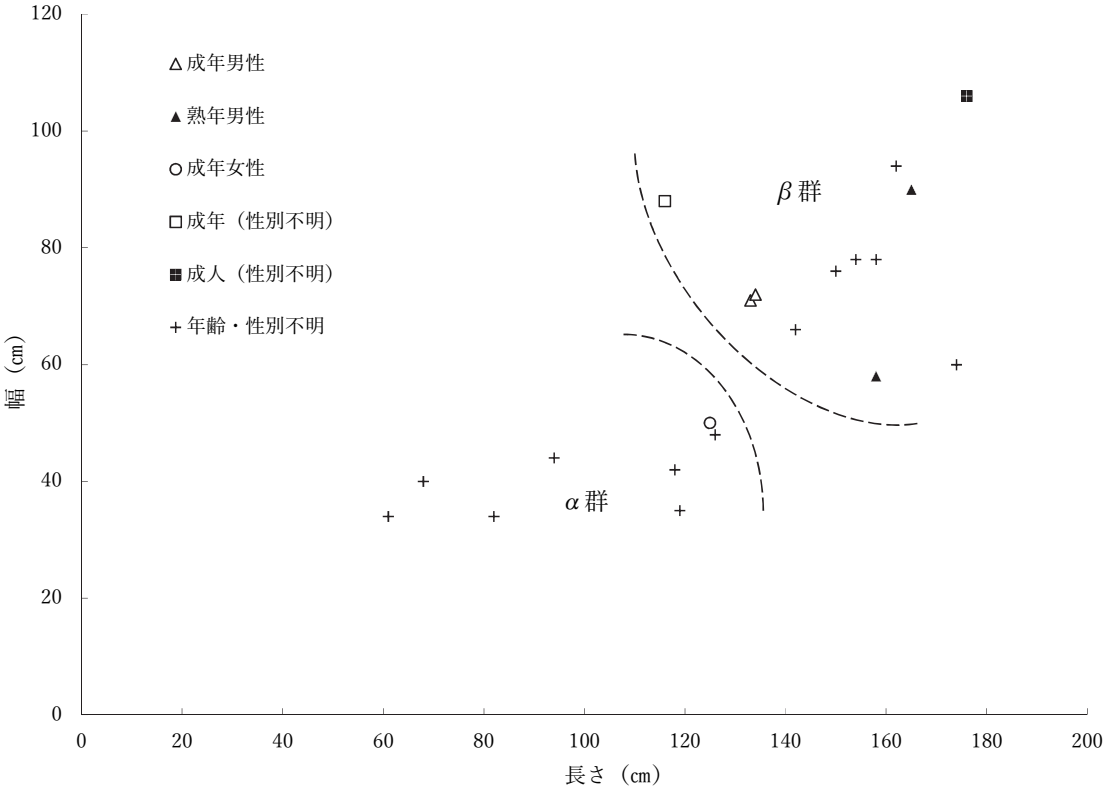


図 5-12　新町遺跡における墓壙底の規模と被葬者の年齢・性別

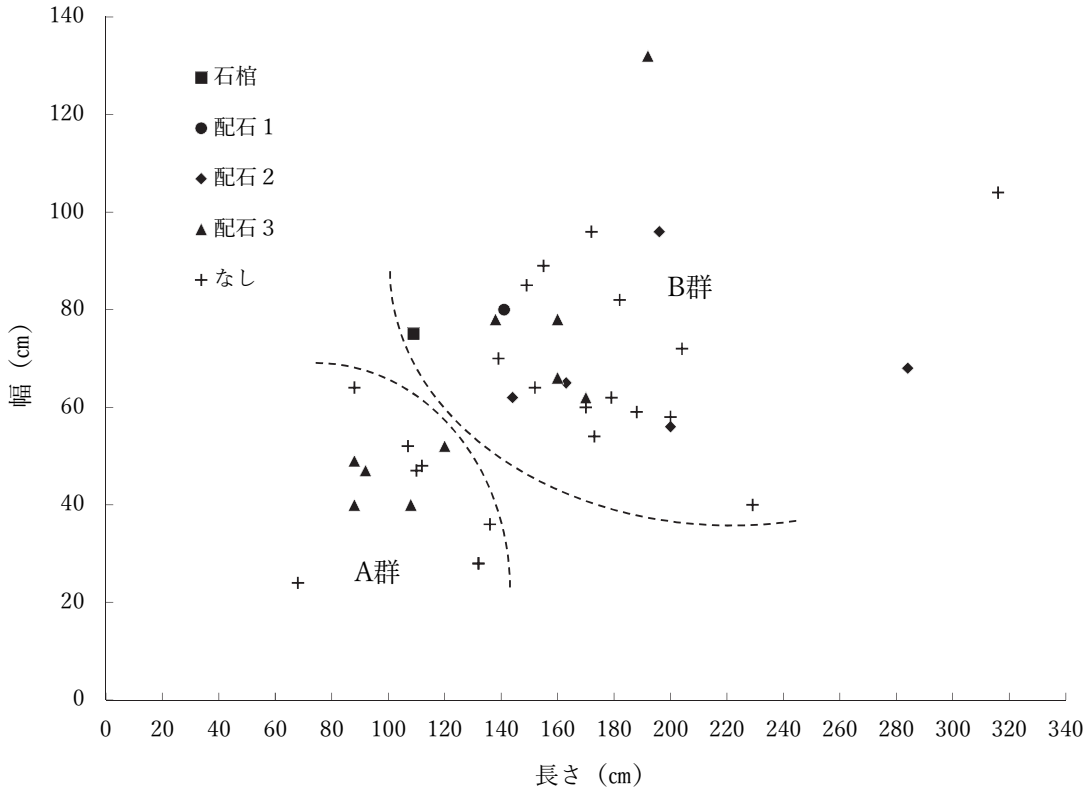


図 5-13　墓壙底の規模と石を用いた施設の相関状況

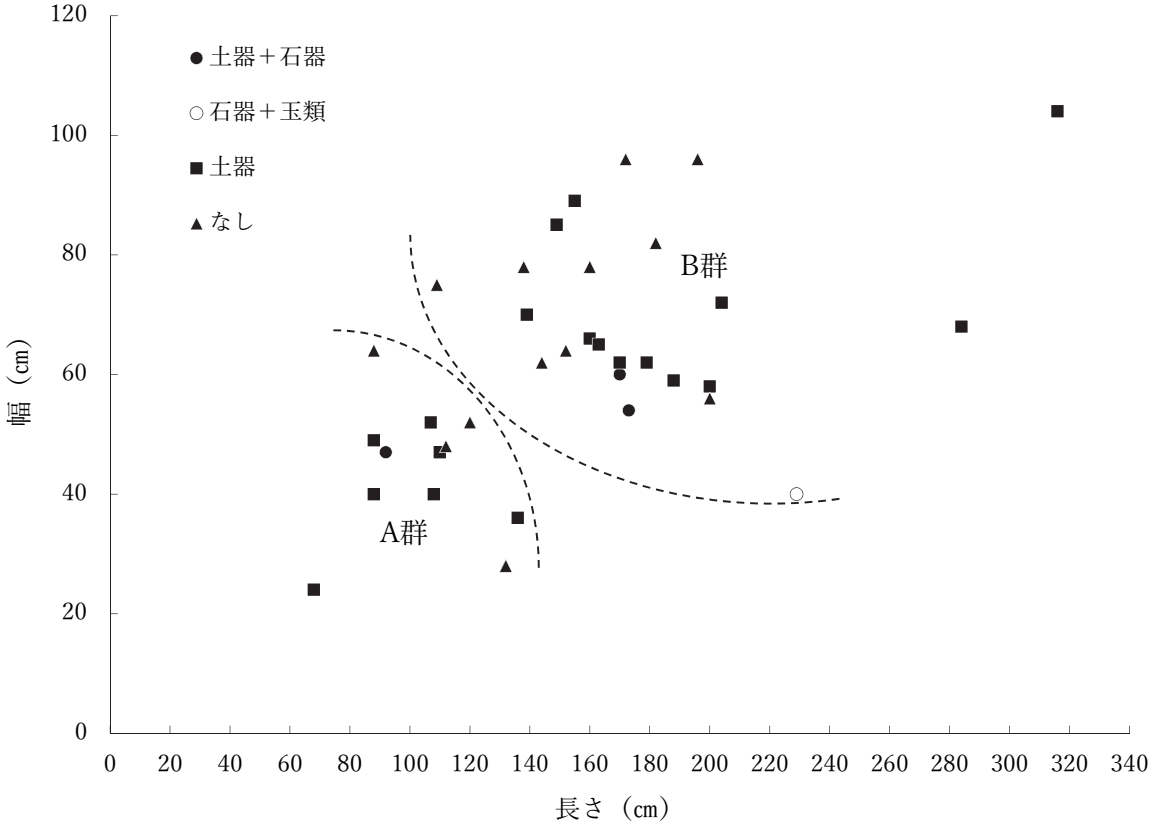


図 5-14　墓壙底の規模と遺物の種類の相関状況

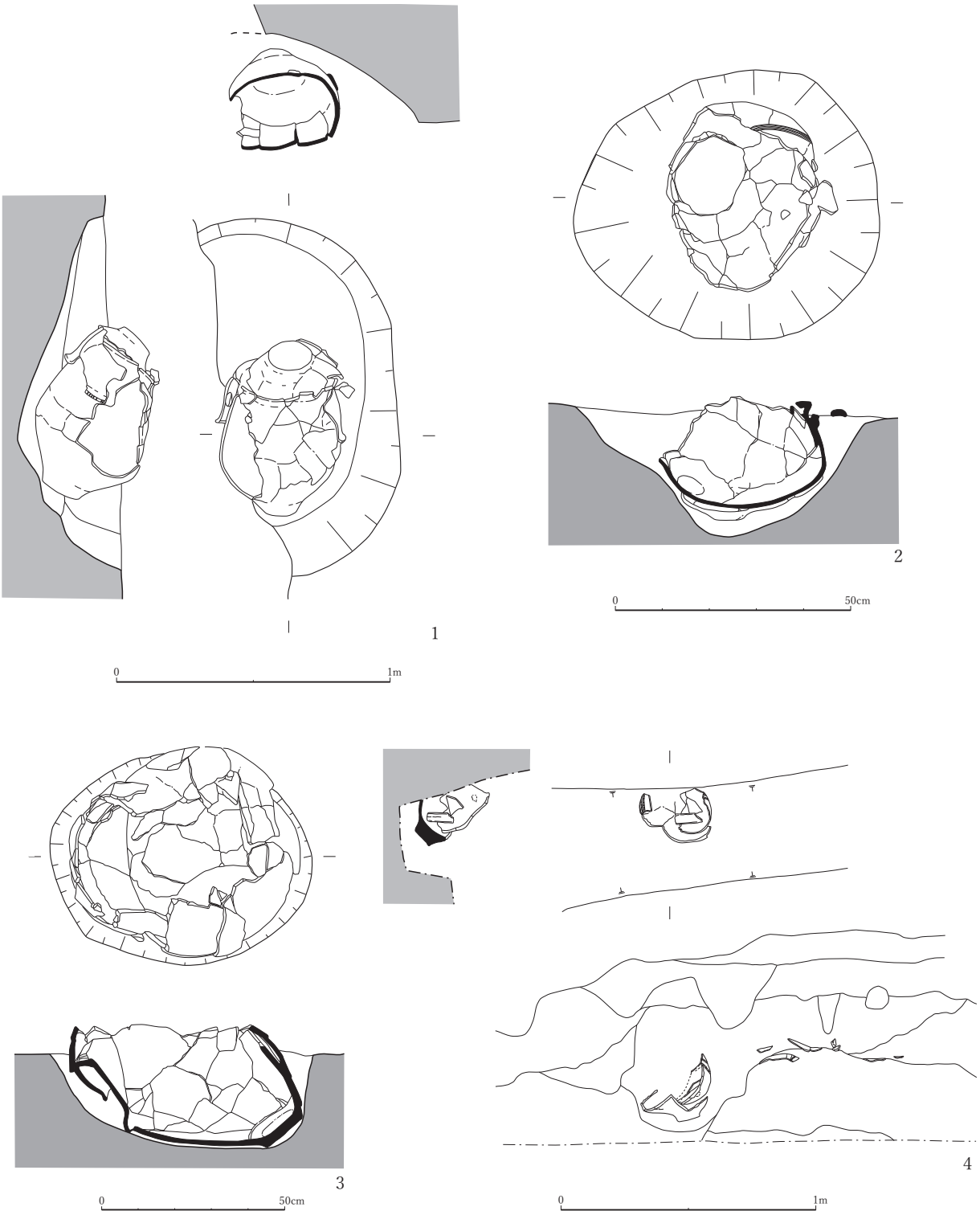


図 5-15　庄・蔵本遺跡一帯における弥生時代前期の甕棺墓

1．庄・蔵本 6 次甕棺墓　2．南蔵本住宅 SI01　3．南蔵本住宅 SI02　4．庄・蔵本 27 次 S1843

1 は徳大埋文（1998），2・3 は勝浦（1999）よりトレース・改変。

表 5-4　甕棺墓の計測的属性一覧

No.	遺跡	地点	遺構	墓壙上面			墓壙底		棺身			主軸方位	埋置角度
				長さ	幅	深さ	長さ	幅	口縁部内径	器高	胴部最大径		
1	庄・蔵本	第６次調査	甕棺墓	129	65+	35	106	54+	31.5	53	45.1	N83°E	29°
2	庄・蔵本	第27次調査	S1843	?	?	?	?	?	(13.4)	30.0+	31	東	42°
3	南蔵本	住宅開発工事	SI01	65	57	26	?	?	(10.2)	40.6+	39.8	N62°W	58°
4	南蔵本	住宅開発工事	SI02	72	57	26	?	?	23.6	62	53.4	N62°W	44°

長さ・幅・深さの単位は㎝。
(　)は残存部の計測値。

表 5-5　甕棺墓の非計測的属性一覧

No.	遺跡	地点	遺構	時期	墓壙平面形	墓壙断面	棺形態	棺器種	出土遺物	備考
1	庄・蔵本	第６次調査	甕棺墓	Ⅰ－１・２	(楕円形)	(U字形)	覆い口	鉢＋壺		松菊里系土器を使用
2	庄・蔵本	第27次調査	S1843	Ⅰ－３	?	?	?	鉢？＋壺＋壺	石剣（石戈）	焼成後穿孔した壺を使用
3	南蔵本	住宅開発工事	SI01	Ⅰ－２	楕円形	逆三角形	?	？＋壺		壺底部片を敷く
4	南蔵本	住宅開発工事	SI02	Ⅰ－１	楕円形	U字形	覆い口	鉢＋壺		

検出されている（図 5-15）。甕棺墓を構成する属性として，ここでは，墓壙の規模，棺身（下甕）に用いた土器の規模，主軸方位，棺身の埋置角度といった計測的属性，墓壙の形態，棺の合わせ方（棺形態），棺に用いた土器の器種，出土遺物といった非計測的属性を取り上げる。これらの属性を各遺構ごとに整理すると，表 5-4・5 の通りである。以下，属性ごとにその特徴を概観する。

墓壙の規模　墓壙上面の長さをみると，６次甕棺墓は，値を把握し得たほかの２例に比べ，大きな値をとることがわかる。これは，棺に用いた土器をどのような角度で埋置したのかということに大きく関わる。すなわち，墓壙上面の長さは埋置角度が小さいほど大きい。

棺身の規模　ここでは，口縁部内径，器高，胴部最大径をあげた。これらはいずれも被葬者の身体サイズに大きく関わる属性であるが，とくに口縁部内径は土器棺被葬者の年齢を考察するうえで，これまでも注目されてきた。福岡県金隈遺跡の甕棺墓出土人骨を報告した中橋孝博らは，甕棺・土器棺の口縁部内径 45 ㎝を，未成人の埋葬と成人のそれとの境界とみた（中橋ほか，1985）。先述した新町遺跡の 18 号墓は，棺内より幼児の歯牙が出土した土器棺墓であるが，棺身は口縁部内径 23.0 ㎝，器高 58 ㎝，胴部最大径 48.6 ㎝を測る（志摩町教委，1987）。また，藤田等（1988）によれば，西北九州の弥生時代の埋葬例では，５～６歳を境界として，乳幼児は土器棺，小児以上は土壙墓・石棺墓・甕棺墓というように，異なる埋葬法が用いられているという。これらをふまえると，棺身の規模からみて，やはりこれらの土器棺墓も乳幼児が埋葬された蓋然性が高いであろう。残存部の内径をあげた 27 次 S1843 と住宅 SI01 は，乳児を埋葬するにしても，その値が小さすぎる。これらが土器棺であるならば，口縁部を大きく打ち欠いたうえで，遺体を収容したものとみなければならない。

主軸方位　いずれもおおむね東西方向をとっている。

埋置角度　先述の通り，墓壙の規模との間に相関がある。

時期　Ⅰ－1からⅠ－3までの幅がある。

墓壙平面形　楕円形だけである。

墓壙断面形　逆三角形とU字形の二者がある。

棺形態　棺身を棺蓋が覆う「覆い口」式だけである。

棺器種　確実なものでは，鉢＋壺の組み合わせがある。

出土遺物　該当するのは，石剣（石戈）が出土した27次S1843の1例だけで，ほかは副葬品とみられる遺物の出土はない。

2．墓制の系譜

さて，これらの墓制の系譜は，どう考えることができようか。結論から言って，これとほぼ同時期に出現する稲作とともに，この系譜は遠く朝鮮半島南部の無文土器文化に求められる。ここで注意しなければならないのは,「求められる」とは言っても, 直接, 徳島地域に伝わったというわけではなく, 北部九州を介しているということである[註3)]。

今日の考古学研究の成果からみて，半島南部の稲作とそれと不可分な関係にある文化は，列島のなかでもまずは北部九州に伝わったとみて間違いない。このときに導入された文化の一つが, 支石墓である。半島南部の支石墓のなかで，列島のものの祖型とみなせるのは，地上に巨大な上石とその周囲に墓域を表示する敷石，地下に多量の石からなる墓室をもつものである。慶尚南道虎灘洞遺跡では，積石からなる墓室の内部から，組み合わせ式石棺のほか，組み合わせ式木棺の痕跡が確認された例や，土層断面より刳り抜き木棺の存在が推定される例が報告されている（東亜細亜文化財，2012）（図5-16）。

こうしたものを祖型とするとはいえ，北部九州の支石墓は，導入当初（縄文時代晩期後葉）から大きく改変されている。佐賀県大友遺跡（九大考研，2001，2003）（図5-17-1），福岡県新町遺跡などの支石墓は，地上に上石こそもつものの，その周囲に敷石はない。地下の墓室は，半島のものに比べ，それほど石を多用しない，あるいは石を使用しないという具合である。また，地上の施設も支石墓の上石とはかけ離れた形態をとる例もある（図5-17-2）。

つづいて弥生時代前期前葉になると，北部九州のなかでも，福岡平野では，弥生独自の墓制，木棺墓がより顕在化する。すなわち，墓壙内に石をもたず，木棺だけを備えた例がより多くを占めるようになる。これは最古の弥生土器, 板付Ⅰ式の成立と時を同じくしている（端野, 2003）。北部九州では, 木棺墓のほかに，福岡県江辻遺跡（粕屋町教委，2002）（図5-17-3），田久松ヶ浦遺跡（宗像市教委，1999）(図5-17-4)，天神森遺跡3次調査（福岡市教委，1996）（図5-17-5）などで，墓壙内に石を配した木棺墓や石槨墓などの墓制が確認されている。乳幼児用の土器棺墓についても，広く普及していることがこれまでの調査で明らかにされている（図5-17-6）。

前項で検討したように，庄･蔵本遺跡一帯の墓制を構成する属性のうち，石を用いた施設は，石棺，配石1～3類の変異が認められた。石棺は，複数の石材を組み合わせ，棺をなすものであるが，石を数段積み重ねて壁体をつくる点に特徴がある。この特徴は，先述した北部九州の石槨墓の壁体にもみられ，これに系譜を求めることは可能である。

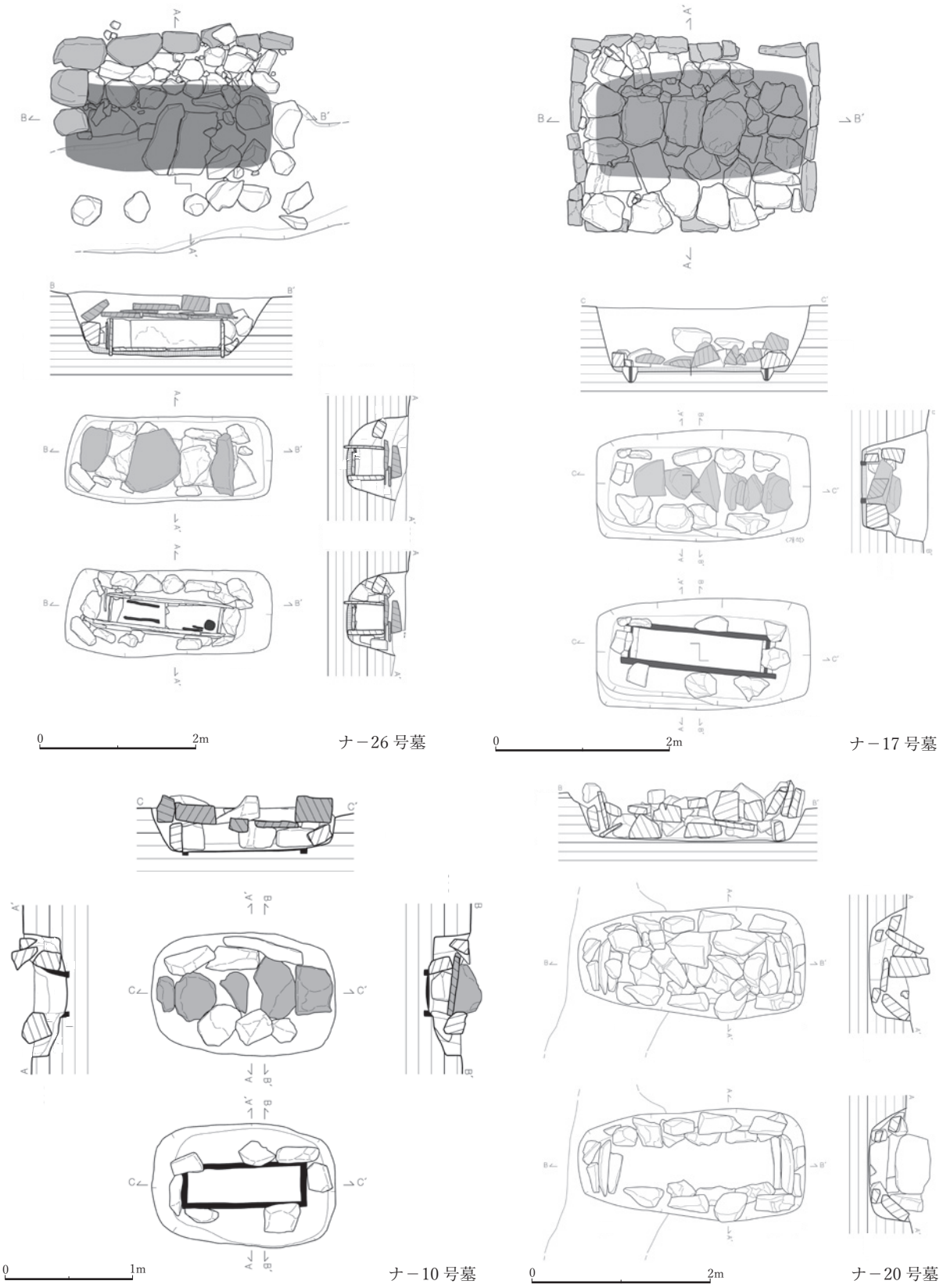


図 5-16　虎灘洞遺跡の石棺・木棺

ナー 26 号墓では組み合わせ式石棺が検出された。ナー 10・17 号墓は組み合わせ式木棺，ナー 20 号墓は刳り抜き式木棺の存在が推定される。東亜細亜文化財（2012）より引用・改変。

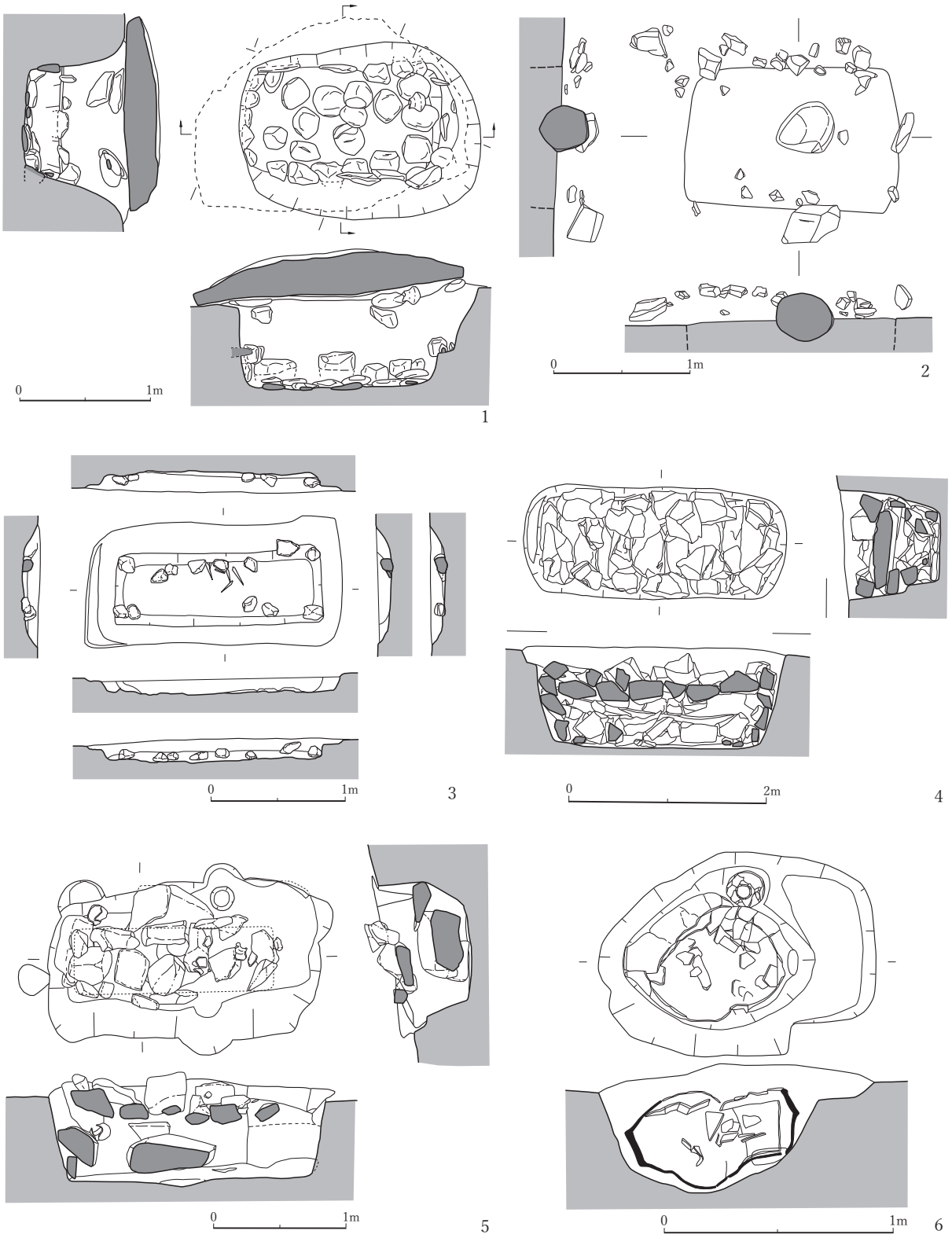


図 5-17　北部九州における縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の墓制

1．大友5次6号支石墓　2．新町43号墓　3．江辻5地点SK20　4．田久松ヶ浦SK218　5．天神森3次4号木棺墓　6．天神森3次27号甕棺墓　各文献よりトレース・改変。

ただし，庄・蔵本遺跡の場合は，床面に掘り込みを有する例も確認されていることから，これ自体が遺体を収容する棺の可能性が高く，内部に木棺が想定し得る石槨墓とは異なる。こうした石槨的な特徴をもつ，弥生時代前期の石棺は，庄・蔵本遺跡のほかでも確認されている。山口県中ノ浜遺跡２～４次調査 E-1 箱式石棺（潮見，1984），同遺跡５～８次調査 G4-3 号石棺（岩崎，1984），梶栗浜遺跡 57 年度調査 c 群石棺（金関，2000）といった響灘沿岸地域の例がそれにあたる。中ノ浜遺跡における石棺の出現は，土器を確実に伴っているわけではないが，付近から出土した土器などからみて，綾羅木Ⅲ式期（弥生時代前期末）とされる（岩崎，1984）。梶栗浜遺跡の石棺も，出土土器からみて，この時期に属するとみなされる（金関，2000）。こうしたことから，これら響灘沿岸地域の石棺は，庄・蔵本遺跡のそれよりも後出するものと判断され，庄・蔵本遺跡の石棺のルーツを響灘沿岸地域に求めることはできない。やはり北部九州の石槨あるいはそれに類する墓室に系譜が求められ，祖型が石槨であった場合は，徳島平野における変容が想定し得ようか。ちなみに筆者は，響灘沿岸の石槨的な要素をもつ石棺の系譜を，北部九州の石槨に求めたことがあるが（端野，2001），この理解に立てば，響灘沿岸地域例と庄・蔵本例とは，親子関係ではなく，兄弟関係にあるといえよう。

つづいて，配石についてはどうか。庄･蔵本遺跡では，配置状態によって大きく１～３類に分類され，さらに２・３類については，それぞれを細分し得た。こうした豊富なバリエーションをもつ配石の系譜もやはり，北部九州の墓制に求められる。先述のように，北部九州に導入された支石墓は，当初より大きく改変され，さらに弥生時代前期前葉にいたると，墓における石の使用頻度は低くなる。こうした過程で，生み出されたのが，墓壙上面や墓壙内で検出された配石であり，これらは支石墓下部構造の墓室を構成する蓋石や積石が変容したものとみなせる。北部九州での石の不使用化傾向は，それを受容した庄・蔵本遺跡一帯でもそのまま引き継がれ，その変化は北部九州よりも遅れた弥生時代前期中葉から末葉にかけて生じている。

こうした配石とともに，徳島平野に伝わったとみられるのが木棺である。庄・蔵本遺跡一帯では，現在のところ，棺材自体の検出例はないが，墓壙の平面形，断面形や土層断面からみて，その存在が推定し得る。墓壙平面形が長方形のもの，墓壙断面形が箱形のものは，内部に木棺が存在した可能性がある。とくに墓壙断面箱形は，組み合わせ式木棺が存在した可能性を示す。福永伸哉（1985）の分類でいうⅠ型（墓壙床面の短辺部に小口板を固定させるための溝状の掘り込みを有するもの）の存在は，未確認である。墓壙断面 U 字形のものについても，刳り抜き式木棺であれば，その可能性を想定し得る。ただ，すべての墓に，木棺が存在したかというとそうではなく，墓壙平面形が不整な長楕円形である例も存在することから，遺体収納容器を設置しない素掘りの土壙墓が，木棺墓とともに存在したと考えるのが，より自然ではないだろうか。ともかく，こうした組み合わせ式木棺，刳り抜き式木棺の両者は，北部九州でもその存在が確認されており，土器・玉類などの副葬習俗ともに，ここにルーツを求めることができよう。

甕棺墓もまた，北部九州にルーツを求め得る。棺身を墓壙底に沿わせ斜位に埋置する，鉢と壺を組み合わせて棺をなす，棺身を棺蓋が覆うといった特徴は，北部九州の乳幼児甕棺墓の中にも見出せる。したがって，徳島平野では，石棺墓・配石墓・木棺墓といった小児以上用の墓制と，乳幼児用の墓制である甕棺墓とが複合したかたちで受容されたとみなせる。

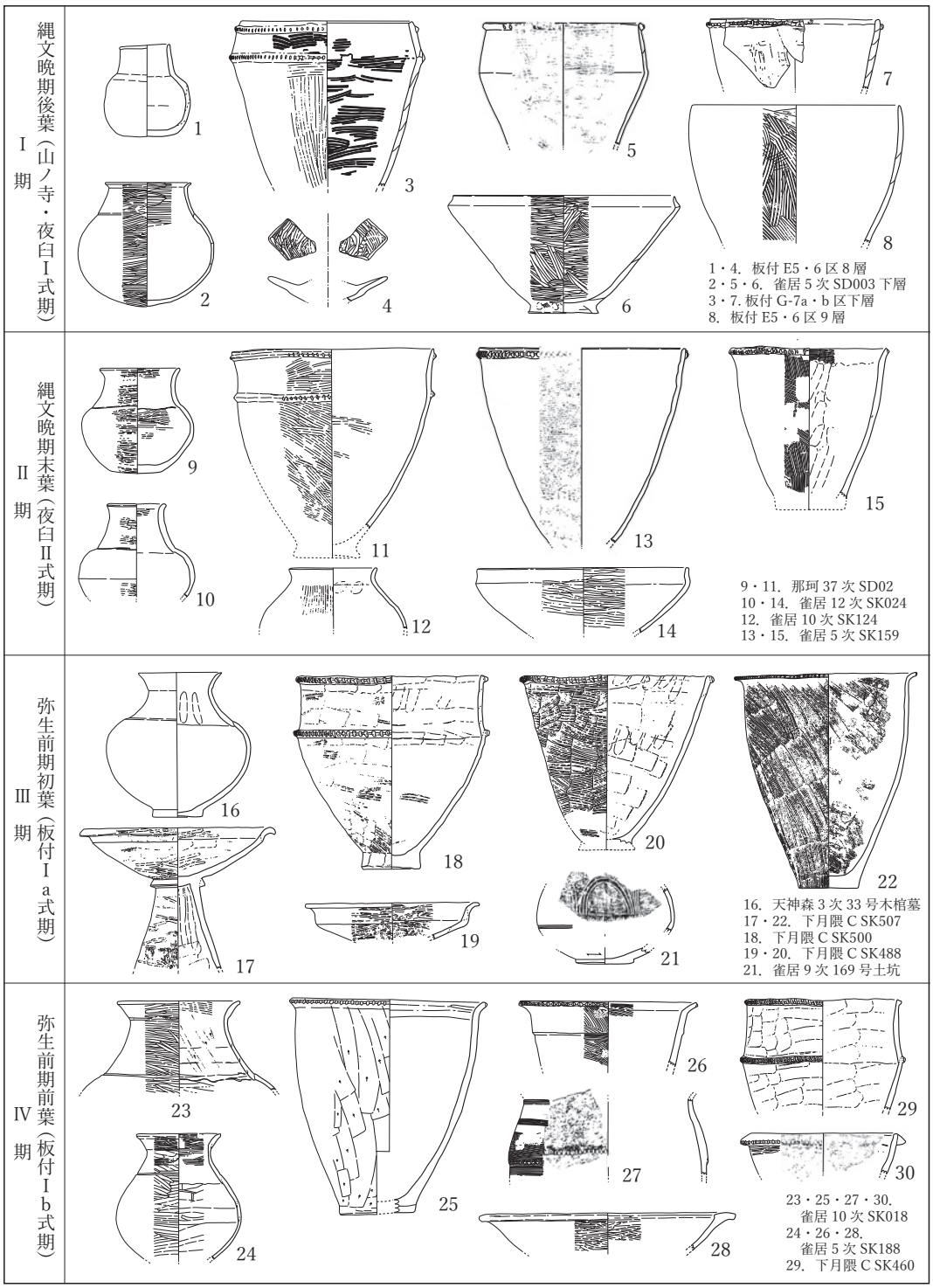


図 5-18　北部九州における弥生時代開始前後の土器編年

縮尺は 1/8。端野（2016）より引用・改変。

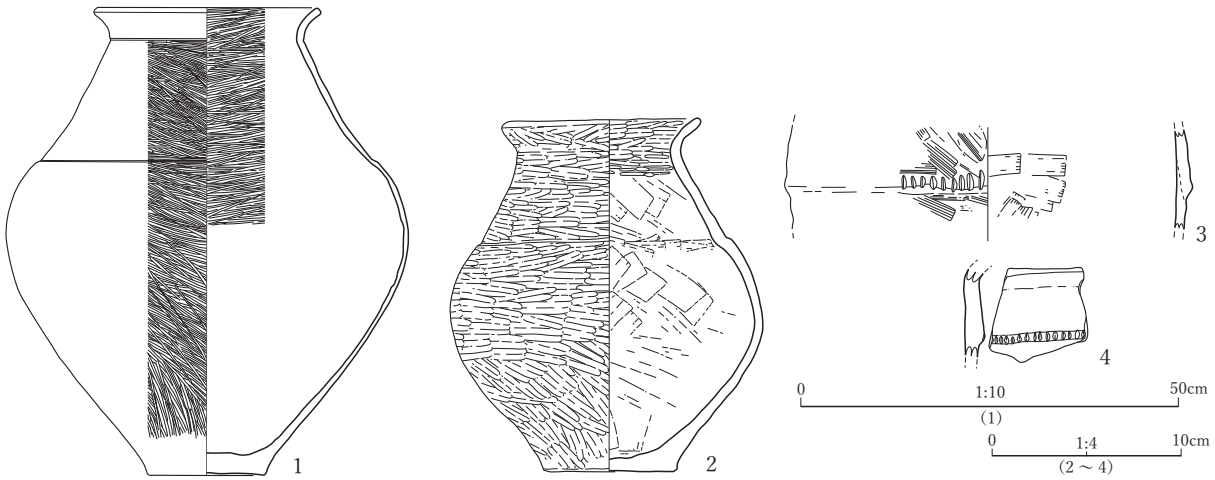


図 5-19　庄・蔵本遺跡一帯最古の弥生土器

1．南蔵本住宅 SI02　2．庄・蔵本 1998 年度立会排水管土坑 3　3．庄・蔵本 10 次溝 1　4．庄・蔵本 22 次 SK02

1 は勝浦（1999），3 は徳大埋文（1998）よりトレース・改変。

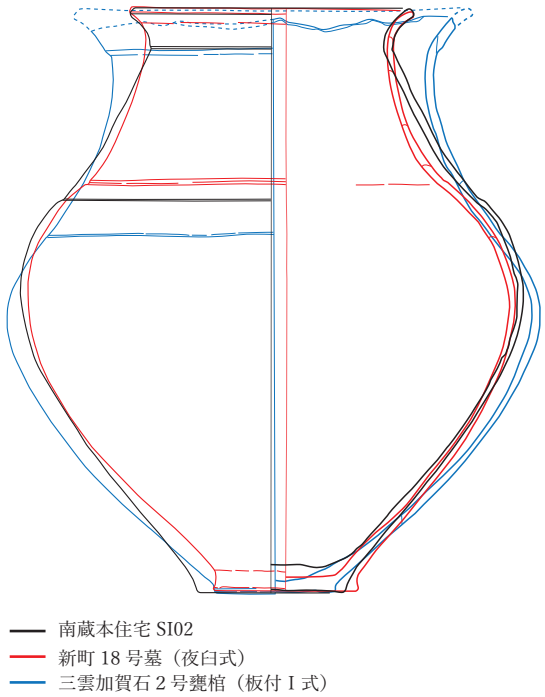


図 5-20　大形壺の形態比較

南蔵本例の縮尺は 1/8。他の 2 例は南蔵本例の高さに合うよう全体のサイズを調整した。新町例，三雲加賀石例の時期は橋口（1992）の甕棺編年による。

こうした北部九州の多様な墓制は，板付 I 式土器の広域伝播の波に乗って，列島西部各地へと広がるものと考えられる。徳島地域はそのうちの一つである。従来より，板付 I 式の壺と甕に近似する土器が，列島西部で点的に分布していることが知られるが（田中，1986 ほか），これが庄・蔵本遺跡一帯でも出土しているという事実は強調しておいた方が良かろう。

北部九州における弥生時代開始前後の土器編年の妥当性に疑問をもった筆者は，先学の成果に学びつつ，「一括資料の非直列的配列」を用いて，これを再検討した（端野，2016）。図 5-18 はその結果の一部であるが，このなかのⅣ期（板付 I b 式期）が，列島西部への広域拡散期にあたる。この時期の壺・甕に類似するものが，庄・蔵本遺跡第 10 次調査地点（酵素科学研究センター地点）（徳大埋文，1998），1998 年度立会調査地点（排水管）[註 4)]，第 22 次調査地点，南蔵本遺跡住宅開発工事地点などで出土している（図 5-19）。ここで，北部九州と徳島平野の土器群を結びつけるのは，頸部と胴部の境界に段を有する壺，胴部上半に段を有する甕である。とくに庄・蔵本遺跡第 22 次調査 SK02 のそれは，庄・蔵本遺跡における弥生土器の最古段階である I － 1 様式（古）（中村，2002）の基準資料に位置づけられ（中村，2010），重要な資料である。また，南蔵本遺跡住宅 SI02 の大形壺は，肩の張り方において，板付 I 式の三雲加賀石例よりむしろ夜臼式の新町例に近く，かつ口頸部下と頸胴部境界とに段を有する点は，板付 I 式の特徴を備えている（図 5-20）。したがって，

これを徳島平野の遠賀川式土器の中でも，最古の部類に属するものとみてよかろう。

列島西部において，こうした土器が出土する遺跡は，稲作適地である低湿地のすぐそばに立地する点で共通する。庄・蔵本遺跡の墓制は，稲作とともに，北部九州から直接的に伝わったとみてよいではないか。そして，こうした文化の受容は，Ⅰ－１様式における突帯文土器と遠賀川式土器の共存現象が物語るように，北部九州からの移入者と，それまでに居住していた在来者との共住（一つの居住域を共有）のなかで平和裏に起きたのではないか[註5)]。

図 5-21　集落と出自集団
キージング（1975）より引用。

３．墓からみた社会

最後に，庄・蔵本遺跡の墓あるいは墓域のあり方から，当時の社会像について，新進化主義の文化人類学者・サーヴィス（1971）の社会類型を用いて，言及しておきたい。これは，人類の社会が統合の度合いによって，バンド社会・部族社会・首長制社会・国家の４つに分類され，バンド社会から国家へと向かうにつれ，社会の成層化･複雑化が進み，かつ統合の度合いが高まるというものである。

まず，庄・蔵本遺跡一帯の弥生時代前期集落が，定住した稲作農耕民のものであったことは，これまでの調査成果からみて，明白である。これを階層社会の所産とみなす見解（北條, 1998b）もあるが，前々項での分析結果によれば，石を用いた施設，遺物の種類，墓域といった各属性において，階層差の明確な表示は認められなかった。そして，墓壙底の規模と，石を用いた施設，遺物の種類とのあいだの関係からは，石の使用頻度や石の置き方，玉類の副葬に，被葬者の年齢差が反映されている可能性がうかがえた。すなわち，この集落では，埋葬行為において，階層差よりもむしろ年齢区分が強調されたものとみられる。こうしたことから，当時は平等原理にもとづいた部族社会であった可能性が高い。

では，同時期に複数存在する墓域は何を意味するのか。部族社会における一つの集落は，複数の異なる出自集団の分節からなると考えられる。ここでの出自集団とは，文化人類学では氏族あるいはクランと呼ばれ，共通の祖先・系譜観念をもち，外婚の単位となるものである。さらに，同じ平野や隣接する地域まで見渡すと，同じ系統の出自集団の分節が，他の集落に居住するというかたちをとる（図5-21）。これら複数の集落が，共通した祭祀や部族意識によって，一つに結合されるような社会が部族社会である。一集落に，複数の出自集団の分節（サブクランあるいはリネージ）が居住するというあり方は，異なる出自集団の分節間で婚姻関係を結ぶことを可能にし（キージング，1975），人間集団の再生産には好都合である。庄・蔵本遺跡での個々の墓域は，こうした出自集団の分節を表示しているのではないだろうか[註6)]。Ⅰ－１様式～Ⅰ－２様式において，庄・蔵本遺跡一帯の微高地上に，複数の居住域が同時併存したことが，近藤玲（2017）により示されている。個々の居住域は，墓域

と対応関係にあるものとみられ，その背後にはやはり出自集団の分節の存在を想定し得よう。

第２節　調査成果のまとめ

最後に，各調査地点に関する報告内容をまとめ，本書の結びとしたい。

ボイラータンク地点（1998 年度立会）　１面の遺構面が調査され，弥生時代前期の墓２基，土坑２基，焼土遺構１基，溝３条が確認された。なかでも，石棺墓・土壙墓といった遺構は，当時の埋葬習俗を知ることができる貴重な資料であり，同時に，この辺り一帯が墓域であったことを示している。これらの資料は，前節でも若干の検討を試みたが，第６次調査地点での成果につづき，徳島平野における弥生墓制起源論，あるいは弥生前期社会論に大きく貢献するものと考えられる。遺物は，弥生時代前期の壺・甕形土器や石斧・石庖丁・石皿・敲石・磨石などの様々な石器が遺構・包含層から出土した。

第 22 次調査地点（西病棟新営その他電気設備地点）　３面の遺構面が調査され，弥生時代前期の土壙墓３基，溝１基，土坑２基，古墳時代中期以降の溝１基，土坑１基，近世以降の溝１基などが確認された。第１～ 1.5 遺構面で検出された３基の土壙墓は，隣接するボイラータンク地点と同様，埋葬習俗の資料として重要であり，この辺りが墓域であったことを証明するものである。出土遺物には，弥生時代前期の壺・甕形土器，粗製剥片石器，敲石といった石器，瓦質土器，大谷焼，瀬戸・美濃系・関西系の近世陶磁器などがある。とりわけ，SK02 出土土器群は，徳島平野における弥生土器編年の最古段階であるＩ－１様式（古）の基準資料であり，かつ三谷遺跡や列島東部との関係を暗示する横型流水文土器を含んでおり，重要である。

第 30 次調査地点（渡り廊下建設地点）　３面の遺構面が調査され，弥生時代前期中葉の溝状遺構３基，弥生時代前期～近世以降の土坑・ピット４基，弥生時代前期～中世の不明遺構２基，近代以降の溝状落ち込み１基が確認された。第３遺構面で検出された溝状遺構の機能については，用水路の末端部と畑の畝間といった二つの可能性を指摘し得るが，いずれが妥当かは今後の調査に委ねられる。

（端野晋平）

註

１．南蔵本遺跡県立中央病院地点の第３・４遺構面で検出された遺構のうち，土坑の形態，埋土の堆積状況，石の出土状況からみて，墓の可能性が高い例を分析対象として抽出した。なお，同地点の出土遺物については徳島県埋蔵文化財センター，住宅開発工事地点のそれについては徳島市教育委員会からのご厚意により，実見することができた。感謝の意を表す次第である。

２．「石棺墓」という名称は与えられているものの，実際は石蓋土壙墓（木棺墓）である（北條，1998a）。

３．異論に対する批判はすでに終えているので（端野，2015，2017a），ここでは振り返らない。

４．未報告。

５．ここでいう共住は，中村豊が庄・蔵本遺跡と三谷遺跡との関係にみた「共生」（中村，1998，2002）とは異なる。端野（2017b）では，誤解していたので訂正する。

６．日本考古学界で，こうした概念を前面に出して，列島先史社会を論じ始めたのは，田中良之（1998，2000）である。本稿はこうした業績に倣うものである。

文献

（日本語）

岩崎卓也，1984．3. 中ノ浜遺跡の調査－東京教育大学－ . 豊浦町教育委員会（編），史跡中ノ浜遺跡保存管理計画策定報告書．豊浦町教育委員会，豊浦．pp. 19-42.

粕屋町教育委員会，2002．江辻遺跡第5地点 . 粕屋町教育委員会，粕屋.

勝浦康守，1999．南蔵本遺跡（住宅開発工事）. 徳島市教育委員会（編），徳島市埋蔵文化財発掘調査概要9．徳島市教育委員会，徳島．pp. 1-25.

金関恕，2000．梶栗浜遺跡 . 山口県（編），山口県史資料編考古1．山口県，山口．pp. 324-327.

キージング（Keesing,R.M.）（小川正恭・笠原政治・河合利光訳），1975．Kin Groups and Social Structure（親族集団と社会構造）．未来社，東京.

九州大学考古学研究室，2001．佐賀県大友遺跡 . 九州大学考古学研究室，福岡.

九州大学考古学研究室，2003．佐賀県大友遺跡Ⅱ . 九州大学考古学研究室，福岡.

近藤玲，2017．四国東部における灌漑水田農耕の受容期の年代について．総研大文化科学研究 13，149-193.

サーヴィス（Service,E.R.）（松園万亀雄訳），1971．Primitive Social Organization: An Evolutionary Perspective（未開の社会組織－進化論的考察－）．弘文堂，東京.

潮見浩，1984．中ノ浜遺跡の調査－広島大学－ . 豊浦町教育委員会（編），史跡中ノ浜遺跡保存管理計画策定報告書．豊浦町教育委員会，豊浦．pp. 13-18.

志摩町教育委員会，1987．新町遺跡 . 志摩町教育委員会，志摩.

田中良之，1986．縄文土器と弥生土器 1. 西日本 . 金関恕・佐原眞（編），弥生文化の研究 3．雄山閣出版，東京．pp. 115-125.

田中良之，1998．出自表示論批判．日本考古学 5，1-18.

田中良之，2000．墓地からみた親族・家族 . 都出比呂志・佐原眞（編），古代史の論点 2．小学館，東京．pp. 131-152.

徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター，2014．南蔵本遺跡－県立中央病院改築事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書－ . 徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター，徳島.

徳島大学埋蔵文化財調査室，1998．庄・蔵本遺跡 1. 徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島.

中橋孝博・土肥直美・永井昌文，1985．金隈遺跡出土の弥生時代人骨 . 福岡市教育委員会（編），史跡金隈遺跡．福岡市教育委員会，福岡．pp. 43-145.

中橋孝博・永井昌文，1987．福岡県志摩町新町遺跡出土の縄文・弥生移行期の人骨 . 橋口達也（編），新町遺跡．志摩町教育委員会，糸島．pp. 87-105.

中村豊，1998．稲作のはじまり－吉野川下流域を中心に－ . 東潮（編），川と人間－吉野川流域史－．渓水社，広島．pp. 79-100.

中村豊，2002．縄文から弥生へ－眉山北麓遺跡群の分析から－ . 徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学．徳島考古学論集刊行会，徳島．pp. 245-258.

中村豊，2010．庄・蔵本遺跡・西病棟新営その他電気設備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 . 徳島大学埋蔵文化財調査室（編），年報2．徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島．pp. 11-21.

橋口達也，1992．大形棺成立以前の甕棺の編年．九州歴史資料館研究論集 17，19-40.

端野晋平，2001．支石墓の系譜と伝播様態 . 田中良之（編），弥生時代における九州・韓半島交流史の研究．九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座，福岡．pp. 29-62.

端野晋平，2003．支石墓伝播のプロセス－韓半島南端部・九州北部を中心として－．日本考古学 16，1-25.

端野晋平，2015．近年の弥生時代開始期墓制論の検討．古文化談叢 74，95-129.

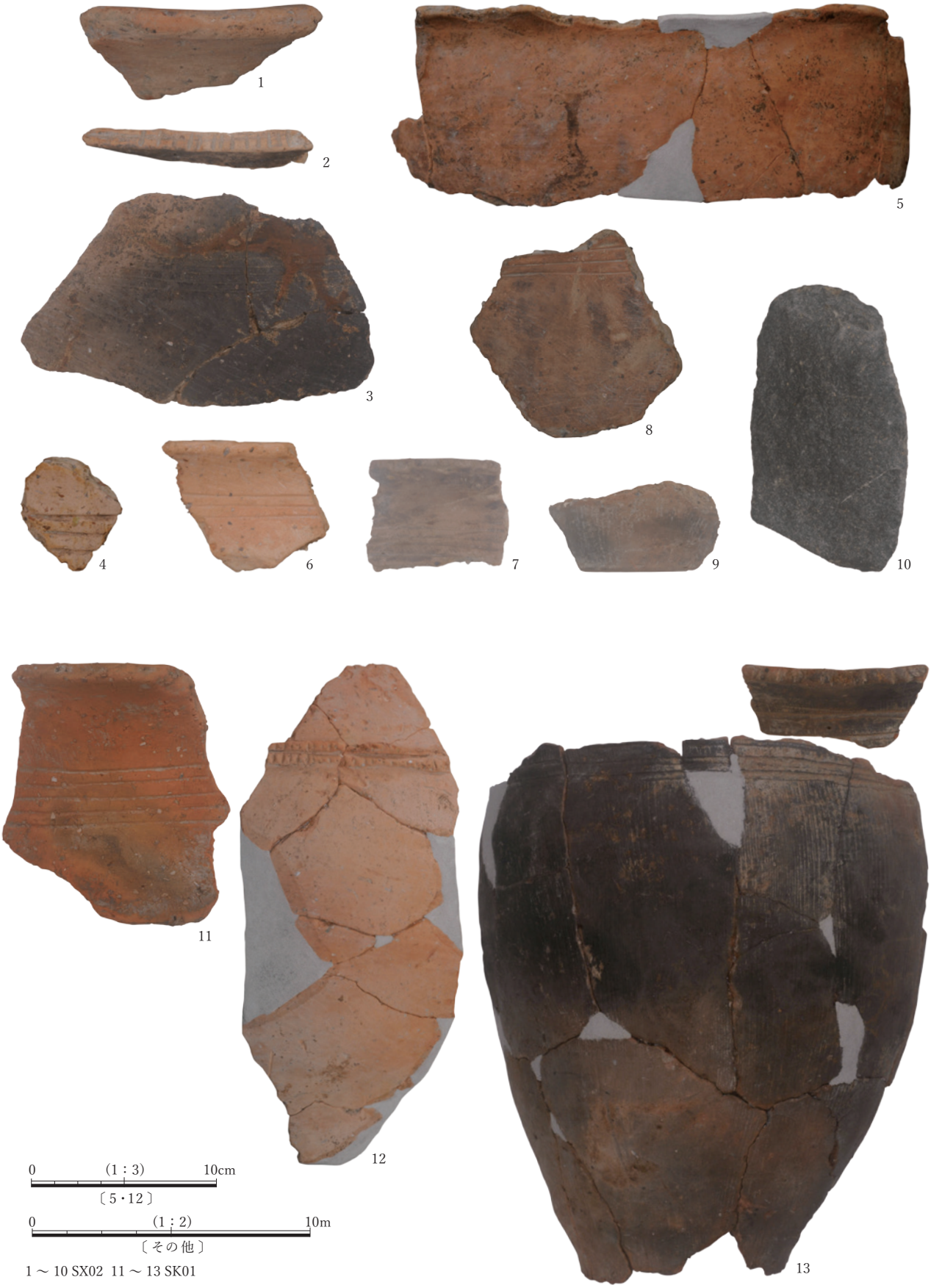
端野晋平，2016．板付Ⅰ式成立前後の壺形土器－分類と編年の検討－ . 田中良之先生追悼論文集編集委員会（編），考古学は科学か 田中良之先生追悼論文集．中国書店，福岡．pp. 325-349.

端野晋平，2017a．中村大介著「支石墓の多様性と交流」に対するコメント．長崎県埋蔵文化財センター研究紀要 7，59-71.

端野晋平，2017b．墓制からみた弥生時代の始まり－徳島地域をケースとして－．地方史研究 67(4)，4-8.

端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治，2015．庄・蔵本遺跡第 27 次調査（立体駐車場地点）の成果．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 1，43-97.

橋本達也，2001．弥生時代前期朝鮮系無文土器の展開と徳島．青山考古 18，167-176.
福岡市教育委員会，1996．下月隈天神森遺跡Ⅲ . 福岡市教育委員会，福岡.
福永伸哉，1985．弥生時代の木棺墓と社会．考古学研究 32(1)，81-106.
藤田等，1988．北部九州弥生時代未成人埋葬について . 永井昌文教授退官記念論文集刊行会（編），日本民族・文化の生成１永井昌文教授退官記念論文集．六興出版，東京．pp. 573-603.
北條芳隆，1998a．第６次調査の記録 . 徳島大学埋蔵文化財調査室（編），庄･蔵本遺跡１．徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島．pp. 15-55.
北條芳隆，1998b．弥生時代前期集団墓の構造 . 徳島大学埋蔵文化財調査室（編），庄・蔵本遺跡１．徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島．pp. 133-141.
宗像市教育委員会，1999．田久松ヶ浦 . 宗像市教育委員会，宗像.
（韓国語）
東亜細亜文化財研究院，2012．晋州 虎灘洞 先史遺跡．東亜細亜文化財研究院，昌原.



1～10 SX02　11～13 SK01

図版２　ボイラータンク地点出土遺物(2)

0　(1：3)　10cm
〔26〕

0　(1：2)　10m
〔その他〕

14 ～ 26 SK01

0　(1：2)　10m

27・28 SD02　29 ～ 33 SD01　34 ～ 36 SD03
37 ～ 45 包含層（黄褐色シルト層）

図版 4　22 次調査地点出土遺物(1)

0　(1：2)　10m

1 SD03
2 ～ 13 SK01 下層

0　(1：3)　10cm
〔18・19・22・24〕

0　(1：2)　10m
〔その他〕

14 ～ 17 SK01
18 ～ 25 SK02 下層

図版 6　22 次調査地点出土遺物(3)

26-1

26-2

27

0　(1：2)　10m

26 ～ 27 SK02 下層

0　(1：3)　10cm
〔28・29〕

0　(1：2)　10m
〔その他〕

28 ～ 31 SK02 下層
32 ～ 48 SK03

図版 8　22 次調査地点出土遺物(5)

0　(1：3)　10cm
〔66･67〕

0　(1：2)　10m
〔その他〕

49 ～ 51 SK07　52 ～ 54 SD02 55 SD01
60 ～ 67 包含層（黄褐色シルト層）

0　(1：3)　10cm
〔73〕

0　(1：2)　10m
〔その他〕

71 ～ 77 包含層（黄褐色シルト層）
78 ～ 85 包含層（黄褐色シルト層～黒褐色シルト層）

報告書抄録

ふりがな	しょう　くらもといせき　さん
書名	庄・蔵本遺跡 3
副書名	ボイラータンク地点（1998 年度立会）・第 22・30 次調査地点
巻次	
シリーズ名	徳島大学埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 7 巻
編著者名	端野晋平・三阪一徳
編集機関	徳島大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒770 －8503　徳島市蔵本町2 丁目50 －1　TEL　088(633)7236
発行年月日	2018 年 3 月 31 日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
庄・蔵本遺跡（しょう くらもと いせき）ボイラータンク地点（ちてん）（1998年度立会）地点	徳島市蔵本町（とくしまし くらもとちょう）2 丁目	36201	171	34°4′28″	134°31′11″	19990106 ～ 19990131	81㎡	ボイラータンクの設置
庄・蔵本遺跡（しょう くらもと いせき）第 22 次調査地点	徳島市蔵本町（とくしまし くらもとちょう）2 丁目	36201	171	34°4′28″	134°31′11″	20080109 ～ 20080214	103㎡	電気設備の設置
庄・蔵本遺跡（しょう くらもと いせき）第 30 次調査地点	徳島市蔵本町（とくしまし くらもとちょう）2 丁目	36201	171	34°4′32″	134°31′4″	20161114 ～ 20161201	70 ㎡	渡り廊下の建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
庄・蔵本遺跡（しょう くらもと いせき）ボイラータンク地点（1998年度立会）地点	集落	弥生時代	石棺墓，土壙墓，土坑，焼土遺構，溝	土器，石器	弥生時代前期の墓域。
庄・蔵本遺跡（しょう くらもと いせき）第 22 次調査地点	集落	弥生時代～近世	土壙墓，溝，土坑	土器，石器，陶磁器	弥生時代前期の墓域。
庄・蔵本遺跡（しょう くらもと いせき）第 30 次調査地点	集落	弥生時代～近世	溝状遺構，土坑，ピット	土器	溝状遺構は用水路あるいは畑の畝間か。

2018 年 3 月 31 日発行

徳島大学埋蔵文化財調査報告書　第 7 巻

庄・蔵本遺跡 3

－ボイラータンク地点（1998 年度立会）・第 22・30 次調査地点－

編集・発行　国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室
徳島市蔵本町 2 丁目 50-1　(088)633-7236
http://tokudaimaibun.jp/
印　　刷　徳島県教育印刷株式会社
徳島市東沖洲 2 丁目 1-13　(088)664-6776

ISBN 978-4-908223-03-7